

第5章 つるはぎななひろいわかげ 鶴萩七尋岩陰遺跡

第1節 遺跡の概観と調査の概要

1 遺跡の概観

本遺跡は、長野市篠ノ井塩崎字白助866に所在する。JR篠ノ井線稲荷山駅の西南方約600mの地点に位置し、東には千曲川をへだてて、復原された森將軍塚古墳を望む。長谷観音として著名な長谷寺は、本遺跡の南方250mにある。篠山東麓の斜面にある巨岩の露頭全体が遺跡で、地元では石造文化財「鶴萩七尋石」の名で親しまれてきた。『塩崎の石造文化財』（塩崎文化財保存会1987）によれば、「鶴萩の西山麓にある大きな石で、大人でも小人でも石幅を測れば七尋あるといわれている。それは大人の目通りと子供の目通りでは測る位置がちがうからだと伝えられている。この石の横に祀られている薬師如来は七尋薬師と呼ばれ、鶴萩の人たちによって信仰されている。」とある。この巨岩は東に張り出して岩陰をつくり、狭いテラスには石垣と土台を築いて一間社の薬師堂が建っていた（PL40）。石垣下の斜面には薬師堂への参道がめぐり、周辺は松や雑木の山林であった。背後は果樹園、前方は市道を挟んで宅地となり、鶴萩の集落へ至る（第110図）。

露頭のある尾根の北側は比較的急傾斜の小規模な扇状地で、ほぼ全面に鶴前遺跡が展開し、沖積地の水田部分は石川条里遺跡の埋没水田址となる。高速道路線としては上り線中心杭STA.713AとSTA.714Aの中間にあたり、長谷トンネル北口の上り線側が遺跡である。今も数本の松が生い茂り、鶴萩七尋石の名残を伝えている。

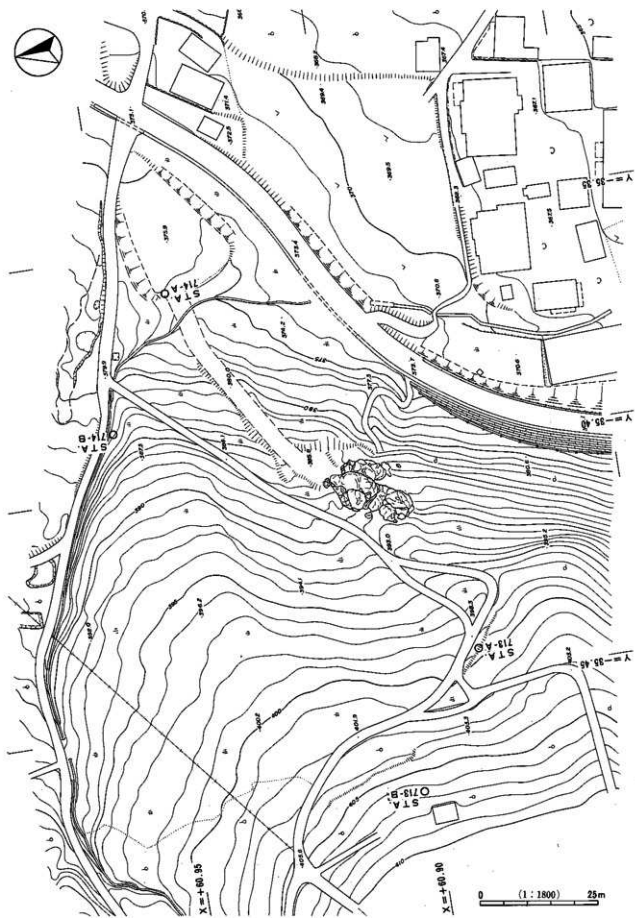
2 調査の概要

そもそも鶴萩七尋石が遺跡と認められたのは、昭和63年春、長野盆地最初の発掘となった鶴前遺跡の調査開始から間もない同年5月のことである。遺跡と指呼の間にある薬師堂が江戸時代以来のものと同じ、取り壊しを控えて屋根にシートをかぶった堂を訪れた際に、土師器や管玉、骨片を採集したことが調査の発端である。発見当時は古墳時代の祭祀か葬所遺跡を予想したことであった。文化財保護法第57条の6第1項の規定による遺跡の発見届出ののち、この巨岩が「鶴萩七尋石」と呼ばれていることと、遺跡の種類が岩陰遺跡であることから、「鶴萩七尋岩陰遺跡」と命名したのである。

発掘調査は平成元年9月から11月にかけて行われた。岩陰が東南東向きで正方位とずれ、遺物の出土が予想されるテラスが狭長なため、原則通りグリッドを国家座標軸に合わせるのには不都合と思われた。このため、調査範囲の長軸を通る任意の基準線を設定し、掘り下げ予定部分の北端に任意の原点0を設けた（第111図）。この長軸上の基準線を、原点から南南西へ1m間隔に分割して、0・1・2・3……19・20の基準点とした。各基準点に直角に交わる短軸上の基準線を設定し、調査範囲全体に1mメッシュをかけた。長軸上の0～20より西北西をR、東南東をLとし、例えば長軸上の基準点4から3m西北西にある基準点は「4R3」と表記した。また掘り下げ範囲が原点より北に拡大したため、0より北北東を1m間隔で-1・-2・……-4の基準点とした（第121図な



まさに「七尋」石（平成元年10月）



第110图 地形图

ど)。したがって、例えば-2から4m東南東の基準点は「-2 L 4」となる。グリッド表示はLの範囲ではその1mメッシュの北東隅、Rの範囲では北西隅の基準点で表示した。このようにグリッドが国家座標と合致しないため、次にいくつかの基準点の座標を列挙しておく。

(基準点)	(X座標)	(Y座標)	(基準点)	(X座標)	(Y座標)
0	60906, 352	-35401, 025	0 L 5	60903, 850	-35396, 695
5	60902, 020	-35403, 525	5 L 5	60901, 020	-35401, 793
10	60897, 690	-35406, 025	15 L 1	60892, 860	-35407, 659
15	60893, 360	-35408, 525	0 R 3	60907, 850	-35403, 623
20	60889, 030	-35411, 025	5 R 5	60904, 520	-35407, 855
26	60883, 833	-35414, 025	9 R 8	60902, 556	-35412, 453

本遺跡は急斜面に立地し、規模が小さいながら巨岩の露頭の最上部から調査区の下限まで10m前後の高低差がある。そこで露頭の形状に則して、岩庇の上を岩上部、薬師堂が建つテラスを岩陰部、石垣から下の斜面を石垣下と呼称し、調査もこの3地点に分かれて進行した(第111図)。

実測は前述したグリッドを基準に手測し、岩陰部の石垣がある時点と、これを除去して掘り下げ、調査が終了する時点の2回空撮を行った。遺物包含層の土はすべてふるいにかけて、微細遺物の採取に努めた。遺構に伴う遺物は原位置記録を基本としたほか、適宜、遺構・1mグリッドおよび土層・岩上部などの地点一括を単位として遺物取り上げを行った。遺跡の形状および調査の方法に準じて、遺構・遺物の報告も岩上部・岩陰部の地点に分けて行うことにする。

3 調査の経過

平成元年度

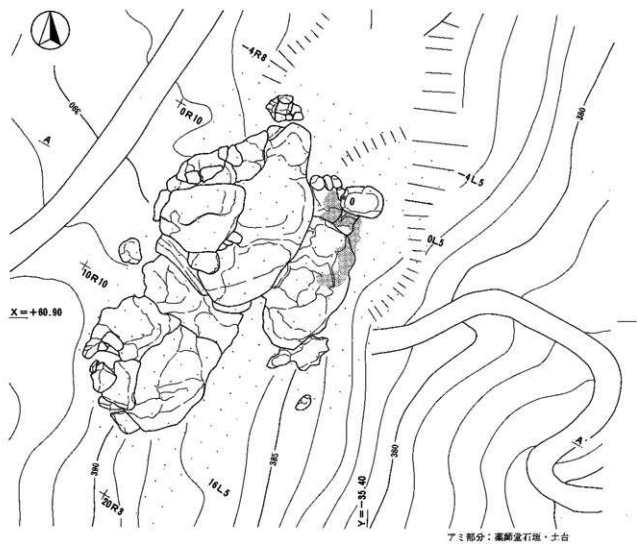
- 9月10日 慰霊祭の後、清掃・除草と一部の表土剥ぎ。
 13日 2・3トレンチ掘り下げ。岩陰部以外は試掘で済みそう。
 20日 グリッド掘り下げ開始。土台・石垣実測。草叢委文化課原係長・六川主事視察。
 25日 骨片多出。変形工字文土器・骨鏃・管玉あり。逐次原位置を記録して掘り下げることにする。
 27日 岩上部で滑石製品出土。土層・遺物分布図実測。
 29日 岩上部・岩陰部とも掘り下げ、実測。以後継続。
 10月3日 岩陰部で土器2個体分と人骨出土。分布図実測。
 9日 岩上部で「山の神」を掘り下げる。岩陰部で円形の落ち込み確認。ガラス小玉出土。
 13日 弥生人骨集中区遺物取り上げ、掘り下げ。信大医学部西沢寿見氏指導。複数体の焼骨とのこと。
 18日 岩陰部遺物取り上げ・実測。石垣を残し空撮。
 20日 重機で石垣除去。
 23日 弥生・古墳時代土坑実測、掘り下げ。石垣下表土剥ぎ。寛永通寶出土。
 26日 古墳土坑より須恵器埴版と骨鏃出土。
 31日 岩陰部で鉄鏃出土。石垣下グリッド掘り下げ。
 11月2日 精査後実測。完撮全景撮影して調査終了。



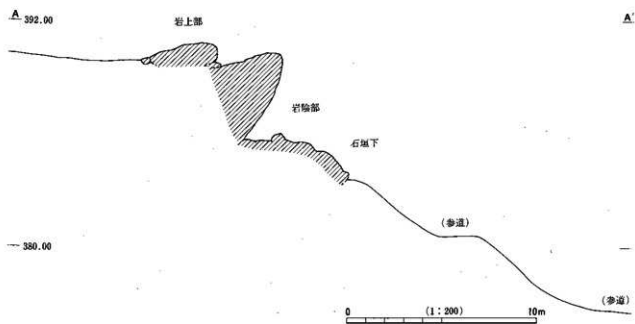
慰霊祭 (平成元年9月)



実測風景 (平成元年10月)



アミ部分：瀬戸堂石垣・土台



第111図 全体図

第2節 地形と基本層序

1 地形

本遺跡は、篠山から不規則に北東方向へ延びる尾根が、盆地の後背湿地に沈む標高380m前後の山麓部に位置する。ここは長野盆地西縁断層群（仮称）の一部によって、山地が階段状に落ちる過程で形成された小規模なテラス状をなし、崩積土に埋積した傾斜地である。テラス端は、局部的に基盤岩の禰花凝灰岩層に属する石英安山岩質凝灰岩の露岩があり、急崖部を作っている。岩陰遺跡は、この急崖部の狭い露岩間隙に所在して、四野宮・石川の水田地帯を眼下にし、川柳將軍塚古墳・森將軍塚古墳をはじめ、千曲川筋を望中に置ける。またテラス状の傾斜面は、新期横捨土石流堆積物に対比される地すべり性堆積物によって覆われ、堆積物は石英粒を多く含んだ砂～シルト質を基質とし、安山岩質や流紋岩質の角礫が主体である。

2 基本層序

本遺跡は急崖部の露岩という立地条件から、全体にほとんど堆積土層が見られない。岩上部は落ち葉を取り除けば大部分が露岩となり、小岩底の下にある薄い腐植土中に遺物が含まれる状態であった。

岩陰部では、岩底の下が多少くぼんでいるため黒色土の堆積が見られ、弥生・古墳時代の浅い土坑SK 01-03が掘り込まれるほか、多量の遺物が出土した。この遺物包含層は厚い部分でも30cm足らずで、薬師堂が乗る石垣の下にも見られ、参道に至る斜面部ではやや厚くなって、流失した遺物を含む。遺構検出部分からつながる狭いテラスは、基準点8より南西では落ち葉が積もるものの腐植土は見られず、黄褐色土の山砂が堆積し、トレンチ調査の結果遺物は皆無であった。

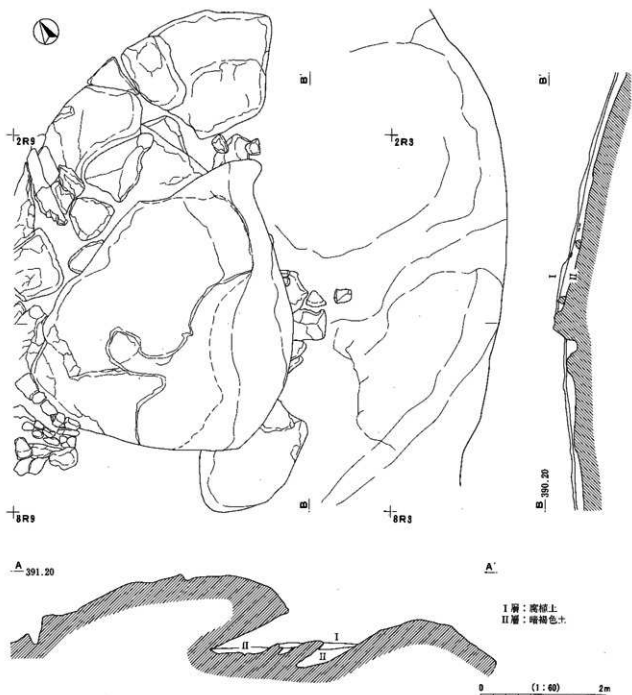
このように不安定な堆積状態ではあるが、落ち葉を交える表面の薄い腐植土層をI層、岩陰部から石垣下に堆積する黒色土層をII層、土壌化しない黄褐色の山砂をIII層とした。遺物包含層はII層、地山はIII層または岩陰を形成する凝灰岩白体である。

第3節 遺 構

1 岩上部の遺構（第112・113図、PL43）

岩陰を作る岩底の上部で、2R9・2R3・8R9・8R3の範囲にかかる。岩底上面の中央部は節理面が風化して割れ目ができ、0R7から6R7にかけて径4mほどの亀甲状の小岩底がかかるような状態となる（第112図）。この小岩底を取り囲むように、手前の割れ目部分に堆積するII層から古墳時代中・後期を主体とする土器が集中して出土した（第113図）。中心は3・4R4・5にあり、1R6・7から6R5まで分布する。土器は大部分が小破片のため、配置はわからない。一部接合できた7・14は2m前後の範囲に散在していた。14は岩陰部から出土した破片が接合したため、落下した遺物もかなりあることと想像される。

古墳時代の土器は土師器のみで、器種組成は埴・壺・甕が圧倒的に多く（第123図10・14）、杯・碗・高杯は少数である。0R5から滑石製品（第128図15）が1点出土し、遺構の性格がうかがえる。これらの古墳時代遺物のほかに、弥生時代中期（第122図6、第124図35）・後期（第122図7、第124図36）土器、奈良・平安時代の須恵器・土師器杯（第129図1・2）がある。弥生後期以外は少量である。



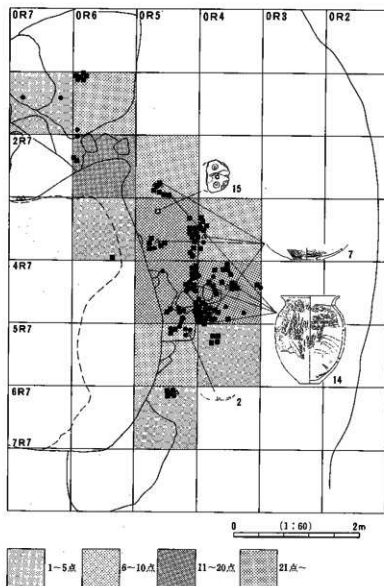
第112図 岩上部実測図

2 岩陰部の遺構

(1) 土坑 (第114～116図、PL43・44)

SK01 (第114図、PL43・44)

2R3を主体に、1R2・3、2R2にかかる。黄褐色砂層のIII層上面で、骨片・土器片を伴う黒色土の落ち込みを認めた。上部は攪乱を被っている。土色の違いから南端をSK03に切られることがわかる。規模・形態は長軸150cm・短軸100cmの楕円形である。深さは最深部で25cmを測り北端は立ち上りを確認



弥生土器 ▲ 中期 △ 後期 古墳中・後期土師器 ■ 杯・柄・高杯 ■ 罎・甕
□ 石製品 □ 平安土器

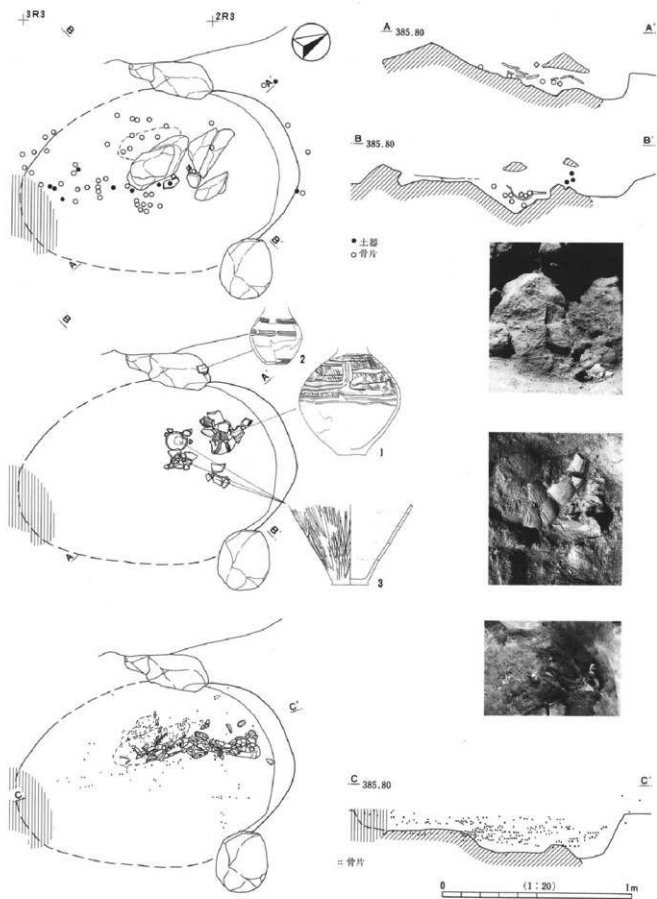
第113図 岩上部遺物分布図

(付表第3節参照)。

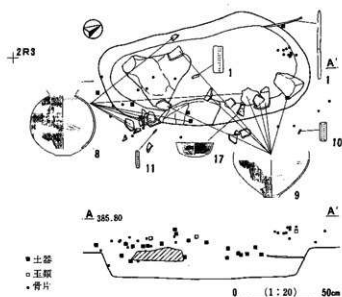
SK02 (第115図、PL43)

岩底下端に接する0・1R3・4にある。III層上面で暗褐色土の落ち込みを確認した。規模・形態は長軸110cm・短軸60cmの長楕円形で、深さは15cmを測る。底部は平坦で、南北壁は斜めに立ち上がる。埋土は暗褐色土(7.5YR3/3)の単層である。上部が後世の攪乱を被っていると見られ、土坑内に特定できる遺物は少ない。検出面から埋土上部にかけて出土した遺物が本址に伴う可能性が高いと思われ、原位置を図示した。古墳時代の土師器壺(第123図8・9)・杯(同17)・鉢(第126図1)・管玉3点(第128図1・10・11)と骨片がある。土師器壺は接合できたものが2個体あり、大部分が東壁に接する位置から出土した。骨片はごく少量で、成人と思われる2体分である(付表第3節参照)。

できるが、底部は北側の一部を除いて岩盤のため、浅い南側はプランが不明瞭である。掘り込みというより、岩盤の節理にできた隙間を利用したと考えられる。埋土は黒褐色土(7.5YR3/1)の単層で、焼土・炭は認められなかった。土坑内からは弥生中期前半の土器3個体(第122図1~3)と多量の焼人骨が出土した。検出面から埋土上位には比較的小さい人骨片が見られた。これを取り上げた埋土中位には、北側半分には土器1・3があった。1の壺は横転してつぶれた状態で、胴部はほぼ復原できたが頸部破片は認められない。3の甕は底部が正位にあり、胴部破片が外側に崩れた状態であった。やはり図示した部分より上位の破片は見出せない。2の小形の壺は西壁に接して出土した破片のほか原位置を確認できないが、1同様頸部破片は見られない。土器1・3の下層には大形の骨片が多く、1に接して大腿骨の骨端が現れ、火熱のために破砕してはいるが、南側にはほぼ原位置につながっている。人骨は少なくとも5体分で、4体は成人、1体は子供のもので、全身骨格のごく一部である。性別は不明である。焼かれていない人骨も混在するが、焼かれた人骨が圧倒的に多く、十分焼けていない人骨と高温を受けた人骨がある



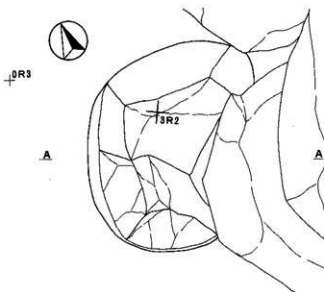
第114圖 SK01實測圖



第115図 SK02実測図

SK03 (第116図、PL44)

基準点2R3が本址のほぼ中央にある。III層上面で検出し、埋土もSK02と同じ暗褐色土の単層である。SK01の南端を切っている。規模・形態は長軸60cm・短軸33cmの不整楕円形で、深さは36cmを測る。西側の一部が地山III層のほかは岩で囲まれ、岩盤の隙間を利用した土坑と考えられる。遺物は埋土全体から出土し、古墳時代の土師器・須恵器、骨鏃、石製品、骨片がある。埋土上半部からは半完形となる須恵器提瓶(第123図32)が2つに割れて出土した。同じ個体の破片が石垣下からも出土したため、上部を攪乱されたものと推定される。図示できなかったが、土師器杯・碗類、壺・甕類の破片もある。注目されるのは骨鏃(第127図3・5~8・10・11)で、12点出土したうち7点が本址に伴った。石製品(第128図14)は残欠らしく、器種は不明である。骨片はSK02より多く、成人らしい2体分に、焼かれていないカモ類の骨が混在していた(付章第3節参照)。SK01を切っているため、本址出土の人骨も本来SK01に伴った可能性がある。



第116図 SK03実測図

(2) 岩陰部の遺物分布状態 (第118~121図、PL43-44)

これまで岩陰部にある弥生時代中期1、古墳時代中・後期各1の3基の土坑について伴出遺物の出土状態も含めて説明してきたが、土坑以外の部分からも多数の遺物が出土した。便宜的に石垣下と呼んだ地区も岩陰部から続く遺物包含層が堆積し、後述のように同一個体の土器が両地区から分散して出土したため、石垣下を含めて土坑以外の岩陰部の遺物分布状態の概要にふれておく。

この地区の遺物分布範囲は第119・121図に示した、 $-2R3 \cdot -2R5 \cdot 5L5 \cdot 5R3$ に囲まれた範囲である。出土遺物のうち、最古期と言えるものは、少数の縄文土器と石器である(第120図)。この次はSK01の時期の弥生中期で、遺物量は多くはない(第118図)。最少量を占めるのはSK02・03と同時期の古墳時代中・後期の遺物である(第119図)。ただし、本遺跡の土器は遺構出土資料以外はいずれの時期に属すものも小破片で、特に古墳時代土器は正確な時期区分・器種分類ができない。このため、中・後期を一括し、土師器の器種は「杯・碗・高杯」と「埴・壺・甕」に大別して集計した。弥生後期がこれに次ぎ、古墳時代前期も少量見られる(第120図)。古代・中世・近世・近代以降の各時代の遺物も少数ながら出土し(第121図)、継続時期は長期におよんでいる。

以上の遺物分布図のうち、遺物量の多い弥生中期と古墳中・後期については、原位置記録のある資料は種別・器種を記号で区別して原位置に表示した。土器については、原位置を表示した資料とグリッド単位に取り上げた資料の破片数の合計を、1mグリッド単位の数量に応じて網点スクリーンで表示した(第118・119図)。これら以外の時期は資料が少数のため、種別を記号で区別し、原位置は省略して1mグリッド単位で実数を表示した(第120・121図)。

縄文時代の遺物には、前・中器土器(第124図)、石器(第125図3・4・8~11)があり、 $0R1 \cdot 0L2 \cdot 1R2 \cdot 1L2 \cdot 3L3 \cdot 4R1$ に散在して少数ずつ出土した(第120図)。

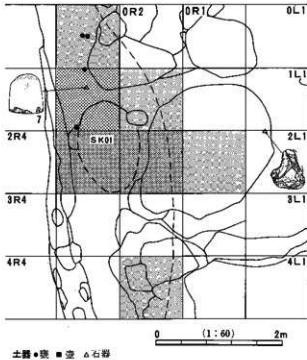
弥生時代中期の遺物には、前半期(第122図4、第124図40~44)・後半期(第124図45)の土器、石器(第125図1・2・5~7)がある。SK01がかかる $1 \cdot 2R2 \cdot 3$ に集中し、土坑以外からの出土量は少ない(第118図)。

弥生時代後期は東西方向の帯状となる特徴的な分布を示し、 $0R3 \sim 0L4$ 、 $1R3 \sim 1L4$ 、 $2R3 \sim 2L1$ 、 $4R2$ から土器が出土した。この分布は岩庇下から石垣下にむかって遺物が流失した状態を示すものと見られる(第120図)。

古墳前期は $1 \cdot 2R3$ に土器が集中する(第120図)。

古墳中・後期遺物は図示した範囲のほぼ全体におよぶが、岩陰部に多く、石垣下はやや希薄になる(第119図)。SK02・03を含む $0R3 \sim 4R3$ 、 $1R2 \sim 4R2$ の範囲には特に集中するが、土坑出土土器以外には図化にたえる資料は少ない。器種組成などについても偏在傾向を指摘できない。第123図11の土師器壺は1個体の半分以上の破片が出土したが、原位置を確認できる破片は岩陰部と石垣下に分かれて東西5m以上の範囲におよぶ。第123図32の須恵器高杯は $0R2 \cdot 1L1 \cdot 3L4 \cdot 4L2 \cdot 3$ にわたる。これらは石垣下出土遺物が岩陰部から流失・分散したことを推定させる例となる。土器以外の遺物では、鉄器は分散して出土し偏在傾向が見られないが、ほぼ全体形がわかる第126図7・8はともに $1R2$ の出土である。骨鉄はSK03に集中したが、第127図1・2は $1R2$ から出土した。玉類は、第128図2~7の管玉と同13のガラス小玉が $0R3 \sim 3R3$ にややまとまる。 $0L \cdot R1$ から $5L \cdot R1$ にかけて遺物がやや希薄なのは、この部分に石垣や薬師堂の土台が築かれたり、露岩であったためであろう。これらの分布状態から、古墳時代遺物は本来岩陰の庇線がかかる範囲にあったものと推定される。

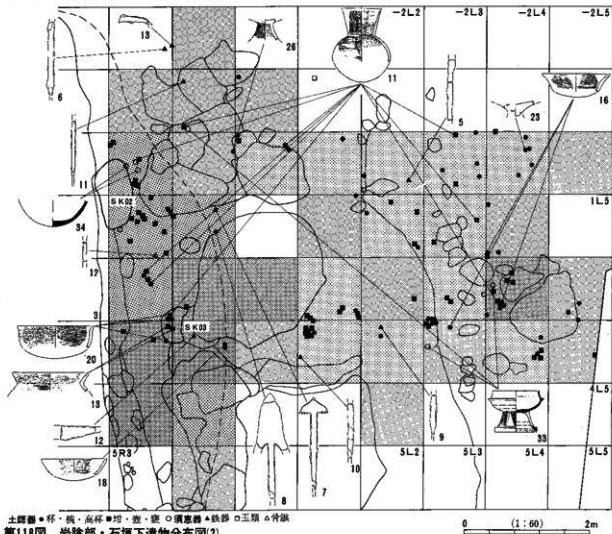
古代以降の遺物は少数ながら、それ以前の遺物が3基の土坑がある岩陰庇線内に集中するのに対して、むしろその部分は空白となり、斜面部から石垣下に多い(第121図)。古代の土器(第124図67、第129図3)



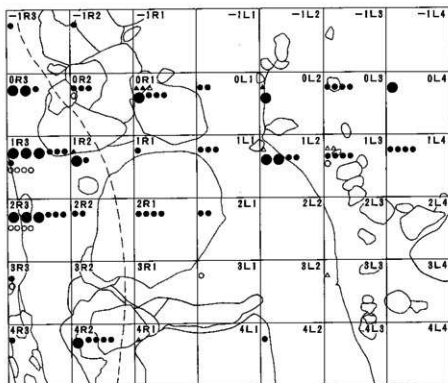
第117図 岩陰部・石垣下遺物分布図(1)

は2R1～2L4を中心とする東西の帯状の分布とも見られる。中世の土器・陶磁器(第129図4～7・9)は0R1・1L1・2L1にややまとまる傾向がある。五輪塔(第131図1・2)は時期が明確ではないが、2点とも岩上部の地表面で採集され、本来の所在地はわからない。近世の土器・陶磁器(第129図8)は特に少数で、3L3以外にまとまりがない。寛永通寶(第130図3～11)が出土した1R2～1L1・2L1は、薬師堂前面に当たる。近代以降の陶磁器は石垣下の2L4に多いが、岩陰部にも散在する。七尋薬師への供献のほか、戦後まで無宿者のねぐらとなったことがあるというから、それらに関する陶磁器もあろう。

なお、このほかにグリッドからも多数の骨片が出土し、大部分が弥生中期前半のSK01に伴っ



第118図 岩陰部・石垣下遺物分布図(2)

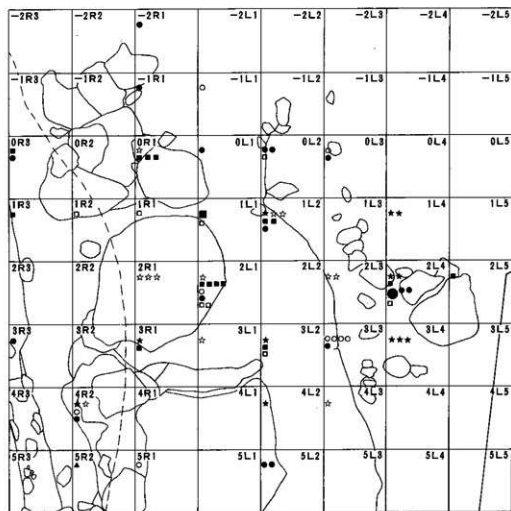


たものと推定されるが、分布状態は付章第3節の表1・2を参照されたい。

第119図 岩陰部・石垣下遺物分布図(3)

0 (1:60) 2m

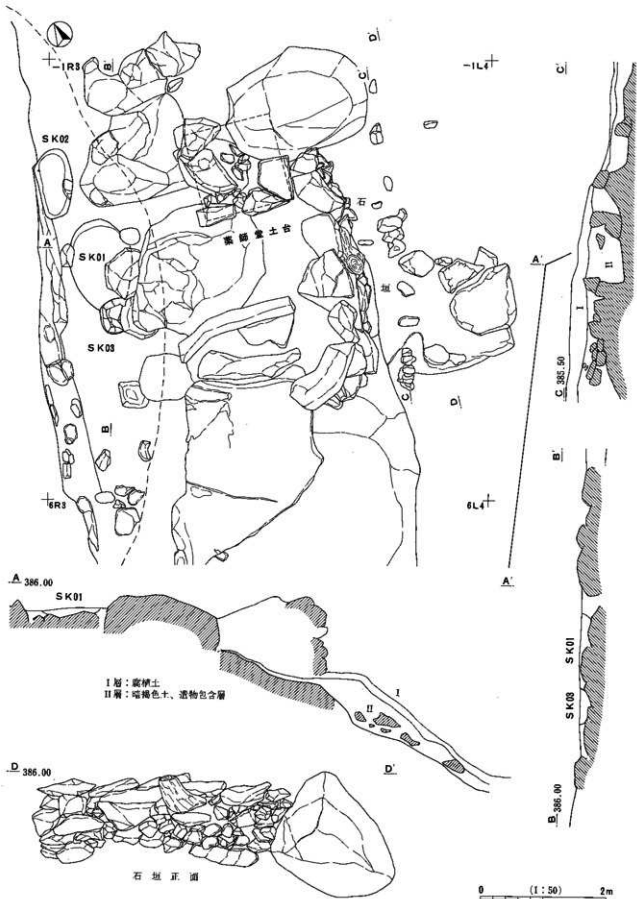
- ▲ 縄文土器 ▲ 石器
- (5点) ● 弥生後期土器
- 古墳前期土器



第120図 岩陰部・石垣下遺物分布図(4)

0 (1:60) 2m

- ▲ 奈良・平安 ▲ 土師器 ☆ 須恵器
- (5点) ■ 中世土器・陶器
- 近世土器・陶磁器
- (5点) ● 近代以降陶磁器
- 銭貨 ▲ 鉄製品



第121圖 岩陰部・土台・石垣実測図

3 七尋薬師堂にかかわる遺構

(1) 石垣 (第117図、PL43)

0 L 2 から 4 L 2 まで東向きの石垣が築かれ、七尋薬師堂前面の前庭部を支えている。岩盤の斜面に盛土して平坦な前庭部を築き、北端は岩盤をそのまま利用する。自然石を野面積みし、上部には扁平の大礫を横積みしている。隙間の目立つやや乱雑な積み方である。

(2) 土台 (第117図、PL40・43)

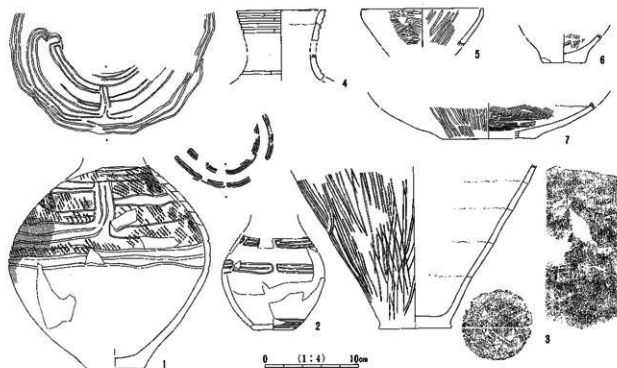
七尋薬師堂は平入りの一間社で、屋根は草葺きの切妻造りである。両開きの格子屏をもち、虹梁に若葉の模様がつき、渦の模様がないから古式を示す。組物はなく、裏面・両側面は板壁である。柱は角柱で、石敷き土台上に建つ (PL40)。この土台は崖側と屏側があり、建物の外側に面をそろえる並べ方で、西側と後側は省略している。薬師堂自体は調査の機会がなかったが、1間は1.4m前後のようである。

第4節 遺物

1 縄文時代の遺物

(1) 土器 (第124図37~39)

37はルーブのLR縄文を施す。38はLRの斜縄文である。この2点は縄文前期前半と思われ、ほかに摩滅した繊維土器片がある。39は隆帯の楕円文に沿って押し引き文を施し、中期前半の勝坂式古段階 (猪沢式から新道式ころ) の土器である。



第122図 弥生土器実測図

(2) 石器 (第125図3・4・8-11)

3・4は頁岩製の打製石斧である。3は撥形で、刃部と頭部を欠損する。厚い横長剥片を素材とし、側縁をよく刃つぶしする。4は短冊形で、幅の割には短い。両面に節理面を残し、周囲からの大まかな剝離成形後、両側縁を細かく刃つぶしする。8は安山岩の凹石である。楕円形礫の両面の中央にアバタ状のくぼみがある。9-11は特殊磨石で、9・11は砂岩、10は緻密な安山岩である。9は半分以上を欠損し、端部に敲打痕がある。10は断面が三角形で、2稜に微弱な摩耗が見られ、2側面の一部にも細かい敲打痕がある。一端には敲打による剝離痕があり、もう一端は3分の1程度欠損する。11は鋭角な稜が平らに摩耗し、小剝離痕を伴う。

2 弥生時代の遺物

(1) 土器 (第122図1-7、第124図35・36・40-66、PL45)

中期前半の土器がまとまっている(第122図1-4、第124図35・40-44)。35以外は岩陰部の出土である。

1-3はSK01から出土した。1は胴部中位に最大径をもつ壺で、頸部を欠損する。胴上半部に磨消縄文を描き、3本単位の沈線を基本として上下を横位区画し、この間に4単位程度長方形の意匠を配して多段に横割りするらしい。文様はやや乱雑で、複節縄文RLRを充填するが、隣り合う文様単位の中では無文部と縄文部が1段ずつずれる。文様帯の部分には施文後にヘラミガキを施して沈線・縄文がつぶれ、赤彩痕がまばらに残る。胴下半は横ヘラミガキし、底面には木葉痕がある。内面は横ナデし、上半部には輪積み痕を残す。胎土に細かい砂を含み、焼成は良く、明黄褐色を呈する。2は小形の壺で、頸部を欠損する。胴上半部に、幅の狭い楕円文を間隔をあけて2段配する。底部外面には4条の沈線帯がある。外面には横ヘラミガキを施し、沈線がややつぶれる。内面は横ナデする。砂がやや多い胎土で石英が目立ち、明るい灰黄褐色を呈する。3は甕の胴下半部で、底部から直線的に開く。外面に半截竹管によるらしい条痕文を施す。内面には横あるいは斜めのナデを施し、わずかに輪積み痕が残る。底面に木葉痕がある。胎土に砂を多く含み、2次焼成を受けているらしく、明橙褐色を呈する。

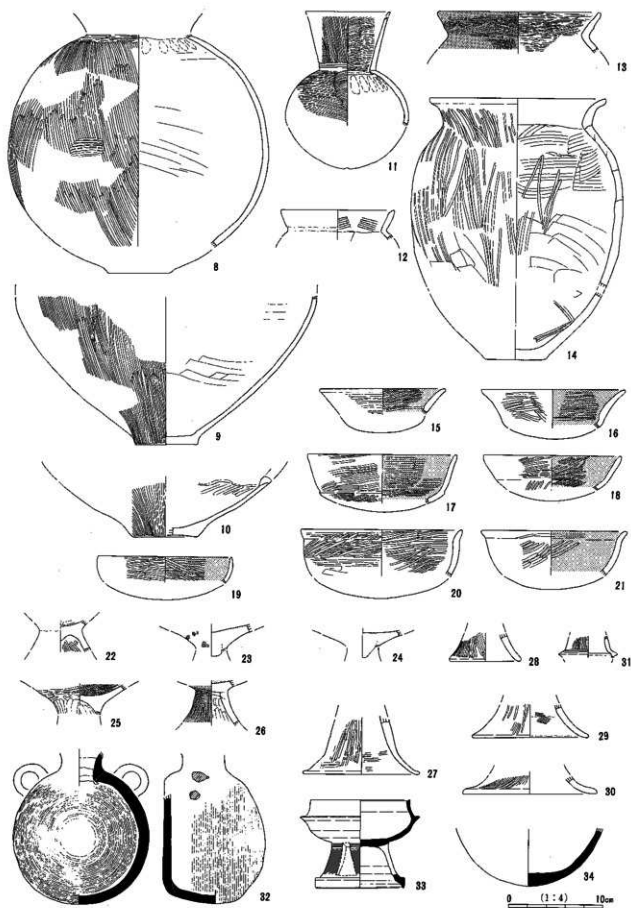
4は壺の頸部で、口縁部外面には4条の太い沈線帯をもつ。胴部との接点部分にも沈線がめぐる。35・40・41は条痕文系の甕である。35・41は縦横に条痕を施し、40は外反する口唇端部を刻む。42-44は在地系の甕である。42・43は縦位に細かい条痕を施す。44は無文の肩部破片で、3と同一の可能性がある。

6・45は中期後半の土器である。6は岩上部出土で、外面と底面に赤彩痕を残す壺である。45は間隔をあけて描描文を施す甕である。

5・7・36・46-66は後期の土器で、7・36は岩上部、その他は岩陰部および石垣下の出土である。7・36・46・48は壺である。7は外湾ぎみに立ち上がる底部外面に縦ヘラミガキ、内面に横ハケメを施し、終末段階と思われる。36は肩部に描描文が見える。46・48は胴下部の稜線以下の破片である。7は口縁部が内湾する鉢で、内外面にヘラミガキを施し、赤彩は見られない。その他は描描波状文を描く甕である。47・49-55は口縁部で、47・49・52は口唇部が内湾する。56-60は籐状文を施す頸部破片、61-66は波状文のみの胴部破片である。これらの後期土器はおおむね箱濬水式に比定される。

(2) 石器 (第125図1・2・5-7)

1・2は有茎石鏃である。1はチャート、2は黒曜石で、それぞれ基部、先端を欠損する。基部形態は1は平基に近く、2は凹基である。5・6は打製石斧で、刃角を呈する刃部は基部より幅が広い。弥生時代の石器としては、石鏃と呼ぶべきかもしれない。2点とも横長剥片を素材とする。5は頁岩製で、大ま



第123図 古墳時代土器実測図

かな剥離で成形し、基部の一部を欠損する。6は砂岩製で、周縁に細かな剥離を施す。表裏面とも長軸方向に顕著な線状痕がある。7は閃緑岩製の太形蛤刃石斧である。刃部側半分程度を欠損し、折れ面を平坦に研磨して敲き石に転用し、平坦面の周囲に剥離痕が並ぶ。

これらの石器は、7以外は弥生時代の石器とは断定できないが、本遺跡では縄文土器に中期以降の土器が見られないこと、特殊磨石など古い時期の石器が認められることと、弥生中期前半の土器が多いことから、弥生時代の可能性が高いと考えた。隣接地にある鶴前遺跡で縄文晩期後葉から弥生中期前半の遺物がまとめて出土したことも、傍証になろう。

3 古墳時代の遺物

(1) 土器 (第123図8～34, PL45)

古墳時代の土器は本遺跡の出土遺物でもっとも多量であるが、全器形がわかる資料はきわめて少ない。特に個体数ではかなりの数を占めるであろう土師器の高杯・杯・椀は小破片に限られる。そのため器種・類型の正確な認定ができず、定量的な分析は困難である。第123図に図示した15～30も全体の10%程度しか遺存しないが、類型を示すためのいわば模式図である。

先に述べたとおり、古墳時代の遺物は中・後期に属するものが圧倒的で、須恵器はごく少数に限られる。土師器には壺・罎・甕・杯・椀・高杯などの器種がある。22は台付甕で、脚部内面をハケメ調整する。数少ない前期の土器である。

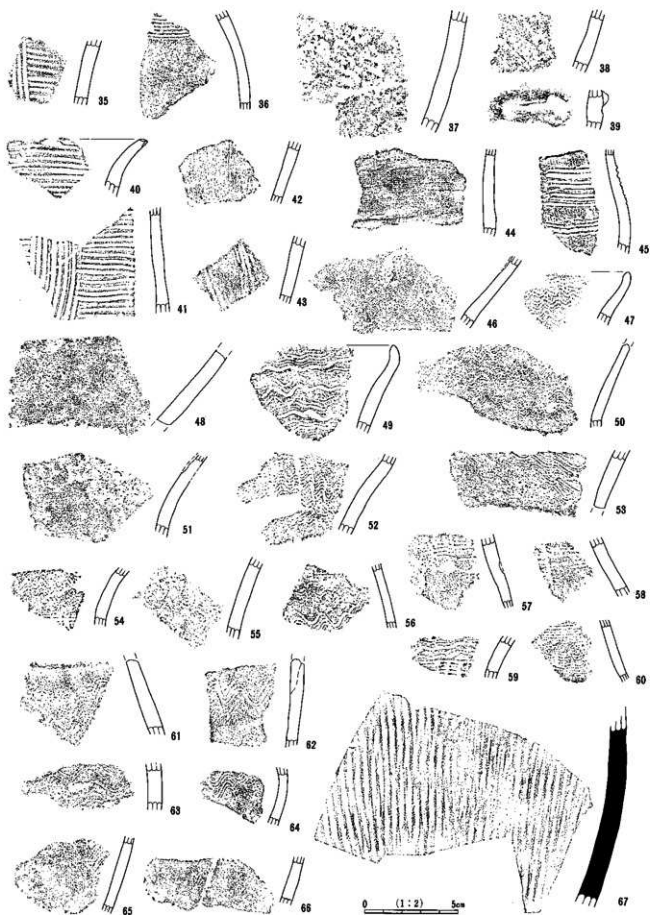
8～10は球形胴の壺で、いずれも口縁部形態は不明である。胎土に砂を多く含む。8は器壁が均一な厚さで器形にゆがみが無い。外面は入念な縦ヘラミガキが施され、内面はヘラで横方向にナデ調整する。9も同様である。10は胴下部の接合部が明瞭である。13は広口壺である。破片数が多いが、ほとんど接合できなかった。砂の少ない精製された胎土で、焼成が良い。口縁部内外面に細かい横ヘラミガキを施し、器面に光沢をもつ。外面に赤彩を施す。11は罎である。13と似通った精製品で、赤褐色を呈し、一部黒色である。胴部はわずかに偏球形で、口縁部は直線的に開き、口唇部が薄い。外面調整は胴部は横、口縁部は縦の細かいヘラミガキで、胴部との境めにヘラで2条の浅い沈線を施す。内面は、胴部はナデによって成形痕を消し、口縁部との接合部を指オサエする。口縁部はヘラミガキを施す。

14は甕で、胴部はやや長く、口縁部が短く外反する。胴下部は摩滅するが、外面は縦ヘラケズリの後まばらな縦ヘラミガキを施す。内面は胴下部をヘラによるナデつけ、上部は粗い横ハケメである。口縁部は横ナデを施す。12は小形甕である。口縁部は短く屈曲し、外面はナデ、内面は横ハケメの後ナデを施す。

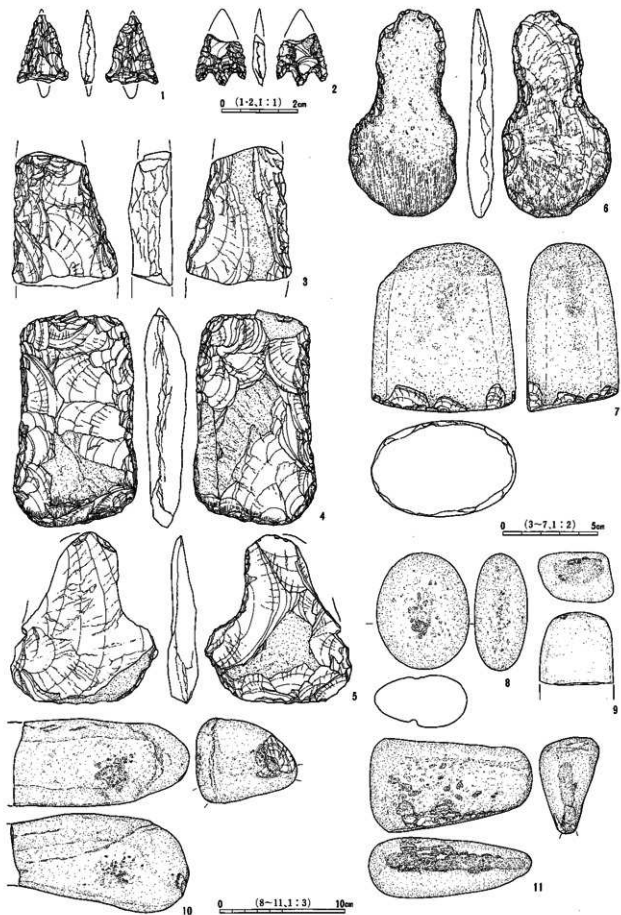
15～21は杯・椀類である。15・16は口縁部が長く外反し、内面に屈折部をもつ。17・18は外面に稜をもつ、須恵器模倣の杯である。19は浅い半球形で、口縁部が内湾ぎみである。20・21は椀形で、口縁部が外屈して内面に稜をもつ。いずれも内外面を横ヘラミガキし、20以外は内面を黒色処理する。

23～28・25～30は高杯である。23～25は杯部で、25は内面黒色である。26～30は脚部で、裾は広がらず内湾ぎみに立ち上がり、外面に縦ヘラミガキを施す。26は杯部内面が黒色、脚部を赤彩する。31は器壁が薄く推定最大径6cmほどで、屈曲部外面が突出する。外面はヘラミガキ、内面はナデ調整する。土製品の一種かもしれない。

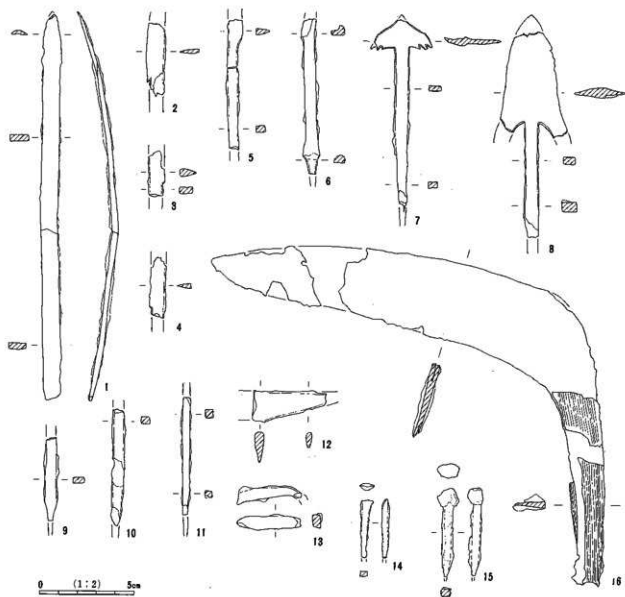
32・33は須恵器である。32は提瓶で、口縁部を欠損する。胎土に白色粗粒砂が目立ち、器壁は15mm前後ときわめて厚い。暗灰色を呈し、高温によるひび割れが生ずる。裏面は平坦に作られ、カキ目を施す表面には厚く灰がかかる。粘土のこびりつきや不規則な工具痕が見られ、粗雑な作りである。環状把手を欠損しており、陶色編年のTK10型式以降に比定され、6世紀半頃に位置付く。33は有蓋高杯である。胎土は



第124図 縄文・弥生・古代土器拓本図



第125圖 縄文・弥生時代石器実測図



第126図 古墳時代・近世鉄製品実測図

砂が少なく緻密で、焼成が良く黒点を生ずる。口縁部は内傾して端部に明瞭な段があり、受部は上方方に伸びる。体部の回転ヘラケズリは下半部2分の1程度である。脚部は短く緩やかに外反し、端部は屈曲する。おそらく3方向に長方形の透かしを切り、カキ目を施す。TK23型式に比定される。

34は瓦質の厚い丸底である。胎土に細かい砂を含み、軟質である。SK02付近から出土し、須恵器でないならば韓式土器の可能性があり、検討を要する。

(2) 鉄製品 (第126図1-12、PL46)

1は鍔である。刃部端をわずかに欠損するが、全長21cm・柄部幅1cm・厚さ0.3cmを測る。刃部の断面形は片丸で、幅は柄部とほとんど変わらない。2-11は鉄鏃である。すべて有茎式鏃に属し、茎部を確認できるものは明瞭な篋被を作り出さない。7・8は平根式鏃である。7は鏃身部が短い幅広の三角形で、水平の関節部に細かい刻みを2カ所ずつ施して三重に小さく挟れた腸状を作る、珍しい形態である。8は腸挟式鏃で、鏃身部は両丸造りらしい。2-6は尖根式の片刃箭鏃で、鏃身の片間は小さい。9-11は頸部または基部である。12は刀子の柄部である。

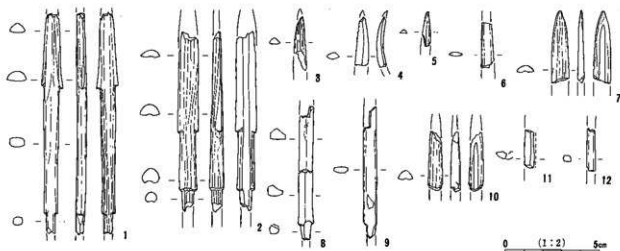
(3) 骨製品 (第127図1~12, PL46)

骨鏃が13点出土し、すべて図示した。3・5~8・10・11の7点はSK03で須恵器提瓶(第123図32)に伴い、6世紀半頃の年代が与えられる。材質はシカの中手骨あるいは中足骨で、骨の表面を残さずに研磨している(付章第4章参照)。1・2は鏃身部と茎部の先端を欠損するが、およそ全体形がわかる。鉄鏃にならって各部分を鏃身部・頸部・茎部と呼んでおく。

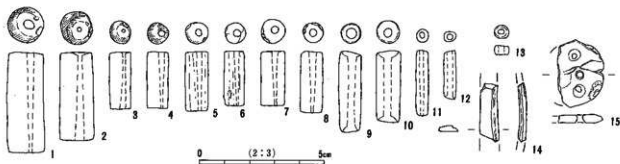
1は鏃身部が頸部より短い。鏃身部の断面形が三角形、頸部が長方形に近く、骨内の溝を残さない。表面には鉄器と思われる加工痕が見られ、鏃身の小さな逆刺と筥被を削り出す。1と似た特徴をもつ欠損品は、鏃身部では3・5・10、頸部では8・9がある。3・5は片鑄造り風で、先端は鋭い。10は骨内の溝を残す。8は頸部断面が五角形、9は扁平である。

2は鏃身部が頸部より長い。鏃身部は薄片造り風で頸部も丸みをもち、骨内の溝を残す。鏃身の逆刺や筥被は1と同じ。2と似た特徴をもつ欠損品は、鏃身部の6・7・11がある。6は先端に近く、薄身で溝はない。4は鏃身部先端で断面が変形を呈し、かなり反っている。12は細く、茎部の可能性がある。

これらの骨鏃にもっとも近い形態の鉄鏃は、尖根式のうち両側で長く平行した両刃の鏃身部をもつ、筥被を備えた有茎式鏃の類であろう。ただし素材の制約から、骨で平根式鏃を作り出すことはむずかしいだろうから、模倣を意図すれば当然尖根式鏃に近い形となろう。したがって、これらの骨鏃は類似形態の鉄鏃をモデルとする模倣品の可能性があるが、断定もできない。全国的にも類例がきわめて少ない遺物であり、本例が古墳時代後期の産であるため、弥生時代の骨鏃からもただちに系譜をたどれない。



第127図 古墳時代骨鏃実測図



第128図 古墳時代石製品実測図

(4) 石製品 (第128図1～15、PL46)

管玉が12点出土し、すべて図示した。形態と材質から4類に分類できる。

1・2は大形で、長さ3.5～4.0cm・太さ1.4～1.5cmを測る。濃緑色の良質な碧玉を用いる。入念に研磨され、光沢がある。片面穿孔で孔の一方が細い。1・2とも両端の孔の周囲が浅くへこんでいる。

3～8は中形で、長さ2.2～2.4cm・太さ0.8～1.0cmと規格的である。灰緑色の緑色凝灰岩製で、研磨面が残る粗雑な仕上げである。片面穿孔である。

9・10は長さ2.8～3.2cm・太さ1.0cmで、暗灰色の滑石製である。両端に深くくぼみがある。

11・12は同じく滑石製で、長さ2.0～2.6cm・太さ0.4～0.5cmと細い。12は孔のまわりがくぼみ、11はそれがはっきりしない。9～12は両端で孔の直径がほとんど変わらない。

14は頁岩と思われる暗灰色の薄い石材の1側縁に沿って溝を刻んでいる。残欠と思われるが、どのような製品かわからない。15は滑石製の有孔円板であろう。直径2.6cmを測り、3分の1程度欠損する。普通は2孔であるが、直列に3孔を穿っており珍しい。

13はガラス小玉である。コバルトブルーで、長径5mm・厚さ3.5mmを測る。

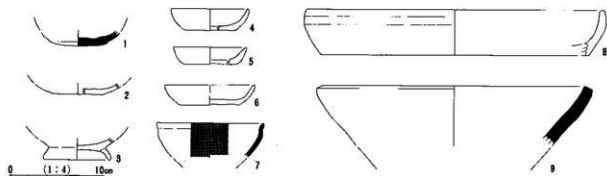
4 古代以降の遺物

(1) 土器・陶磁器 (第124図67、第129図1～9)

第124図67、第129図1～3は古代の土器である。1・2は岩上部、または岩陰部出土である。1は須恵器杯で、底部はへら切りの後ミガキを施す。2は土師器杯で、回転糸切痕がある。3は土師器碗である。1は8世紀前半、2・3は10世紀である。67は須恵器甕で、外面は縦方向の格子タタキを施す。内面に青海波文が見られず、ナデを施す。

第129図4～7・9は中世の陶磁器である。4～6は土器皿、いわゆるカワラケである。水ごしして精製された胎土で、灰白色を呈し、軟質である。ロクロ成形され、回転糸切痕を残す。6は口縁部に煤が付着し、灯明皿に用いられている。14世紀の産と思われる。9は珠洲系の播鉢である。胎土に小石を含まず、軟質の須恵質である。内外面とも粗雑にナデを施し、面取りした口縁部のみ入念に横ナデする。14世紀と思われ、在地産の可能性はある。7は美濃大窯前半期の天目茶碗である。口縁部を玉縁状に仕上げ、16世紀前半の産である。

第129図8はほうろくで、器高が低い内湾ぎみの器形である。内耳鍋と共通の砂の多い胎土で、近世の産である。ほかに幕末ころの磁器も見られる。

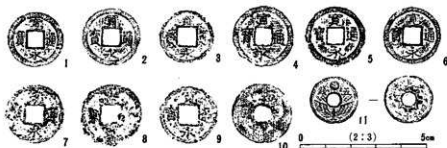


第129図 中・近世土器・陶磁器実測図

(2) 鉄製品 (第126図)

13~16, PL46)

13~15は断面方形の釘である。13は曲がった釘の可能性が高いが、他の器種かもしれない。15は頭部が丸く、近世と思われる。16は鎌である。柄

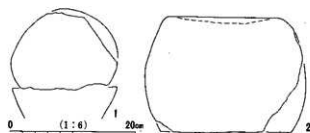


第126図 鉄貨拓本図

に対して直角に装着され、木質が残る。近世以降の産と思われるが、時期ははっきりしない。

(3) 銭貨 (第130図1~11, PL46)

寛永通寶が13点出土し、7点が銅銭 (第130図1~8)、6点が鉄銭 (同9・10) である。銅銭はいずれも小形である。鉄銭は錆化のため書体は読み取れない。



第130図 五輪塔実測図

11は昭和11年製造の5銭白銅貨である。岩上部の南側にある「山の神」から出土した。

(4) 五輪塔 (第131図1・2)

1は玄武岩質溶岩の石材を用いた風・空輪で、風輪部を欠損する。空輪は最大径17cmを測り、やや扁平で頂部が尖らない。2は凝灰岩を用いた水輪で、高さ18.4cm・最大径25cm・上面径約19cmを測る。全体が低平で丸みの乏しいプロポーションである。下面は平坦、上面はわずかにくぼんでいる。

第5節 小 結

本遺跡は縄文時代早期ころから近代までの長さにおよび、岩陰は時代とともに性格を変えてきたことがわかった。調査の成果として、弥生時代中期と古墳時代中・後期の問題について若干ふれておきたい。

弥生中期については、SK01から多量の焼人骨が出土し、中期前半の土器を伴った。土器は中・小の壺2個と甕1個で、いずれも口縁部を欠損している。時期は庄ノ畑式ころと思われるが、あるいは阿島式に下る可能性もある。土器の出土状態と大きさから、壺を納骨容器とはみなしにくい。人骨は成人4体と子供1体で、十分焼けていない人骨と高温を受けた人骨が見られ、焼かれていない骨も混在するため、火葬の条件は一定ではないという。5体分としては少量のため、火葬後に取り残されたか、埋葬後に消失した可能性が指摘されている。炭・焼土が見られないという所見を重視すれば、出土した焼人骨は近隣で火葬され、主な部分を抽出した際に遺棄された残余骨となる。一方、大腸骨1本がほぼ残っていたことや半完形の土器を伴ったことを重視すれば、SK01自体を岩陰再葬墓と考えることもできる。また、焼土が生じない程度の低火度で火葬されたとすれば、本岩陰は一次葬としての遺体処理、あるいは二次葬としての遺骨処理の場であった可能性もありうる。さらに埋葬後に被熱した可能性も指摘されている。土坑上部が後世の擾乱を被っているため、想定できるケースを列挙して結論は今後の検討に譲る。岩陰や洞窟から焼人骨を出土した類例として、県内では佐久市月明沢遺跡がある。小規模な岩陰から成人4体・幼児1体以上の人骨を出土し、個体数不明の成人男性らしい各部の焼骨が混在する。水神平式土器と人歯牙加工品を出

第25表 古墳時代骨罎出土遺跡地名表

遺跡名	所在地	遺跡・遺構種別	時期	点数	摘要	文献
五松山洞窟遺跡	宮城県石巻市	洞窟内人骨埋蔵	6世紀末～7世紀初頭	7点	シカ中手・足骨、2種類、逆刺・開あり	石巻市教委1988
金冠塚古墳(山ノ上古墳)	福島県いわき市	横穴式石室	6世紀末	8点	逆刺ある・なしの2種類、開あり	梅宮茂1964 東博図版目録1968
大善寺古墳	# 田村郡田村	組合式石棺		10点	同上	梅宮茂1964
胡麻状古墳	# 東白川郡柳倉町	組合式石棺		25点	3大別5種類、逆刺・開ある類が主体	井上国雄他1975
磯崎古墳	茨城県那珂市					
鶴萩七岩陰遺跡	長野県長野市	岩陰祭祀遺構?	6世紀後半	13点	シカ中手・足骨、逆刺・開あり、2種類	本報告1994
生仁遺跡	# 更埴市	竪穴住居址	後期	4点	同上素材、開ある・なしの2種類、ヤス状刺突具あり	更埴市教委1989
累代遺跡群	# #	トレンチ(古墳住居址?)	弥生中期～平安	1点	未製品、歪あり	# 1988
鳥が崎洞窟	神奈川県横須賀市			4点		赤星直忠1924
佐島第3号穴	# #			1点		# 1929
吉井城山横穴	# #			3点		# 1932
なたぎり遺跡	# #	C地点遺物包含層	後期	9点	逆刺・開あり、3大別5種類	横須賀市教委1986
鴨居八幡社境内貝塚	# #			3点		
住吉神社裏洞穴	# #			断欠		赤星直忠1960
猿島洞穴	# #			1点		# 1952
間口洞穴	# 三浦市			1点		# 1953
江奈3号横穴	# #		後期	1点	逆刺なし・開あり	# 1976
一色古墳	# 桑田町			4点		
東二取8号地下式横穴墓	宮崎県小林市		後期	7点以上	逆刺なし?・開あり	宮崎県埋文センター1993

本表は石巻市教委1988・横須賀市教委1986・赤星直忠1976を参考に作成した。

土したが、攪乱のため遺物は四散状態という。ほかに群馬県の八東窪洞窟(弥生中期中頃～後半)・三笠山岩陰(弥生後期)が知られる。時期は下るが、丸子町鳥羽山洞窟(古墳中期)・岩谷堂洞窟(古墳後期)は焼人骨を伴う特異な埋葬あるいは崖葬の葬所で、その系譜が問題となっている。

岩上部の小岩庇周辺からは古墳時代中・後期の土器が出土した。滑石製の有孔円板を伴ったことから、岩上部が祭祀の場であったことは確実と思われ、巨岩祭祀の種類としては磐座と見られる。SK02はおそらく古墳時代中期、SK03は後期の土坑である。この時期の遺物はもっとも多量で、岩陰部全体に分布する。個体識別の結果、本来岩庇下にあったものが転落・分散したらしいことがわかった。遺物出土状態から岩陰部や土坑の性格を推定するのは無理であるが、土器以外の鉄鏃・鈍・管玉・ガラス小玉は古墳の副葬品と共通する。また岩上部が磐座とすれば、同時期の岩陰部も一連の祭祀遺構と考えるのが妥当であろう。ただし、手づくね土器は見出せない。二つの土坑からは少量ながらそれぞれ2体分の人骨が出土したほか、岩陰部全体に散在するため、葬所である可能性も捨て切れない。しかしSK01の人骨ほどの大きさやまとまりがなく、SK03が切り合うことや薬師堂建立などのため、弥生中期の焼人骨が攪乱されたものと見られる。県内の巨岩祭祀遺跡には東山道に沿う鳴岩遺跡などがあるが、交通路の祭祀と見るべきで、本遺跡とは性格が異なるであろう。静岡県引佐町天白磐座遺跡は山頂部に群在する巨岩にあり、特に巨大な三つの露頭の根本から多数の手づくね土器、鉄矛、鉄刀、鉄鏃、鈍、石製模造勾玉を出土した。4世紀後葉～13世紀中葉まで祭祀が営まれ、古墳後期を主体とするから、本遺跡の古墳時代祭祀を検討するうえ

で見過ごせない類例である。12点出土した骨鐵は7点がSK03で6世紀後半の須恵器提瓶に伴ったことから、ほぼこの時期の所産と考えられる。きわめて珍しい遺物なので、試みに管見に接した例を第25表に集めてみた。福島県と三浦半島、そして長野盆地にまとまりがあり、古墳時代後期あるいは6世紀後半に集中する。出土遺跡は大部分が古墳あるいは横穴墓で、遺物包含層出土の鉾切遺跡はウシ頭骨を配した祭祀遺構が著名である。ほかに集落址では、生人遺跡と長野市榎田遺跡の古墳時代の溝から出土した例が知られる。本遺跡のように逆刺と関笹をもつ形態が主流らしい。どうやら宮城県から宮崎県までの太平洋岸の文物のようで、地域が異なっても時期は限定され、鉄鐵模倣の可能性もある。長野盆地は人骨・獣骨が遺存しやすい土壌条件を備えるのか集落址の出土例があり、古墳時代にも骨角器は一般的だったかもしれない。反面、古墳時代の貝塚などからの出土例がなく、県内では中・後期の土師器を多出した高山村湯倉洞窟でも骨鐵は知られていない。石室副葬品が遺存しやすい点は留意すべきだが、古墳出土例が圧倒的で希少遺物という特徴を考慮して、祭祀にも用いられる非日常的な性格を見出さなわけにはいかない。

少量の古代・中世遺物も七尋薬師堂の前身に当たる信仰関係の可能性もある。この薬師堂は文政年間に長谷区一帯に眼病がはやった時に建てられたと伝えられ、目の神といわれ決して仏とはいわない。地元の人々との関係がなほらしく、4月8日と10月8日には二反織を立てて鶴萩地区30戸による祭礼が行われる。本尊は2体あり、明治初期までは馬頭観音と似た石像、その後は木造の如来像となったという。懸崖造で有名な長野市浅川のブランド薬師も石像で、祭神は八幡神といわれる。神仏習合した近世以降の民間信仰の一例として興味もたれる。偶然であろうか、天白磐座遺跡のある丘陵も「薬師山」である。

参考文献

- 赤星直忠 1976 『三浦市江奈横穴群』
 石川日出志 1988 『縄文・弥生時代の焼人骨』〔職台史学〕74
 辰巳和弘ほか 1992 『天白磐座遺跡』引佐町教育委員会
 国立歴史民俗博物館編 1985 『祭祀関係遺物出土地名表』〔共同研究「古代の祭祀と信仰」附編〕
 桜井秀雄ほか 1993 『長野県』『古墳時代の祭祀』第2回東日本理蔵文化財研究会
 設楽博己 1993 『密棺再葬墓の基礎的研究』〔国立歴史民俗博物館研究報告〕50
 西沢寿晃ほか 1978 『長野県佐久市月明遺跡発掘資料について』〔長野県考古学会誌〕31
 長谷川厚ほか 1986 『鉾切遺跡—C・D地点の調査』
 三宅宗謙ほか 1988 『五松山洞窟遺跡』石巻市教育委員会



七尋薬師像



再建された薬師堂

第6章 あかざわじょうせき 赤沢城跡

第1節 遺跡の概観と調査の概要

1 遺跡の概観

本城跡は、長野市篠ノ井塩崎字越543番地に所在する。遺跡は善光寺平西南部にあって、篠山山系から東向きに張り出す尾根の先端部に立地し、眼下には北東方向に流路を委え、屈曲する千曲川を望める。城郭の施設は尾根筋を中心として築かれており、頂部に主郭、尾根筋と斜面に塹壕を巡らし、堀を画して付属郭が配されている典型的な山城である。また、周辺の小字図では、この尾根には「城山」という地名が確認される（PL47）。

本城郭の前面は、沖積地の展開する東側で、眼下には越の集落が広がる。尾根筋から山麓付近まで塹壕を延ばすことで、前面の防衛的機能を果たしている。一方、背面の西側は、谷を隔てて尾根が続く。城郭の施設は、城山の南西斜面の一角に塹壕の集中が認められるほかには、谷を取り巻く尾根筋・斜面に確認することはできない。したがって本城郭は、独立峰的な尾根先端部の全域を城域として、周囲の尾根まで広がらない完結的な縄張りを呈す。高速道はこの谷を中心に通るため、今回の調査対象地は、谷と城山の西側斜面であった。

主郭が築かれる尾根頂部の標高は480.02m、尾根筋と谷の比高差は40～50mで、この城山が篠山山系の尾根で最も突出しているため、主郭からは眺望に富み、屋代城をはじめとした対岸の城跡など、善光寺平南部に立地する多くの城跡を確認できる。

千曲川左岸では石川糸里遺跡を囲むように尾根が延びており、塩崎地域はその一角に位置する。尾根の先端部には多くの山城が点在し、赤沢城からは沢を隔てて塩崎城（別名・白助城）・塩崎城見山砦などを確認できる。また善光寺平の喉元に当たるこの地区が、城郭の分布状況から一時期非常に軍事的緊張状態にあったことが推察できよう。

2 調査の概要

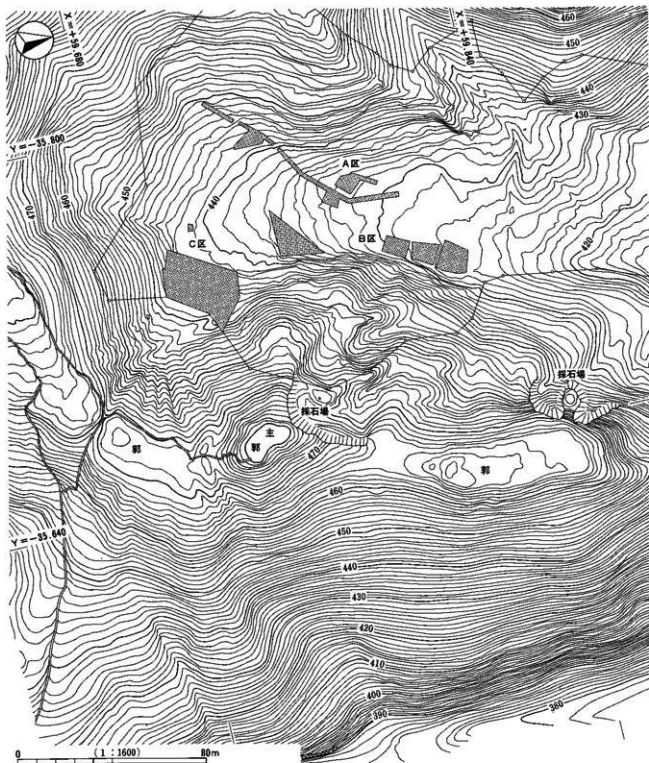
高速道用地は赤沢城跡の城郭施設が展開する尾根の西側にかかり、北に開けた狭長な谷地形である。城郭施設は大半が調査区外となり、調査区内は近世以降の石切り場の攪乱によって失われている（165頁写真上）。現状は山林と果樹園で、段状に造成された部分が多い（第132図）。

発掘調査に先立ち、8月中に地表面観察を行って縄張りを作図し、調査区内の堀・土塁・テラス状平坦地などの施設を確認した（第138図）。

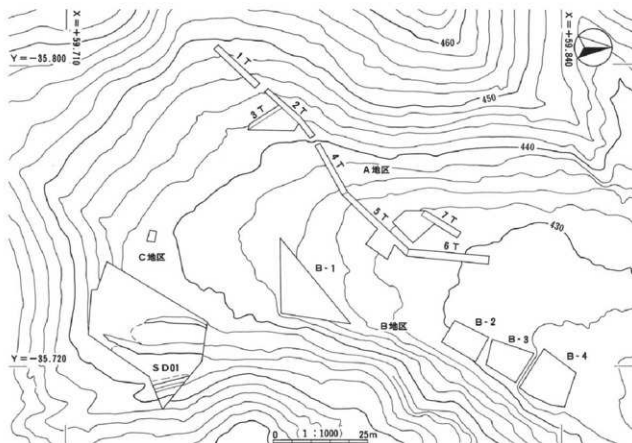
本調査は調査研究員3名が担当し、昭和63年9月12日から10月14日まで約1カ月間を要した。交通不便な山地のため、プレハブにかかわってテントを設営し、水はタンク運搬、作業従事員は徒歩によった。まず、重機によるトレンチ掘りと表土剥ぎを行って、遺構と遺物包含層の確認に努め、黒色土の堆積と遺物を検出したA・B・C地区の3地点を発掘することとなった（第139図）。A地区は谷中央部、B・C地区は主郭西側の山麓部に当たる。調査の結果、遺構としてはC地区で塹壕の一部を検出したのみで、B地区の石垣やC地区の平坦地は城郭施設ではなく、近世・近代以降の造成と判明した。遺物は、弥生時代後期から戦国時代までの少量の土器・陶磁器と、石臼・鉄貨などが出土したにとどまった。また、調査面積は、当初予定どおりの5,925㎡である。

測量基準杭は、日本道路公団の中心杭・上り線幅杭を利用し、 $X=59,680\sim 59,840$ 、 $Y=-34,200\sim -35,800$ の間の任意の座標を用いて、光波測距儀で測量した。地形測量は航空測量により、城郭範囲全体を図化した。

整理期間中の平成4年1月13日には、奈良女子大学教授村田修三氏の現地指導を受け、縄張り図の修正を行った。



第132図 地形・調査範囲図



第133図 調査区全体図

3 調査の経過

昭和63年度

- 9月12日 重機によるトレンチ掘り、表土剥ぎ開始。
 14日 トレンチ断面の精査。石垣は近代以降と判明。
 16日 石垣下谷部の精査。遺物少量。支谷部の草刈り。
 22日 C地区で整塚検出。
 28日 A地区は黒色土掘り下げ、発土土器出土。遺構は確認できず。
 10月3日 C地区は整塚の掘り下げ開始。近世遺物出土。
 5日 航空撮影・測量を実施。C地区の中世以降の面を完掘。
 7日 B地区で中世陶器出土。攪乱著しく遺構なし。
 11日 重機による掘り下げと遺構検出。
 12日 A・C地区では遺構・遺物なし。B地区はトレンチ断面実測。
 14日 A・C地区、中部電力作業区内調査区を測量して全作業を終了。



採石場跡



調査風景 (昭和63年9月)

第2節 地形と基本層序

遺跡は千曲川が大きく屈曲し東北方向に流路を変える地点の、千曲川左岸にある。篠山山塊の小坂山から東に延びた尾根が、標高を下げながら盆地に突き出た、長野市篠ノ井塩崎と更埴市稲荷山との境、湯の崎の西方の城山に所在する。この尾根付近は、裾花凝灰岩に属する石英安山岩質の流紋岩および流紋岩質凝灰岩の山骨で、山脚は鋭く盆地に落ちる。そのため、北・東・南側の山脚は峻険な急傾斜をなし、西側は深い谷が入り込んで南西方向のみに瘦せ尾根が山地に続く。盆地との比高差は110mほどである。

高速道路線は赤沢城の西側、南北に延びる谷地形を通るため、本城郭に関連した施設の調査は、西側斜面の一部に限られた。したがって、調査区内の土層堆積は、谷に向かって傾斜する崩落土が主体であったため、地表面として形成された層は確認できなかった(第132・133図)。

谷を挟んだ両側の斜面を中心に設定し掘り下げたトレンチの断面では、尾根の斜面から谷に向かって崩落した層が顕著に認められた。特に多量の礫を含むⅢ層の堆積は、A区2・3トレンチで谷に向かって傾斜し厚くなり、谷中央部に近いA区4～7トレンチ付近が最も層が厚かった。また6・7トレンチではひとかえりもある礫が多量に混入する状況であった。

第3トレンチの西側でⅡ3層を掘り込むⅡ2層基調の落ち込みが確認されたが、これは面的調査により谷底方向に流れる自然流路であった。

出土遺物からするとⅡ層が現代の造成による土で、Ⅲ層は弥生から近代に至るまでに堆積した層と推定できる。

基本土層は以下のとおりである(第134図)。

I層：黒褐色で腐食土。腐食土と小礫と細礫を含む砂質粘土層で近・現代の陶磁器出土。

Ⅱ層：黄褐色砂質土。リング畑造成時の盛り土で内耳土器・カワラケ・須恵器出土。

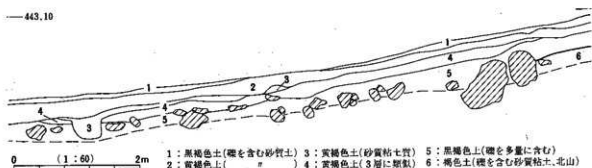
Ⅱ-2層 粘性が弱い砂質粘土層。

Ⅱ-3層 砂質粘土層。

Ⅲ層：礫を多量に含む黒褐色土。角礫を多量に含む砂壤土で内耳土器・弥生土器出土。

Ⅳ層：褐色砂質で地山。大小の角礫を含む砂質粘土。

—443.10



第134図 A地区(03トレンチ)土層図

第3節 遺構

1 中世の遺構

(1) 堀 (第135・136図、P L50・52)

赤沢城の主郭部は南北に延びる尾根上に郭が配置され、尾根頂部に主郭、尾根を切る堅堀が南北両側に走り、堀を画して平坦部（付属郭）が存在するいわゆる連郭式の山城である。

発掘調査に先立って、本城郭の縄張り把握と調査区内の施設の有無の確認を目的に実施した地表面観察では、高速道の路線が本城郭の西側斜面を通り、調査区内では堀・土塁・テラス状平坦地などの施設が確認された（第138図）。

赤沢城の縄張りで特徴的なことは、主郭・付属郭の規模と比較して、郭間に配置された堅堀の規模と構造が複雑である点があげられる。詳細は第5節で記述するが、この堀は堅堀群のなかで最も南端に位置し、後方の山とを分断する目的をもつ。尾根南端を切った堅堀は、東側斜面の中腹で収斂し山麓まで延びる。一方西側では、尾根中腹付近から角度を変えて山麓まで斜面を斜めに走行するが、近代の石切りにより、破壊・崩壊したため、先端部の状況は把握できない。

さらに、主郭後方に掘削された数条の堀切が、斜面で収斂する状況が確認できるなど、西側斜面で特異な堀の配置をなすことも赤沢城の特徴である。したがって、東西の斜面を比較すると堀の平面形が山麓で若干異なる。この形態は、この堀が尾根を切る目的のほかに、斜面部ではより防衛的機能を強化する目的があったと想定でき、西側、堀の谷側縁辺部に土塁を構築し、他の堅堀をここに収斂する堀配置により、西側の防御を補強したと推定される。

調査区はこの堀の先端部付近に位置するが、石切りによる破壊で調査できた部分は堀の一部であるため、構造的な面で解明できたものは堅堀の構築状況と廃棄プロセスである。施設のほとんどが調査区外であるため、堀と郭との関係など施設相互の有機的関連性を考古学的資料で把握することはできなかった。

検出した堀は、上部幅3.5～3.6m・底部幅3.5～4m・地表面からの深さ1.3m、断面形はいわゆる薬研堀に当たるV字形で、掘り込んだあと堀底部を広げる構築方法と推定される。断面形は緩やかな傾斜をもつ程度であるが、底部付近はほぼ垂直を呈する。底部付近で傾斜角が変化する堀は近年の中世城郭の調査で検出例が増加しており、山城では最も一般的に認められる形状である。

堀の埋土は7層に分層され、Ⅲ4層が小礫の混入する砂層で、Ⅲ4層を境に土質が変化し、上層には石切り場で確認されたものと同様な礫が混入する。また、出土遺物ではⅢ1層から中世の陶磁器、Ⅲ6層から須恵器が出土した。

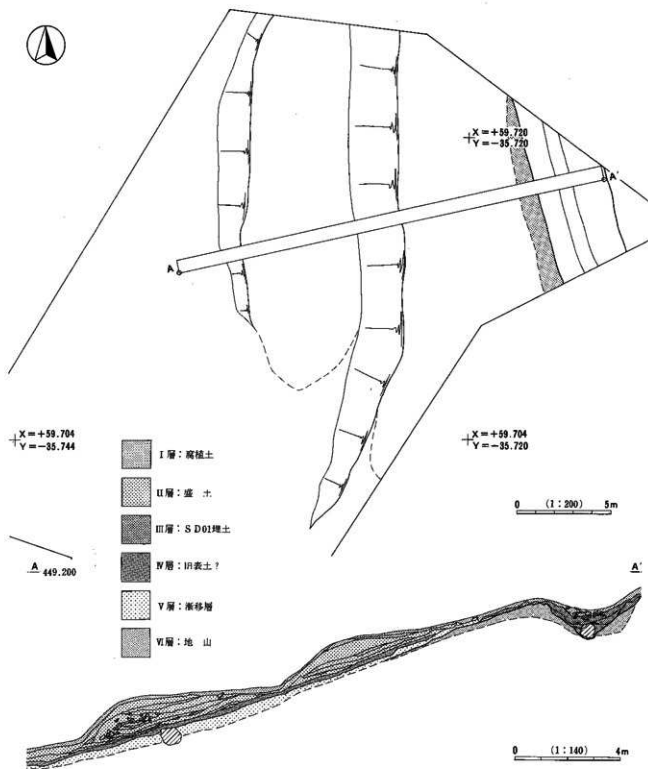
埋土の堆積状況と出土遺物から推察すると、城郭使用時には薬研形の空堀として機能したものが、Ⅲ4層堆積後、堀の底部が埋まり浅い凹地になった段階で、一時期道として2次的に利用された可能性がある。堀を2次的利用した時期は、Ⅰ・Ⅲ1層の土層から推察すると比較的新しく、近・現代に近い段階と推定できる。

(2) 土 塁 (第135・136図)

地表面観察では前記した堅堀の西側で、尾根上から斜面下方に延びて堀に並走する土塁状の高まりが認められた。調査区内では後述する段の構築に際して上部が削られ、基部が残存していたにすぎなかったため、土塁の構築状況をとらえることはできなかった。調査区内に遺存した部分が少ないため、構造的な面

を把握することができないが、堀に防御の要素を加えるために、堀で生じた土を盛り上げて土塁を築いた施設と理解できよう。

この遺構は、近年調査例が増えつつある阻塞類に属するといえるが、県内では調査例がない状況で本城郭は貴重な資料となろう。



第135図 C地区遺構・土層図

2 中世以降の施設

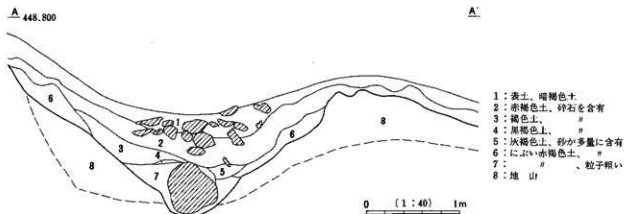
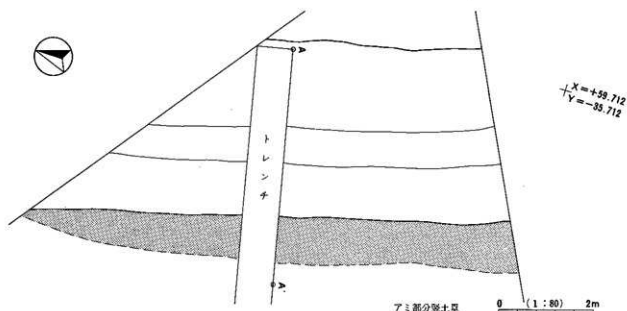
(1) テラス状の平坦部 (第135図、P L51・52)

本城郭の西側斜面、調査区にかかった豎堀に近接して2段の平坦部が確認された。段は等高線と同方向に長軸をもち、傾斜に沿ってテラス状に造られている。規模は上段で長軸25・26m・短軸7～8m、下段が長軸25m・短軸6～7mを測る。

調査前の地表面観察では、この段が豎堀に関係した郭とも推定されたが、虎口・土塁などが確認されず、城郭背面に位置することから城郭に帰属する施設と積極的に認定できなかった。

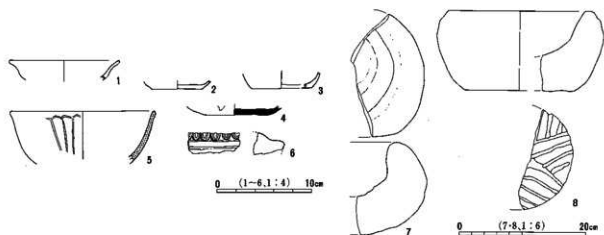
調査では、このテラス・段と豎堀との関係、構築時期と構築方法の把握を主目的として、傾斜に沿って段に直交する方向にトレンチを設定して掘り下げた。その結果、2段の平坦部は地山を削り出した後、盛り土で構築されている状況が認められた。盛り土は粘質土と砂が互層になっており、盛り土2～4層には石切り場の破砕礫と推定される礫の混入が認められた。

本址の時期は、盛り土4層から近世の火鉢が出土したことにより、近世以降に造られた段と推定される。さらに、豎堀に並走する豎土塁は、この段の構築に際して削られ、盛り土に利用された可能性がある。



- 1: 表土、暗褐色土
- 2: 赤褐色土、碎石を含有
- 3: 褐色土、 "
- 4: 灰褐色土、 "
- 5: 灰褐色土、砂が多量に含有
- 6: にぶい赤褐色土、 "
- 7: "、粒子粗い
- 8: 地山

第136図 SD01・豎土塁実測図



第137図 土器・陶磁器・石製品実測図

第4節 遺物

遺物の量は少なく、土器・陶磁器と、少量の石製品、金属製品がある。

1 土器・陶磁器 (第137図1～6)

時期的には弥生時代から近世と大きな幅をもち、すべて細片であることが特徴である。弥生時代後期(箱清水式)の遺物は、壺が数片A区から出土しているが、器面が荒れている。奈良・平安時代の遺物は須恵器甕片を中心に調査区全体から出土している。

最も多いのが中世の遺物である。1～3はロクロ調整の土器皿で、灰白色軟質、2・3は底部に糸切痕をもつ。図示した資料以外にも12片あるが、いずれも同じ特徴を示す。4は古瀬戸の緑釉皿で、鉄釉が施され、底部に糸切痕を残す。瀬戸・美濃系の陶器はこれ1点である。時期的には15世紀後半におけそうである。5は龍泉窯系青磁碗で、細いへう描きの蓮弁文が施されるが、口縁部の山形と体部の部分が別に簡略化されて描かれている。時期的には、15世紀代におけそうである。このほか輸入陶磁器は同じく龍泉窯系の青磁碗の小片が1片ある。6は瓦質に近い焼成をした火鉢の破片と考えられ、隆帯を1条もち、蓮弁が施される。図示した資料以外には、内耳鍋片が17片ある。

このほか、近世陶器・磁器として、肥前系の碗、瀬戸・美濃系の灰釉碗がある。

遺構との関連から、中世の遺物について若干ふれてみたい。時期的には、他地域からの移入陶磁器により、15世紀代という年代が与えられたが、土器皿はいずれもロクロ調整であり、内耳鍋の存在などから、中世の遺物の年代はほぼ同様な年代が与えられそうである。ただ、いずれも城跡の中心部分からの出土ではなく、細片がほとんどであり、遺構の年代比定的好資料とはいえない。

2 石製品 (第137図7・8)

7・8は安山岩製の石鉢である。7はやや軟質の石材を用い、口縁が内湾して体部が厚い。善光寺平に多いタイプである。8は摺白の転用品で、下臼の下面をえぐり、口縁が外反ぎみの石鉢にしている。類似を見かけない。

第5節 成果と課題

1 赤沢城の縄張りと築城主体者について

本遺跡の郭構成については第3節で若干ふれた。調査区は遺跡の背面に当たる西の谷側にかかるため、調査区内で関係する城郭施設は塹壕・土塁の2施設に限られ、発掘調査が実施できた範囲はそのごく一部であった。

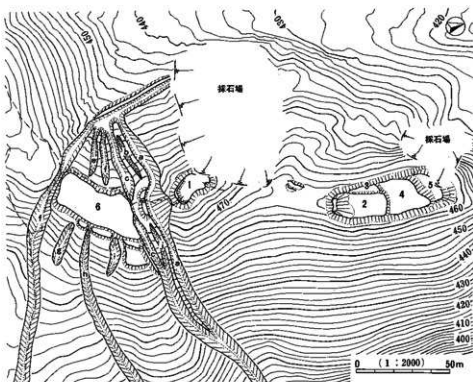
ここでは、調査前の地表面観察で作成した縄張り図(第138図、河西克造作図)をもとに、本城郭の縄張り構成を把握したいが、城郭の大部分が調査範囲外であり、また地表面観察で確認した施設をすべて中世段階のものとして理解はできず、また埋没した施設などの正確な規模・形状をとらえることは不可能であるため、限界性があることを断っておきたい。

まず、全体的な施設の配置方法から見ると、赤沢城の主たる郭は尾根上に限定されている。郭は東西に延びる尾根筋を利用して、城郭の中心的役割をなす主郭を尾根頂部に置く。付属郭は主郭を中心として東西2カ所に認められ、ほぼ同規模である。主郭と付属郭とは基本的に堀切で遮断される。堀は尾根筋を切るいわゆる塹壕が、城域の中で主郭後方の一定区域に集中する。主郭と郭⑥とは基本的に堀切で遮断されるが、一方、尾根先端方向に堀切が見られないので、部分的に堀を配した城郭で、堀の多用が普遍的となり、阻害としての性格がいまだ顕著になっていない様相といえよう。また、城郭の施設は、主郭周辺が顕著であるが、尾根先端の郭②③④付近から郭⑥付近まで広がっている。したがって、本城郭の城域は尾根先端部の郭から堀fまでと推定される。

城域では、主郭の前方・後方に防衛的役割をもつ郭が配置される。これは尾根上が郭構成の主たる空間であることを示す。斜面部では郭⑥付近に塹壕が集中する特異な区域があるが、全体的に見ると、斜面部に郭が確認されないことから、防衛的機能を自然地形に多く依存したことがわかる。

次に、各々の規模・形状であるが、一部崩落するものの20×10mの隅丸長方形を呈する主郭の構造は、北西側で平入虎口が、また反対方向では土塁中央部に出入り口がある。土塁はこの部分と一部東側に残存し、土塁に石垣を用いた形跡はない。

付属郭としての郭②③④と郭⑥はほぼ同規模であるが、郭⑥は積極的に城郭施設と認定できない。郭②③④は若干高低差のある南北に長い郭で、主郭と同様に南側一角に土塁が認められる。斜面部に構築される段状の郭が、郭②③④のさらに尾根先端部まで三日月状に確認できるのみで、



第138図 赤沢城縄張り図

段郭を多用していない状況は、赤沢城の特徴といえよう。

堀については、主郭後方に集中する堅堀のなかで、堀aと堀c、南端の堀fの3条が比較的規模が大きい。3条の堀は最も広い箇所幅8～9mあり、基本的にこの堀が尾根上から山裾まで延びるが、斜面途中で取敢し最終的に1～2条となる。3条の堀間には尾根筋直下から始まり、山裾で取敢する前者の堀と形状が異なる堀d・e・g・h・iがある。このことは、堀a・c・fが堀切の基本的配置を構成し、本城郭ではこれが主たる防御施設であったと推定される。さらに、堀間には堀構築時に掘削した土を盛り上げた堅土塁が堀に並走する形で認められる。これは堀とともに斜面の防御を強化する役割であろう。

次に上記縄張りの特徴とそれから推定する築城主体者と時期についてふれてみる。

本城郭の郭は尾根上に顕著に認められ、堀は城域の南側一角に集中する。城郭の性格が異なるので一概には比較できないが、塩崎城見山砦のように山のほぼ全城を防御した形跡はない。本遺跡で確認される郭は、防御的・土木技術の面で見ても単純で、多様化した施設を用いておらず、併せて郭の配置が尾根に限定される状況は、基本的に縄張りか複雑化する戦国期以前の様相を呈していると推定される。しかし、堀には尾根の遮断と斜面の防御を目的とする大規模な堅堀が配され、斜面を放射状に走る畝状空堀群の要素が本城郭で確認できる。

堅堀の規模・形状は、戦国期山城の様相に類似し、近年、松本地域の後期小笠原系の城郭では「長大な堅堀」・「中腹で密集・取敢する堅堀」などが特徴として指摘されている（註1）。規模的には大きく異なるが、本城郭の堀配置と小笠原系城郭を比較すると、堀は若干様相を異にするものの、類似点は抽出できる。少なくとも、武田系の縄張りを表出していない。

赤沢城の施設からは、郭と堀が時期的に異なる様相を示していることがわかる。戦国期以前の郭と戦国期の堀であり、戦国期になって堀の改修が行われたことを指摘できる。すなわち、赤沢城の最終段階は、堅堀の配置に武田系の要素がまったく具備されていないため、武田氏とは別系統の築城主体者を想定でき、堀を阻害的施設として多用する上杉系の城郭と考えたい（註2）。

現段階では武田・上杉氏の争いが激化する永祿年間の本城郭に関する史料は皆無であるが、上杉景勝が天正11（1583）年に信濃進攻の前線基地として稲荷山城を築城した記録がある。現在これ以外には上杉氏と本城郭周辺を直接結びつける史料がないことから、赤沢城は稲荷山城の築城時に改修された可能性があり、本城郭の最終段階は稲荷山城を居館とした山城的性格を具備していたと想定される。

現在、本城郭を「赤沢城（塩崎新城）」とする書物が多く見られる。塩崎地域には「塩崎」と名がつく城郭が2カ所ある。文献に見える「塩崎城」と「塩崎新城」をどちらに比定するかについては定説化していないが、「塩崎城」を長谷観音背後の現塩崎城、「塩崎新城」を稲荷山西方の現赤沢城とする説が多いため、ここではこの説に従うこととする。文献史料では、応永10（1403）年に村上氏の「塩崎新城」を信濃代官細川滋忠が攻め落としている記録があるため、赤沢城はこの段階までさかのぼると考えられる。さらに15世紀中頃には「諏訪御符札之古書」に諏訪大社上社御堂頭役として「四宮赤沢対馬守」の名が認められ、この頃赤沢氏の存在を確認できる。しかし、赤沢氏の実態については不明点が多いため、本城郭との直接的な関係を解明できないが、ここでは赤沢氏が15世紀中葉に本城郭にかかわった可能性を示唆するにとどめたい。

最後に、この調査で赤沢城の縄張りの特徴を把握できた点は大きな成果で、今後善光寺平の中世城郭を考えていく上で良好な資料となるであろう。

注

1. 三島正之 1988「小笠原領域の山城と武田氏」(『中世城郭研究』第2号・中世城郭研究会)
村田修三 1987「林城」(『図説中世城郭事典』第2巻・新人物往來社)
2. 河石克造 近刊「善光寺平(西南部)の中世城郭」(『長野県埋蔵文化財センター設立十周年記念論集』)で赤沢城の堅堀の特徴と堅堀の出現時期についてふれた。

第6節 小 結

当センターでは、昭和59年に塩尻市高山城跡の調査を実施したが、積極的に城郭遺跡として認定できる施設・遺構は確認されず、城跡としての伝承が残っていたにすぎなかった。したがって、赤沢城は、中世城郭の調査に当たった最初の遺跡になる。

赤沢城の調査では、高速道が通過する斜面部の堅堀と土塁の2施設について構造的把握ができたことが大きな成果であったが、城郭全体からするとほんの一端がわかったにすぎず、おのずから考古学的アプローチの限界性を感じざるを得ない。中世山城の考古学的調査で解明できた点は少ないものの、赤沢城と次章に報告する塩崎城見山砦の調査は他の一面では大きな意義があると思われる。今日、善光寺平に立地する中世城郭の実態は、数カ所を除きほとんどが解明されていないのが現状だからである。

中世城郭の分布・構造などを総括的にとらえるため、昭和57年に長野県教育委員会が実施した分布調査は、諸説紛々としていた城郭研究の一応の到達点で、基礎資料の集成という面で大きな意義がある。しかし、分布の漏れ・縄張り図の精度などの問題があり、多くの課題を残す結果となり、いまだ中世城郭の全体像が明らかにされていないといえよう。

このような中で、本調査は遅ればせながら縄張り図の作成・地表面観察などの城郭史的アプローチと、発掘調査による考古学的アプローチの両者を実施したことで、塩崎地域城郭の資料の史料化と地域史とのかわりを解明するうえで、ひとつの出発点になると考えられる。



赤沢城跡の現況

第7章 塩崎城見山砦遺跡

第1節 遺跡の概観と調査の概要

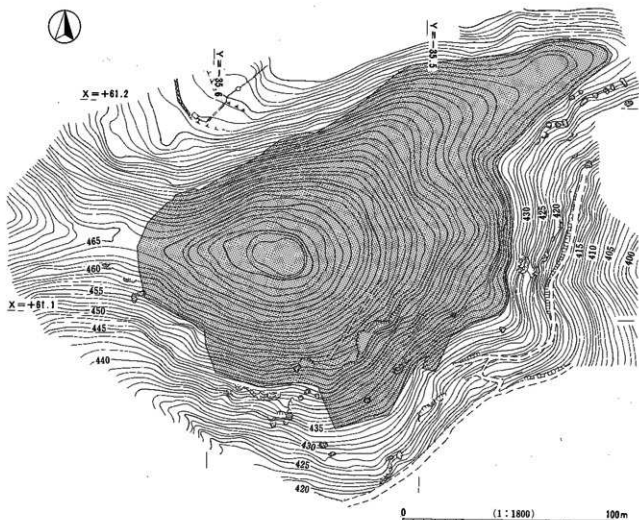
1 遺跡の概観

本城跡は、長野市篠ノ井塩崎字金山4,381番地を中心に所在する。この塩崎地域には、篠山山系から沖積地に向かって幾筋もの尾根が延びており、尾根の頂部には古墳・中世山城が分布している。

周辺に立地する中世城郭では、本遺跡と沢を隔てた南西側の尾根頂部に塩崎城がある。この塩崎城と本城郭との関連性は後述するが、戦国期に両者は一体的に機能し、見山砦は塩崎城の出城として位置づけられていたことがある。この塩崎城の南には赤沢城があり、北側には鳥坂峠がある。反対に対岸の千曲川右岸の尾根には、屋代城・鷲尾城などの山城があり、本城跡と対峙する。

遺跡は、塩崎城の立地する山塊から分岐する最も張り出した標高471mの尾根頂部に立地している。山麓との比高差は110mで比較的低い尾根上にあり、背後の塩崎城と比較して城郭としての要害性をさほど感じさせない。反対に山麓の集落から容易に仰視できる状況は、両者の密接な関係を類推できよう。

城跡は尾根先端部の頂部に主郭を築き、主郭周囲と尾根筋に数段の帯郭・段郭を、主郭後方には尾根筋

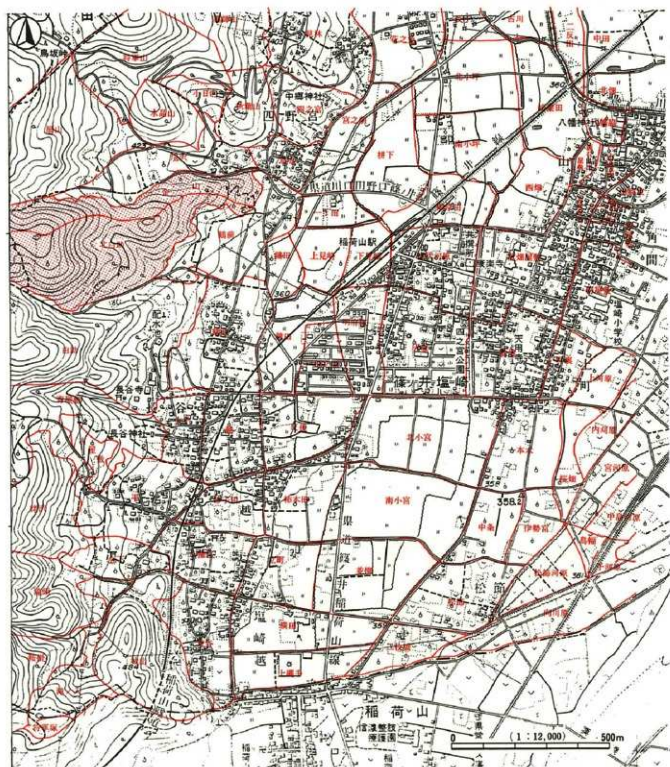


第139図 地形・調査範囲図

を遮断する堀切を配置する縄張りである。また斜面には防塁・阻塞類的な施設を設けない単郭式の山城で、いわゆる「小規模城郭」に類する。

城跡からの眺望は眼下に四野宮の集落、千曲川の自然堤防上の集落を一望できるのみならず、南は上田市、北は須坂市まで遠望できるなど良好で、本城跡は交通の要所に立地すること、良好な眺望という2要素を具備している点に、その性格が如実に表出されているといえる（PL53・68）。

なお調査前の尾根一帯は山林であり、周辺は果樹園として利用されていた。



第140図 調査地周辺の小宇

2 調査の概要

(1) 発掘調査に至るまでの経過

塩崎地域に分布する中世山城については、従来、塩崎城と赤沢城が大塔合戦・川中島合戦との関連で論じられてきた。しかし塩崎城見山砦は分布図に登録されておらず、平成2年に長野・上信越両自動車道建設に伴い、遺跡の立地する尾根が採土場に選定されたことから発見された遺跡である。

当初、遺跡(城郭)の規模・構造が不明であったため、調査は位置の確定、立地状況、周辺城郭との関係等を把握する目的で城跡一帯を踏査し、地表面観察で城郭施設の縄張り図を作成した。

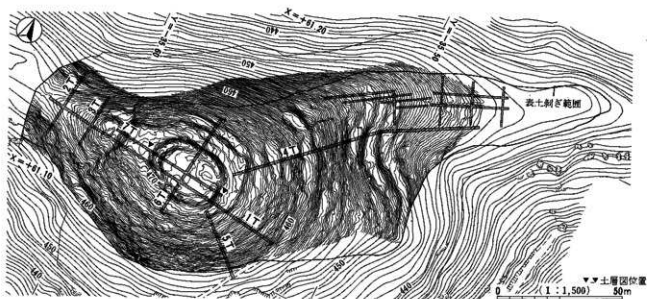
城郭が立地する尾根筋に字境線が通り、北側が「金山(かねやま)」、南側が「北白助(きたしろすけ)」地籍であるが、城郭に関連した地名は確認されない(第140図)。

本城郭については『塩崎村史』のみに記載され、掲載された「中世遺跡所在図」には、出典根拠は示されていないものの、塩崎城北方に「見山砦」と呼ばれる城郭が図示されており、その配置から見て本城郭が該当すると推定される程度である。また聞き取り調査では、地元でのこの尾根を古くから「のろし山」と呼んでいたことを確認できた。

本城郭の地表面観察で確認された縄張りには、主郭部では尾根頂部に土塁が全周する主郭が明瞭に認められ、東・南側の2カ所で土塁が切れており、出入口(虎口)を想定できた(PL54)。主郭背後の尾根筋には、副郭・堀切が存在し、郭の堀切側一方に土塁が見られたが、主郭の土塁と比較すると小規模で形状は簡素なものであった。主郭周辺では帯郭が数段にわたって配され、最上段の平坦部は副郭とつながり、帯郭が交差する北東部分には虎口がある。主郭の背後には、続きの尾根とを遮断する堀切がある。尾根筋を切る部分が最も規模が大きく、尾根筋を遮断しながら斜面中腹まで延びる形状で、南側では堀が終わる箇所に郭(堀底郭)が、北側では内側に郭(堀内郭)があった。また堀切り西側の尾根鞍部付近では、北側斜面で三日月状の平坦部が数段見られたほかは、特に防御の施設は確認されなかった。

(2) 発掘調査の概要(第139・141~143図、PL57)

地表面観察の結果、尾根鞍部の北側一角を除き城郭施設の大半が調査の対象になることがわかった。城郭施設は特に尾根筋に認められたが、埋没した城郭施設の存在を考え中世山城の全面発掘を実施することとした。発掘調査は平成3年6月12日から10月30日まで約14,000㎡を対象として実施し、調査研究員は主



第141図 トレンチ設定・表土剥ぎ範囲図

として6名が当たった。発掘調査に先立ち、現況測量図の作成を目的として航空測量の実施を予定したが、伐採木の処理が遅れたことで、トータル・ステーションを用いた記録方法に変更した。

調査は、基本的に尾根筋・斜面にトレンチを設定して、層序の確認と施設の構築方法を把握することから開始した。トレンチは自然傾斜の部分のほかに、郭の構築状況を把握する目的で削平地(郭)にも設定した。傾斜部分では尾根頂部から鞍部にかけての尾根筋とそれに平行・直交する方向に、施設部分では虎口を避けて主郭から東側斜面に放射状に設定し、掘削した。この時点で出土遺物はわずかであったが、主郭周辺で比較的多く認められ、表土下中世面の上部には、部分的に崩落土が堆積している状況であった。

調査に当たっては、施設ごとに名称をつけた。尾根頂部で土塁が全周する平坦部を「主郭」、主郭西側の平坦部を「副郭」、主郭周囲の細長い平坦部を「帯郭」とし、以上を「主郭部」と総称した。副郭後方の「堀」の内側で確認された平坦部を「堀内郭」、南傾斜の堀の終わる部分で認められた平坦部を「堀底郭」と称した。また主郭部以外では、東側斜面の細長い平坦部を「帯郭」、帯郭より小規模の平坦部を「付属郭」・「段郭」とした。さらに、調査の便宜上、主郭・副郭以外の平坦部(帯郭・付属郭・段郭)には1・2・3郭と統一番号をつけた。

調査は地表面観察で明確に城郭施設が確認された尾根筋に主眼を置き、表土剥ぎは削平地(郭)では人力で、斜面部では重機を用いて行い、排土処理は基本的にベルトコンベアーにより調査区外に搬出する方法をとった。遺構検出は表土下で実施し、再度凝灰岩層で行ったが、トレンチ掘削の段階で中世の遺物の他に、旧石器時代の石器、弥生・古墳時代の土器等が尾根頂部付近で出土したため、中世山城より先行する遺構の存在が予想された。土塁・虎口等の施設は、表土剥ぎで規模・形状を捉えた後、最後に構築方法と基部の状況を記録する目的で解体を行った。

測量は日本道路公団の測量用杭を基準として、40m四方の大地区の設定を業者に委託した。遺構の集中が予想された主郭部については($X = 61, 120, 000$, $Y = -35, 600, 000$)と($X = 61, 120, 000$, $Y = -35, 560, 000$)の基準杭を設け、8m四方のメッシュを設定した。また遺構の測量は主郭部では座標に合わせた杭を用い、主郭部以外では独自に測量基準杭を設定して測量し、のちに光波測距儀で地点を記録した。標高は測量基準杭設定時に公団測量杭を基準にして調査区内にベンチマーク(標高466.763m・470.969m)を設定した。

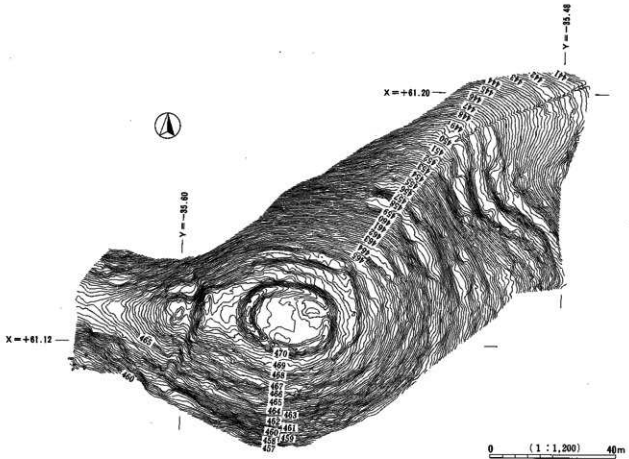
また城郭施設の測量はトータル・ステーションを用いて行い、調査中に図化素図と遺構図を照合して仮の全体図を作成した。

全景写真は、セナ機、バルーンを用いて実施した。発掘範囲とトレンチの位置、さらに全体の測量は業者委託としてトータル・ステーションを用いて記録した。

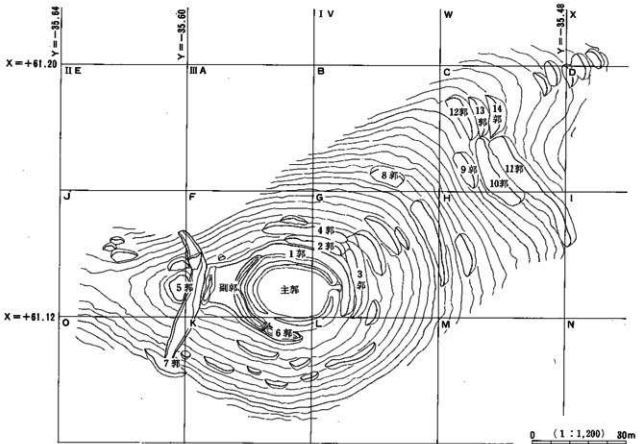
調査の結果、主郭部に遺構が比較的集中する傾向があり、中世では主郭からは掘立柱建物址・集石・土坑などが検出された。主郭部以外で遺構が集中した東側帯郭から、溝・溝状遺構・土坑が検出された。さらに中世以前では、主郭の中世整地層下層から古墳時代の土坑・土器集中、副郭斜面で弥生時代の土坑が、東側斜面では縄文時代の土坑、中世の土坑(墓址)が検出された。なお北側斜面を中心に旧石器時代の石器が出土した。

整理作業は発掘調査終了後11月18日から翌3月まで遺物の水洗・注記と、図面類の整理・調査所見の調整などの基本的作業を行った。報告書については城郭施設と遺構の原稿執筆・図版作成を平成3年度内に行い、遺物については実測・図版複製・写真・原稿を平成4年度に持ち越した。

なお調査では土塁内部に掻き上げ土塁と版築土塁があり、副郭では堀SD02を埋めて郭として利用した状況が認められるなど、3段階の変遷が想定できた。したがって、本報告ではこれをI期とII期(IIa期・IIb期)と呼称することとした。



第142図 現況実測図



第143図 地区割図および郭名称

3 調査の経過

平成3年度

- 3～6月 調査前の現況測量図を記録。
 5月24日 遺跡の位置・調査範囲の確認。地表面観察を実施、縄張り図作成。
 6月12日 発掘調査開始。プレハブ周辺の整備。
 14日 調査区内の草刈り。主郭より尾根鞍部にかけて尾根筋に人力で01トレンチ掘削。
 19日 土層断面観察のための02～05トレンチ掘削終了。土層観察の後、部分的に表土剥ぎを実施。
 21日 主郭・副郭に06～07トレンチ掘削。中世面確認。
 25日 重機・人力で本格的に表土剥ぎ開始。トレンチ断面の記録に着手。
 26日 副郭・堀の表土剥ぎ・遺構検出。伐採木の撤去を行いベルトコンベアー設置。排土作業開始。
 7月4日 主郭表土剥ぎ、遺構検出。土器集中・鉄釘出土。
 11日 主郭で土坑・集石・炭の集中を確認。
 15日 集石精査。主郭土塁より尖頭器出土。主郭南側で土橋検出。
 18日 主郭北側の段郭で石器多出。南側で鉄砲玉出土。SK02から弥生後期の土器出土。
 25日 尾根東側先端部、工所用道路部分の調査。
 31日 主郭土塁東側の平坦より精査金具出土。
 8月1日 森嶋総理事石器について指導。
 2日 バルーンによる全景写真の撮影。宮崎和順理事長視察。山梨文化財研究所萩原三雄氏・山梨県埋蔵文化財センター八巻と志夫氏現地指導。
 6日 南側の堀底よりピット列(SA101・102)検出。表土剥ぎ後の測量図の記録に入る。
 8日 セスン機による航空撮影。
 11日 現地説明会を開く。見学者約500名。
 20日 一部、主郭土塁のたち割り。
 22日 主郭土塁の外側を外周する溝(SD101)を検出。西側の尾根鞍部で旧石器の調査。
 27日 主郭土塁のたち割り。主郭内地山面で遺構検出。平坦部・斜面部を重機で地山面の遺構確認。
 9月3日 主郭内のSK14から古墳時代の土器出土。
 6日 主郭土塁土層転写。
 17日 主郭その他の城郭施設をバルーンにて撮影。一部空中写真測量を実施。主郭東側出入口付近から古墳時代の土器片が集中して出土。
 25日 主郭で孤立柱建物址ST01～03を検出。
 27日 東側斜面の帯郭でコ字状の溝を数基検出。
 10月8日 擋鉢を伴う土坑SK76を検出。
 9日 主郭土塁出入口部分のたち割り。
 17日 重機により主郭土塁の除去。
 23日 主郭東側出入口部でSX01のピットを検出。東側斜面で陥し穴を検出。
 30日 本日で現場作業終了。
 11月18日 整理作業開始。遺構図の整理、所見の調整、中世城郭に関する施設・遺構の原稿執筆。
 1月13日 奈良女子大学村田修三氏来所、指導。



斜面部作業風景(平成3年6月)



主郭作業風景(平成3年7月)



宮崎理事長視察(平成3年8月)



主郭土塁土層転写(平成3年9月)

- 14日 塩崎城・塩崎城見山岩・赤沢城で村田修三氏現地指導。センターで遺構・遺物について指導。

第2節 地形と基本層序

本遺跡は、篠山山塊の北東方向に延びる尾根が、長野盆地西縁推定断層群（仮称）の一部によって階段状のテラスを残しながら、盆地に落ちる突端部に形成された小丘に立地する。この尾根は、帯郭が展開する東側一方はなだらかに傾斜するほかは比較的に急である。

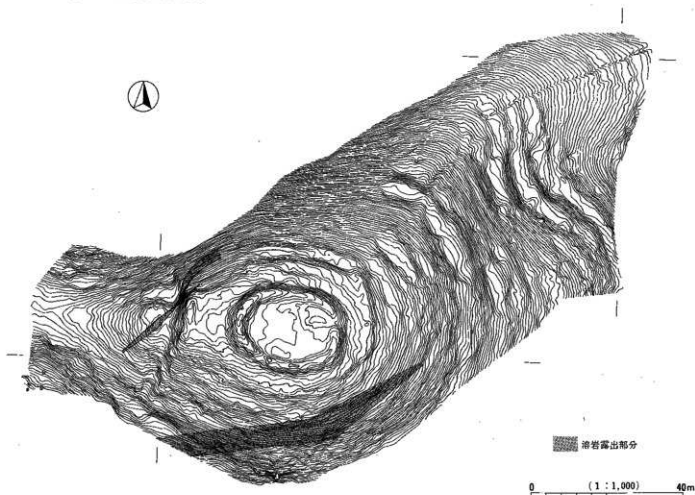
南北両側は地滑り性崩壊層からなる緩斜面および小溪流が湾入し、東は尾根筋が緩く盆地に落ち、四野宮段丘に接する。また西は、瘦尾根を通り後方の山地へ続く。したがってあまり要害性をもたない。

基盤岩類は、裾花凝灰岩に属する流紋岩質～石英安山岩質凝灰岩からなり、同質の火山礫凝灰岩・凝灰角礫岩を挟み、凝灰岩は軽石凝灰岩質である。

東側斜面では2次堆積のローム層が、尾根鞍部で約30cmの厚さをもつ凝灰岩の風化層が確認された。また尾根筋は風雨などで土砂が斜面に流されたため、地山の上部には主たる堆積層はなく、わずかな風化層と表土が堆積している状況であった。

基本層序は以下のとおりである（第145図）。

- I層：表土。黄褐色中粒砂。石英黒雲母散点し、赤松等の葉・樹皮と風化礫が混在。
- II層：腐植層。細粒砂と粗粒砂の混合。凝灰岩粒・石英黒雲母散点。
- III層：裾花凝灰岩の風化層。石英黒雲母多量に含む。粘性有し、しまりあり。
- IV層：裾花凝灰岩の風化層。石英黒雲母散点。凝灰岩のブロック含有。粘性有し、しまりあり。
- V層：地山。裾花凝灰岩。



第144図 地質図

この基本層序は城郭築城にあたって手がおよんでおらず、大幅な地形の変更を受けていない尾根鞍部のものである。しかしこの箇所と斜面部以外にプライマリーな堆積は見られず、城郭施設はⅢ層・Ⅳ層を主体として用い構築されている。したがって、層名は基本層序はⅠ～Ⅴとローマ数字を用い、構築士などは2～38とアラビア数字を用いた。

この尾根は裾花凝灰岩によって形成されているが、随所に凝灰岩の割れ目から噴き出した溶岩が確認され、主郭周辺では、6郭・堀の縁辺部で認められた。堀と主郭周辺では溶岩が露出しているが、堀・曲輪の構築では溶岩を掘り残し、溶岩粒を構築に用いている状況が認められた(第144図)。

第3節 遺 構

1 中世の施設と遺構

(1) 主 郭

① 主郭の概要 (第146図・151図、P.L55・56・58)

本城跡の立地する尾根先端部の頂部に位置する主郭は、長径(東西)約23cm、短径(南北)約15cmの規模を有し、形状は楕円形を呈す。西側に空堀の機能をもつ半円形のSD02を構築したことで、平面形が左右対称を示さない。主郭には全周する土塁が認められ、西側が比較的大きい。主郭は平坦部と土塁に分けられ、面積的には平坦部が293.6㎡、土塁が249.5㎡と全体の46%を土塁が占める。主郭の出入口は城郭前面の東側ともう一方南側の計2カ所にある。ここは土塁が切れており、南側の土塁外側では土橋が確認された。

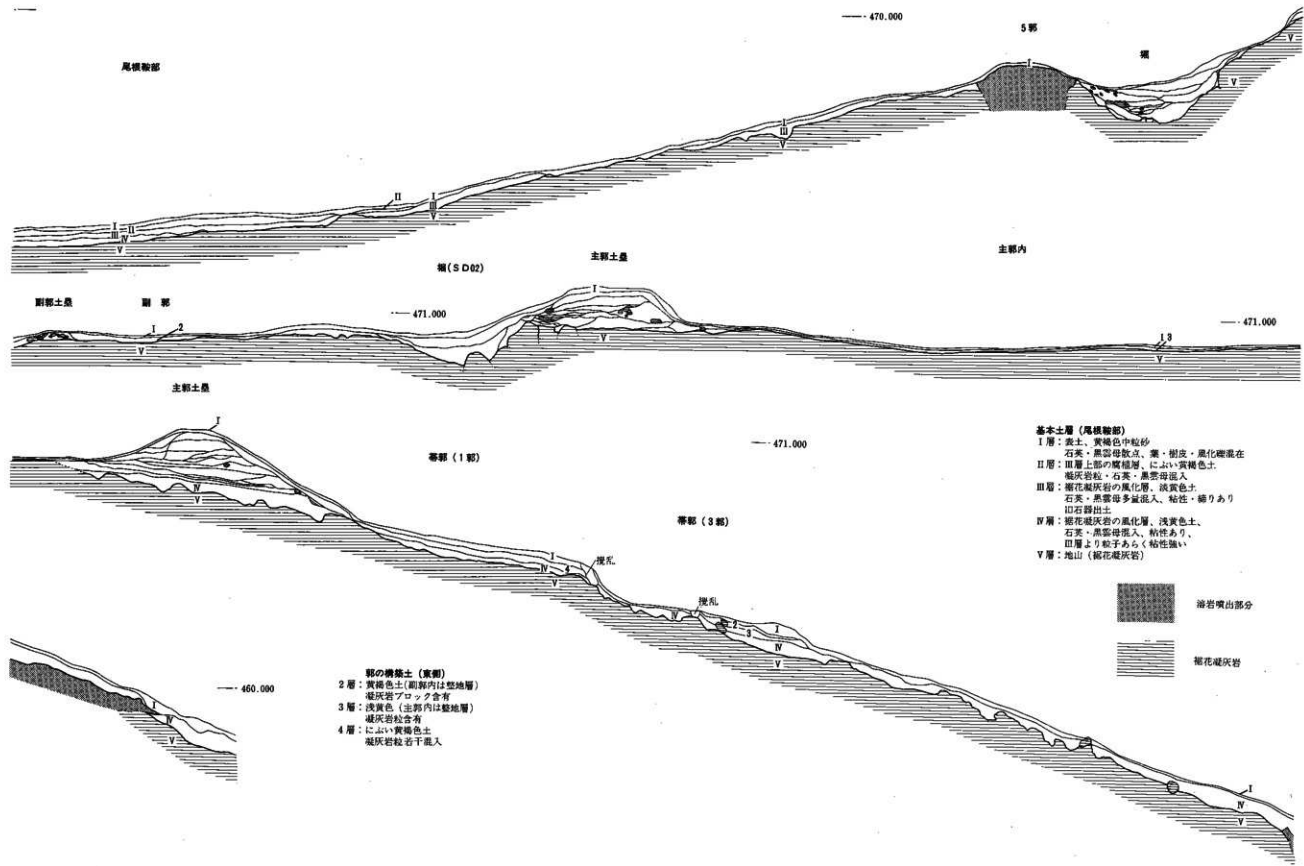
主郭構築前の地形は、地山(裾花凝灰岩)から推測すると、主郭の中央部と北西隅付近が尾根の頂部で、南東側にかけて若干傾斜していたらしい。また主郭の土塁は、主郭内の削平によって生じた土を主な盛り土とし、最高所付近に最大規模の土塁を築き、そこを中心として若干西側に傾斜する地形の縁辺部を利用して、全周土塁を築いた様子がうかがえる。

調査の結果、中世山城に属する遺構として、東側出入口部から4基の柱穴で構成される遺構(SX01)と、主郭内から3棟の掘立柱建物址(ST01・02・03)のほかに、投石用と推定される集石や土坑・ビットなどが検出された。主郭土塁では2段階の構築が認められた。なお、掘立柱建物址の柱穴は整地層を若干下げた面であったが、形状が不明確であったため、Ⅴ層まで下げて検出した。最も遺存状況が良好なⅡ期を見ると、主郭内は土塁構築後、整地されており、そこで検出された遺構が基本的にⅡ期に伴うことがわかる。なお整地層(3層)からは土器皿破片(SQ01)・須恵器の小片が出土した。

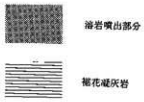
建物址は主郭中央部に近接して配置され、周囲に集石などの遺構が分布し、西側半分は比較的遺構が密集する状況から、最も広い面積が確保できる中央部を住空間としたことがうかがわれる。住空間と対照的に東半分には主たる遺構がないのは、出入口部であったからであろう。なお、建物址の周囲では炭が広範囲にわたって確認され、分布状況から烽火に関係したものと思われる。

特徴的な遺物では、本城郭全体で231点の鉄釘が出土したことがあげられる。その大部分は主郭からで、鉄釘と炭がほぼ同位置で分布することから、両者の密接な関係を想定できる。

また、中世以前の遺構として、弥生時代の土坑、古墳時代の土坑・土器集中が、遺構外の遺物では尾根鞍部より旧石器・縄文時代の石器の散布、土塁構築土と斜面から旧石器時代の石器と古墳時代の土器が多数出土した。



- 基本土層 (尾根部)**
- I層：黄土、黄褐色中粒砂
 - II層：石炭・黒雲母散点、葉・樹皮・風化礫混在
 - III層：II層上部の腐植層、にんじり質褐色土、腐炭粒、石炭・黒雲母混入
 - IV層：腐炭層の風化層、淡黄色土、石炭・黒雲母多量混入、粘性・締りあり
 - V層：砂状腐炭の風化層、淡黄色土、石炭・黒雲母混入、粘性あり、IV層より粒子あらく粘性強い
 - VI層：地山 (腐炭腐炭岩)



- 郭の構築土 (東郭)**
- 2層：黄褐色土 (郭内には墊地層) 凝灰岩ブロック含有
 - 3層：淡黄色 (主郭内は墊地層) 凝灰岩散含有
 - 4層：にんじり質褐色土 凝灰岩粒若干混入

第145図 O1トレンチ土層図

② 土 壘 (第147・148図、PL59)

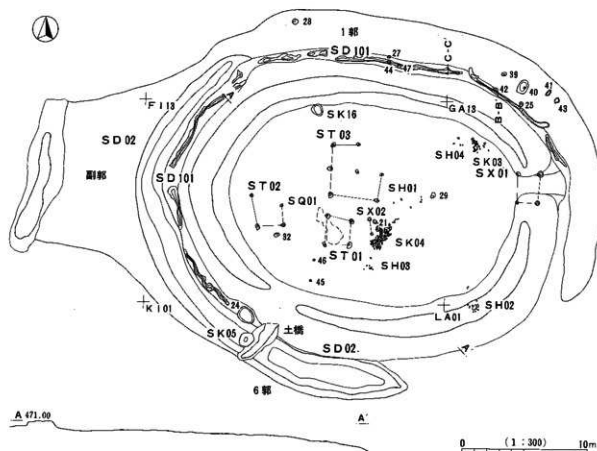
主郭を全周する土壘の規模は、高さ1.6m、基底部幅4.1m・裾部幅0.8mを測り、尾根鞍部側の西側が大きい。反対側の東側出入口付近は高さ0.6m、基底部幅4.1m・裾部幅0.56mと小さく、土壘の最高所と最低所には1mの比高差がある。土壘の傾斜は、平均で主郭の外側が $42\sim 45^\circ$ 、郭側が $30\sim 35^\circ$ 。内側はなだらかで、防衛的機能をもつ外側が急傾斜で特に北側が顕著であった。6カ所で記録した土壘断面図では、2時期の構築が確認できたため、ここではI期土壘・II期土壘と呼ぶこととする。

I期土壘の構築は古墳時代の土器を含む旧地表を削平することから開始され、砂質土(17層・24層)を主体にして版築方法で構築している。23層で顕著なように非常に堅く敲きしめ、地山が高い西側(セクションB)より、低い南側(セクションD)の方が複雑に構築している。これは、主郭の平坦部と土壘を構築する際に、高い部分を削平して低い部分の地ならしを行った結果といえる。

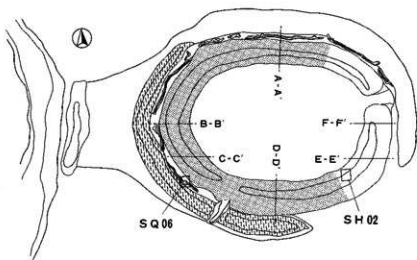
II期土壘は北側(セクションA)で明確であるが、土壘構築時にはI期土壘上部を若干削平し平坦化したと推定される。土壘は17層上部に裾花凝灰岩にブロックを主体とした層(14層)を三角形に盛り上げて掻き上げる構築方法である。12層が最終盛り土にあるが13層が確認されない東側では、12層が三角形の顕著な盛り土として認められる。南側(セクションD)でII期土壘の構築状況を見ると、I期土壘の主郭内部側に15・16層を盛り、土壘を拡幅し、上部に12層を盛り上げている状況が見られた。

ここでI期土壘とII期土壘の構造を比較してみたい。

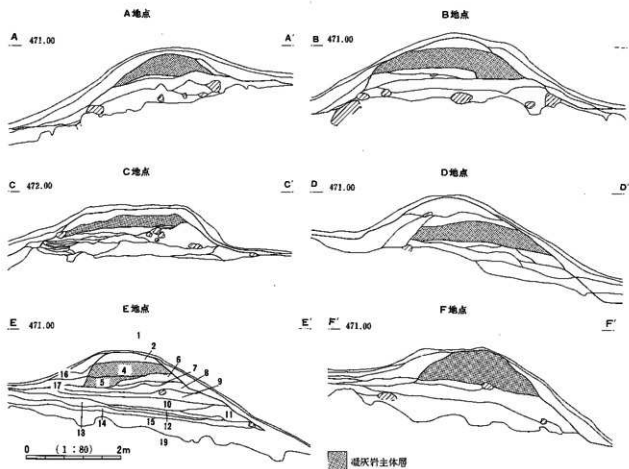
I期の版築土壘はII期土壘の下部で確認され、その範囲はほぼ同じであった。このことからI期の土壘は主郭縁辺部を全周し、わずかな高まりをもつ低土壘で、II期に至り主郭内を全周する顕著な高土壘が築



第148図 主郭・副郭遺構分布図および地山立面図



第147図 主郭土塁断面実測位置および土量計算図



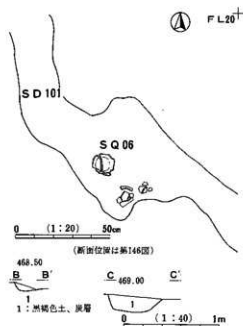
C地点

- 1: 黄土
- 2: 黄褐色土、焼灰岩粒混入
- 3: 黄褐色土、焼灰岩粒の融合、腐葉
- 4: 黄褐色土、焼灰岩粒の融合、3層に類似、腐葉明瞭
- 5: にぶい黄褐色土、焼灰岩粒混入
- 6: 灰黄色土、焼灰岩粒混入
- 7: 焼灰黄色土
- 8: 黄褐色土、砂質
- 9: 黄褐色土、腐葉
- 10: 灰黄色土、腐葉

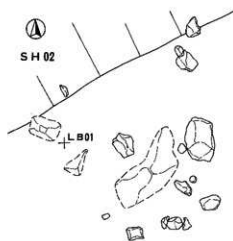
E地点

- 1: 黄土
- 2: オリーブ褐色土
- 3: にぶい黄褐色土
- 4: 黄褐色土
- 5: 黄褐色土、焼灰岩ブロック混入、灰散点
- 6: 黄褐色土、焼灰岩ブロック多量
- 7: 黄褐色土、焼灰岩粒の干散点
- 8: 灰黄色土、焼灰岩ブロック混入
- 9: 黄褐色土
- 10: 灰黄色土、焼灰岩ブロックの取捨
- 11: 黄褐色土、焼灰岩ブロック混入
- 12: オリーブ褐色土、焼灰岩粒の混合層
- 13: 黄褐色土、腐葉
- 14: 焼灰黄色土、四地表(古墳時代)の残存
- 15: 黄褐色土
- 16: オリーブ褐色土、土層崩落土
- 17: 黄褐色土、土層崩落土
- 18: 黄褐色土、S D 101埋土、灰屑
- 19: 明黄褐色土、地山、焼灰岩

第148図 主郭土塁断面図



第149図 SD101ピット・土層分布図

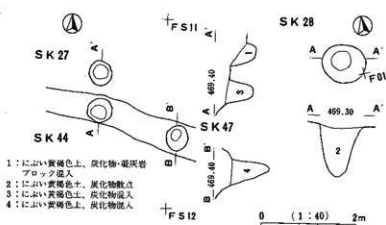


第150図 土層頂部破片分布図

西側傾斜部から銭貨（庶寧元寶）が、土層頂部と斜面から土師器・須恵器の小破片、土層内部で土師器・須恵器の破片がそれぞれ出土した。

SD101 (第149図、PL59・60)

本址は主郭の北西側を中心とした土層外側に位置する。土層の基部に接近し、全周する土層に沿ってめぐる溝状遺構である。検出：土層崩落土（8～10層）を除去した面で、基部付近に炭が大量に混入した带状の溝が確認された。規模・形態：溝は南側出入口部から北側をまわり東側出入口部に至る間で確認された。東側出入口部より南方では明確な掘り込みは確認されなかったが、01トレンチ断面では形跡が確認されるため、本址は1郭先端部付近までのびていたと推定される。溝は部分的に途切れ、最も残存状況が良い1郭付近では、幅56cm・深さ16cmあるが、全体的に幅が狭く、北側を除き掘り込みが明確ではない。詳細を見ると、本址は蛇行して一定の形状を示さない。また溝が途切れている部分については、SK42付近で認められるように、溝の両端が外側を向く箇所があることから、遺構構築段階にすでに切れていたと推定される。柱穴：本址の埋土を掘り下げて検出されたSK44・47は柱穴の可能性を指摘できる。埋土：本址上部には土層崩落土（10層）が堆積する。埋土は炭が大量に混入した黒褐色の単一層で、角材と推定さ



かれている。しかし土層内からは時期判別が可能な遺物が出土しなかったため、構築と変遷の詳細な時期を把握することはできなかった。

構築方法は、Ⅰ・Ⅱ期土層とも主郭内を削平した土を用いて構築したと推定され、主郭内は最低2回の削平行為を受けていると考えられるが、裾花凝灰岩のブロックを主体としたⅡ期土層の構築土についてはさらに別な起源を想定できる。それはⅡ期土層の主体を占める14層が東側一角を除き全体に分布する状況と、主郭西側にある堀SD02の位置とが近接するため、基本的には堀の掘削で生じた裾花凝灰岩を土層に用いたことが想定できるからである。参考までに両者の土量計算を試みた結果、SD02の発生土量が40.15m³、土層の14層が15.26m³と前者が圧倒的に多く、直接的な関係を指摘するまでに至らなかったが、Ⅱ期土層構築土の主体をここに求めることはできよう。したがって主郭土層とSD02は、平地方形館の土層と堀の関係と同様であることを指摘できる。

れる炭化材が出土し、本址東側、SD02に近接するテラス状部分にも炭化材があった。樹種鑑定の結果、両者とも掘立柱建物址の柱材と同様ヒノキと判明した（付章第5節参照）。切り合い：SK42が切る。出土遺物：検出時に覆土上面より土器皿（SQ06）が数点出土した。時期：主郭土塁と郭の構築との関連からⅡ期と判断した。性格：主郭の北東側に集中して帯郭が配置されたことと、北側の主郭土塁外側が急傾斜を示すことから、本城郭がこの方面の防衛的機能を強化した様子を推測できる。また本址の位置と土塁の傾斜とに密接な関係がありそうで、本址は防衛的機能をもち、土塁崩落を防ぐ板塀などの基部に相当する。

SQ06（第149図、PL60）

本址はSD101と土橋が近接する箇所であり土器皿の底部が出土した。土塁崩落土を除去した面で確認され、検出時には2つの土器が並べてあるようにも見えた。しかしSD101の埋土がほとんど残存していなかったため、埋土内のか、それとも埋土上面に置かれたものかは、判断がつかない。

SH02（第150図、PL59）

本址は主郭土塁南東隅に位置し、土塁頂部で確認された集石である。直径5～20cmの角礫が集中し、主郭内に落ちた石もあるが、ほとんどは土塁頂部に置かれた状況であった。土塁頂部で石が確認されたのはここ1カ所で、位置的に推察すると本址は投石用の可能性がある。

③ 出入口部（第152図、PL54・60）

地表面観察で東側と南側の2カ所で土塁が切れている部分を確認した。調査当初、この部分は通路として後世破壊された可能性も考慮に入れて表土剥ぎ・検出を行ったが、城郭使用時に伴う施設と認定できた。この部分は主郭の虎口であり、構造的には平虎口を呈する。しかし帯郭の虎口と区別するため、ここでは「出入口部」と呼ぶこととする。

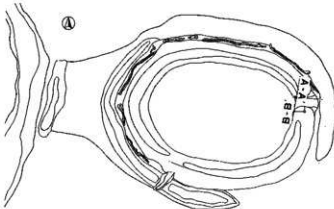
東側出入口部は主郭東側中央より若干北方に位置し、土塁の切れた凹地状部分の規模は幅は約2mを測り、構造は出入口底部と主郭中世間とはほとんど高低差はなく同一レベルで、出入口部から帯郭（1郭）にかけてはスロープ状に傾斜している。主郭と1郭には約1.4mの高低差があるが、折れがないため狭いスロープ状の傾斜部分を直進し、本施設に立つことにより主郭内に望める単純な構造である。出入口部の構築は土塁の構築と同時に行為れ、土塁同様2時期が確認された。Ⅰ期土塁は版築方法で構築され（土塁北側15～20層・南側18・19・21層）、盛土完了後、出入口部分には別な土（12～14層）を用いて固めている。Ⅱ期土塁は、本施設内側の土塁縁辺にSX01の柱穴を掘削し、その上部に3～8層を盛って構築している8層は土塁縁辺と柱とのすき間を埋める目的をもつ構築土であろう。

土層断面からⅠ期土塁構築時に出入口部がこの場所につくられ、Ⅱ期土塁の出入口部はⅠ期の場所を継承して、SX01の構築はⅡ期土塁の盛り土と同様に行っていることがわかる。このことから出入口部はⅡ期に至り上部施設に伴う構造に変化し、Ⅰ期土塁時期にはSX01が存在しなかったと推定される。

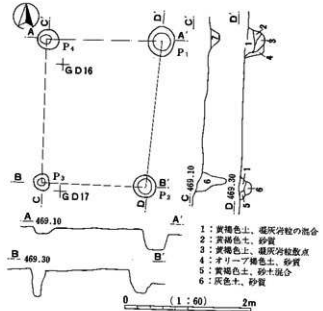
出土遺物では、13・14層より古墳時代の土師器の破片が出土した。

南側出入口部は、南側中央より若干西方に位置し、土塁の切れた凹地状部分の規模は約2mを測るが、出入口底部と主郭内とに明らかにレベル差があり、出入口部の方が高い。南側の本施設でも2時期の構築が確認され、Ⅰ期土塁に属する出入口の構築土は11～15層であり、11・13層は強く敲きしめてあるが、中央部に別な構築土を用いた形跡はない。同じくⅡ期土塁の出入口は、Ⅰ期土塁上部に4～10層を盛り上げ、出入口中央部には凝灰岩を主体とした6層を貼っている。

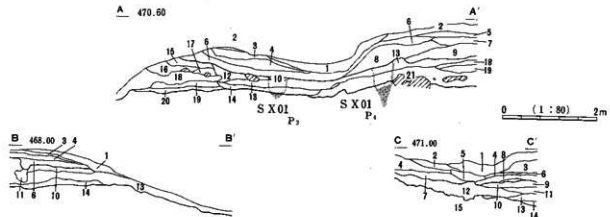
南側出入口のⅠ期からⅡ期への変遷は、Ⅱ期に至っても上部施設を伴わない点が東側出入口と異なり、さらに城郭の背後に通ずるこの場所は、主郭内とレベル差が生じるため、主郭内から出入口を利用するにはある程度土塁を登り、土橋をわたるようになっている。



第151図 主郭概念図



第153図 SX01実測図



東側出入口部(A-A'・B-B')

- 1: 黄褐色土、土豆層跡土
- 2: 黄褐色土、土豆層跡土
- II期土層
- 3: 黄褐色土、凝灰岩粒散点
- 4: 灰色土、砂質
- 5: 黄褐色土、砂質
- 6: オリーブ褐色土、凝灰岩粒混合
- 7: 黄褐色土
- 8: オリーブ褐色土、出入口跡辺の盛り土・砂質
- 9: 暗灰褐色土、凝灰岩粒含む・砂質
- 10: 褐色土、砂質
- 11: におい黄色土、SX01のP4埋土
凝灰岩粒混合

I期土層

- 12: におい黄色土、凝灰岩をくいだいた盛り土
- 13: 褐色土、砂質
- 14: 褐色土、灰散点
- 15: オリーブ褐色土、凝灰岩粒多量
- 16: 暗灰褐色土、互層を有す・凝灰
- 17: 黄褐色土、凝灰岩粒多量
- 18: 黄褐色土、互層・版築
- 19: 黄褐色土、互層・版築
- 20: オリーブ褐色土、凝灰岩風化層
- 21: 暗オリーブ色土、砂質
- 22: 地山、凝灰岩

南側出入口部(C-C')

- 1: 黄褐色土
- 2: 黄褐色土、凝灰岩粒混合
- 3: 黄褐色土、砂質
- 4: 暗褐色土、版築
- 5: オリーブ褐色土、凝灰岩粒混合層、出入口部にたたきしめた土
- 6: 暗灰黄色土
- 7: 黄褐色土、凝灰岩粒混入
- 8: 灰色土、凝灰岩粒混入
- 9: 黄褐色土、凝灰岩粒混合
- 10: 黄褐色土、版築
- 11: におい黄色土、砂質
- 12: 灰色土、版築・版築
- 13: 黄褐色土
- 14: 褐色土
- 15: 地山、凝灰岩

第152図 出入口部断面図

なお土橋はI期・II期の両時期に使用されている。

SX01 (第153図、PL60)

検出: 主郭東側出入口部の土層断面図記録のための土層解体時に、P₂が断面で確認された。柱穴はV層の凝灰岩まで下げた面で、出入口の土層縁辺部で4基を検出した。規模・形態: 長軸2.3m・短軸1.8mで南北に長軸をもつ1×1間の建物址である。柱穴: 形状は4基とも円形で、掘り方はP₃が深さ40cmと

比較的深く、柱穴と思われる断面形を示すほかは浅い。埋土：P₂で3層、P₄で4層に分層できたほかは単一層である。断面で柱痕跡は確認されず、P₂上部で5層と思われる土が堆積していたことから、柱穴はⅡ期土塁構築時に5層を盛る段階とほぼ同時期に掘り込まれたと考えられる。出土遺物：P₄より土師器の小破片が出土。時期：柱穴より遺構の時期判別が可能な遺物が出土しなかったが、5層の堆積からⅡ期土塁と同時期と判断できる。性格：本址は主郭出入口に付随する建物址として、櫓門のような施設を推定できる。櫓門としてその規模を推定すると、櫓の底部と土塁上部に想定される櫓・塀の先端が同じ高さがあり、櫓部分が櫓・塀より高くなる構造で、門部分の規模は、土塁上の櫓・塀の高さを1mと仮定すると、2mくらいの規模があったと考えられる。

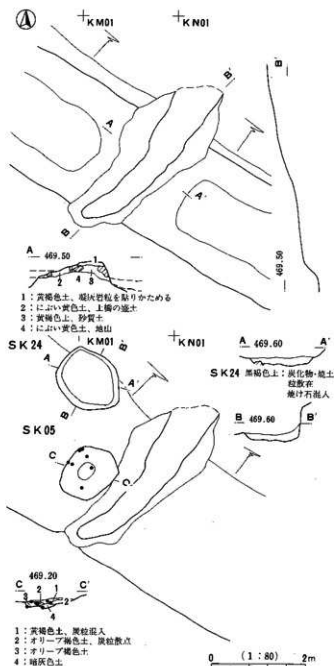
④ 土 橋 (第154図、PL61)

土橋は主郭南側出入口部の外側に位置し、主郭と背後の郭との連絡を主目的とした施設であるが、全体的に小規模なものである。形状は基本的に長方形で、土橋上部の平坦部は主郭土塁との接点付近で幅約0.8m、先端部は約0.3mと狭まり、主郭側から先端部に向かいスロープ状に傾斜する。土橋上部から底部にかけては、西側で比較的高急であるが、反対方向ではなだらかな傾斜をもつ程度である。土橋は主郭側からほぼ直線的に延び、先端部がわずかに西方向に曲行する状況は、主郭背後に配置された施設への連絡を考慮したためであろう。

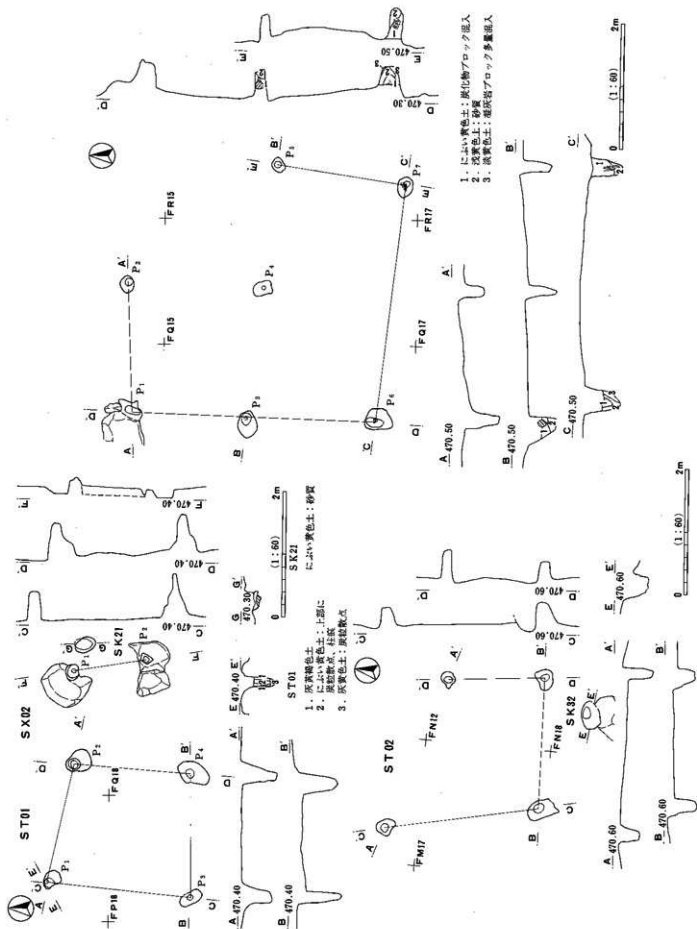
本施設についても2時期の使用が確認された。空堀的性格をもつSD02が機能した段階と、埋設後の帯郭形成段階である。構築方法はSD02掘削時に土橋部分を掘り残しており、上部に凝灰岩粒を貼っている。SD02埋設後上部に貼った6層から集中して鉄釘と銭貨が出土した。

SK05 (第154図)

位置：土橋の西側中央部にある。規模・形態：長径1.28m・短径1.0m・深さ19cmで、不整楕円形をなす。埋土：4層に分層された。2層には炭が混在し、2・3層を中心に鉄釘が出土した。時期：本址はSD02埋設後、帯郭(6郭)の形成と同時期であろう。



第154図 土橋実測図および変遷



第155図 土部独立柱建物址・付属施設実測図

SK24 (第154図、PL61)

位置:土橋の北東、土塁と土橋の接点付近にある。**検出:**土層崩落土の除去と土橋検出段階で確認した。**規模・形態:**長径1.48cm・短径1.18cm・深さ19cmで、形状は不整形円形をなす。土塁を一部削り込んで構築している。**埋土:**単一層で、炭化物・焼土粒が散在する。**時期:**SK05と同時期で、主郭土塁をめぐるSD101とは同時に存在したと判断される。

⑤ 掘立柱建物址

ST01 (第155図、PL61)

位置:主郭中央部より若干南西側にあり、ST03・SX02に隣接する。**検出:**整地層では不明確であったが、V層まで下げた面で褐色土の落ち込み柱穴が確認され、検出時には柱穴上面に炭が散在していた。調査時には柱穴の配列を認定できなかったため、土坑として記録したが、後の検討で1×1間の掘立柱建物址を想定した。**柱穴:**検出はV層まで下げて実施したため、形状は異なりバラツキが見られる。柱間の間隔は P_1 と P_3 がわずかに長く、柱筋はよく通らない。掘り方はほぼ直角で、深さは平均50~60cm、断面形は P_1 が円柱状であるが、 P_2 ~ P_4 は底部が狭まり上部がいびつの形で、下部は円形に近くなる傾向がある。**埋土:** P_1 のみ3層に分層できた。2層はかなり上部まで炭のブロックが散在し、柱状に堆積しており柱痕跡と推定される。底部の3層にも炭粒が含まれる。**時期:**柱穴からの出土物がないため、詳細な時期を明確にできないが、隣接する掘立柱建物址・集石等と同時存在のII期と判断した。**性格:**本址はST03に付属する建物址であろう。

SX02 (第155図、PL61)

位置:本址はST01と1.5mほど離れた東側にある2基のピットである。**検出:**ST01と同様、整地では不明確であったがV層まで下げた面で凝灰岩を掘り込んで確認された。検出時に P_1 の半分がすでに消失している点から、掘り込まれた段階ではピット間のV層上部には、ある程度の堆積層が存在したと想定される。**柱穴:** P_1 は長径27cm・短径22cmで深さ35cm、底部中央にくぼみがある。凝灰岩の縁辺部を掘り込んだ北西側では、壁面に縦方向にノミ痕と推定される幾条もの痕跡が見られた。 P_1 の南1.1mにある P_2 は、長径17cm・短径13cm・深さ13cmで凝灰岩に掘り込んである。平面は方形で、断面はややすぼまった角柱状をなす。 P_1 同様、ノミ痕と推定される痕跡が見られた。**時期:**ST01と同時期と推定。**性格:**本址は2基の柱穴で機能していたと考えられ、ST01にきわめて隣接する関係から、ST01の建物址に付属する施設と考えられ、櫓などの昇降を目的とした梯子あるいは、土台の基底となる柱穴ではないだろうか。なお P_1 に近接しているSK21は本址に帰属するピットと推定される。

ST02 (第155図、PL62)

位置:主郭のほぼ中央部にはST01・03が同軸で存在するが、本址はその西側の主郭出入口部から最も奥まった箇所にある。**検出:**整地層では不明確であったが、V層まで下げた面で凝灰岩を掘り込んだピットを確認した。調査時にはこのピットを掘立柱建物址の柱穴として把握できなかったため、土坑として記録したが、後の検討で掘立柱建物址とした。**柱穴:**検出時にV層まで下げたため、形状にバラツキがあるが基本的に円形である。 P_2 が約50cmと最も深く、ほかは30cm前後であり、底部は平坦である。 P_3 ・ P_4 の西辺と P_2 ・ P_4 の南辺がほぼ直角をなす。柱間は P_1 と P_3 が2.5mと最も長く、反対側の P_2 ・ P_4 間と同じではないため、北側は土台などを用い、南北に長軸をもつ建物であったと推定される。SX01・03と異なり、軸が若干西に振れた建物である。**時期:**ほかの建物とわずかに軸を異にするが、同時期に存在したといえる。**性格:**ST01・03の位置関係からすると、本址は倉庫的な性格をもつ建物であったと考えられる。

ST03 (第155図、PL61)

位置:主郭中央より若干北方にありST01と並列する。**検出:**整地層では不明確であったが、V層まで下げた面で凝灰岩を掘り込んだピットを確認した。調査時では掘立柱建物址を想定したが、明確なピットの配列は確認されなかった。しかし、後の検討で2×2間の掘立柱建物址と判断した。**柱穴:**7基あるが、北東隅と南中央部の2カ所では確認されなかった。北西と南東隅と直角だが、南西隅にわずかに広がり、ここを基点として北東方向に開く建物で、全体的に整った柱穴配置ではない。形状は柱穴の検出がV層まで下げたことでバラツキが見られるが、不整楕円形が基本である。掘り込みは垂直で深さは50cm前後が多く、柱痕が確認された柱穴の底部は丸底を呈していた。柱間は1.8~2.1mで平均値は2mである。柱痕はP₅・P₆・P₇から炭化した状態で確認され、P₇の炭化材は面取り痕がある直径10cmの角材を想定できる。樹種鑑定ではヒノキであった(付章第5節参照)。**埋土:**P₅・P₆・P₇で3層に分層できた。1層は凝灰岩ブロックが主体で、炭化材のほかに木炭のブロックを含んでいた。**時期:**柱穴から遺物が出土しなかったため、時期を明確にできないが、ST01・02と同時期と判断できる。**性格:**主郭で確認された掘立柱建物址で本址が最も大きいことから、本城郭の中心的役割をなす建物である。建物配置から機能的には方形館でいう母屋に相当しようが、構造的には居住施設ではなく、小屋的な建物であると考えられる。

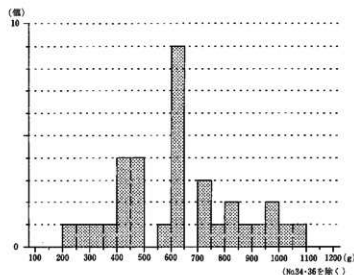
⑤ 集石・土坑

SK03 (第156・157図、PL62)

位置:主郭東側出入口部付近の土塁東隅の土塁裾部にある集石である。**検出:**1層を除去した面で礫の上部が確認され、3層の中世整地層上面で精査し、集石の広がり把握した。**規模・形態:**径10cm前後の礫36個がきわめて不規則に集まる。集石の下部に掘り込みはなく、礫が集め置かれた状況である。礫の大きさを計測した結果、平均値は長さ10.9cm・短径81cm・厚さ5.9cm・重さ622gであった(計測値が極端に異なるNo34・36を除く)。**出土遺物:**鉄釘が礫に混入した状態で出土した。**時期:**主郭の掘立柱建物址と同時期と判断。**性格:**出土状態と礫の大きさから投石であろう。

SK04 (第157図、PL62)

位置:主郭中央部、ST01・SX02の東側にきわめて近接してある。**検出:**SK03と同様、1層を除去した



第156図 SK03礫重量分布図

第26表 SK03出土礫計測表

No	重量 (g)	(cm)			石質
		長径	短径	厚さ	
1	230	80	55	45	全山 安山岩
2	630	90	75	55	
3	600	105	80	50	
4	480	95	75	60	
5	440	90	75	65	
6	280	85	50	45	
7	620	125	65	50	
8	640	105	100	50	
9	960	145	100	60	
10	600	115	100	50	
11	720	110	75	70	
12	400	130	60	50	
13	560	85	80	60	
14	620	110	95	60	
15	480	90	80	50	
16	600	100	85	55	
17	470	115	65	50	
18	460	110	75	65	
19	400	105	65	50	
20	420	90	80	55	
21	820	100	85	70	
22	730	100	80	60	
23	600	95	75	70	
24	320	95	65	45	
25	830	130	120	55	
26	760	155	100	65	
27	940	145	95	85	
28	1010	135	95	80	
29	850	125	75	60	
30	350	100	75	45	
31	700	110	85	65	
32	600	115	75	60	
33	960	100	95	95	
34	2170	160	110	85	
35	1070	105	90	75	
36	3470	180	130	120	



第157図 主郭土坑・集石実測図

3層上面で礫の集中を確認する。規模・形態：長軸を北東方向に向け、2.3m×1mの範囲に最も礫が集中する。形状は不整な長方形であるが、周辺にも礫が散在する。中心付近では礫が密集し重なる部分があり、中世整地層にくだ込んだ礫と上部に積み上げた礫がある。礫は大きさが一定ではなく、長径が3～20cmと様々である。集石下部に掘り込みはない。出土遺物：礫に混入した状態で土師器に小破片が数点出土したが、礫が集中する段階で入り込んだのであろう。時期：3層上面で検出されたことから、主郭の掘立柱建物址との同時存在が考えられる。性格：礫の大きさからSK03同様、投石と推定されるが、本址の位置がST01とそれに付属するSX02に近接するため、ST01との密接な関係も指摘できる。

SK16 (第157図、PL62)

位置：主郭北西の土塁裾部にある。土塁崩落土を除去し、主郭内をV層まで下げた面の土塁の裾で凝灰岩を掘り込んだ落ち込みを確認した。規模・形態：長径86cm・短径85cm・深さ58cmの規模で、形状は不整楕円形を呈す。土坑の両わきには径30～50cmの扁平な凝灰岩が据え置かれた状態で並び、土坑との関係が考えられる。土坑がこの凝灰岩のレベルから掘り込まれたと推定すると、底部までの深さが約90cmとなる。掘り方は、北側は土塁の墨線に沿って掘り込まれ、主郭内に向かい三角形に張り出している。埋土：砂質の凝灰岩風化層で、炭などの散在は認められない。時期：遺物が出土しないため時期を明確にできないが、掘立柱建物址と同時と判断される。性格：主郭では本址以外で建物址に帰属する土坑は確認されないので、貯蔵穴の可能性があるほかは機能を特定することはできなかった。

SK45・46 (第157図)

位置：主郭南側出入口部付近にある。検出：V層上面まで下げた面で凝灰岩を掘り込んだ本址を検出。柱穴：2基は1.6m離れて南北に並ぶ。形状は円形で径約10cm・深さ30cm程度で、掘り込みはほぼ垂直、断面は円柱状をなす。時期：主郭低の遺構と同時期。性格：位置が南側出入口とST02に近接する点で、両者に付属する施設と想定される。

(2) 副郭

① 副郭の概要 (第158図)

主郭周囲は南東を除き帯郭がまわがるが、土塁のある西側の平坦地を副郭と呼称した。ここは南北約12m・東西約8mの規模をもつ方形の平坦地で、主郭の後備えの役割をもつ。堀に面した西側には土塁があるが、主郭と異なり郭を全周しない。

調査の結果、主郭西側で地表面観察では確認できなかったが、土塁に沿う半円形の堀(SD02)が検出された。副郭も主郭土塁と同様2時期にわたる。堀は防御を強化する目的で外周に土塁を構築し、副郭は、中央部の南北両斜面に阻害の性格の施設が配置された時期から、土塁を崩して堀を埋めた後、ここを整地し郭として再利用した時期に変遷したことが認められた。出土遺物には土師器の小破片がある。

② 土 塁 (第159図、PL63)

副郭の西側一方にあり、長軸12.2m・短軸2.8m・高さ40cmで南北に長い。土塁構築時には、土を主体として盛り上げ、遺存状況の良い土塁の南端部では、上部に径20cm前後の石を貼り並べている状況が見られた。また下部の石は並列的にしっかり固定され、その上部にはさらに石を巧妙に積み上げているため、石塁の性格もあったといえる。なお石は加工していない自然石である。土塁は基本的にI・II期の両時期で機能する。

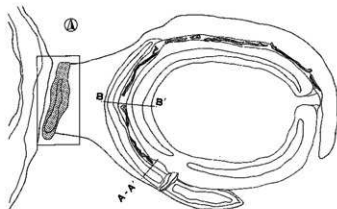
土塁の構築は、副郭にSD02があった時期に開始される。土により造られた上部に石を貼りつめている姿がI期の土塁である。現在は削平されているため、当時の高さを復原できないが、副郭全面が整地された段階には、I期土塁の上部にさらに盛土を行ったと推定される。したがって、土塁はI期・II期ともに

使用されている。出土遺物は土塁内部より土器皿の破片が出土した。

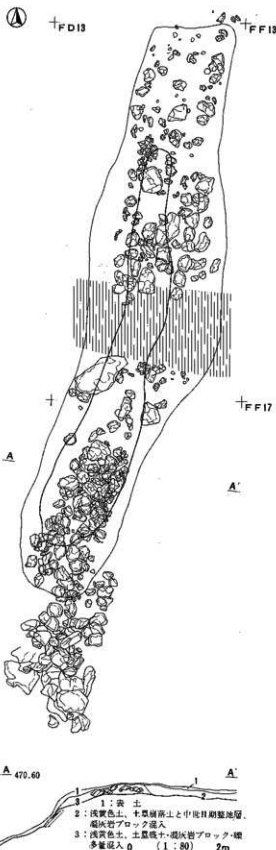
③ 堀

SD02 (第158・160図、PL63)

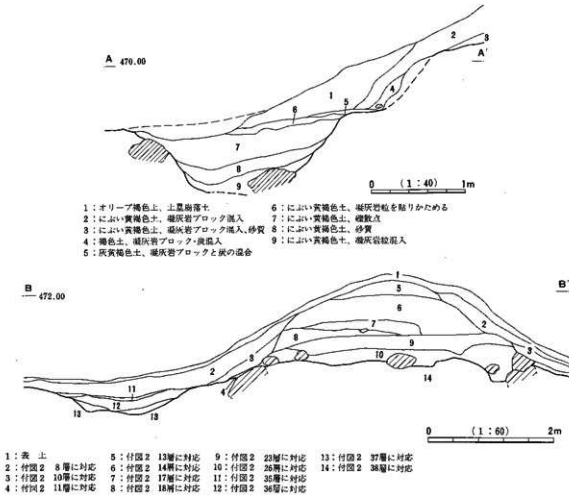
位置：主郭と副郭が接する部分にあり、半円形に主郭西側をめぐる溝である。**検出：**地表面観察では本址は確認されず、01トレンチ掘削段階で溝が確認できた。検出はI層を剥いだ面で実施した。**規模・形態：**本城郭の背後に位置する本址は、主郭土塁で最大規模をもつ西側部分を外周し、北は副郭と帯郭の接点付近から、南は帯郭先端部付近まで広がり、先端部付近では幅が狭まる。最大幅は上端3.0m・下端1m・深さ70cmの規模をもち、断面はU字状を呈す。掘り方は緩やかな傾斜をもつ程度で、底部はほぼ平坦である。底部には炭が散在した。埋土：3層に分層された。7～9層の堆積後、凝灰岩粒を主体とした6層を上部に貼り平坦化している。したがって、本址は埋没後、郭として2次的に利用されたらしく、6層上部にはSD101埋土に類似する薄い炭層が堆積しているため、II期の段階でSD101が構築されたことがわかる。**出土遺物：**埋土から土師器の小破片が、6層から須恵器・土師器の小破片、埋土上層より土器皿(SQ10・Na55)が出土した。埋土中と6層から鉄釘が出土したが、特に6層に顕著で、土橋周辺に集中していた。そのほか銭貨が1点ある。**時期：**本址の構築はI期で、郭としての利用がII期である。**性格：**本址は主郭との関係から堀の性格をもった防御的施設で、外周には掘削時に生じた土を用いた土塁があったと推定される。そしてII期に



第158図 副郭概念図



第159図 副郭土塁実測図



第160図 SD02断面図

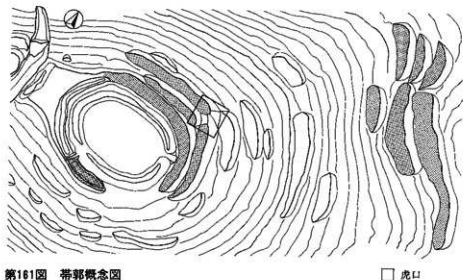
は、土塁を崩し本址を埋めてここを郭として再利用したため、機能していなかったことがわかる

(3) 帯郭

① 帯郭の概要 (第161図、PL64)

帯郭とした部分は、主郭部にある細長い郭(1~4郭)と東側斜面で等高線に沿って配置された郭(9~11・15郭)である。

主郭部の帯郭は主郭北側で顕著に認められ、主郭周囲を防御する目的をもつ。郭の先端部が交差する主郭の北東側に虎口がある。調査では、主郭東側出入口付近で土・



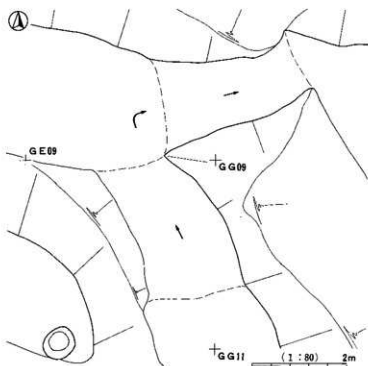
第161図 帯郭概念図

ビットが集中して確認された。

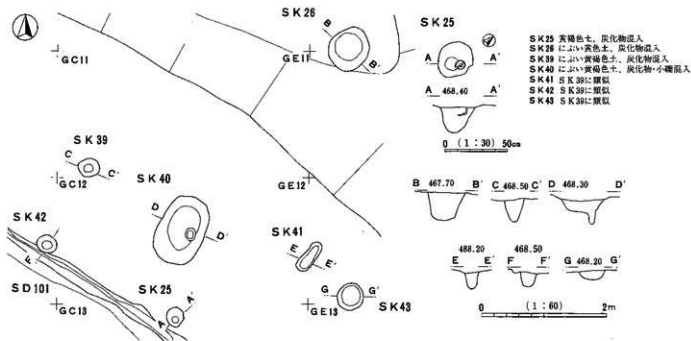
一方、東側斜面の帯郭は城郭の前面に位置し、主郭部と約21mの比高差をもつことから、軍事的空間の主郭部を補助する部分と想定でき、調査ではコの字状の溝・土坑・ビットが数基確認された。この溝の分布はここに限定されており、この遺構が城郭の前面に構築されていることと関係があり、兵士などが小屋懸けするための施設の下部遺構と推定される。

帯郭は山側から郭の縁辺にかけて若干傾斜し、コの字状の溝は切岸の反対側の郭の最奥部で検出されたため、構築当初は全周していた溝が後世、縁辺部の崩落によりコの字状に残存したとも思われる。

特徴的なことは埋土に炭化物粒が散在していたことである。また郭の構築では、土坑SK75の上部を削平しているため、SK75は城郭以前の遺構と考えられる。特徴的な出土遺物としては、主郭東側の1郭からの青銅製の鞘尻金具、SK78の紹聖元宝、東側斜面からの砥石がある。また北側斜面から弥生時代の壺の破片と偶蹄類の趾骨が出土した。



第162図 虎口実測図



第163図 帯郭ビット群実測図

② 虎口 (第162図、PL64)

位置：主郭北東、3・4郭で確認された。**検出**：地表面観察で確認され、検出はI層を剥いだ面で行った。**規模・形態**：本施設は3・4郭を連絡し、北東尾根筋に設けられた通路の出入口に当たり、上下に配置された郭の先端部を利用して、スロープ状の通路を構築している。幅約1m・長さ約1.5mの規模をもち、途中で一度屈曲するいわゆる「平入虎口」である。虎口を防御する土塁・石組などの施設はない。時期：II期に帰属する。

③ ビット群 (第163図、PL64)

位置：主郭をめぐる1郭の北東側虎口付近にある。**検出**：一部凝灰岩層まで下げたが基本的にI層を剥いだ面で行った。**規模・形態**：不整形で掘り込みの深さは20～30cmのものが多く、SK40では柱穴状の落ち込みが見られた。SK25・39・42の3基は、SD101と方向を合わせた建物址の可能性はあるが、北東隅ではビットが確認されなかった。SK26は2郭の東側先端部にある円形の土坑で、径約70cm・掘り込みが約50cmとビット群のなかで最も規模が大きい。虎口に最も近接するため、密接な関係を指摘できる。埋土：単一層で炭化物粒が混入する。**出土遺物**：SK25から16世紀の土器皿が出土した。**時期**：II期に帰属する。

④ 溝状遺構

検出はI層を剥ぎ、崩落土を除去した面で行った。コの字状の形態が多く、構築当初の姿ではなく、むしろ上部を削平されている遺構と推定される。したがって詳細な形状は不明である。遺構は9・12・13郭の西側斜面に多く、11郭では郭の山側にあたる西側の最奥部に位置する。溝の中央部が途切れるものもあり、斜面に構築された竪穴状遺構の周溝らしい。しかし斜面であることから溝自体が機能していたとすると、この部分は想定される城内の通路に当たるため、防衛的機能をも備えた板塀・櫓などの下部遺構とも考えられる。ここでは性格を断定しかねるが、類例を探し機能を推定したい。時期：II期に帰属する。

SB01 (第164図、PL64)

位置：9郭北側の斜面にある。**規模・形態**：長さ約3.4m・最大幅約40cmで、等高線にほぼ平行に走り、両側の先端部がほぼ直角に屈曲する。掘り込みは西側で確認できるのみ。断面の深さは約40cm。**埋土**：単一層で炭化物粒が散在する。

SB02 (第164図、PL64)

位置：12郭西側の斜面にあり、SB03とは10cmの間隔で並列する。**規模・形態**：長さ約2.1m・最大幅約40cmで等高線にほぼ平行に走り、SB01同様、両側の先端部がほぼ直角に屈曲する。掘り込みは西側で確認できるのみ。断面の深さは約30cm。**埋土**：単一層で炭化物粒が散在する。**出土遺物**：鉄釘が1点出土。

SB03 (第164図、PL65)

位置：12郭西側の斜面にあり、SB02と近接してある。**規模・形態**：長さ約2.9m・最大幅約30cmで等高線にほぼ平行に走る。掘り込みは明確でなく、断面の深さは約5cmである。**埋土**：単一層で炭化物粒が散在する。

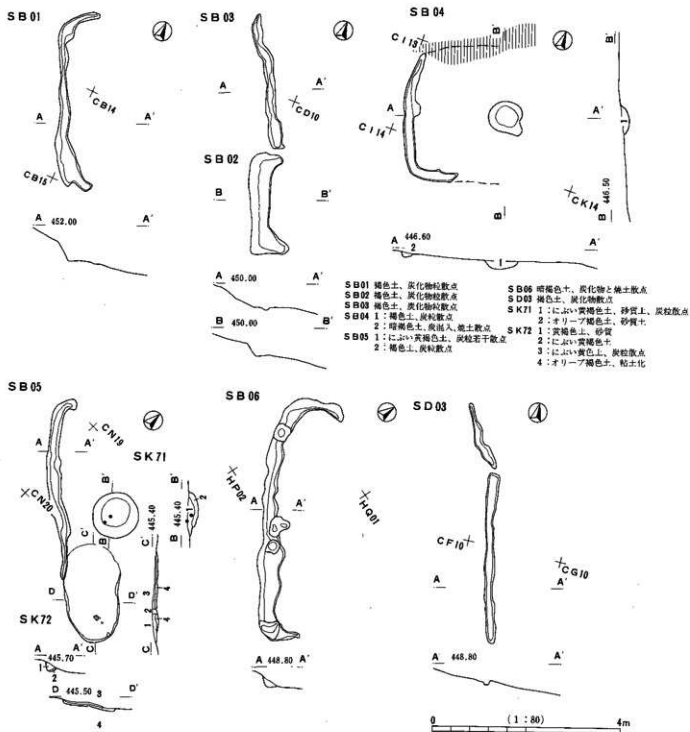
SB04 (第164図、PL65)

位置：14郭に近接する11郭北端にある。**規模・形態**：長辺約2.7m・最大幅約20cmで、L字状を呈す。溝に囲まれた中央部には径約50cm・深さ約15cmの不整形の落ち込みがある。掘り込みは溝の西側で明確に確認できるのみである。断面の深さは約10cm。**埋土**：溝・ビットとも単一層で両者とも炭化物粒が散在し、ビットには焼土粒も混在する。炭化物は樹種鑑定の結果、クリと判明した(付章第5節参照)。**出土遺物**：

検出時に須恵器の破片が出土した。性格：溝にビットが伴うことから、ビットを中心に方形に溝がめぐる遺構と推定され、竪穴状遺構の周溝であろう。

SB05 (第164図、PL65)

位置：11郭中央部の斜面側にあり、SB06・SK71・72と近接する。規模・形態：長さ約4.0m・幅(最大幅)約30cmで等高線にほぼ平行に走る。溝の北東側の端部がほぼ直角に屈曲する。掘り込みは西側で確認され、断面の深さは約20cmである。埋土：2層に分層した。2層とも炭化物粒を含む。切り合い：SK72が切る。性格：本址も竪穴状遺構の周溝であろう。



第164図 茶郭溝状遺構実測図

SB06 (第164図、PL65)

位置：11郭中央部の斜面側にあり、SB05と近接する。規模・形態：長さ約6m・最大幅約50cmで等高線にはほぼ平行に走行し、両側の先端部がほぼ直角に屈曲する。本址はこの種の遺構のなかで最も規模が大きい。掘り込みは西側で確認され、断面の深さは約25cmである。ほかの溝状遺構と異なり、4カ所でピット状に若干深く掘り込まれている。埋土：単一層で炭化物粒・焼土粒が散在する。性格：竪穴状遺構の周溝と推定される。

SD03 (第164図、PL65)

位置：13郭西側の斜面にある。規模・形態：長さ約5m・幅(最大幅)約20cmで、等高線にはほぼ平行に走る。溝はほぼ中央部で約10cmとぎれ、走行方向が若干変化する。掘り込みはほぼ垂直で、断面の深さは約10cm、底部は平坦で幅約10cmある。埋土：単一層で炭化物粒・焼土粒が散在する。

③ 土 坑

SK71 (第164図、PL65)

位置：11郭のSB05の西側に近接する。規模・形態：径約10cmで円形を呈する。断面はなだらかな傾斜をもつ程度で、深さは約20cmである。埋土：2層に分層した。全体に炭が散在する。出土遺物：1層から鉄釘が1点出土した。時期：Ⅱ期に帰属する。

SK72 (第164図、PL65)

位置：SK71に近接し、本址北側でSB05を切る。規模・形態：長径約2.0m・短径1.2mで、不整形円形を呈する。掘り込みは約7cmと浅く、底部には凹凸がある。埋土：4層に分層した。3層には炭が散在する。出土遺物：3層から鉄釘が2点出土した。時期：Ⅱ期に帰属する。

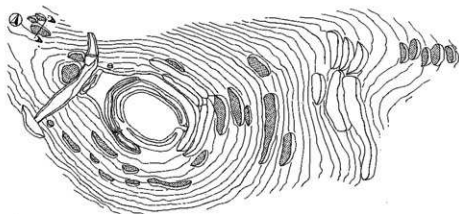
(4) 付属郭・段郭

① 付属郭・段郭の概要 (第165・166図)

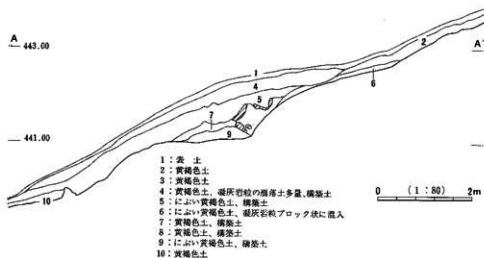
本城郭で細長い帯状を呈す郭以外の郭を付属郭・段郭と呼称した。この2者は厳密には分類されないが、付属郭は南側斜面と尾根鞍部付近で認められた小規模な平坦部、段郭は北東のやせ尾根を中心として配置された三角形の削平地とした。

段郭は主郭から北東方向にのびる尾根筋に配置され、城内の通路部分付近を中心に構築されている。この配置から、城内の通路は段郭を経ながら主郭部に通じていたと推定できる。帯郭と比較して小規模で形状は三角形・三日月状を呈するものが多い。削平地(郭)では、縁辺部に土塁・石組等の防衛的施設は確認されない。調査の結果、8郭から烽火に関係したと推定される土坑が、12～14郭からピットが確認されたが、標列として明確に把握できなかった。13・14郭は、構築の際には時期的に先行する土坑(SK48・50・59)の上部を削平している。遺物は13郭より元豊通宝が1点出土した。

付属郭は南側斜面で等高線に沿う方向に細長い郭が配置され、さらに堀の西側尾根鞍部付近と北側斜面でも確認された。段郭同様、付属する防衛的施設はなく、調査の結果、遺構が検出された郭は5郭と7郭であった。尾根鞍部の北側斜面で確認された郭は、調査区外にも一部展開しており、その配置から相対的に北側を意識的に防衛している状況が把握できる。郭の構築は、郭構築部分を地山まで掘削することから開始している。郭を斜面と同方向に切断して土層断面を観察した結果、掘り込みの断面形はU字状をなしており、郭中央部の掘り込みは深いが両側の先端部付近は浅い。したがって、掘削した段階では中央が深い槽鉢状をなしていたことがわかる。



第165図 付属郭・段郭概念図



第166図 付属郭断面図

構築は基本的に掘削した際に生じた土を使用し、基底部に凝灰岩と7～9層を用いて固め、上部に4・5層を盛り上げて平坦化しているが、縁辺部はすでに流失している。したがって、施設の構築は、付属郭は単に地山を掘削し平坦化する単純な行為でなかったことがわかるが、本城郭では北側斜面以外の付属郭は、基本的に地山を掘削し郭を築いている状態で、構築方法に若干の異なりがある。特徴的な遺物としては、6郭の土橋付近から鉄砲玉、段郭付近から礫石、8郭から土器皿がそれぞれ出土した。

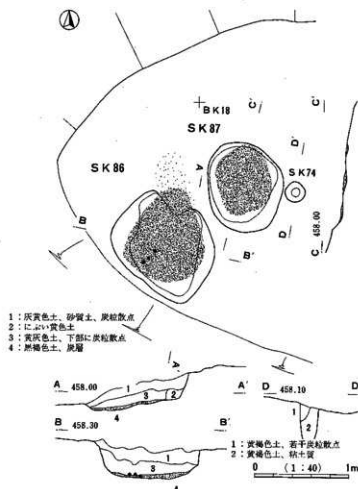
② 土 坑

SK01 (第168図、PL65)

位置：堀の西側、尾根筋に配置された5郭のほぼ中央にある。**検出：**1層を取り去った面で検出した。規模・形態：長径約2.9m・短径約1.9mの不整形で、掘り込みは約25cmと浅く、立ち上がりは不明瞭で、底部のほぼ中央に落ち込みがある。埋土：4層に分層した。1層には礫が多量に混入し、人為埋没の可能性がある。**出土遺物：**熙寧元寶が1点ある。**時期：**土器の出土がないため、明確な時期を把握できないが、Ⅱ期に帰属すると考えられる。**性格：**2郭は堀の西側で最高所に位置することから、尾根鞍部の施設を監視する目的があったと推定されるが、遺構の性格は特定できない。

SK86 (第167図、PL66)

位置：主郭北東方向の8郭の西側端部にあり、SK87に近接する。**検出：**1層を取り去った面で広範囲にわたって炭の散在が見られたが、土坑としての認定はできず、一部下げて遺構の検出を実施した。規模・



第167図 SK74・86・87実測図

れた土坑のなかで、埋土に明確な炭層が確認できるものは本址とSK87に限られる。本址は烽火などを上げた遺構ではなく、むしろ烽火使用時に生じた灰・炭などを埋めた遺構と思われる。

SK87 (第167図、PL66)

位置：SK86に近接する。**検出**：SK86と同様である。**規模・形態**：長径95cm・短径78cmの不整形円形。掘り込みの深さは23cmと浅く、遺構の残存状況が悪いため、立ち上がりが確認できたのは南側のみであった。**埋土**：遺構の残りがわずかのため、底部付近で炭が散在する層が確認できたにとどまる。**時期**：出土遺物がないが、SK86と同時期と推定できる。**性格**：SK86と同様で、烽火に関係した遺構と想定される。

(5) 堀

① 堀の概要 (第169図)

地表面観察で確認できた堀は、副郭の西側に位置する本址に限られた。機能的には尾根鞍部側から主郭部を防御する役割をもつ。調査でも斜面に阻害類的性格の施設が確認されなかったため、本城郭では堀の構築が斜面部におよんでいないことがわかる。調査の結果、堀の南側斜面部で2列にわたる欄別と、堀が終わる場所に堀底郭が構築されており、そこから土坑が数基確認された。また反対の北側では、堀の底部付近に堀内郭が確認された。遺物では堀底郭より出土した土器皿の小破片がある。



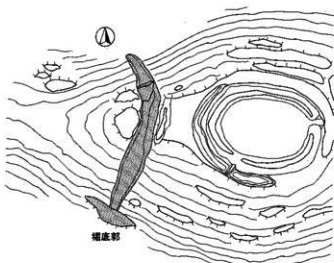
第168図 SK01実測図

形態：長径1.12m・短径95cmの不整形形である。掘り込みの深さは34cmでほぼ垂直に立ち上がり、底部はほぼ平坦である。北側の一部はすでに破壊されており、ここでは炭が流出していた。**埋土**：4層に分層した。1・2・4層に炭が散在しているが、1層に顕著である。**出土遺物**：3・4層から鉄釘が3点出土した。**時期**：時期を明確にできる遺物の出土がなかったが、II期に帰属すると考えられる。**性格**：本城郭で検出さ

② 堀

SD01 (第170図、PL66)

位置：副郭後方の尾根筋で、副郭と5郭に挟まれた場所にある。規模・形態：総延長約40m・尾根筋幅約4.5mを測る。堆積土により約1m埋没した状態で、本址底部から副郭頂部までの比高差は約3.2m、2郭頂部までは約1.7mある。断面形は中世山城では一般的ないわゆる薬研形を呈し、掘削の深さは総じて尾根筋が深く、終わる部分では浅くなる。断面は副郭がある東側が急傾斜で、傾斜部分には随所に凝灰岩が露出している。したがって、本址の防御的機能は、副郭側の幅切岸が



第169図 堀概念図

鋭いことから、ここに重点が置かれたと考えられ、西側の尾根からの防御を意識した様子がわかる。また本址は尾根筋を切った後斜面にのびるが、北斜面では中腹付近で終わり、壘堀に発展する構造ではない。南斜面では堀が終わる箇所が郭が構築され、この堀底郭からは土坑が数基検出されたが、遺構から施設の性格を確定することはできない。北側では尾根筋から斜面に落ちる付近の底部には郭が構築されている。

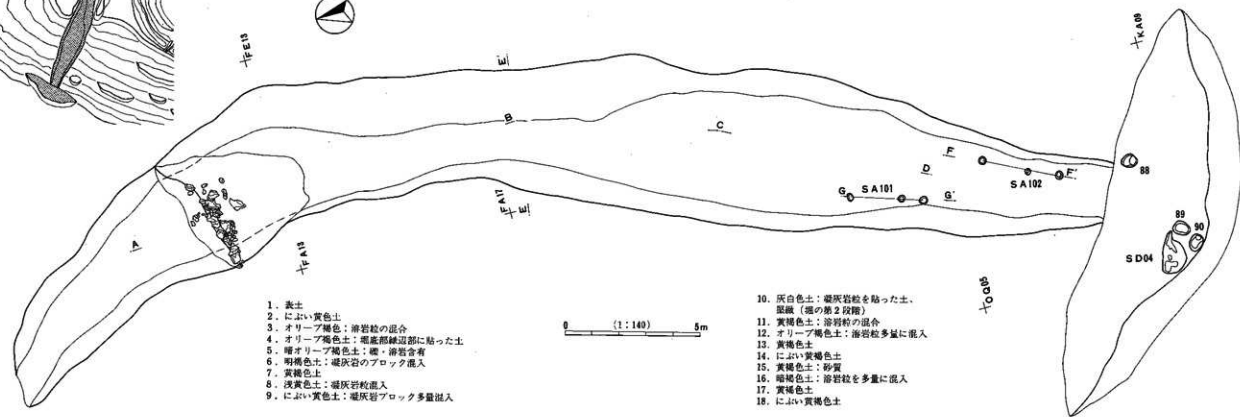
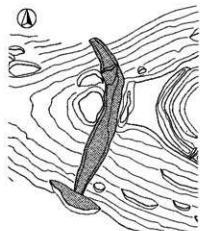
堀は尾根筋ではほぼ南北方向に掘削されているが、斜面では自然の傾斜に沿って掘削されているため、形状は若干鋭角のなご字状をなす。埋土：18層に分層した。本址も2時期にわたる使用が確認された。土層断面では10層で固く締めた形跡が見られたため、堀は掘削した段階と14・15層が堆積した後に使用されていたと思われる。また6層堆積後、北側に堀内郭の構築が開始され、郭の縁辺部に礫を貼りつめ、4層を貼った状況が見られる。

ここでは2時期の姿を掘削段階と改修段階と呼称するが、掘削段階で単に阻塞類的性格の堀が、改修段階で堀の外側に隣接する付属郭と連絡する目的で堀底部に郭を構築した姿に変化し、堀内を道として利用していたと思われる。出土遺物：2層から土師器の小破片と鉄釘4点が出土した。時期：時期を確定できる出土遺物はないが、掘削段階と改修段階ともII期に帰属すると考えられる。

③ ビット列

SA101・102 (第170図、PL66)

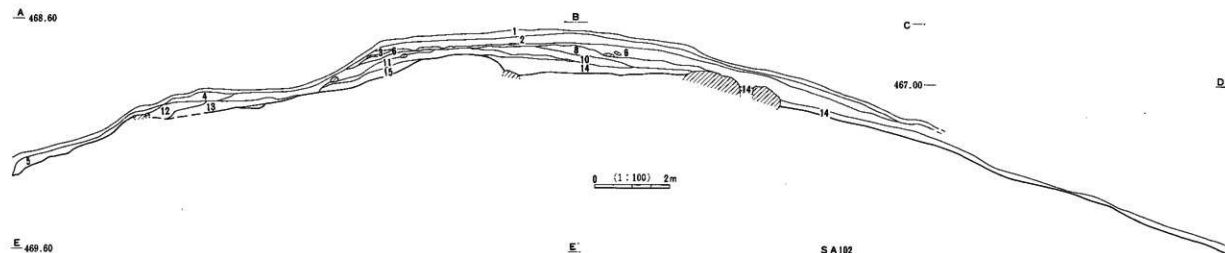
位置：堀の南側斜面、堀底郭付近にある。検出：1層と堀の埋土を掘り下げた面の地山でビット状の落ち込みを検出した。ビットは14層上面より掘り込まれていたと推定されるため、堀内郭・堀底部と同時に存在し堀の改修段階時に伴う。規模・形態：堀底部の斜面に構築された欄列で、3基で1列をなす計2列が確認された。ビットは等間隔でなく、比較的南側のSA101、P₁・P₂、SA102、P₁・P₂が狭い。柱穴：径20～30cm前後で不整形円形を呈し、掘り込みはほぼ垂直でSA102、P₁・P₂の底部に柱状のくぼみが認められた。埋土：単一層。時期：出土遺物がないため、時期を明確にできないが、II期に帰属する。性格：柱穴の断面形から6本の柱が垂直に立っていた状況を推定できるが、ビット列の配列と位置関係から木橋を設けた可能性はなく、むしろ逆茂木に類した施設を推定できる。



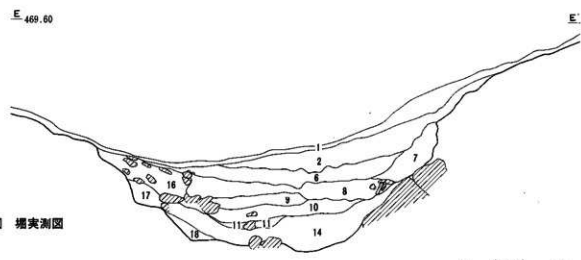
1. 黄土
2. におい黄色土
3. オリブ褐色土：溶岩粒の混入
4. オリブ褐色土：裾底部縁辺部に粘った土
5. 暗オリブ褐色土：礫・溶岩含有
6. 暗褐色土：凝灰岩のブロック混入
7. 黄褐色土
8. 淡黄色土：凝灰岩粒混入
9. におい黄色土：凝灰岩ブロック多量混入

10. 灰白色土：凝灰岩粒を粘った土、凝灰（裾の第2段層）
11. 黄褐色土：溶岩粒の混入
12. オリブ褐色土：海沿粒多量に混入
13. 黄褐色土
14. におい黄褐色土
15. 黄褐色土：砂質
16. 暗褐色土：溶岩粒を多量に混入
17. 黄褐色土
18. におい黄褐色土

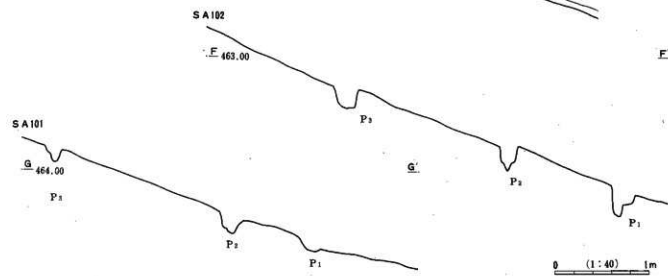
0 (1:140) 5m



0 (1:100) 2m



0 (1:40) 1m



0 (1:40) 1m

(6) 城郭施設以外の遺構

① 遺構の概要

本城郭で検出された中世の遺構は、基本的に城郭に関係している。しかし、わずかであるが、城郭施設に伴わない遺構が5郭西側の尾根根幹部と、北東尾根筋の13・14郭付近と11郭の東側斜面で確認された。

② 土坑

SK48・59 (第171図、PL66)

位置：主郭北東の段郭14郭付近にあり、14郭構築時に本址の一部が削平されている。**検出：**14郭での調査は1層と崩落土を剥ぎ、一部下げた面で遺構検出を実施した。本址はその際、14郭の西斜面側の端部で確認された。**規模・形態：**SK59は長径1.4m・短径90cmの不整楕円形の土坑である。上部の東側が郭の構築時に削平されたため、掘り込みが確認できたのは西側であり、立ち上がりはほぼ垂直である。底部には細かなくぼみが見られ、全体的に西側に傾斜している。SK48はSK59の北側に近接し、長径57cm・短径52cmで西側の一部がいびつであるが、不整形を呈する。掘り込みは8cmと浅く、立ち上がりは明確ではない。**埋土：**SK59は3層に分層、SK48は単一層である。両者とも1層には炭化物粒・焼土粒が散在している。**出土遺物：**SK48の検出時に鉄釘が2点出土した。**時期：**埋土からは出土遺物がないため、時期を確定できないが、SK50と同時期であろう。

SK30 (第171図、PL66)

位置：北東尾根筋に配置された13郭付近にあり、13郭の構築では本址東側を一部削平している。**検出：**13郭での遺構検出時には遺構の存在を想定できたが、明確なプランは確認されなかった。そのため、一部掘り下げてプランを確定した。**規模・形態：**等高線に沿った方向に長軸をもつ不整な隅丸長方形を呈し、長径2.3m・短径1.7mを測る。掘り込みは西側で明瞭に確認され、なだらかに傾斜し、深さは27cmと比較的浅い。底部中央が細長くくぼみ、中央部が若干深い。**埋土：**3層に分層した。1層に炭化物粒と凝灰岩粒が混入し、3層には炭化物粒と焼土粒を含む。**出土遺物：**1・3層から鉄釘が4点出土した。**時期：**時期を確定できる出土遺物がないうが、鉄釘から中世と考えられる。**性格：**土坑の形態と鉄釘の出土から墓址と推定される。城郭に若干先行する時期に尾根の一部が墓地として利用されていたのであろう。

SK78 (第171図、PL66)

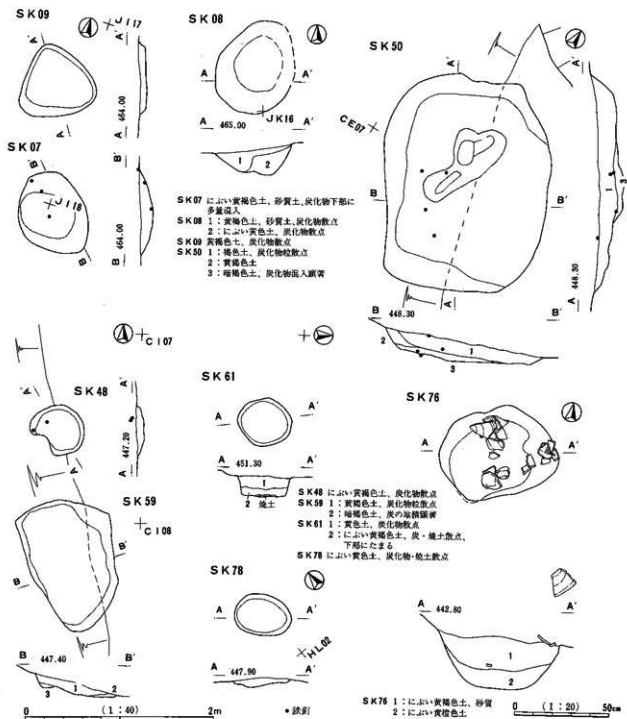
位置：帯郭11郭の東側斜面で地形の凹地部分にある。**検出：**1層を剥ぐ段階で摺鉢の破片が出土した。土器の周囲を精査した際に円形の落ち込みを確認したため、土坑と認定した。**規模・形態：**等高線に直交する方向に長軸をもつ長径64cm・短径44cmの不整楕円形の土坑である。掘り込みは深さ29cmで落ち込みはなだらかに傾斜し、底部は平坦である。**埋土：**2層に分層した。**出土遺物：**1層から底部穿孔の珠洲系摺鉢がほぼ一個体分出土した。**時期：**出土遺物から推測して15世紀前半で1期に先行する時期であろう。**性格：**SK49・50・59と同時期と推定され、墓地に関係した遺構と思われる。

SK14 (第172図)

位置：帯郭12郭の西側斜面の北東尾根筋にありSB01と近接する。**検出：**1層を剥いだ面で色調が異なる円形の落ち込みを確認した。**規模・形態：**北東尾根筋の傾斜に直交する方向に長軸をもつ長径1.9m・短径1.6mの不整楕円形の土坑。掘り込みの傾斜は北側で急だが、他はなだらかであり、深さは50cmを測る。底部付近から炭化材が出土した。**埋土：**8層に分層した。底部南側には炭層6層が見られ、上部には凝灰岩のブロックを含む4・5・8層が堆積する。埋土は全体的に凝灰岩の風化層が起源であった。**時期：**時期を確定できる遺物が出土しないが、中世に帰属すると推定できよう。

SK07・08・09 (第171図、PL66)

位置：主郭後方の尾根鞍部にある。北側斜面には付属郭が存在するが、尾根筋周辺には城郭施設はない。
 検出：この周辺での遺構検出は、基本的にI層を除きII層で実施したが、本址はII層を一部下げたIII層で確認された。検出時にSK07・09付近で鉄釘が18点出土した。さらに下げた面で旧石器時代と縄文時代の石器の散布が見られた。規模・形態：SK07は不整楕円形で長さ95cm・短径77cm・深さ8cm。SK08は不整楕円形で長さ1.0m・短径82cm・深さ28cm。SK09は不整隅丸三角形で径78cm・深さ7cm。埋土：SK08が2層に分層された。2層に炭化物粒が散在する。時期：時期を確定できる出土遺物がないが、鉄釘が

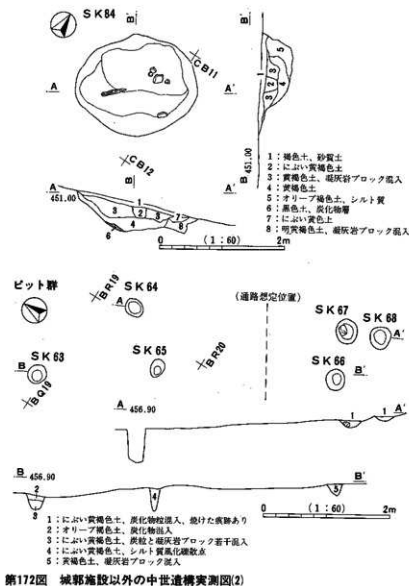


第171図 城郭施設以外の中世遺構実測図(1)

ら推定すると中世に帰属する。性格：堀の後方の尾根鞍部に主たる城郭施設はない。したがって、本址は城郭施設と直接的な関係をもたない中世の土坑であろうが、遺物からは性格を特定することはできなかった。

③ ビット群 (第172図)

位置：北側の尾根筋に配置された8郭と15郭の中間地点にある。検出：I層を除去した面でビット状の落ち込みが6基確認された。調査の段階では、6基のビットの関連性を捉えられなかったため土坑として記録したが、後の検討で出入口に関連した施設と推定した。規模・形態：ほぼ円形を呈する6基の土坑により構成され、両脇に3基ずつ集中する。土坑は径約30cm～35cmと小規模で、SK64と65が40～50cmの掘り込みをもち、柱穴の可能性を指摘できるほかは、比較的浅い。埋土：SK63は2層に分層され、3層はわずかに炭粒を含むが、ほかのビットは単一層

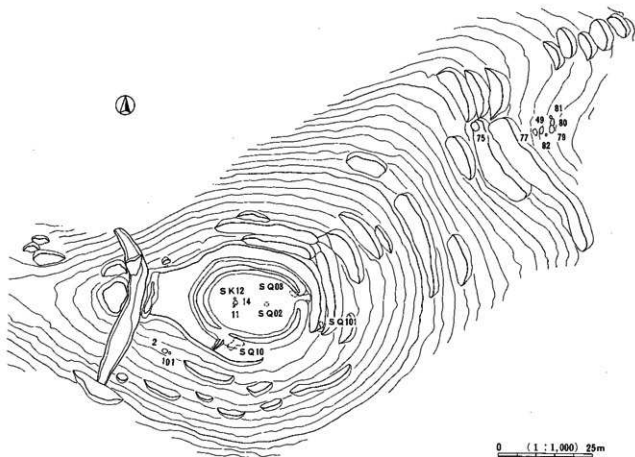


2 その他の遺構

本遺跡で確認された遺構は、中世山城に関連した遺構が主体を占めるが、先行トレンチ掘削の段階で、旧石器・古墳時代の遺物が確認されたため、該期の遺構の存在を予想した。調査では、城郭施設と城郭に帰属する遺構の記録終了後、城郭に先行する遺構の検出・調査を実施した(第173図)。

旧石器時代の石器は、主郭のある尾根頂部と主郭北側斜面で多数に出土した。石器は城郭施設構築時の盛土から出土し、すでに原位置を移動した状況であったが、分布状況などから比較的北側の尾根頂部にブロックが存在したと推定される。

縄文時代では、東側斜面の地形の凹地部分で土坑が7基確認され、当該期の遺構の分布はここに限定される。遺物は出土しなかったが、SK49・75・77・79・80の5基は、底部に逆茂木痕がないが規模・形状から陥し穴と推定できる。なお、本調査で出土した該期の土器では、08トレンチから縄文施文の尖底部



第173図 中世以前遺構分布図

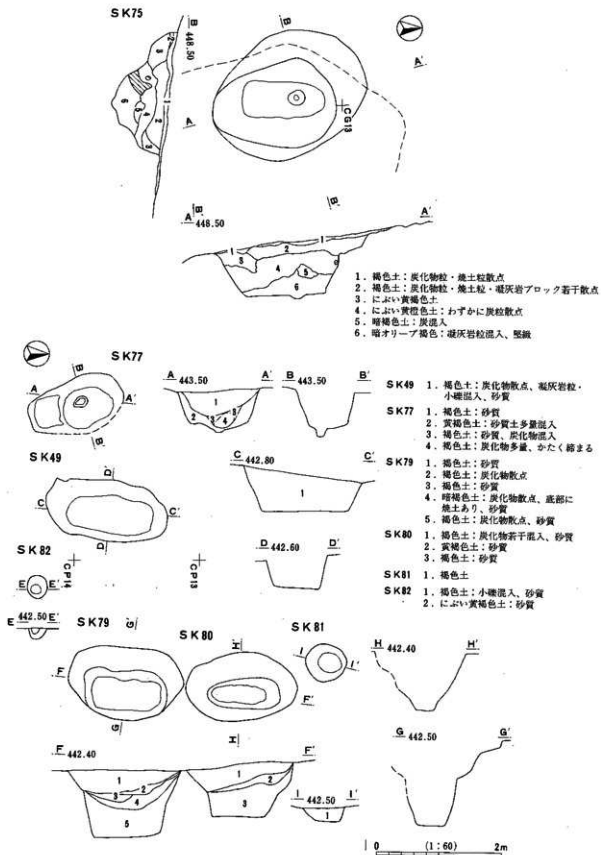
の小破片が1点確認されたにすぎない。

弥生時代では、副郭南側斜面で後期の甕・壺が出土した土坑が1基検出された。土坑の上部は削平されすでに残存しなかったが、土器の出土状況から土器棺墓と推定できる。

古墳時代では、主郭中世整地層の下層から土坑が3基、土器集中が2カ所、土壘下部から土器集中が1カ所、主郭東側の1郭から土器集中が1カ所確認された。中世整地層の下層は層位的にはプライマリーな状態であり、土器集中は原位置からほとんど移動していないと考えられる。土坑は尾根頂部付近で検出され、土坑と土器集中は主郭周囲で唯一帯郭が築かれていない南東隅を取り囲む形で、SK14が西側、SQ10が南側、SQ02・03・101が北・東側に分布する。SQ10を除きいずれも標高469.00～470.10m付近の平坦部に集中する傾向があり、器種はすべて壺形に限られる。さらに、部分的であるが、土壘構築土の下層には該期の土器を含む層が確認され、量的に少ないものの、土器群が出土した立地・器種から想定できることは大きな意味をもち、該期に盛土により尾根頂部全体を利用した行為を想定できる。しかし城郭構築時に大半を削平しているため詳細は不明である。

(1) 縄文時代の遺構

該期の遺構は東側斜面にある程度のもともりをもって分布する。遺構の分布するこの部分では、表土下に斜面上部から流出した2次堆積のローム層が確認された。ローム層は大きく2層に分層され、上層は黒褐色を呈し、鉄分と思われる集積がある。下層は黄色を呈し、上層と比較して粒子が細かい層であり、縄文時代の土坑は上層から掘り込まれていたが、平面的にはプランが確認できなかったため、下層上面まで下げて検出した。



第174図 縄文時代遺構実測図

① 土 坑

SK49 (第174図)

規模・形態：長軸1.98m・短軸98cmの不整楕円形を呈す。深さは74cmで、壁は急傾斜で立ち上がる。主軸方向は他の土坑とはほぼ同方向で、N12°Wを指し、等高線に平行する。底部はほぼ平坦であるが、ビット状の落ち込みが確認されない。埋土：単一層。炭化物粒が散在。出土遺物：なし。

SK75 (第174図、PL67)

規模・形態：長軸2.48m・短軸2.09mの不整楕円形を呈す。遺構の西側一部を除き帯郭10郭構築時に上部を削平されている。深さは90cmで底部は南北方向に長軸をもつ長方形をなし、底部は平坦で径20cmの小ビットが1カ所ある。主軸方向はN6°Wで等高線に平行する。壁は急傾斜で立ち上がるが、上部は大きく開く。埋土：6層に分層した。底部には凝灰岩の細粒が密できわめて締まる6層が堆積し、上部には凝灰岩の風化土を主体とした層が堆積するが、4層には炭、2層には炭・焼土粒が散在する。出土遺物：1層から土器皿が出土した。したがって、1・2層は中世段階の斜面上部からの崩落土と推定され、出土した土器皿は本址に属さないとはいえる。

SK77 (第174図)

規模・形態：長軸1.56m・推定短軸90cmの不整楕円形を呈す。深さは67cmで、底部には若干高低差があり、北側は円形を呈しわずかに深い。中央部ではビット状の小さな落ち込みが見られた。主軸方向はN18°Wを指し、ほぼ等高線に平行する。壁は比較的急傾斜に立ち上がる。埋土：4層に分層した。壁・底部付近に3層が堆積する。わずかに炭化物が散在するが、4層は顕著で堅くしまる。樹種鑑定の結果、4層内の炭は、SK79・80と同様、クリと判明した(付章第5節参照)。出土遺物：なし。

SK79 (第174図、PL67)

規模・形態：長軸1.85m・推定短軸1.18mの不整楕円形を呈し、深さは1.07mを測る。平坦に整えられた底部は南北方向に長軸をもつ長方形を呈すが、ビットは存在しない。主軸方向は、N0°を指し、等高線にほぼ平行するがわずかに西に振れ、北側でSK80ときわめて近接する。壁はほぼ垂直に立ち上がるが、上部はやや傾斜して開く。埋土：5層に分層した。底部・壁付近には炭化物粒が散在する砂質土(5層)が堆積する。その上部には底部一面に薄く4層の炭化物が広がり、焼土も確認された。この炭化物は樹種鑑定の結果、クリと判明した(付章第5節参照)。4層の上部には炭化物粒を含む薄い層2・3層が堆積しており、底部に広がる炭層4層は、本址上部を覆った草類が陥没したものと考えられる。

SK80 (第174図、PL67)

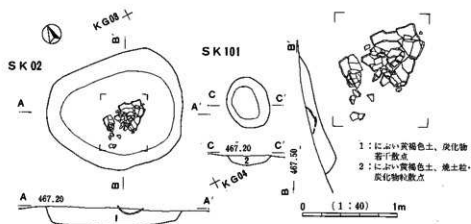
規模・形態：長軸1.78m・推定短軸1.10mの不整楕円形を呈し、深さは88cmを測る。SK79と同様、底部は平坦に整えられ、ほぼ長方形をなすが、ビットは存在しない。本址の南端ではSK79ときわめて近接し、主軸方向はSK79と同様N0°で、等高線に対して西に振れる。壁はほぼ垂直に立ち上がるが、南側の上部はフラスコ状に開く。埋土：3層に分層した。SK79と類似し、底部付近には砂質土3層が堆積し、上面には炭が薄く広がっていた。樹種鑑定の結果、同定は不可能であった。3層上面に広がる炭層は、SK79同様本址上部を覆った草類が陥没したものと考えられる。

(2) 弥生時代の遺構

① 土器棺墓

SK02・101 (第175図、PL67)

位置：根根頂部に近い剛郭の南斜面にある土器棺墓である。検出：I層を剥いだ面で弥生時代の土器片が



第175図 弥生時代遺構実測図

集中して確認され、棺を埋置した墓塚 (SK02) と付属の施設 (SK101) が検出された。後世の掘り込みなどによって棺の大半は失われ、その下部が残存するにとどまるが、壺と甕が合せ口にして埋置されている状況が明らかとなった。また周囲を若干下げて検出したが、プランを確認できなかった。そこで先行トレンチを入れたところ、立ち上がりがやっと確認されたので掘り込みをもつ遺構と認定した。規模・形態：まず掘り込みであるが、SK02は長径1.44m・短径1.21m・深さ20cmの規模で、不整楕円形を呈する。土坑のはほぼ中央部には甕と壺がきわめて近接して出土した。底部はほぼ平坦である。主軸方向は、N71°Wを指し、等高線にはほぼ平行する。壁は残存部分がわずかであるため、明確にできないが、若干傾斜しなだらかに立ち上がっていたと推定される。SK101は長径56cm・短径43cm・深さ10cmの規模で、不整楕円形を呈す。主軸方向はN5°Eで等高線に直交する。壁はなだらかに立ち上がり、底部は明確に平坦ではない。次に土器棺であるが、箱清水土器の甕を棺身とし壺を蓋とするが、いずれも大型サイズの器を用いている。棺身の甕は図化し得ない状況にあるものの、現場の状況から頸部を打ち欠いた体部を転用していることが明らかであろう。形状は胴部最大径を上位にもつもので、最大径より上位に波状文が施文される。頸部付近で打ち欠いているが、簾状文の破片がみられないことから、簾状文を施文しない甕であった可能性が高い。棺身の器高は約40cmであろう。容量は50ℓを前後するものと考えられる。他の壺は胴最大径下半部を用いるもので、中部高地挿描文文化圏土器棺の諸例と同様である。第181図⑩の大型壺で、くびれ部は明瞭に屈曲する。赤彩は施されない。大型甕と壺と甕の一部を打ち欠き合せ口にした土器棺は、主軸方向を等高線に平行させる墓塚内に合せ口状態で約50cmを想定できる。棺が横位に埋置されていた。墓塚のプランの確認は不明瞭であるが、墓塚がつかみにくい点は当地域の土器棺墓諸例と同様といえよう。一方、近接するSK101は焼土ブロック・炭化物が散在し、埋葬行為との関連で注意しなくてはならない。棺内から副葬品は確認できないが、棺の大半を失っており、その有無は不明と言わざるをえない。埋土：SK02・101とも単一層である。SK02は炭化物が若干散在する砂質土、SK101はSK02同様砂質土である。焼土ブロック・炭化物が散在し、人為的な埋没であろう。時期・性格：弥生時代後期後半の箱清水期に当たるが、当該期の幼児土器棺墓は墓域のなかに位置づけることが明らかになりつつある。集落域からの比高差のある当時期の墓域の検出例はいまだ明らかでないが、中世城郭に破壊された墓域を想定することができよう。

(3) 古墳時代の遺構

① 土 坑

SK14 (第176図、PL67)

位置:主郭のほぼ中央部、周囲をST01・02・03に囲まれる中間地点にある。**検出:**主郭中世整地層の3層を取り去り、V層上部の凝灰岩風化層で遺構検出を実施した段階で土器片が出土した。土器と周囲の精査を行った結果、風化層を掘り込む落ち込みを確認した。**規模・形態:**長径1,18m・短径1,10m・深さ22cmの規模で、不整隅丸三角形を呈す。壁は緩やかに立ち上がり、上部は中世の整地段階で削平され、比較的下部のみが残存していたため上部構造は不明である。底部はほぼ平坦である。**埋土:**単一層で凝灰岩ブロックと古墳時代の土器を含む。**出土遺物:**底部・壁付近から古墳時代の土師器が出土。**時期:**出土土器から古墳時代に比定される。本址に近接してSK11・12の2カ所の落ち込みを確認した。土器は出土しなかったが、本址と同時期と推定される。

② 土器集中

SQ02 (第176図、PL67)

位置:主郭中央部より若干東側にある。**検出:**07トレンチの掘削段階で、3層の下層から土器集中が確認された。3層を除去した07トレンチ7層上面で精査した結果、南北約80cm・東西約90cmの範囲で土器集中が確認され、特に中央部では、約30cm四方の範囲に比較的大きな土器片が折り重なっていた。下部には落ち込みは確認されない。**時期:**出土土器は土師器の壺で、古墳時代に比定される。

SQ03 (第176図、PL67)

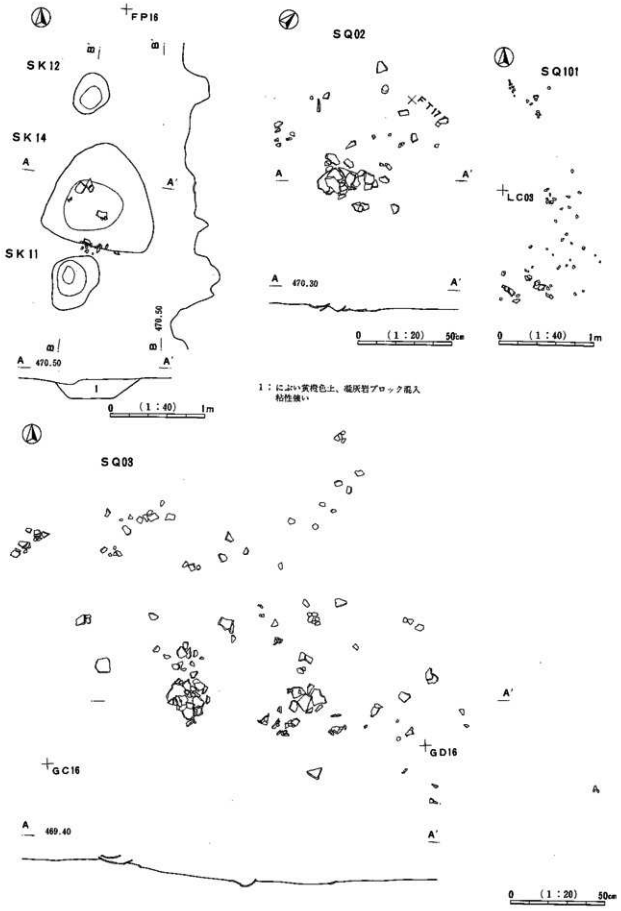
位置:主郭の東側出入口部の北側、土塁の裾部付近にある。**検出:**3層を除去した面で、土器の散布が確認されたため、広がり把握するために周囲を精査した。南北約2,4m・東西約2,4mの範囲に土器が集中しており、中央部では2カ所で特に集中する状況が見られた。土器の下部からは落ち込みは確認されない。土器は土塁構築土(東側出入口部13・14層)に混入したものが若干あるが、大半はSQ02と同様、中世整地層下層の凝灰岩風化層から認められた。**時期:**出土土器は土師器の壺で、SQ02と同時期の古墳時代に比定される。

SQ10 (第176図)

位置:主郭の南側出入口部の東側、土塁の下部にある。**検出:**土塁の基底部を調査中、土器の散布が確認されたので、広がりを把握するために周囲を若干下げて精査した。その結果、東西約3m・南北約2,5mの範囲に土器が集中していた。SQ02・03と比較して細かな土器片の集中であった。基本的に土塁構築土下層から出土したため、性格はSQ02・03と同様と推定される。**時期:**出土土器はからSQ02・03と同時期である。

SQ101 (第176図、PL67)

位置:主郭東側出入口部の外側、帯郭1郭の南側先端部付近の斜面にある。**検出:**I郭と斜面部でI層を取り去り遺構検出中に、斜面で土器の集中を確認した。精査した結果、東西約2,5m・南北約1,2mの範囲に土器が集中した。土器はSQ02・03と比較して小さく、特に密集した状況は見られず、尾根頂部から崩落した可能性もある。**時期:**出土土器は土師器の壺で古墳時代に比定され、ほかの土器集中と同時期である。



第176図 古墳時代遺構実測図

第27表 土坑集計表

番号	施設	形態	長軸×短軸×深さ (m)	長軸方向	底面	埋土	出土遺物	備考
SK01	5郭	不整形	2.95×1.95×25	—	舟底状	礎	縄貨1	
02		不整形円形	1.44×1.21×20	N71° W	南傾	灰	帯縁瓦片文量及び巻	土器棺蓋、弥生後期
03	七郭	(集石遺構)						
04	七郭	(集石遺構)						
05	6郭	不整形円形	1.28×1.0×19	N32° E	舟底状	灰・礎		
07		不整形円形	0.95×0.7×11	N37° W	舟底状	灰	釘3	
08		不整形円形	1.02×0.82×28	N20° E	舟底状	灰		
09		不整形丸三角形	0.78×0.77×7	—	舟底状	灰		
11	主郭	不整形円形	0.65×0.46×36	N30° E	丸底			古墳時代
12	主郭	不整形円形	0.42×0.36×30	—	丸底			古墳時代
14	主郭	不整形丸三角形	1.18×1.10×22	—	舟底状			古墳前期土器 古墳時代
16	七郭	不整形円形	0.86×0.85×58	N40° W	平底	灰		
21	主郭	不整形円形	0.35×0.24×24	N31° W	平底	灰		
24	6郭	不整形円形	1.48×1.18×19	N48° W	舟底状	灰・焼土		
25	1郭	不整形円形	0.30×0.27×20	—	舟底状	灰	土器皿1, 釘2	
26	2郭	不整形円形	0.72×0.61×45	—	舟底状	灰		
27	1郭	円形	0.26×0.24×28	—	舟底状	灰		
28	1郭	不整形円形	0.46×0.41×58	—	舟底状	灰		
29	主郭	不整形円形	0.42×0.34×48	—	平底			
32	七郭	不整形円形	0.45×0.30×40	N77° E	丸底			
39	1郭	不整形円形	0.36×0.30×45	—	丸底			
40	1郭	不整形円形	1.12×0.76×38	N26° E	舟底・柱礎	灰		
41	1郭	不整形円形	0.54×0.20×26	N37° E	舟底状	灰		
42	1郭	円形	0.32×0.26×22	—	丸底	灰		
43	1郭	円形	0.44×0.41×14	—	丸底	灰		
44	1郭	円形	0.27×0.25×28	—	丸底	灰		
45	主郭	円形	0.14×0.11×32	—	丸底			
46	七郭	円形	0.14×0.12×33	—	丸底			
47	1郭	円形	0.26×0.23×41	—	丸底			
48	14郭	不整形円形	0.57×0.52×8	N39° W	舟底状	灰・焼土	釘2	
49		不整形円形	1.98×0.98×74	N12° E	平底状			陥し穴、礎文、縄貨施設が切る
50	13郭	不整形丸長方形	2.29×1.71×27	N28° W	舟底序	灰・焼土	釘4	陥し穴、礎文、縄貨施設が切る 墓址か、縄貨施設が切る
51		円形	0.22 × 23	—	尖底			
52		円形	0.2×0.17×17	—	丸底			
53	9郭	円形	φ0.26 × 10	—	丸底	灰		
54	10郭	円形	φ0.26 × 7	—	丸底	灰		
55	10郭	円形	φ0.28 × 38	—	丸底	灰		
56	14郭	円形	φ0.23 × 24	—	丸底	灰		
57	12郭	円形	φ0.3 × 26	—	丸底	灰		
58	12郭	円形	0.27×0.25×22	—	丸底			
59	14郭	不整形円形	1.40×0.9×11	N25° W	窯傾	灰		縄貨施設が切る
60		楕円形	0.53×0.35×6	N87° W	舟底状	灰		
61		不整形円形	0.51×0.56×23	—	平底	灰・焼土		
63		円形	0.28×0.31×21	—	丸底	灰		斜面のビット群
64		楕円形	0.32×0.27×54	N25° E	丸底			#
65		楕円形	0.28×0.21×37	N80° E	丸底			#
66		円形	φ0.33 × 18	—	丸底			#
67		円形	0.34×0.36×12	—	舟底状	灰・底に石		#
68		不整形円形	0.32×0.36×7	—	舟底状	灰		#
69	9郭	円形	φ0.24 × 7	—	丸底			
70	9郭	円形	φ0.23 × 29	—	丸底			
71	11郭	円形	0.96×1.0 × 21	—	舟底状	灰	釘2	
72	11郭	不整形円形	2.07×1.14×13	N47° W	窯傾	灰	釘1	
73	11郭	円形	φ0.35 × 33	—	丸底	灰		
74	8郭	円形	φ0.21 × 43	—	丸底	灰		
75	10郭	不整形円形	2.48×2.09×90	N 6° W	帯縁・長平組			陥し穴、礎文、縄貨施設が切る
76		不整形円形	0.64×0.44×29	N52° E	舟底状		溝跡1個体	
77		不整形円形	1.56×0.90×67	N18° W	舟底状	灰		陥し穴、礎文
78	10郭	楕円形	0.62×0.44×9	N40° W	舟底状	灰・焼土	縄貨1	
79		不整形楕円形	1.85×1.18×108	N 0° E	平底状	灰		陥し穴、礎文
80		不整形円形	1.78×1.10×88	N 0° E	平底状	灰		陥し穴、礎文
81		不整形円形	0.60×0.65×22	—	舟底状			礎文
82		不整形円形	0.31×0.35×17	—	舟底状			礎文
83	13郭	不整形円形	0.27×0.32×21	—	舟底状	灰・焼土		
84	土器埋蔵	不整形円形	1.92×1.64×50	N90° E	舟底状	灰		
85	8郭	円形	φ0.19	—			土器皿1個体	落ち込みなし
86	8郭	不整形円形	1.12×0.95×34	N48° W	北傾・平組	灰	釘3	灰・灰を埋めた土坑
87	8郭	不整形円形	0.95×0.78×23	N12° W	平底	灰		#
88	7郭	不整形円形	0.50×0.41×18	—	舟底状			
89	7郭	楕円形	0.64×0.46×14	N37° E	舟底状			
90	7郭	不整形円形	0.72×0.48×24	N44° W	舟底状			
101		不整形円形	0.36×0.43×10	N 5° E	舟底状	灰・焼土		

第4節 遺物

1 旧石器・縄文時代の遺物

(1) 遺物出土状態 (第177図)

本遺跡から出土した石器類は後述するように、その特徴から旧石器時代から縄文時代の所産であると考えられる。その平面分布は第177図に示したとおりである。中世の遺構によって大きく地形が改変されているために本来の遺物包含層は失われ、ほとんどの遺物が原位置をとどめていない。調査区中央に見られる2カ所の遺物集中も中世遺構(土塁)の中から出土したものである。ただこの集中から北東部の斜面にかけて遺物が多いことから、本来の遺物集中もこの周辺にあったことがうかがわれる。また主郭土塁南側からは縄文土器が1点出土した。小破片のため図示できないが、胎土に繊維を含む乳頭状の尖底部で、外面に縄文が施文され、前期初頭の土器と思われる。

調査区西端に見られる遺物集中は尾根の鞍部にあり、中世の大幅な地形改変を受けていない箇所当たる。この遺物集中から出土している遺物は第179図9の打製石斧や第180図15の石鎌であり、旧石器時代のブロックとしては認定できない。

(2) 石器 (第178～180図、P.L.69・70)

本遺跡から出土した石器類は総数204点にのぼる。前述のとおりこれらは旧石器・縄文時代の所産と考えられるが、出土状態から厳密には分離できないため本項では一括して扱うこととする。

204点の内訳は、槍先形尖頭器8点、石鎌6点、打製石斧8点、磨製石斧2点、削器9点、搔器3点、小剥離痕のある剥片2点、磨石2点、ピエス・エスキーユ1点、その他の石器3点、石核3点、剥片・砕片155点、礫片2点である。

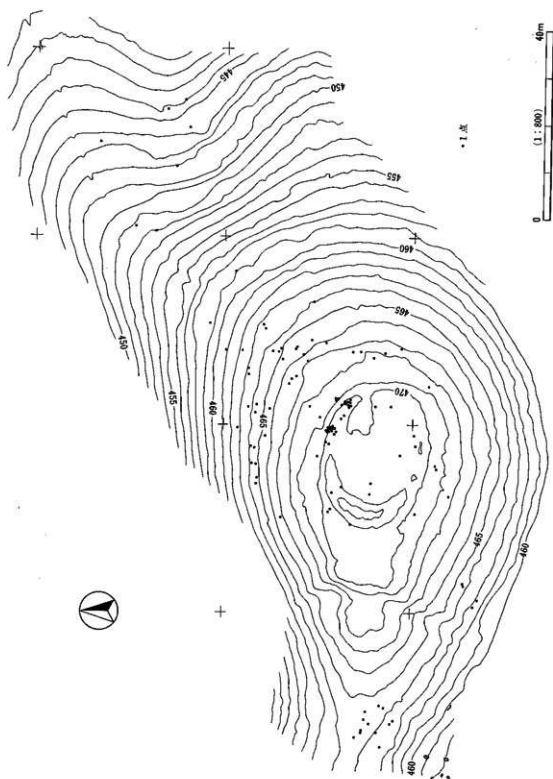
① 槍先形尖頭器 (第178図1～5、P.L.69)

槍先形尖頭器は8点出土したが、遺存度が良く形態がわかる5点を図示した。1は安山岩製、先端部を欠損する。左右非対称な平面形状を呈する。重量は16.9gを測る。2も安山岩製、表面の風化が著しく剥離面が不明瞭である。左側縁が右側縁に比べ凹凸が著しいが、製作時に左右非対称を意識したものか、使用の結果の破損かは風化のため観察できない。重量は10.1gを測る。3も2と同一の石材を用いており、2ほどではないにしろ剥離面はやはり不明瞭である。これも左右非対称の平面形状を呈する。重量は5.2gを測る。以上3点は、2も製作時の形態をとどめていと積極的に理解すれば、長さ4.5～7.0cm(推定復原)の中形両面加工槍先形尖頭器の一群としてとらえられる。

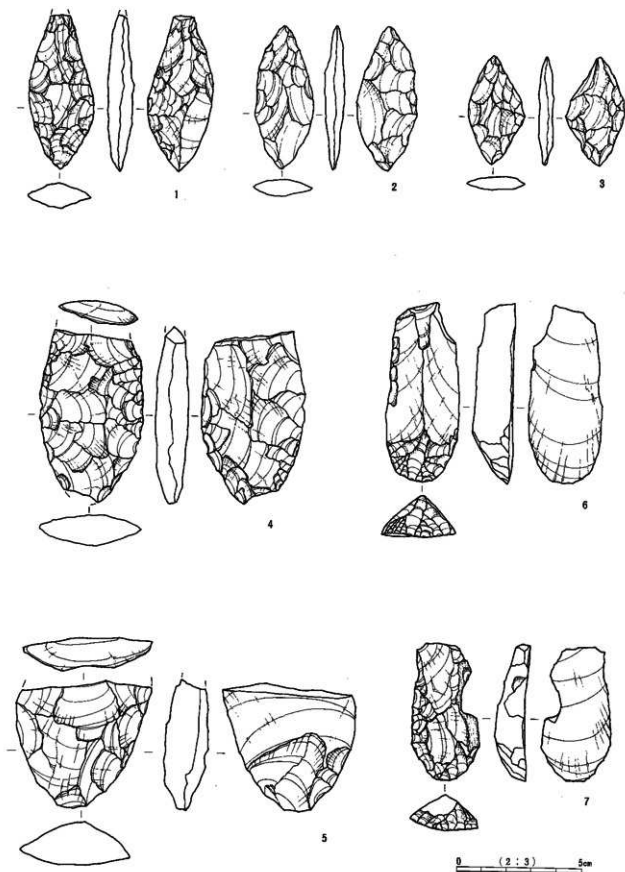
4は先端および基部の一部を欠損しているが、推定復原すれば全長は10cmを超えたと考えられ、大形の両面加工槍先形尖頭器とみなすことができよう。頁岩製である。5は表面の加工が全面におよぶが、表面は部分的な加工であることから、大形の半両面加工槍先形尖頭器と認定したが、基部のみの出土で全体の形状は不明なので他器種の可能性もある。頁岩製。

② 搔器 (第178図6・7、P.L.69)

6・7ともに縦長剥片を素材とし、その端部に急斜度の加工を施し刃部を作り出している。素材となった剥片は、背面の観察から一稜しかなく分厚いこと(6)、表裏の剥離方向が一致しないこと(7)から



第177図 石器分布図



第178圖 石器実測図(1)

縦長剥片を利用はしているものの、連続的に縦長剥片を剝離するいわゆる石刃技法によるものではない。石材は6が頁岩製、7が玉髓製、重量は6が29.7g、7が17.0gを測る。

③ 打製石斧 (第179図8~12、P L69・70)

8は表面および左側縁に自然面を残し、大きさの割には厚みがある形態を有する。本来はもっと大形品であったものが、使用に伴う破損等で刃部および右側縁を再生加工したため、この形態になったものか。砂岩製で、重量は121.3gを測る。9は頁岩製の小形の楕円打製石斧。刃部の摩耗は表裏面ともに著しい。10は下半部を欠損しているが、撥形を呈すると考えられる。表裏面ともに自然面を残すことから、扁平な礫を素材とすると考えられる。砂岩製。11・12は横断面がD字形もしくは三角形を呈する片刃の石斧として認定した。ただし神子柴型石斧を想定するには、11は非常に小形である点、12は頭部のみなので問題がないわけではない。石材は11が安山岩製、12が頁岩製、重量は完形品と考えられる11が46.8gを測る。

④ 磨製石斧 (第179図13、P L70)

表裏、側縁ともに全面的に研磨された薄手の磨製石斧である。刃部および頭部の一部を欠損する。蛇紋岩製で、重量は66.9gを測る。

⑤ 石 鏃 (第180図14・15、P L70)

6点のうちほぼ完形の2点を図示した。14はチャート製で、縁辺は微細な剝離によって直線的な外形を呈するように仕上げられている。重量は1.3gを測る。15は黒曜石製で、縁辺の処理は14とは対照的に粗い剝離をそのまま残し鋸歯状の外形を作り出している。重量は0.35gを測る。

⑥ 石 核 (第180図16・17、P L70)

16・17の2点ともに黒曜石製である。残核の形態から、おそらく原石を分割するようなかたちで石核の母材が作り出され(礫片、厚手剥片)、そこから小形薄手の剥片が剝離される、縄文時代に一般的に見られる石核に共通する。

⑦ 削 器 (第180図18・19、P L70)

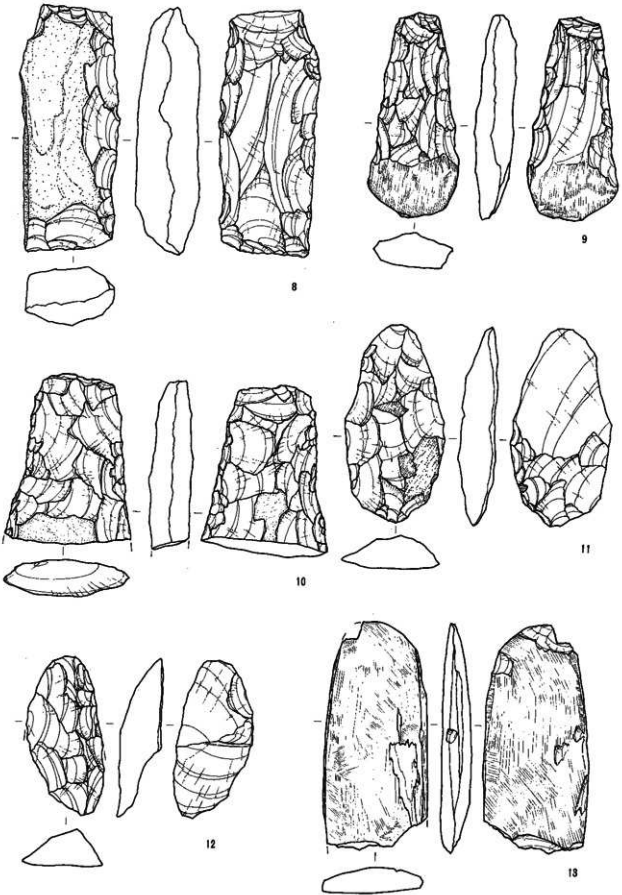
18は大形の砂岩製の縦長剥片を素材として、両側縁に調整加工を施し刃部を形成している。とくに右側縁は外湾する刃部を意識していると思われる。重量は153.3gを測る。19も18と同様に外湾する刃部を有する大形の削器である。砂岩製で、重量は127.1gを測る。

⑧ 磨 石 (第180図20・21、P L70)

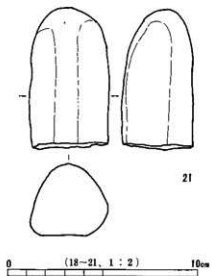
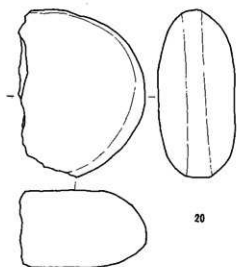
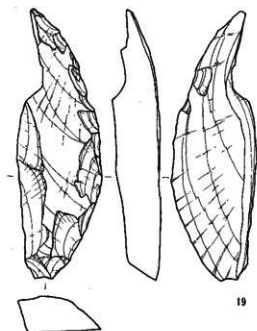
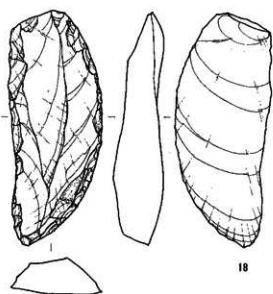
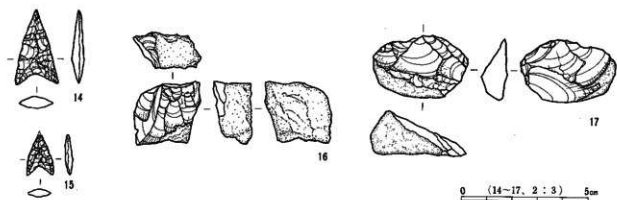
20は花崗岩製で、表裏両面とも摩耗している。重量は360gを測る。21は横断面が隅丸の三角形を呈し、それぞれの直線的な側縁に摩耗が見られる。砂岩製で、重量は180gを測る。

(3) 石器群の位置付け

上記の石器類のなかで、槍先形尖頭器、搔器について着目したい。北信地域で本遺跡と同様な搔器を多量に出土する遺跡として、飯山市内の旧石器時代の遺跡がある(日焼遺跡・上野遺跡・トノ池南遺跡等)(註1)。これらはナイフ形石器、槍先形尖頭器等に伴っており旧石器時代でも後半期の位置付けが与えられている(註2)。なかでもナイフ形石器を伴わず、槍先形尖頭器と伴出している上野遺跡が最も近い石



第179図 石器実測図(2)



第180圖 石器実測圖(3)

器群としてあげられる。この上野遺跡では磨製石斧も出土しており、本遺跡の磨製石斧も注意しておきたい。

打製石斧は、神子柴型石斧?と認定したものを除き縄文時代の所産ととらえるべきであろうが、小形でやや精緻なつくりをしている点、縄文中期に一般的に見られる大形の打製石斧とは特徴を異にしている。

剥片は槍先形尖頭器製作時に出るいわゆるポイントフレイクが目立つ。したがって、縄文時代の遺物もあるが、剥片類と石器の多くは旧石器時代の後半期～終末期にかけて残されたものと見られるのではないだろうか。

註

- 1 飯山市教育委員会 1989 「日焼遺跡」【小沼湯滝バイパス関係遺跡発掘調査報告Ⅰ】
飯山市教育委員会 1990 「上野遺跡」【小沼湯滝バイパス関係遺跡発掘調査報告Ⅱ】
飯山市教育委員会 1991 「トノ池南遺跡」【小沼湯滝バイパス関係遺跡発掘調査報告Ⅲ】
- 2 望月静雄 1989 「飯山市日焼遺跡の石器群」【第2回長野県旧石器文化交流会—発表要旨—】

2 弥生・古墳時代の遺物

(1) 土器 (第181図)

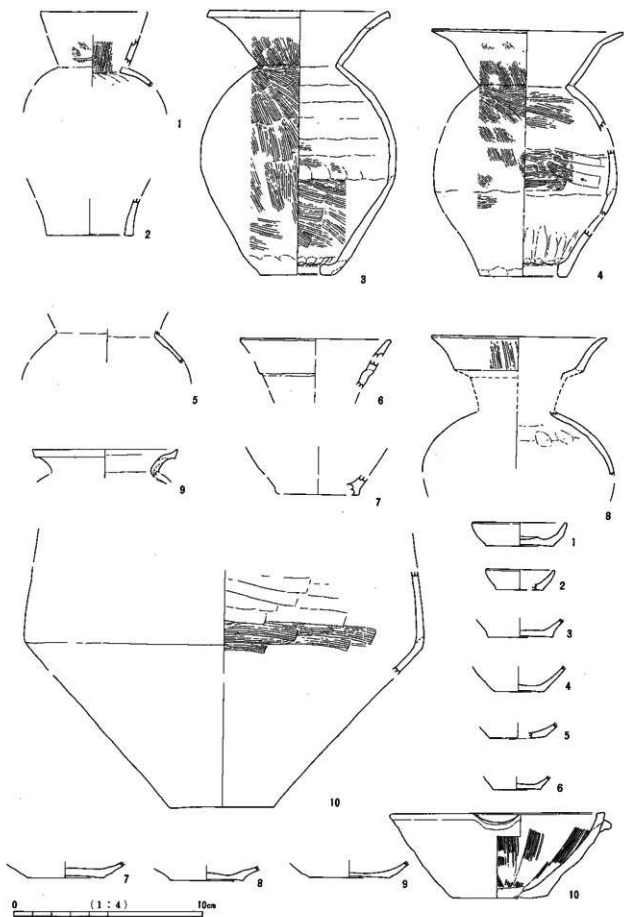
遺物は少量で、「見山砦」として機能した中世のわずかであり、5世紀前半代の土器の出土量が多く、築城時に破壊された該期の遺構の存在が予想される。

1・2・4はSQ03からの出土である。1は直口縁壺の頸部で、不純物を含まない精選された胎土で、丁寧なヘラミガキが施され、赤彩される。二重口縁壺の可能性もある。2・4は底部穿孔の広口壺で、器壁は厚く一次的なハケ調整を全面に残している。穿孔は、焼成前に、粘土紐をドーナツ状にまわしてそのまま形づくり、広い口径をとっている。体部は胴下半部を成形した後、粘土紐を積み上げ卵形につくる。頸部は縦方向のハケ調整、口縁部は強い横ナデを施し、2は端部を面取りする。3はSQ02から出土し、2と同じ形態・調整をもつ底部穿孔の広口壺で、口縁端部は丸く仕上げられる。2～4の類別として、更埴市小島遺跡1号溝(方形低墳丘古墳)に出土例がある。5・8はSQ10の出土である。5は直口縁壺と考えられ、器面は荒れており、ヘラミガキを施しているが、1より粗製である。二重口縁壺の可能性もある。8は1と同様、精製の短い段の二重口縁の壺で、口縁部に強いヨコナデ、体部外面に粗いタテヘラミガキが施される。類例は、長野市二ツ宮遺跡5区13号住居址で、脚屈折高杯とともに出土している。6・7はSQ04から出土し、ヘラミガキを施した精製の二重口縁壺である。9・10は北斜面から出土しており、10は箱清水式の壺の体部である。9は口縁端部を、強いヨコナデによってつまみ上げ状をなし、面取り部を形成する。頸部の形態、口縁端部の仕上げから北陸系と考えられる。近隣の鶴前遺跡に類例が見られる。

以上の土器は、出土地点および时期的にも、大きく二分類される。第一は1～8の土器集中区(SQ02～04・10)からの出土で、同様式の器種構成と考えられる。时期的には、長野市本村東沖遺跡の千野浩氏による分類の2～3段階に相当すると思われ、5世紀前半の年代が与えられよう〔千野1993〕。第二は北斜面の9・10の一群で、弥生時代後期と考えられる。

文 献

- 千野 浩 1993 「本村東沖遺跡における古墳時代中期以降の土器編年について」【本村東沖遺跡】長野市教育委員会



第101図 弥生・古墳時代・中世土器・陶器実測図

3 古代・中世の遺物

(1) 土器・陶磁器 (第181図、PL71)

平安時代の須恵器や黒色土器Aの杯がわずかに出土しているが、まとまっていない。

中世としては、土器皿と珠洲系の摺鉢がある。土器皿は細片が多く、その量は多いとはいえず、遺構に伴う例も少ない。1～9はログロ調整の土器皿である。焼成は軟質で、不純物をほとんど含まない灰白色の胎土を呈する。1はSK25、2・3・6はSK75、4はSK85、7・8はSQ06、9はSQ10、5は主郭土塁内からの出土である。時期的には15世紀後半以降と考えられるが、遺物自体細片が多く特定できない。10はほぼ完形の珠洲系の摺鉢で、灰白色の小石を多数含む。口縁端部は水平に仕上げられ、片口がつけられる。内部には間隔を開けながら放射状に12本単位の卸目がつけられる。時期的には14世紀後半から15世紀前半と考えられる。

遺物は非常に少なく、これらにより時期を限定するのは難しいが、土器皿の年代が見山砦として機能した段階と思われる。

(2) 鉄釘 (第182・183図、第28・29表、PL72)

遺物のなかでは最も出土量が多い。出土位置は第182図および第29表に示すように、主郭周囲に多く見られる。いずれもIIb期の縄張りを構築する際の、整地土層上面から中層にかけて出土した。集中地点が何か所か見られるが、出土状況から、整地の際、それ以前にあった建物あるいは建具の廃材等と一緒に投棄された可能性が高い。特に主郭土橋西脇付近からの出土量が多いが、SD02を埋め立て平坦にする際の埋土の中より、約3mの円形の範囲に2カ所から集中して出土しており、最終段階以前の縄張りを完成させる時点でそれ以前からあった構築物、あるいは建物を廃棄した際に集めて捨てられた可能性が強く、そこに用いられた鉄釘の蓋然性が高い。他の部分からの出土状態を見ると、遺構内でも埋土上面であることを考慮すれば、主郭部周囲からの自然営力による流出とも考えられそうである。土塁との関係については、その盛土内からの出土はないことから、これらが磐構築以前に用いられた可能性はない。

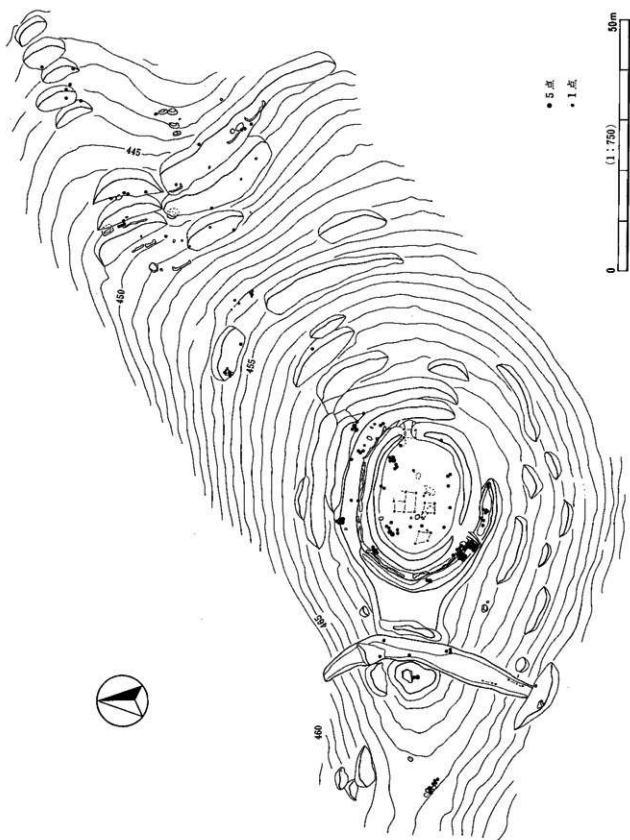
破損品が多く全体がわかる例は少ないが、鉄釘の長さの分布を取り上げたのが第30表である。全体の6割が5～8cmに集中することがわかる。3.3cmを1寸とすると、2寸前後に集中することになる。山城あるいは中世の居館・集落内部でまとまった鉄釘の出土例はなく、比較対象がないため、この長さの分布が示す使用用途の違い等は、今後の課題である。形態は、断面は方形を指向した長方形が多く、当然ではあるが、一辺の大きさは全体が長いほど大きい。頭部形態は、通常叩かれるために変形等は考えられるが、大きく二者に分けることが可能である。一つは4・5に代表される、基部上端を叩き延ばし、その後単に

第28表 鉄釘の出土地点

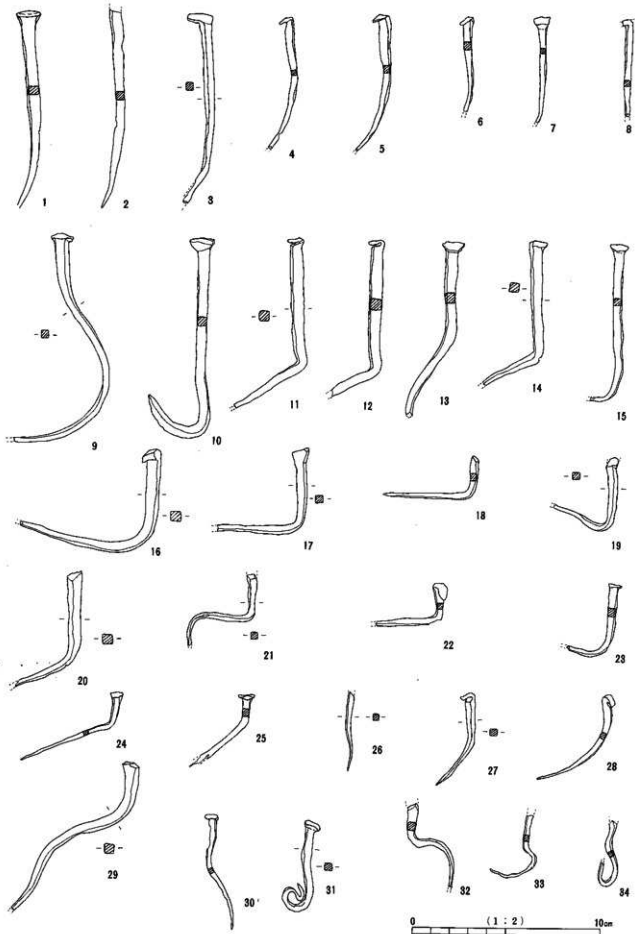
出土位置	点数	割合
主郭土橋付近	70点	30.3%
主郭周囲の帯郭	31点	13.4%
主郭内(平戸部)	29点	12.6%
付属部(北東)	21点	9.1%
尾根鞍部	20点	8.7%
堀	9点	3.9%
帯郭(東側)	4点	1.7%
その他	47点	20.3%
合計	231点	100%

第29表 鉄釘の長さ分布

長さ(mm)	点数	割合
～ 23	2点	2.3%
32 ～ 36	6点	7.0%
40 ～ 45	8点	9.3%
50 ～ 63	30点	34.9%
67 ～ 80	22点	25.6%
86 ～ 95	8点	9.3%
105 ～ 118	8点	9.3%
144 ～ 150	2点	2.3%
合計	86点	100%



第182図 中世鉄釘分布図



第183図 中世鉄釘実測図

折り曲げた一群であり、仮にA群としておく。もう一つは、11・12に代表される、基部上端に鑿を入れて叩き延ばし、その後折り曲げた一群であり、仮にB群としておく。この二形態は、鉄釘自体の長さとの関連性は見られない。近隣の遺跡で中世の鉄釘の分類を行った例は少ないため対比はできないが、小松望氏が松本平の吉田川西遺構の出土品を対象に行った鉄釘分類と比較してみたい(小松1989)。小松氏は、古代から近世まで鉄釘を大きくI～VIII類に分けており、今回のA群はIV類に、B群はV類に分類できそうである。ともに、時期的には近世にはほとんど見られず、古代から中世(16世紀)にかけての出土が多く、量的にも最も普遍的に見られるとされる。その長さを比較しても二寸程度に集中することは変わりがない。なお近世に多いとされるVI類や、用途が特殊と思われる飾り釘の出土はない。

最後に、釘の使用痕跡であるが、頭部が叩きつぶされている例や頭部および端部のおよび端部の欠損品が多いのは当然であるが、ここで注目したいのは、曲がり方である。それもいくつかに分類が可能である。一つは、90度近く一度折り曲がる一群で、さらにその位置から、下半部(11・12・14・20・22)、上半部(16～18)に分けることが可能である。これらは、木材に打ちつけた後、例えば板などを押さえるために、意図的に折り曲げたとも考えられる。このほか二度折り曲がる例もある(21)。次は、「釣り針」状に湾曲する一群である(9・10・15・33)。これなどは、一度打ち込み、それを抜く際に曲がったというよりも、意図的に曲げられた可能性が高いが、目的等は不明である。吉田川西遺跡においては曲がった例は少なく、これが見山砦の建物あるいは建具等との関連によるかは言及できないが、今後の類別の増加を待って検討したい。

文 献

小松望 1989 「金属資料と鍛冶資料」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書 3—塩尻市内その2 吉田川西遺跡』

(3) 金属製品・銭貨

いずれも遺構外の出土であり、時期等の特定はできない。1は鉄製の鋳物の厚さ2mm程度の破片で、鉄鍋の口縁部の可能性があるが、変形が著しく断定はできない。2は主郭を巡る土塁東側出土の、ほぼ完形の銅製の輪尻で、断面は長径2.6cm、短径1.5cmの楕円形を呈する。側面には唐草模様が浮き上がるように彫られており、端部の平坦面には小さな穴が透かし状に開けられ、一部剥離をしているが全体に鍍金されている。3は6郭から出土した直径1.1cmの球形の鉛製品で、火縄銃の弾丸の可能性はある。

銭貨は4はSK01、10はSK78、11は6郭の出土であるが、埋納されるような出土状況ではない。他は遺構外から出土した。4は皇宗通寶(初徳年1039年)、6は開元通寶(621年)、7は熙寧元寶(1068年)、8は元豐通寶(1078年)、9は至道元寶(995年)、10は紹聖元寶(1094年)、11は聖宋元寶(1101年)と判読でき、いずれも渡来銭であるが、5は判読できない。

輪尻と火縄銃の弾丸の出土は、「見山砦」の性格を考えるうえで興味深い。

第5節 成果と課題

1 塩崎城見山砦の変遷

(1) 城郭施設の変遷 (第30表)

地表面観察で確認された縄張りは16世紀の様相を示すため、本城郭の最終段階は、いわゆる戦国期に属する(註1)。発掘調査での大きな成果として、全面発掘により城郭の最終段階に帰属するすべての城郭施設と遺構が把握できたことがあるが、そのほか主郭部を中心として先行する城郭の様相が判明したこともある。

先行する城郭は、最終段階の城郭構築時に、それ以前の城郭施設と遺構の大半を削平しているため、全体的には確認されていないが、主郭土塁・副郭の堀・主郭土橋で2時期にわたり使用されていたことがわかった。ここでは主郭部の変遷について触れてみることにする。

各段階の様相をまとめたものが以下の表であるが、I期では城郭施設と遺構の大半が遺存していないため、推測の部分が加わっていることを断っておく。

なお城郭の変遷ではI期とII期とに大別し、さらにII期をa・bに二分した。地表面観察で確認される城郭の最終段階はII b期に当たる。

第30表 城郭施設の変遷過程

時 期	I 期	II 期	
		II a	II b
施 設	15世紀(中頃)～16世紀(前半)		
縄張り (主郭)	主郭には版築方法の低土塁が存在し、ほぼ全周する構造。土塁構築は主郭内の土を削平して使用し、土塁の基部はII期と比べて緩やか。出入口は東側と南側に存在。	主郭土塁の西側に堀(SD02)を掘削する。生じた土をI期土塁上部に盛土し、高土塁とする(掻き上げ土塁)。土塁の基部付近に溝(SD101)を構築し、西側はテラス状をなす。 主郭内を整地し3棟の建物を構築。出入口はI期の場所を踏襲し東側にはSX01を構築。	主郭土塁・櫓門・建物等はII a期から継承。 SD101も継続。
(副郭)	主郭付近には帯郭はなく、副郭の堀(SD02)も存在しない。	SD02の西側には堀に沿う形で土塁がまわる。土塁と堀の2重構造。副郭には土塁と阻壘類を構築。	土塁を崩しSD02を埋める。平沢化し上部に土を貼る。副郭全体に整地を行い阻壘を埋めて郭とし、帯郭とつなげる。
(帯郭)		主郭北側に1段(1郭)のみ存在。	
(堀)	尾根筋に堀切が存在(推定)。	堀(SD01)が存在。	II a期から継続。堀は道としても利用され、堀の内側に郭を構築し、近接する付属郭との連絡をもつ。堀底郭も存在。
主な出土 遺物			帯郭(SK25)・主郭土塁をまわるSD101・SQ06、SK75・85より土器里出土。

施設ごとに変遷過程をみると、主郭土塁は、I期の段階では低土塁であったものが、II期ではI期土塁上部に盛り上げ高土塁としている。土塁の傾斜は、II期に至り急傾斜になる。出入口は両段階とも同じ位

置だが、SX01が構築されたのはⅡa期で、Ⅱb期に継続する。主郭内の建物址と土塁をまわる溝SD01はⅡa期に帰属し、SX01同様Ⅱb期に継続する。

副郭はⅡa期に防衛的機能を主目的とした阻害類が築かれたが、Ⅱb期には郭に変遷している。

帯郭はⅡa期に主郭北側に築かれているが、Ⅱb期に至り面積が拡大する。

付属郭・段郭はⅡb期に帰属する。

堀はⅡa期に存在するが、Ⅱb期では内部と堀が終わる部分に郭を構築する。Ⅰ期にも尾根を遮断する堀が構築されていたと考えられるが、詳細は不明である。

(2) 各時期の様相 (第184図)

塩崎城見山砦のⅠ期

Ⅰ期では、主郭部の主郭土塁が認められたのみで、斜面部で帯郭・付属郭・段郭は認識されなかった。

Ⅱa期の城郭施設の構築で削平されている箇所があると推定されるため、全体像は把握できないが、尾根頂部に主郭を築き、背後に堀がつくられていたと考えられる。斜面部には削平地・堀を築かない単郭式の城郭であり、城郭の機能の大半を主郭が担っていたことがいえる。

主郭では土塁が版築方法で低く築かれ、その土塁法面はなだらかに傾斜した構造である。Ⅱa期の土塁構築で削平されているため、詳細な構造はわからないが、版築土塁の遺存状況からはほぼ全周していたと考えられる。なお主郭の出入口部は城郭の前面である東側と南側に設けられているが、出入口部には付随する建物址は構築されていない。主郭内部はⅡ期の整地層で削平されているため該期の遺構はなかったが、主郭と堀で構成された縄張りからすると、簡素な建物があった程度と考えられる。

塩崎城見山砦のⅡ期 (Ⅱa期)

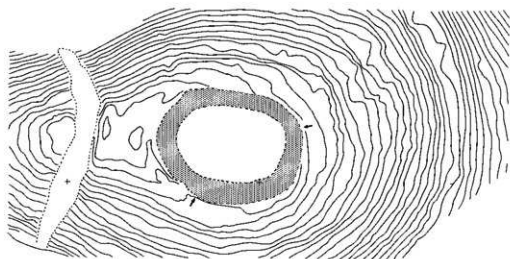
尾根頂部に主郭を築き、主郭後方に堀を掘削する様相は基本的にⅠ期と同様であり、城郭の機能の大半を主郭が担っていた。

しかしⅠ期と大きく異なることは、主郭周囲に帯郭が築かれ、主郭と堀の中間にさらに堀と土塁が築かれることである。該期に主郭を全周する土塁は、主郭内の削平と副郭の堀SD02掘削で生じた土を盛土とし、Ⅰ期の版築土塁上部に掻き上げて築いている。Ⅰ期では斜面がなだらかで低土塁であったが、該期では斜面が急傾斜で高土塁に変化している。

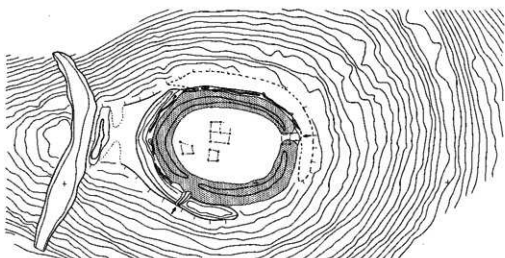
東側出入口部には建物址らしいSX01があり、その構築は土層断面から主郭土塁とほぼ同時であった。もう一方の南側出入口部は建物がないが土橋があり、主郭内部から堀側への連絡はここを使用していたことがわかる。東側出入口から土橋にかけての範囲には、主郭土塁の裾に溝SD101が、また主郭内部には3棟の建物址があり、Ⅱb期の基本形が形成される。また該期での副郭部分には、堀切SD01側に土塁、主郭土塁の背後に半円形の堀SD02、その外側にさらに土塁と堀が並走し、副郭部分が堀と土塁による2重構造をなすことで、防衛的機能を重視した空間を形成していたことがわかる。

Ⅱb期になると主郭周囲には城兵の横の移動を可能にするために、主郭周囲の帯郭は連続するが、該期では連続せず、帯郭は狭い。また堀は尾根筋を遮断することが主目的で、内側と堀底に郭は築かれていない。さらに帯郭が副郭と連続しないことから、城郭内部の施設相互の連絡が完備されていないことがわかる。

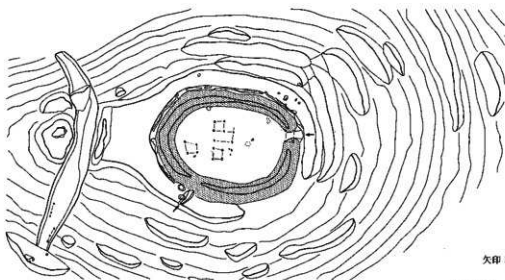
このⅡa期の城郭は機能の大半を担う主郭が尾根頂部に築かれる。尾根筋を堀切で遮断する構想は基本的にⅠ期と同様であるが、防衛的機能が強化され軍事的施設として発展したことがうかがえる。このことは、塩崎城見山砦ではⅠ期からⅡa期への変遷が画期として位置付けられ、Ⅰ期の城郭が改修された結果



I 期



IIa期



IIb期

矢印：出入口

0 (1:800) 50m

第184図 塩崎城見山砦(主郭部)城郭施設の変遷

と理解できる(註2)。

塩崎城見山砦のII期(IIb期)

主郭と帯郭の構造は基本的にIIa期と同様である。該期ではIIa期の郭を拡張して面積を広げたことが特徴的なことであり、IIa期と同様、城郭の機能の大半を主郭が担っていた。

該期では主郭土塁背後の堀SD02が埋められ、上部を平坦化して凝灰岩塊を貼る行為がなされる。また同時に副郭土塁を除きSD02に近接する土塁を破壊することで副郭全体を整地し、郭として使用している。主郭土橋はIIa期では堀SD02をわたる構造となっていたが、該期では堀が埋められ脇にSD05が構築された姿に変化している。したがって土橋はIIa期から該期まで使用される。副郭の整地化により主郭周囲の帯郭は連続する構造となり、城兵の横の移動が可能となる。堀ではIIa期の堀を一部埋め、内部に郭(堀内郭)を築いている。その結果、北斜面で堀に接する付属郭と堀内郭の連絡が可能となり、また反対の南側では堀が終る部分に郭がつくられているため、堀の内部が通路として利用されていたと推定される。主郭ではIIa期の建物と出入口に構築されたSX01が存在しており、土器などの遺物は出土しなかったが、投石と推定される集石がこの段階に帰属すると考えられる。

IIa期からIIb期への変遷はI期からIIa期への変遷と異なり、大規模な改修ではない。該期では城郭の中核を占める主郭でIIa期の土塁と遺構が継続して使用されており、基本的にIIa期の縄張りを踏襲している。主郭を中心として土塁と堀などの防塁・阻塞類の施設で構成されていたIIa期のものが、該期で堀を埋め平坦部の拡張による郭の多用化がなされ、部分的改修を指摘できる。

IIb期の年代は縄張り編年から、16世紀中頃～後半に比定できる(註3)が、土器が示す年代との不一致については後述する。

(3) 各時期の年代と築城主体者について(第185図)

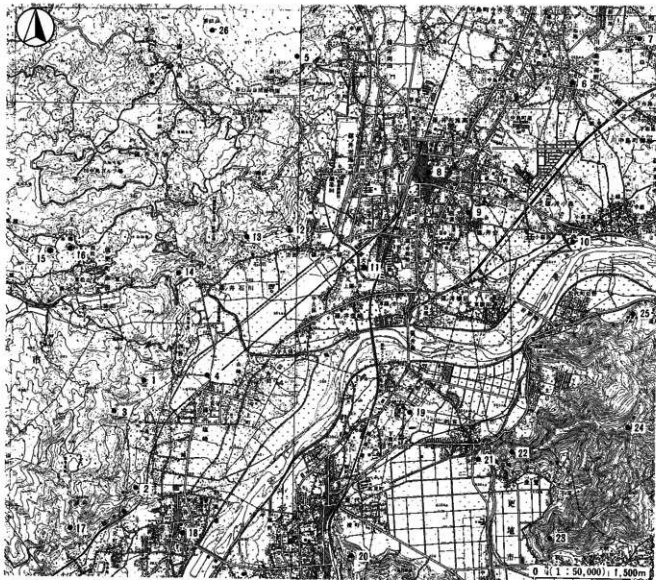
塩崎城見山砦から出土した土器は15世紀前半～16世紀前半のものである。そのなかでSK76出土の珠洲系播鉢は15世紀前半に比定できるが、本址は城郭築城以前の遺構である。したがって本城郭は土器から15世紀中頃～16世紀前半に築城・発展し、この間には3段階の変遷があったことがわかる。しかし各段階の年代については、全体的に土器の出土量が少ないうえ、I・IIa期の年代を明確に捉えられる遺物が少ないため、城郭の上限を15世紀中頃、下限を16世紀前半とすることにとどめる。

SK48・50・59は付属郭を築く際に上部を一部削平されている。この遺構は中世の墓址と考えられ、時期的にはSK76出土の播鉢から15世紀前半に比定できる。したがってI期築城以前にここには墓域が形成されており、15世紀前半以降に墓域を破壊し城郭が築城されたようである。

それでは築城主体者を歴史的環境から想定してみると、『長野県史』によれば、15世紀中頃～16世紀前半の特徴的なこととして、守護小笠原氏の内紛と村上氏の北信濃一帯への勢力拡大をあげている。しかし、15世紀では当時、有力国人であった村上氏と塩崎地域に存在した小国人武士との関係などが明確ではないなど、善光寺平南部の動向については不明な点が多い。したがって、築城主体者を特定することは容易ではない。

I期の築城はこのように桑原氏・塩崎氏などの小国人武士による支配がなされている状況のなかで実施され、主郭と堀による単純な縄張りの状況から、村上氏の介入した様子はなく、築城主体者は小国人武士によるものであったと推定される(註4)。

16世紀になると村上氏は善光寺平において勢力を拡大していったようであるが、北信濃一円にはおおよそ、塩崎周辺はその影響下にあった小国人武士が支配していたらしいことから(註5)、IIa期・IIb期



1:塩崎城見山砦 2:赤沢城 3:塩崎城 4:石川榮里遺跡(中世居館) 5:藤の城 6:戸部城 7:広田城 8:布施氏館 9:廣田城
10:小糸館 11:大塔城 12:二ッ柳城 13:湯ノ入城 14:石川城 15:西の城 16:東の城 17:小坂城 18:館宿山城 19:歴代古城
20:歴代城 21:生仁館 22:唐崎山城 23:鷺尾城 24:大城城 25:妻女山 26:善白山(有義城)

第185図 長野盆地南西部の中世城郭分布図

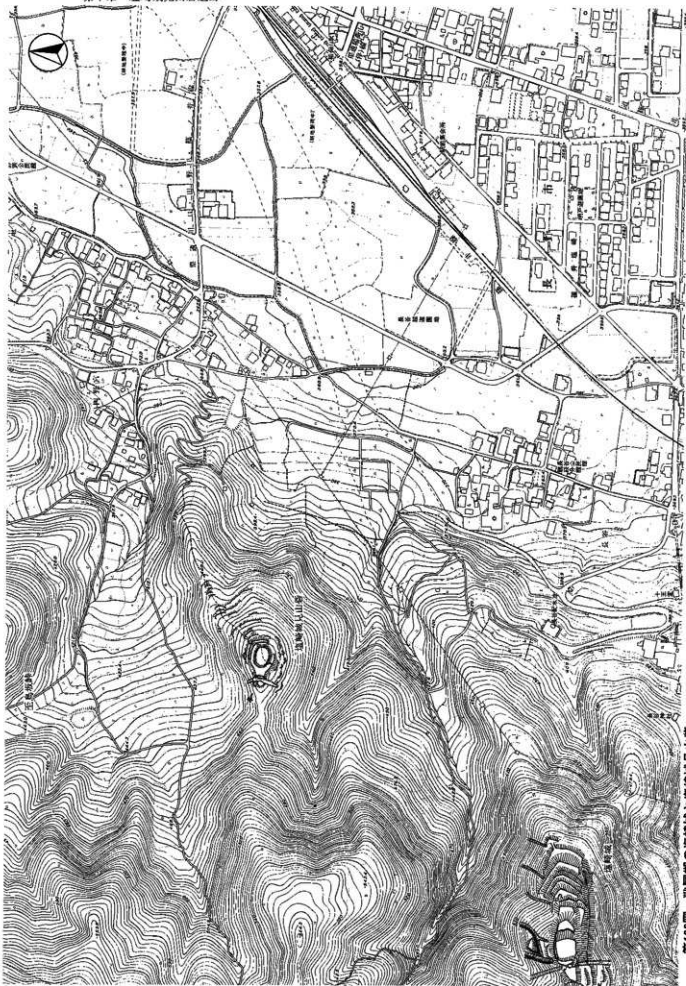
への改修も小国人によるものと考えられる。またⅠ期からⅡa期への改修が画期として捉えられるが、基本的に築城主体者は在地の小国人武士で、外部勢力が築城などに関与していなかったと言えよう。

次に塩崎城見山砦と武田氏の北信濃侵攻、さらに武田氏と上杉氏が善光寺平の支配をめぐる衝突したいわゆる川中島合戦(註6)との関係についてである。縄張りは16世紀中頃～後半の年代を示しているが、出土した土器の下限は16世紀前半であり、考古資料と縄張りの不一致が生じている(註7)。これは縄張り論の限界性に起因するか、それとも土器の解釈に起因するか、現段階では判断がつかず今後の課題になるが、本調査では武田氏および川中島合戦と直接結びつく資料は得られなかった。

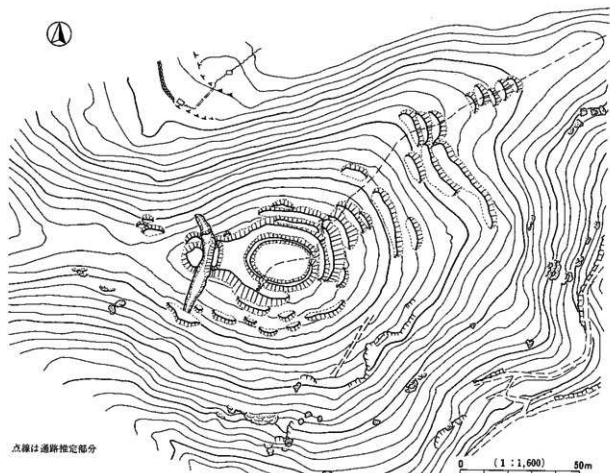
2 塩崎城見山砦の城郭施設と遺構について

(1) 城郭施設の構造

城郭施設は尾根頂部の主郭を中心に周囲に副郭・帯郭、斜面部に帯郭・付属郭、主郭後方に堀などが配



新山原茶室跡と茶室跡の位置新
第188図



第187図 塩崎城見山營構張り図

置されており、主郭と副郭に土塁、主郭と帯郭には虎口などの施設が設けられていた。ここでは城郭施設の構造と構築方法について検討したい(第187図、河西克造作図)。

① 郭

標高471mの尾根頂部に位置する主郭は最も広い面積をもち、全周する土塁が築かれており、本城郭の中枢的役割を担っていた。主郭の形状が楕円形を呈することは、あまり尾根頂部の地形を掘削せず、最低限の削平と盛土行為により達成したことによるものである。さらに土塁は削平で生じた土を主な盛土として、地形の縁辺部をうまく利用して構築されたと考えられる。西側に隣接する副郭は、主郭とのレベルがほぼ同じであり、最低限の削平により構築されているが、付属する施設は堀に接する西側に土塁があるのみである。主郭周囲の帯郭(1~4郭)は、形状は細長く基本的に等高線に沿って配置されている。1~4郭の形状にはある程度の規格性があるが、東斜面の9~11郭には見られない。帯郭の構築は基本的に斜面を削り切土によりわずかに整形する方法である。すべてに共通する点は、切土の縁辺部に土を貼りつけて平坦部を拡張しないことと、付属する防衛的施設が見られないことである。しかし土層断面を見ると、1~4郭は斜面を削った土で造成しており、切岸が明瞭であるが、9・10・11郭はその造成がない。

この構築方法の違いは、1~4郭が主郭の補助的性格として本来の機能に携わる空間で、9~11郭は直接的に関与しない空間であったという機能の違いに起因すると考えられる。

付属郭は主郭から北東にのびる尾根・尾根鞍部の北斜面や帯郭と帯郭の中間地点などに築かれている。帯郭と類似することは形状に規格性がなく、構築方法が斜面を削り平坦化する程度で、付属する防衛的施設がないことである。しかし尾根鞍部北斜面の付属郭は構築方法が複雑で、斜面を掘削した後、生じた土

を貼り詰め平坦化している状況がある。このことから付属郭は2種類の構築方法があったことがわかる。

しかし全体的には本城郭での帯郭と付属郭の構築は、斜面を削ることを主体とし、そこで生じた土を用いて施設を複雑化する行為はしていない。また郭に防御的な施設を設けた形跡がないことから、縁辺部に槽などがつくられていた程度と推定される。

② 堀

本城郭には副郭（SD02）と副郭の西側（SD01）の2カ所に築かれている。SD02は主郭土塁の外側につくられた半円形の堀で、性格的には主郭に帰属する施設であるので、本城郭全体にかかわる堀はSD01のみである。

堀は尾根筋が最も広く斜面では狭くなり、尾根筋・斜面部ともに副郭に接する東側が鋭い切岸になっており、西側を意識して築かれている。さらに堀は斜面途中で終わる構造で、斜面部を十分に利用していないため、本施設が尾根と尾根の遮断を主目的とするいわゆる堀切であったことがわかる。前項で触れたが、この堀は2時期にわたって利用された痕跡があり、その2時期がII a期とII b期にあたると考えられる。

築かれた堀が1条のみであり、斜面中腹にまで延びていないことは、明らかに構造的には単純である。このことは帯郭・付属郭に特に付属施設がないことと共通し、本城郭には十分な防御性が備わっていないことを指摘できる。

③ 土 塁

主郭と副郭の2カ所にある。主郭の土塁は全周する構造で、土層断面では版築土塁と掻き上げ土塁の二者が見られた。版築土塁は尾根頂部の削平で生じた土を主体とし、一方掻き上げ土塁は主郭内の造成と、SD02堀削で生じた凝灰岩塊を主体として、版築土塁上部に盛り上げて築かれている。また部分的ではあるが、I期土塁の上部を若干削平してII期土塁を構築した痕跡があった。

版築土塁がI期、掻き上げ土塁がII a期にあたることから、本城郭での土塁構築技法は版築方法が先行している。その構造はII a期に掻き上げ方法により顕著な全周土塁が構築されており、版築土塁の残存状況からするとI期も基本的に全周していたようである。しかしI期土塁の範囲はII期土塁下部に残存している版築土塁から推定したものであり、正確な土塁の高さなどその規模については、不明である。

副郭には堀に接する西側のみに土塁がある。表土を削いだ面では明確に確認されなかったが、土塁を削る過程で自然石があらわれ、それが中央部を除きほぼ全面に見られた。土塁の上部は後世にある程度削平されていることを考えると、土塁の構築はまずある程度の高さまで土を盛り上げ、後に石を貼り詰め基本形をつくり、さらに土を盛り上げる方法で行われたと推定される。この土塁はII a期とII b期の両時期に帰属するため、石を貼り詰めた状態がII a期、上部に土を盛り上げた時期がII b期に当たると思われる。

④ 虎口・土橋

2～4郭が交差する箇所と主郭の2カ所にあるが、ここでは後者を主郭出入口部と呼称した。

虎口は斜面にあり、下から4郭・3郭・2郭・1郭の順に上りながら主郭の東側出入口に通じるようにつくられている。虎口には石組などの付属する施設はなく、構造的にはきわめて単純ないわゆる平入虎口（坂虎口）である。虎口の構築は地山を掘削しスロープ状の傾斜をつくるのが主体であり、そこで生じた土を用いて虎口を複雑化していない。

主郭出入口は2カ所設けられており、城郭全面に当たる東側出入口は約1.4mの高低差のある主郭と1郭にスロープ状の傾斜をつくり、折れることなく主郭に直進する構造である。II a期になりこの出入口

部に付随する建物址が構築されている。もう一方の南側出入口部は、土橋により副郭と連絡する構造であるが、東側と比較して規模が小さく建物址がない点で主体的な出入口でないことがわかる。

I期・II期とも出入口と土塁の構築が同時に行われ、通路部分には別な土を用いて固めている様子が見られ、帯郭の虎口とは若干構築方法にちがいがあ

(2) 遺構の解釈

本城郭で検出された遺構は、基本的に城郭の最終段階であるII b期に帰属する。したがってここでは、遺構の解釈から16世紀前半の塩崎城見山砦の様相を考えてみたい。

まず主郭で検出された3棟の建物址であるが、主郭で最も大きい2×2間の掘立柱建物址(ST03)は小屋的、1×1間の掘立柱建物址(ST01)は櫓的、1×1間の掘立柱建物址(ST02)は倉庫的な建物と推定できる。

遺構のなかで主郭の中心的役割をはたした2×2間の掘立柱建物は、風雨をしのぐことを目的とした仮住まい的なものであったと考えられる(註8)。遺構の配置からこの小屋的な建物に近接し、見張りを目的とする櫓建物ST01が主郭での機能を分担していたと考えられる。

さらに東側出入口部で検出されたSX01は、門的性格をもっていた建物であったと推定できる。城郭につくられた門については、『一遍聖人絵伝』と『粉河寺縁起』の武士の館に二層式の櫓門が描かれている。この資料は鎌倉期で、塩崎城見山砦と時代的に異なり、館の門という性格上、SX01と直接的に関連づけられないが、類似した建物であった可能性はあろう(註9)。主郭で検出された集石についてであるが、城郭から集石が検出される例は全国的に多いが、石自体の分析から集石の性格を断定した報告はない。本城郭の主郭内部の集石(SK03)については、第3節1で石の計測値から投石と推定した。

投石の別名「つぶて」については、中沢淳氏が武田信玄の石投げ隊が三方ヶ原で活躍した様子に触れており(註10)、戦時に鉄砲が普遍的に使用される以前は、投石が弓・槍と並ぶ武器として多く用いられていたと考えられるようである。このことから主郭土塁頂部の集石も同様のものであろう。

主郭土塁の裾で検出された溝(SD101)は、土塁の傾斜が垂直に近くなる北側で明確に確認されたため、防衛的機能と土止めを目的として設置した板塀の下部と推定した。なおSD101は蛇行して部分的に途切れる箇所があるため、板塀が交差する部分にはすき間があったのであろう。遺構は検出されていないが、主郭土塁の頂部には櫓などが構築されていたと考えられ、主郭土塁に板塀が設置されていたことを合わせると、塩崎城見山砦のような小規模な城郭でも戦闘用に武装していたことが想像できる。

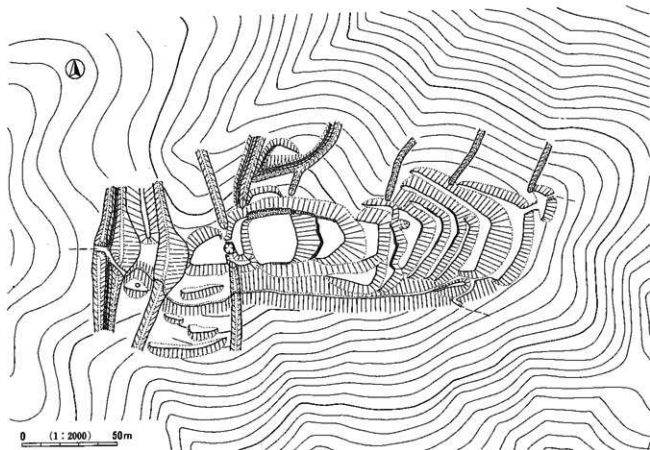
帯郭ではコ字状の溝が検出された。検出例が少ないため機能を特定できないが、島根県・尼子陣所跡と兵庫県・加佐山城の発掘調査で同様な遺構が確認されている(註11)。尼子陣所跡は天正年間に尼子氏が陣城として利用した城郭で、中井均氏はこの種の城郭からコ字状の溝が検出される傾向があり、このような遺構と陣城とが密接な関係にあることを指摘している(註12)。

斜面部のうち北東斜面では8郭と15郭の中央部に6基のピットが確認され、3基ずつが2カ所までまっていた。この8郭と15郭にはさまれた場所は、主郭から北東にのびる通路に位置するため、斜面に構築された門に相当しよう。

3 塩崎城見山砦と周辺の城郭について

(1) 周辺の城郭(第185図)

善光寺平の遺跡分布については第2章第1節で触れたので、ここでは塩崎周辺の中世城郭について概観



第188図 塩崎城縄張り図

(河西克造作図、中田正光氏原図に加筆・修正)

したい(註13)。

この地域は信濃守護小笠原長秀と信濃国人衆による応永7年(1400)の大塔合戦の舞台で、小笠原氏が立て籠った塩崎城(第185図中3)がある(註14)。千曲川両岸には幾筋もの尾根があり、その先端には比較的小規模な山城が分布する。中世山城は千曲川を挟んだ両岸でほぼ同じ立地状況を示し、千曲川を中心とした沖積地を取り囲むように分布する。なかでも南端のせり出した尾根には善光寺平南側の出入口を監視するように赤沢城・屋代城が位置している状況が特徴的である。

左岸の塩崎地域では、篠山山系から東に分岐する尾根頂部に先端部に山城がある。最奥地には応永年間より戦国期に至るまで塩崎地域の中核的役割を示した塩崎城が、さらに突出した北方の尾根には塩崎城見山砦、また南方には赤沢城がひかえている。さらに塩崎南方の更埴市桑原地域では、尾根先端部に小坂城がある。

対岸の更埴地域では、最奥地の尾根頂部に鞍骨城(図外)、尾根先端に唐崎山城・鷲尾城・屋代城などの山城と妻女山、さらに東方に海津城(図外)などがある。千曲川が屈曲する北では、武田晴信が川中島合戦の際に布陣したと伝えられる茶臼山がある。

このように善光寺平西南部の山城は塩崎城と鞍骨城を除き、平地とはあまり比高差がない尾根頂部に立地する傾向がある。また尾根頂部に主郭を築き、防衛的機能が発達していない構造が一般的であるなかで、尾根筋に郭などの城郭施設を配置せず、斜面部を特に利用しない、いわゆる「小規模城郭」(註15)は塩崎城見山砦以外に存在しないことがわかる。

(2) 最終段階の塩崎城見山砦と塩崎城の関係

塩崎城見山砦のⅡb期(16世紀前半)の様相について、近接する塩崎城との関係も含めて触れてみたい

(第186図)。

見山砦の北には更級郡西部と善光寺平南部を結ぶ鳥坂峠が通ずる。歴史的な点については不明な点が多いが、道は現在と若干変わっているものの、中世にさかのぼると推定される。見山砦は峠の登り口付近に位置すること、中世には北国西街道より山側の山裾をほぼ南北に通る道が存在した(註16)ことを考え合わせると、交通の要所に立地していることがわかる。しかし、塩崎城からは眼下に見山砦が見えるが、鳥坂峠は見山砦がさきぎって望むことはできない。この状況から、見山砦には塩崎城では果たせない鳥坂峠を監視する機能があったと考えられる(註17)。

このように最終段階の塩崎城見山砦は、塩崎城の一要素を担っており、情報伝達を主たる機能として重要な位置を占めていたことがわかり、戦国期16世紀前半頃には塩崎城と見山砦が一体化していたと考えられる(第186図)。塩崎城が合戦に利用された事件として、大塔合戦と永禄7年(1564)の武田氏と上杉氏の対陣がある。永禄7年には武田氏が更級郡塩崎に出陣して上杉輝虎と対陣し、その際武田氏は塩崎城見山砦と沢を隔てて南西側に近接する塩崎城を陣城として利用したようであり(註18)、現在塩崎城には斜面部に並走する塹堀が確認でき、武田氏の改修を指摘できる(註19、第188図)。今回の調査ではこの時期に塩崎城見山砦が機能していないことが明らかとなったが、最近、遺物が残らない城郭の利用の可能性を示唆された(註20)。このような事例を確認していないため、ここで検討できないが、可能性があるとするれば、本城郭が16世紀前半以降使用されなかったとは断言できず、塩崎城が武田氏によって改修された永禄年間に見山砦が同氏の影響下にあったことも考えられる。

次に見山砦の特徴というべき主郭からの眺望について考えてみたい。主郭と集落との比高が110mと比較的接近した位置関係にあるにもかかわらず、千曲川の自然堤防上の集落と眼下に四宮の集落が見える。さらに南は上田、北は須坂までの半径約20kmの範囲を見渡すことができることから、見山砦が情報を伝達する機能をもっていたことは間違いない。

情報伝達で主体を占めるものに烽火がある。村田修三氏は、主郭に築かれた全周土塁は、防衛的要素が第一義的であるが、主郭平坦面からある程度の高さまでは風が入り込まない、いわゆる「無風状態」を形成することが目的であったと指摘した。また縄張りの特徴がない小規模城郭の主郭に土塁が全周することは、烽火台の可能性が高いことをあげた(註21、第184図)。この指摘からすると見山砦は情報伝達を主目的とした城郭で、ネットワーク的な伝達、塩崎城への伝達、四宮の集落への伝達の3要素を担っていたと解釈できる。しかし烽火を上げたと考えられる遺構が確認されなかったため、本城郭では“はなつるべ式烽火台”(註22)による烽火が基本であった可能性がある。

なお、情報伝達の手段として烽火のほかに鐘がある。鐘については最近、萩原三雄・笹本正治両氏などの論考がある(註23)。本城郭の年代と若干異なるが、萩原氏は『北條五代記』の烽火の記載をもととして、甲斐國に所在する武田氏系城郭の烽火台の実態について分析しており、北條氏は情報伝達として貝や鐘を用いていたことを示唆している。さらに笹本氏は戦国期の武田氏が烽火と鐘を併用して情報伝達を行っていたことを指摘している。したがって本城郭で烽火や鐘などを用いて眼下の集落・館、さらに周辺城郭などの比較的近い地域に情報を伝達していた可能性が考えられる(註24)。

このように最終段階の塩崎城見山砦は、塩崎城の出城として一要素を担っており、情報伝達を主たる機能として重要な位置を占めていたことが本城郭の性格であろう。

4 城郭構築以前の様相

今回の調査では、城郭に先行する旧石器・縄文・弥生・古墳・平安・中世の各時代の遺構・遺物が確認された。城郭の構築に当たり大半を削平された状況であるため、遺構の性格を把握できないものが多い。

したがって不明確な部分があるが、本項では尾根頂部の利用方法について推測し、時期的な変遷を概観したい。なお、遺構・遺物の詳細については第3・4節を参照されたい。

(1) 旧石器時代

遺物は尾根鞍部と主郭北側斜面で確認された。石器は頁岩製が主体を占め、旧石器時代終末期の神子柴文化期に属する。

主郭北側斜面の石器は帯郭の構築土に混入した状況で出土したが、すでに原位置をとどめていなかった。しかし石器の分布が主郭内と北側の土塁基部、北側の帯郭や斜面に最も集中していたことから、北から北東にかけて尾根頂部の縁辺部にブロックが存在したと推定できる。したがって、該期には尾根頂部と鞍部を利用し、主体部は尾根頂部であったことがうかがえる。

(2) 縄文時代

遺構は東斜面の中腹付近で自然地形が凹地状を呈す部分に、土坑7基がある程度集中して分布していた。うち5基は形状からいわゆる陥し穴と推定できる。時期については伴出遺物がなく特定できないが、従来から指摘されている縄文時代早期か前期であろう。長野盆地での検出例がないため今後の課題となる。陥し穴と目される土坑のうち、特に密集する帯郭下部での分布状況は、等高線とはほぼ同方向に長軸をもち、50cm～1mの間隔で斜面の上下に並列する。形態・主軸方向に若干の相違が認められ、またきわめて近接する状況もあるため、すべてが同時期に存在したとはいえない。

塩崎城見山岩が立地する尾根のなかで、調査前に東側斜面の中腹に道があったことと、陥し穴の分布状況から、縄文時代にもこの付近にけもの道があったと推定される。この種の遺構が東側斜面の一角に限定された状況を考えると、けもの道は等高線に沿う形ではなく、突出する尾根を南北に横断する形で存在したことになる。また尾根の南北には篠山山系から流下する沢があり、陥し穴は沢に挟まれた中間に位置するため、沢と沢を結ぶようなけもの道をねらって、沢に集まる動物を狩猟対象としたことがうかがわれる。

なお、遺構外の遺物では、08トレンチから縄文土器の尖底部が出土した。さらに尾根鞍部に石器の散布が見られたが、旧石器時代の遺物も混じっていた。

(3) 弥生時代

遺構には副郭南斜面で弥生時代後期の甕と壺が出土した土器棺墓がある。土器は土坑底部付近で甕と壺の口縁部が合わさった状況で出土し、墓域として尾根を利用したことがわかる。しかし上部を削平されているため、その構造を明確にできず資料提示にとどまる点は残念である。

(4) 古墳時代

主郭がある尾根頂部の土坑と土器集中、土塁基部と土塁東側の斜面の土器集中があり、遺構からは古墳時代の土器が出土した。

土坑と土器は、主郭の中世整地層の下層から検出されたが、整地の段階で上部を削平され、下部付近が残存した状況であった。土器は主郭の南・東側で比較的顕著に確認され、土器包含層は主郭出入口部付近では黒色化しており、この時期に地表面で土壌化したことを示す。したがって、古墳時代に尾根頂部の特に南・東側を盛り土して利用した形跡を指摘でき、この盛り土を低墳丘墓に比定できそうであるが、断定はできず、可能性を指摘するにとどまる。尾根頂部はこの時期に第一次削平が、また中世段階に第二次削平が行われている。

(5) 中 世

北東付属郭付近のSK50に代表されるが、付属郭構築時に数基の土坑の上部を削平している。SK76出土土器から15世紀前半に比定される。この土坑群は墓址と推定でき、この時期、尾根頂部は城郭として利用されていなかったようである。したがって、この時期北東の尾根先端部に墓城が形成されており、15世紀中頃、城郭構築時に一部が破壊されたものと考えられる。

以上、中世を含め5時期にわたって同一尾根を利用している状況を把握できた。

註

- 1 村田修三1987「林城」(『図説中世城郭事典』第2巻)では「土塁囲み」の出現を16世紀前半としている。
- 2 城郭の改修についての論文は、三島正之1988「小笠原領域の山城と武田氏」(『中世城郭研究』第2号)などがある。
- 3 調査で指導を受けた奈良女子大学村田修三氏より、塩崎城見山砦の縄張りが16世紀中頃～後半であるという指摘があった。
- 4 中世城郭の発掘調査で16世紀に先行する城郭が確認できた例が少ないため、I期の解釈については今後の課題として残る。
- 5 桜井松夫1987「村上氏の支配」など(『長野県史』通史編第3巻・長野県史刊行会)。なお本稿では塩崎氏・桑原氏などに「小国人武士」という用語を用いたが、その出典はこの文献にある。
- 6 笹本正治1990「戦国大名武田氏の信濃支配」でいわゆる川中島合戦の経過を「信濃史料」に掲載された史料をもとにまとめている。それによると従来語り継がれていたことが史的には不明な部分が多いことがわかる。
- 7 発掘調査による考古資料の年代と縄張りの年代が一致しないという事例は、青森県・尻八館の発掘調査に代表されるように全国各地で見られつつある。
- 8 山上雅弘1990「戦国時代の山城」(『中世城郭研究論集』・新人物往來社)でも同様な指摘がある。
- 9 「一瀬聖人伝」筑前国の武士の館(『日本の絵巻』第20巻)、「粉河寺縁起」長者の邸(『日本の絵巻』第5巻)
- 10 中沢 淳1981「つぶて」(法政大学出版局)
- 11 振井久之「尼子陣所跡発掘調査報告書」(高根県大和村教育委員会・1992)、「加佐山城跡・慈眼寺山城跡現地説明会資料」兵庫県教育委員会・1992
- 12 中井 均「軍事施設としての中世城郭」1993(『第10回全国城郭研究者セミナー発表資料』)
- 13 中世城郭の分布図は、長野県教育委員会『長野県の中世城郭跡』をもとに加筆した。
- 14 『長野県史』では文献史料に見える「塩崎城」を現在の赤沢城に当てているが、立地的に見て「塩崎城」は現在の塩崎城であると考えられる。
- 15 「小規模城郭」とは、地域支配の核となる「拠点的城郭」に対して特徴のない小規模な城郭を示す(『第8回全国城郭研究セミナー・シンポジウム「小規模城郭」・研究報告編』)。
- 16 地元での伝承と、矢崎憲之1973「塩崎における古道の懐愁」(『長野』81号)による。
- 17 村田修三氏から塩崎城見山砦の主たる機能は、鳥坂峠の監視と情報伝達であるとの指摘を受けた。
- 18 中田正光1988「戦国武田の城」(有峰書店新社)
- 19 河西克彦近刊「善光寺平(西南部)の中世城郭」(『長野県埋蔵文化財センター設立十周年記念論集』)
- 20 平成6年3月12日の城郭談話会の報告会で、中井均氏・山上雅弘氏が指摘している。
- 21 村田修三1992「『のろし台』の見方」(『第8回全国城郭研究者セミナー・シンポジウム「小規模城郭」・研究報告編』)。
- 22 「はねつるべ方式」の烽火台については『和漢三才図會』(東京美術)・『古事類苑』兵部部(城郭下)に記載されており、八巻与志夫「中世城郭の機能について」(『月刊文化財』299号)で触れている。
- 23 萩原三雄1989「中世戦国期における烽火台の特質と史的位相」(『信濃』41巻11号)・笹本正治1990「中世の音・近世の音」(名著出版)
- 24 現在も同様であるが、明治年間の地籍図では本城郭が立地する尾根の北半分は「金山」(かなやま)地蔵である。この地名の起源が「鐘」にあると考えられないだろうか。このような類例を探して検討したい。

第6節 小 結

城郭遺跡の調査には昭和63年に実施した前章の赤沢城があるが、調査した城郭施設は堅堀の一部のみであった。したがって塩崎城見山砦は、当センターが本格的に城郭遺跡の調査に取り組んだ最初の遺跡になる。今回の調査では中世山城の城郭施設と遺構の調査に主眼を置いたが、城郭築城以前の遺構と遺物が検出され、中世以前に尾根頂部を利用した形跡が確認された。この成果が特に信濃国（善光寺平）における今後の中世城郭の調査と研究に多少なりとも役立てばと見え、最後に成果の一端と今後の課題を述べてまとめたい。

本調査は中世山城の全面発掘により、考古学的に16世紀の山城の実態を明らかにし、烽火台としてその構造をつかむことができた。縄張りの小規模な山城であるが、情報伝達を主たる機能とする本城郭の主郭には、3棟の建物址と櫓門と推定される1棟の建物址が構築されていた様子と、郭の機能分化がなかったことは、山城に建つ建物の景観を想像できる良好な資料になろう。

特筆される成果として、本城郭の最終段階である16世紀前半より先行する城郭施設が確認され、城郭の変遷が把握できたことがある。出土土器と城郭施設の改修から3段階の変遷があり、15世紀代は尾根頂部の平土部と背後の堀とで構成され防衛的に未熟な城郭が、16世紀になり主郭に顕著な全周土塁を構築し、斜面部に帯郭と付属郭が配置される軍事的要素を強化した城郭に変化した過程が把握できた。さらに15世紀前半に墓域が形成されていた部分に、一部を破壊し城郭を築城していることがわかった。しかし、年代については考古資料と縄張り編年とが一致しない状況が生じた。この状況は最近全国各地でも指摘されつつあるが、本城郭の最終段階は遺物では16世紀前半、縄張りでは16世紀中頃～後半を示しており、このズレは縄張りの論の限界性に起因するか、それとも遺物の解釈に起因するかは今後の大きな課題である。

塩崎城見山砦の南方には大塔合戦に登場し、以降塩崎地域の中核的役割を果たした塩崎城がある。両城郭の関係であるが、見山砦は単独では機能せず塩崎城の一構成要素となり、情報伝達という重要な機能を果たしたことがわかった。このことは見山砦が塩崎城とその居館に取り込まれていたことを意味するため、今後類例を探すなかで、周辺集落の調査成果も含めて検討していきたい。

調査で検出された城郭築城以前の遺構と遺物としては、遺構には縄文時代の陥し穴、弥生時代の土器棺墓、古墳時代の土坑・土器集中、中世の墓址などがある。遺物では縄文～古墳時代の土器のほかに旧石器時代の石器が出土した。大半が城郭の築城により削平されていたが、このような尾根頂部が意外にも中世以前に幾度となく利用されてきたことが確認され、特に旧石器時代の遺跡立地と古墳出現期の墳墓の可能性については注目される。本遺跡のような比高差が小さい尾根頂部の遺跡の調査例が少ないため、貴重な事例となろう。

次に、今後に残された課題を列記したい。

本報告は城郭の資料報告とその変遷、さらに塩崎城との関係に終始し、館とのかかわりには触れることができなかった。塩崎地域には方形の館・屋敷の存在が数カ所伝えられているものの、居住的要素が強い施設は当センターが調査した石川条里遺跡（集落域）以外にはなく、山城との関係は不明な部分が多い。石川条里遺跡は現在整理中であるためここでは即断はさけるが、見山砦の直下という位置関係から、塩崎城・見山砦・石川条里遺跡（集落域）の三者一体で機能していた可能性があるため、報告を待って検討していきたい。

城郭に関係した集落遺跡の調査例には、長野市若穂の春山城の麓に位置する北ノ脇遺跡などがある。この遺跡は中世末に比定でき、10棟前後の獨立柱建物址により屋敷地を構成しているが、このような遺跡が点在していることから、善光寺平には、直下にいわゆる「根小屋」というような小規模な屋敷地をもつ山

城が多いと言えないだろうか。現段階では直接見山砦との関係はないが、地域史を解明する上で両者の関係を考えていきたい。

中世城郭調査の方法論は現在は確立されておらず、暗中模索の段階である。このような動向のなかで本調査は実施された。調査前の縄張り図と現況測量図の作成、調査中の城郭施設と遺構の認定・記録方法などは、既知遺跡の調査方法と成果を参考にしつつ、調査全般が試行錯誤と模索の連続であったことはたしかである。県内での山城の全面発掘は岡谷市・小坂城址に次いで2例目であり、数少ない事例になる。ここで実施した調査法がどのように評価できるかは、本報告を目にした研究者に委ねられる。今後、よりの確に考古学的資料による中世山城の実像を把握するために、今回試みた調査法と報告について、忌憚ない批判を期待する。

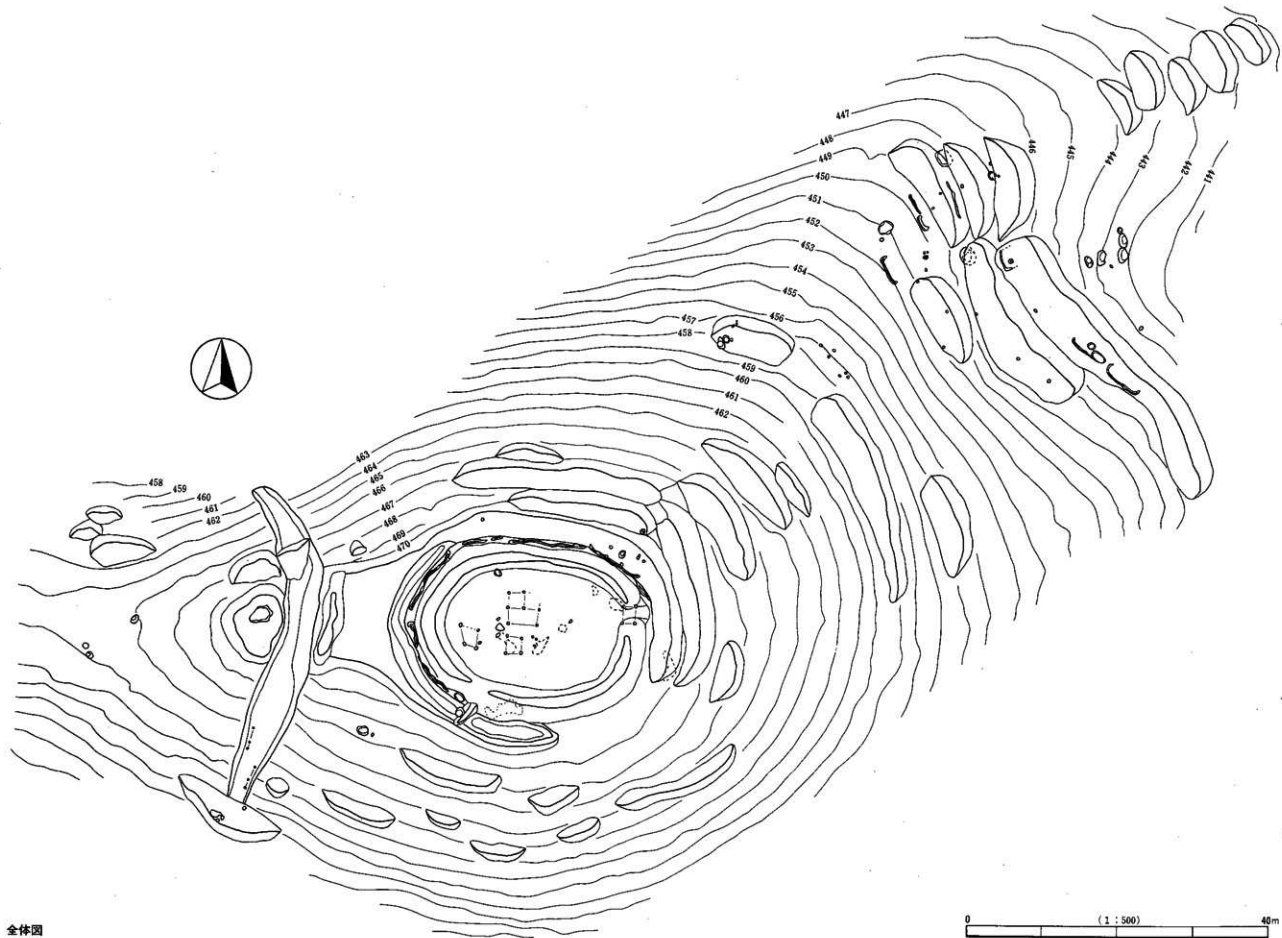
最後に現場での作業を通じて感じた点を一言述べたい。本調査は尾根全体を斜ぐ大規模な調査であったが、樹木の伐採と並行して現況測量図の作成とトレンチ掘削の開始を余儀なくされた。また表土削ぎの段階にあっても伐採木が残る状況は、のちの排土処理と遺構検出に影響を与えた。さらに調査地が交通不便な地点のため、調査参加者は毎日、四野宮の集落からプレハブまで急な坂道を徒歩で登ることとなり、平地と異なる多くの不便さを伴う、山城調査の困難を経験した。さて、山城を築き、城として機能している時を想像した場合、山に木々が生い茂っているかどうかの問題は非常に重要で、誰しもが疑問とすることである。調査以前筆者は城郭を築く際にはすべての木を伐採し、普請を行ったと考えていた。これについて本調査で明確な結論が見い出せたわけではないが、調査を通じて一応の見通しをもった。前述のとおり伐採木の処置に苦慮した経験から、中世山城の築城においても木の伐採は大変な作業であったことが痛感され、必要最低限の範囲のみで立木が伐採されたと考えるに至った。したがって、本城郭の築城は郭の構築から開始されているが、主郭・副郭・帯郭・付属郭・堀など城郭施設を築く範囲のみ木を伐採して土木工事を行い、基本的に斜面部には手をつけなかったと考えられる。このことから塩崎城見山砦には、尾根頂部に主郭の構築物と帯郭が見え、北東の尾根筋に段郭が、東側中腹には等高線に沿う帯郭が数段配置され、小屋掛けの構築物がある姿を想像できる。そのほかの場所には木々が生い茂っており、中世山城として機能している時には、尾根全体が丸裸で城郭の存在が容易に確認できる景観ではなかったといえよう。

本調査は急傾斜地などの険しい条件のもとで行われた発掘作業にもかかわらず、無事故で進行できたことをよろこび、地元住民から多くの協力を得たことに、謝意を表したい。

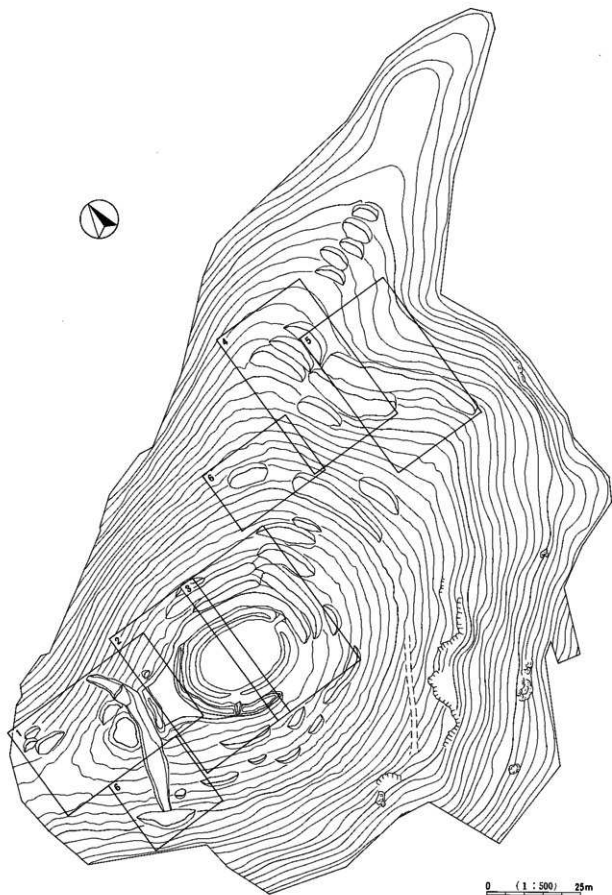
本書の刊行をもって塩崎城見山砦遺跡の一連の調査は完結するが、残された課題の解決には今後一層の努力が必要であり、さらに地域史に還元できるよう念願して結びとしたい。



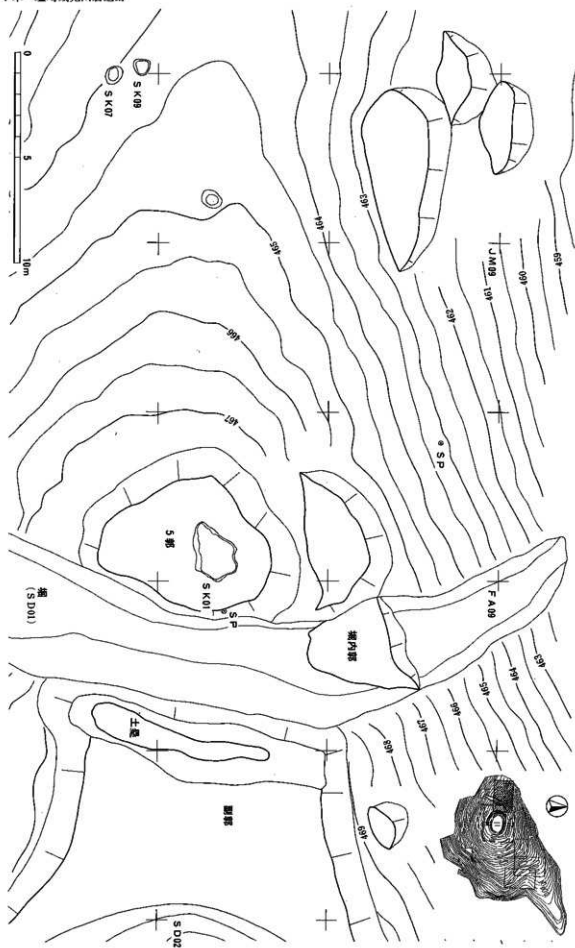
塩崎城見山砦遺跡現況



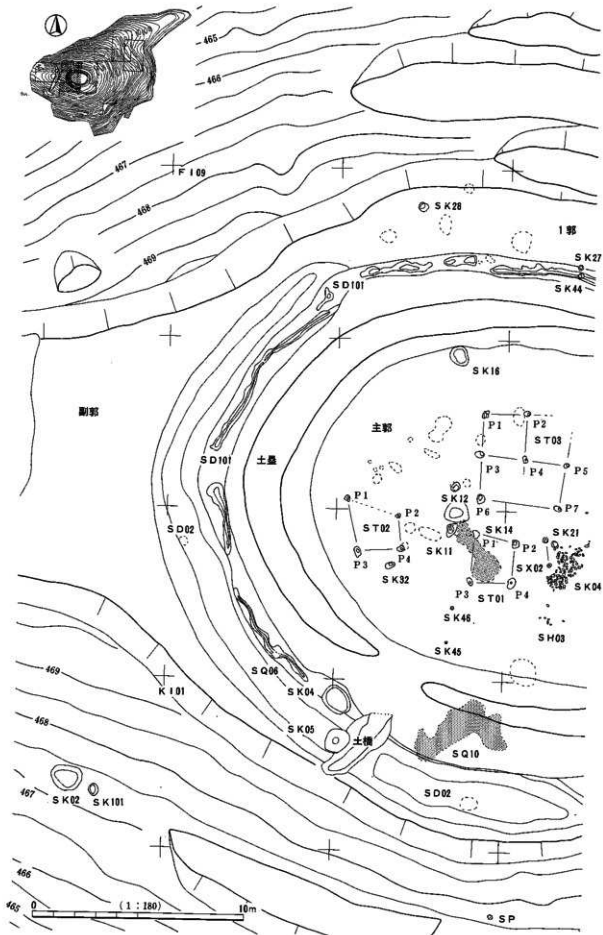
第189图 全体图



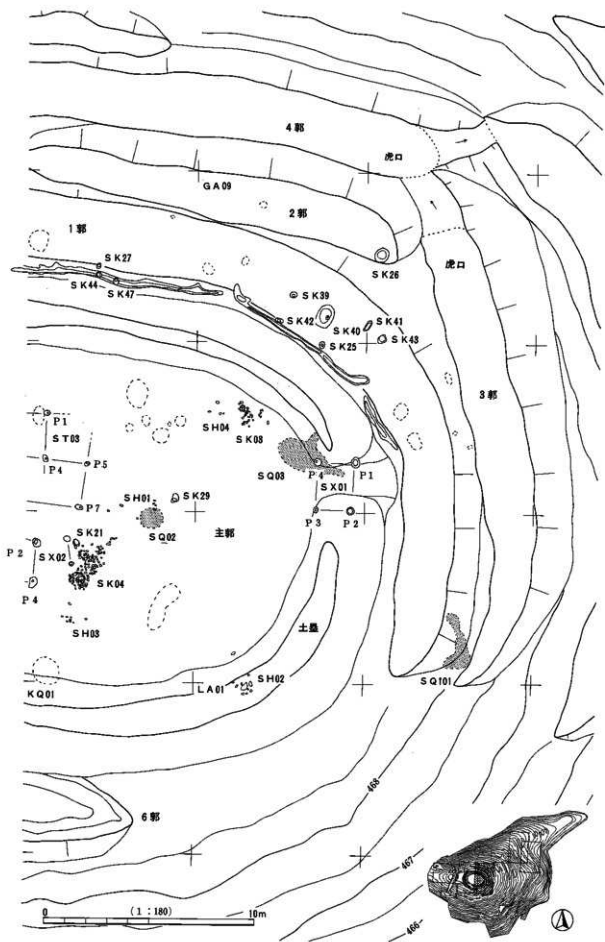
第190圖 透視割付圖



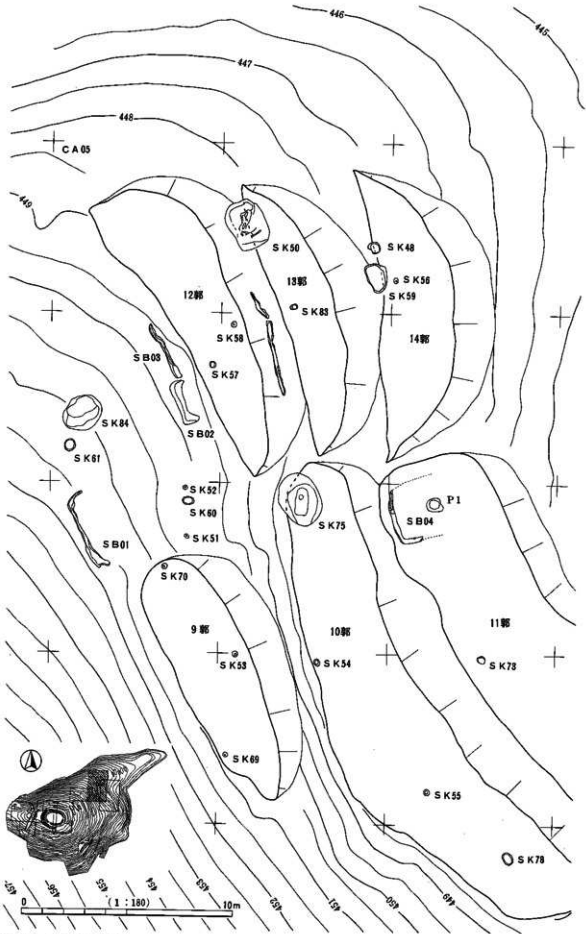
第191図 遺構実測図(1)



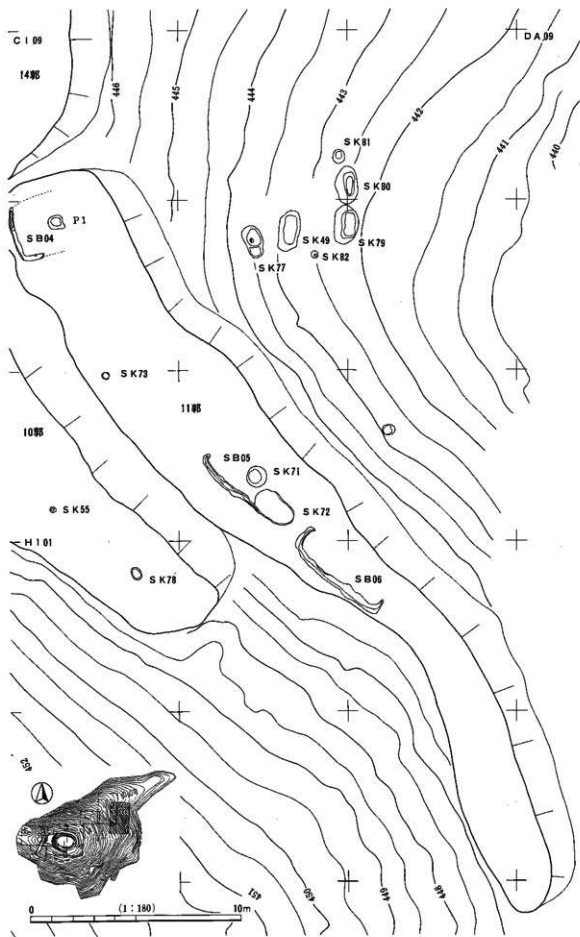
第192図 遺構実測図(2)



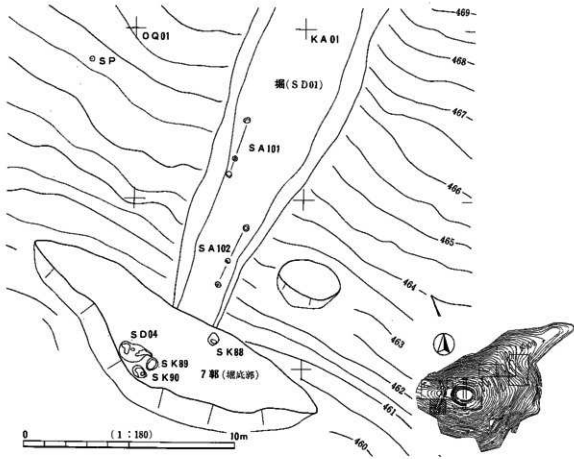
第193図 遺構実測図(3)



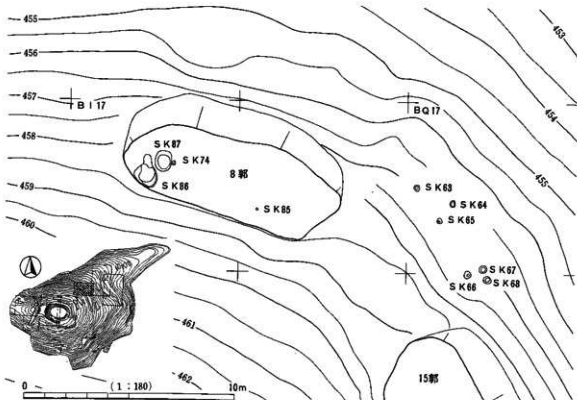
第194圖 遺構実測図(4)



第195図 遺構実測図(5)



第196圖 遺構実測図(6)



第197圖 遺構実測図(7)

第8章 地之目遺跡・一丁田遺跡

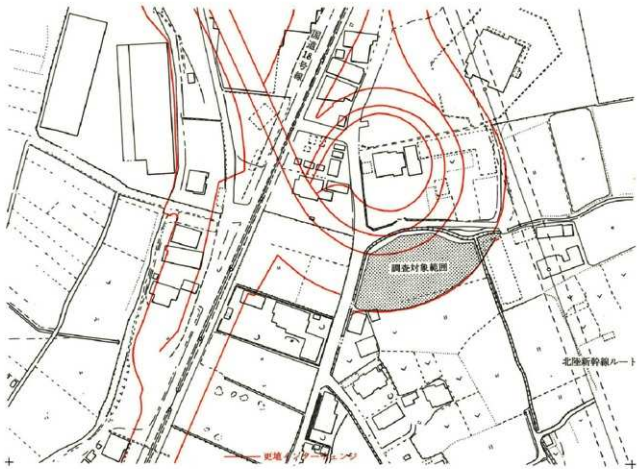
第1節 遺跡の概観と調査の概要

1 遺跡の概観 (第198・199図、PL73)

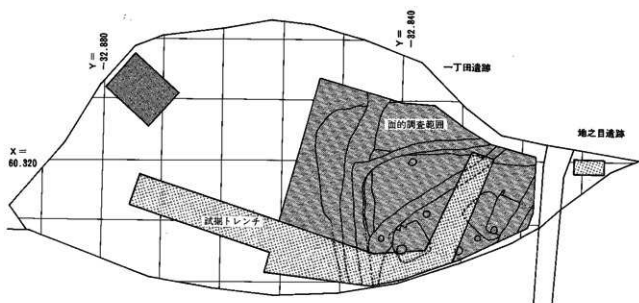
本遺跡は更埴市の北部、大字更埴字一丁田に所在する。今回、中央自動車道長野線更埴インターチェンジの側道に一部がかかり、調査を実施することとなった。一帯は水田として利用されており、隣接して一丁田川が流れる。地形的に見ると、現在では千曲川の自然堤防より一段低い氾濫原に位置するように見えるが、埋没した状況を見ると、自然堤防末端の緩斜面であった可能性が強い。

本遺跡は、大きく千曲川右岸の自然堤防上に展開する屋代遺跡群の西端の一部としてとらえられ、以前から奈良～平安時代の遺物の分布が認められていた。また、地之目遺跡と一丁田遺跡は、本来は別遺跡ではあるが、今回の調査部分で接しており、まとめて扱うこととした。

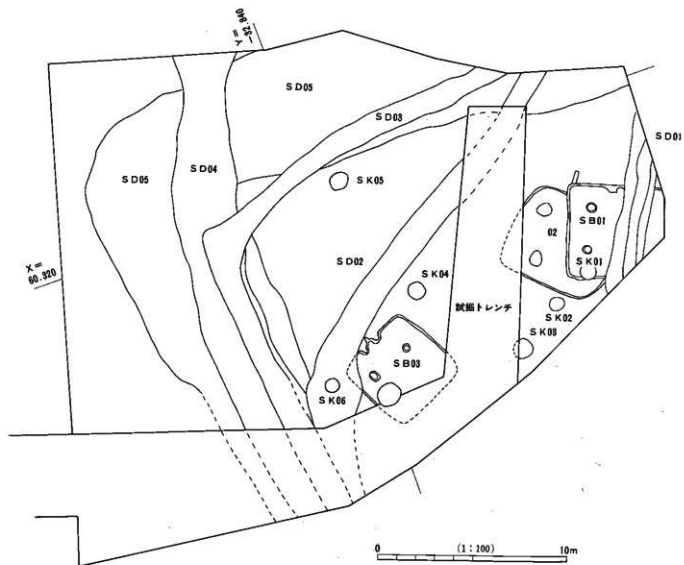
なお、平成5年度から始まった埋文センターによる北陸新幹線関連調査で、本遺跡の南に近接した一段高い微高地部分で、奈良から平安時代の集落の調査を実施している。



第198図 調査範囲周辺図



第199図 発掘区域図



第200図 遺構分布図

2 調査の概要と経過

(1) 概要 (第199・200図、PL73)

調査の対象となった面積は、地之目遺跡が200㎡、一丁田遺跡が1,800㎡である。最初に、遺構・遺物の包含層の有無、土層の堆積状況、面的調査の必要範囲を確認するため、トレンチ調査を行った。その結果、地之目遺跡については耕作時の攪乱が基盤の砂礫層まで達している部分が多く、また遺物・遺構等の発見がないため、面的な拡張は必要ないと判断した。一丁田遺跡は、調査区東部分に遺構の集中する部分が見られ、面的に拡張して調査を実施する。西部は厚く砂礫層が堆積して千曲川の氾濫原と考えられ、面的に拡張する調査は必要ないと判断した。東部分の遺構は古墳時代後期（7世紀前半）の竪穴住居址が1軒、奈良時代の竪穴住居址が2軒、中世以降の井戸状の土坑が7基、時期不明の溝を5条調査した。

(2) 経過

試掘を兼ねた調査は、平成2年11月15日から17日にかけて、調査研究員4名により、大型バックホーを用い実施した。その結果、一丁田遺跡の東半分に遺構・遺物が集中しており、面的調査が必要と判断した。

本調査は平成3年4月4日から機材等の搬入、8日から作業従事員が参加し遺構検出・調査にかかる。途中水路の決壊等があり、進行が遅れるが5月31日に終了する。

概要については、平成4年度刊行の「長野県埋蔵文化財センター年報8」に掲載、平成5年度に整理作業を実施し、平成6年3月31日報告書を刊行する。

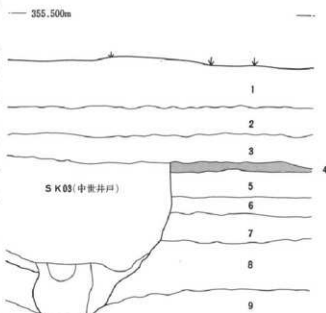


実測風景 (平成3年5月)

3 基本層序 (第201図、PL74)

地表面から1mほどは耕作土であり、ほぼ調査区全体に分布し、さらに3面（1～3層）に分けることが可能である。时期的には、中世の井戸が耕作土を剥がした段階で検出されることや、近世陶器が出土したことから、近世以降と思われる。なお、畦畔等の遺構は耕作土中から検出することはできなかった。土壌化がみられる4層が主に古墳時代後期から平安時代の遺物包含層で、遺構の検出は5層の上面で行ったが、この層からの掘り込みと考えられる。分布は一丁田遺跡の東半分（今回の面的調査部分）に広がっており、南東にいくほど40cm程度と厚く、西や北へいくほど薄くなる。調査区内部ではこの部分が微高地状に礫層が盛り上がっている。この分布範囲を、面的に拡張して調査を実施した。5層以下は千曲川の氾濫によると思われる砂層と礫層が交互に続き、土壌化した層は認められない。

以上のことから、調査は4層上面で一度検出をし、4層の包含層を手掘りして下げながら遺物を採集し、5層上面で再び遺構を検出したことになる。



第201図 基本土層図

第2節 遺構と遺物

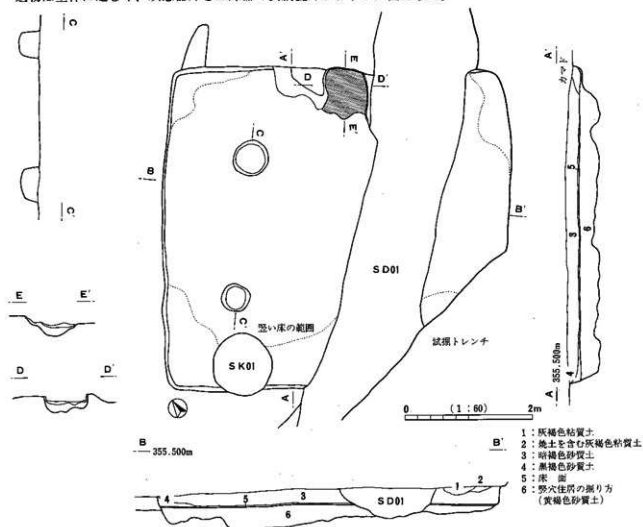
1 古代

遺物からみて、大きく7世紀代から8世紀前半と、13世紀以降とに分けることができ、前者を古代、後者を中世として記述していく。古代の遺構は竪穴住居址のみで、遺物は遺構外からも出土した。中世の遺構は溝と井戸のみで、建物址はみられない。

(1) 竪穴住居址

SB01 (第202・205図、PL74)

遺構：3層を取り除いた4層上面で明瞭に検出でき、重複関係は、SD01が中央を縦断し、SK07に切られ、SB02を切っている。埋没状況は単層で、砂のブロックを多数含むため、人為的な埋没と考えられる。平面形は一部調査範囲外にかかるが、5.40m×5.10mのほぼ正方形を呈し、壁高は22cmを測る。床面は大きく荒掘りした後、粘質土を入れて平坦にし、固めている。ピットは、西半分で2カ所に見られ、柱痕跡などは認められないが、柱穴の可能性はある。カマドは北壁につくられるが、残存状況は悪く、粘土で構築された西袖の一部と若干掘り込まれた火床が認められる。支脚石は痕跡も含めて見つからない。遺物は全体に乏しく、須恵器片と土師器の長胴甕片がわずかに出土した。



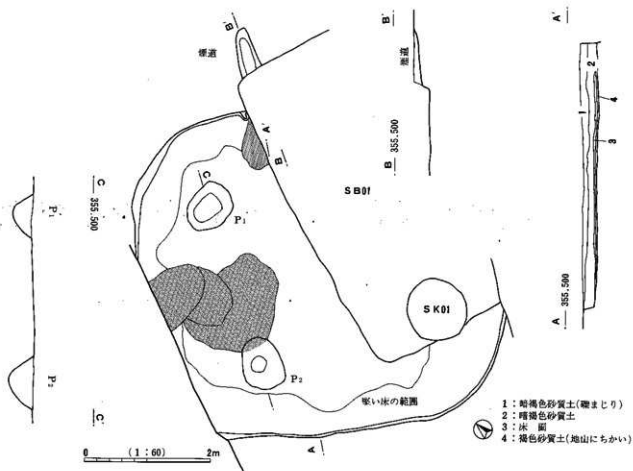
第202図 SB01実測図

遺物：全体に遺物量は少ない。土師器の長胴甕の破片が多く見られ、いずれも縦方向のナデ調整で仕上げている。食膳具は少なく、埋土より底部をへラキリの後ナデ調整した須恵器杯AⅡ（1）、床面下の掘り方より同様な須恵器杯AⅡ（2）が見られる。時期的には8世紀前半と考えられる。

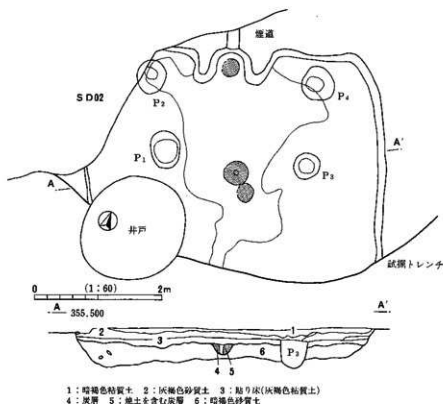
SB02（第203・205図、PL74）

遺構：試掘調査のトレンチで検出されており、4層上面から切り込まれる。またSB01の調査の際にプラン等が明らかになる。重複関係は、SB01に床面を大きく切り込まれ、SK01に切られる。埋没状況を見ると、多数のこぶし大の石が埋土中に見られ、人為的な埋め戻しが考えられる。SB01および試掘トレンチによって破壊されているが、平面形は5.20×5.80mのやや隅丸の正方形と考えられ、壁高は10cm程度と浅い。床面はSB01同様に荒掘りした後、粘質土を入れて固めている。施設としては西壁の壁の焼けた部分がカマドと考えられるが、袖・支脚石などは残存していない。なお、床面に焼けた部分が見られるが、カマドとの関連が考えられる。ピットは2カ所にあり、柱痕跡はないが、位置的にみて柱穴であろう。遺物は全体に少なく、須恵器片、土師器甕片が散在する程度である。

遺物：須恵器杯A・蓋、ナデ調整の土師器長胴甕が見られる。1は須恵器蓋で頂部を回転へラズリで仕上げる。2は内面黒色処理をした半球状の土師器の杯で外面はへらミガキがなされる。3・4・5は長胴甕の体部下半で、ともに内外面縦方向のへラズリに近いナデで仕上げられており、底部は4がナデで仕上げられ、5は木葉痕を残す。



第203図 SB02実測図



1: 暗褐色粘質土 2: 灰褐色砂質土 3: 貼り灰(灰褐色粘質土)
4: 炭屑 5: 粘土を含む炭屑 6: 暗褐色砂質土

第204図 SB03実測図

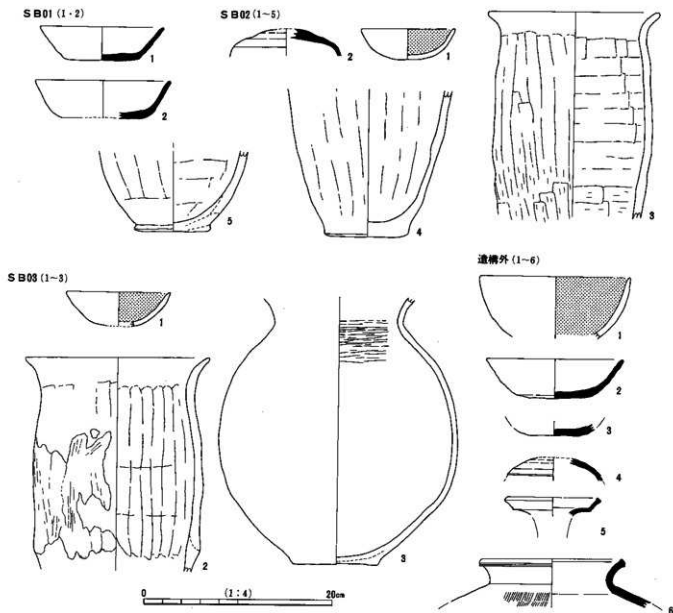
SB03 (第204・205図、PL74)

遺構: 試掘トレンチとSD02によって、一部を破壊される。また、SK12・13・15によって切り込まれた最も古い遺構である。他の竪穴住居址と同様に4層上面から掘り込んでおり、明瞭に検出できた。埋没状況を見ると、埋土は炭化物が含まれる5層に近い砂質土を幾つかに分層することが可能であり、自然堆積の可能性が強い。平面形は、4.20×4.50mの隅丸のほぼ正方形で、壁高は20cmを測る。床面は、他と同様に大きく掘り込んだのち粘質土を入れて固めており、中央部のみ硬い部分が広がる。施設としては、北壁に地山を削り出して袖としたカマドが設けられている。火床は何枚かあり、継続的な使用が考えられる。煙道は細く短く延びる。ピットは4カ所検出しているが、P₁は浅いくぼみ状で土師器の小型壺が入れられる。P₂・P₃は隣接しており、P₂は浅いくぼみ状で焼土が詰まっている。P₃は炭化物が充満しており、中央に杭状の炭化物が残っていた。先端部を焼いた柱を埋設し中央部が腐食してしまった結果の柱痕跡であろう。遺物は、床面上のP₁から土師器小型壺がつぶれた状態で発見された以外、ほとんどは埋土からの出土である。

遺物: 食膳具には土師器・須恵器が見られ、他に土師器の長胴甕、壺が見られる。1は口縁に強いナデを施して弱い稜をつくる半球状の杯で、内面黒色処理をしてある。3は口縁をわずかに欠損する体部球形の壺で、内・外面をヘラミガキで仕上げている。2は縦方向のナデ調整で仕上げる長胴甕、外面には二次的に水こしの粘土が塗られナデ調整がなされている。

(2) 遺構外出土遺物 (第205図、PL75)

1は外面の下半を横方向のヘラケズリし、内面黒色処理する大型の杯である。2・3は須恵器杯AIIで、ともに底部回転ヘラケリで仕上げられている。4・5は須恵器の蓋で天井部はヘラケズリで仕上げる。5は比較的頸部が長い壺の口縁部と思われる。6は須恵器甕の口縁部である。



第205図 古代土器実測図

2 中世以降・その他

(1) 溝 (第200・206・208図)

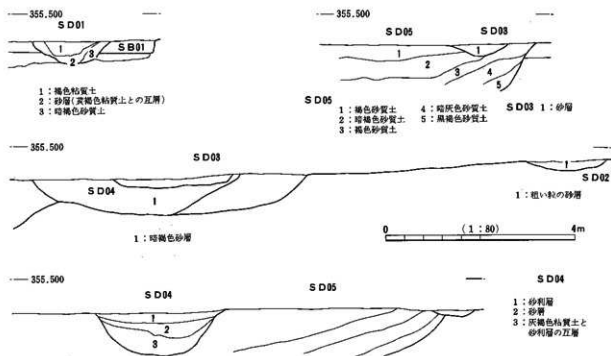
溝はいずれも竪穴住居址を切っており、時期的には平安時代以降といえそうである。

SD 0 1

SB01を切っており、調査区域外で大きく直角に曲がる可能性がある。幅は100cmほどで深さは検出面より40cmを測る。埋土は2・3層が土壌化した暗褐色の粘質土で、砂のブロックを多数含み、人為的な埋没の可能性が高い。1層は砂質土で洪水による埋没であろう。遺物は埋土1層から、龍泉窯系青磁碗が出土しており、時期的には中世の可能性が高い。

SD 0 2

一部試掘トレンチによって壊されており、SD05・SB03を切り、井戸(SK06)の上面を削平している。幅は100~150cmほどで、深さは20cmを測る。埋土は粗粒の砂層で、洪水で埋まった可能性が高い。また、



第206図 溝断面図

調査区域外に大きく直角に曲がる可能性がある。遺物は近世陶器が見られ、さらに中世の井戸 (SK06) を切ることから近世以降と思われる。

SD03

SD05・04を切り、SD02に切られる。幅は約100～130cm、深さは10cmと浅く、大きく直角に曲がる。底部は凹凸があり、埋土は粗粒の砂層で洪水により埋没した可能性が高い。時期的には中世以降であろう。

遺物は埋土中より出土している(第208図)。1は大窯期の瀬戸・美濃窯系陶器の皿で、灰釉が全面に施される。2は白濁する釉が施される白磁皿の体部である。3・4は須恵質の摺鉢である。5は軽石製の石製品で、中央部に径1cmほどの穴が開けられている。

SD04

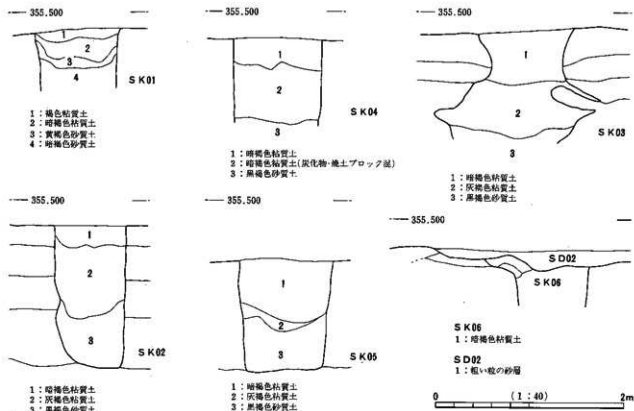
前年度にすでに確認されており、一部をその試掘トレンチで壊している。SD05を切り、SD02・03に切られる。ほぼ南北にやや弧を描くように走り、幅は220～380cmと一定せず、深さは80～100cmと深い。埋土は粗粒の砂質土で、洪水による埋没の可能性が高い。遺物は須恵器片、摩滅した鉄石美製の管玉があるが、時期的には中世以降と思われる。

SD05

SD02～04のすべての溝によって切られる。埋土は砂質土と砂礫土の互層で、何回もの洪水によって埋没あるいは削平されたと思われる。ただし、礫層が盛り上がった微高地部分を方形に取り囲むようで、人工的な改変があった可能性も考えられる。遺物は検出面からのみで、埋土からの出土はない。東端は、明確であるが西端は不明である。

(2) 土 坑 (第200・207・208図)

溝に囲まれた礫層が盛り上がる微高地部分に集中分布する。いずれも4層上面で検出されており、井戸の可能性が高い。



第207図 土坑断面図

SK01

SB01を切り込んで造られる。径90cmほどの平面形が円の井戸である。壁の崩落により危険なため、底面までは掘削することはできなかった。遺物は検出面からの出土のみで、埋土からの出土はない。

SK02

切り合い関係はなく、径70cm、深さ160cmの平面形が円形の井戸である。埋土は、底部近くが砂質土と粘質土の互層で自然埋没と考えられ、上部は多量の砂のブロックが含まれており、埋め戻しと考えることができる。底面からは龍泉窯系青磁碗が出土した。

SK03

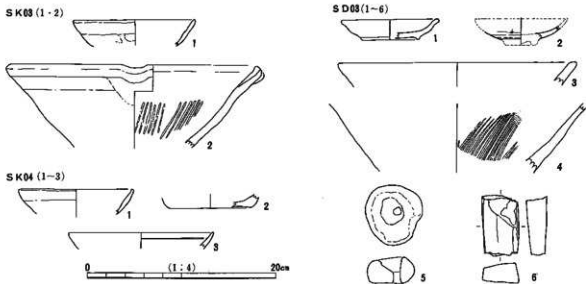
試掘トレンチにより半割されてしまい、全体の形状は不明であるが、径100cmほどの平面が円形になると思われる。埋没の過程で壁は崩落しているが、最上部は埋め戻しの可能性が高い。遺物は、埋没土中からほとんどである(第208図)。1は手づくね成形の土器皿で、上半部はヨコナデ、下半部は指圧痕が残る。2は片口がつく珠洲系摺鉢であるが、瓦質に近い焼成である。口縁部は回転ナデで仕上げ、下半部は弱い縦方向のハケの後、横方向のナデで仕上げている。

SK04

単独で発見された。壁の崩落が起こり危険なため、底面までは調査できなかったが、平面形が径100cm弱の円形の井戸である。下半部は砂質土と粘質土の互層で、上部は多量の砂のブロックを含む粘質土で、この状況からある高さまで洪水で埋没した後、人為的に埋められたと考えられる。遺物は埋没土の中から出土しており(第208図)、1は手づくね成形の土器皿で、体部下半に指圧痕を残す。2はロクロ調整の土器皿である。3は、龍泉窯系青磁碗で口縁内面に浅く一条の沈線が入る。

SK05

単独で発見された径100cmほどの円形の井戸である。下部は自然、上部は人為的な埋没である。遺物



第208図 中世土器・陶磁器実測図

としては龍泉窯系青磁碗がある。

SK03

SD02を切って構築される。地盤が脆弱なため、底面までの調査はできていない。平面は径80cmの円形で、土器皿が出土している。時期は中世と考えられる。

第3節 小 結

今回の調査で検出された遺構は、時期的には、大きく古代と中世に分けることが可能である。いずれも微高地に立地する集落の北辺を調査したにすぎないと思われ、全容を明らかにすることはできない。

古代の集落は、遺物からみると7世紀から8世紀前半の間継続しているが、それ以降はみられない。北陸新幹線関係の調査では、やや離れた地点で9世紀まで継続する集落が発見されている。このため集落を分析するには大きくは屋代高校部分まで含めた広い範囲を想定しなければならない(註1)。

中世には、微高地を取り囲むように大きくL字状に溝が巡らされている。内部に井戸は見られるが、掘立柱建物をはじめとした建物の検出はなく、居住域とはいいがたい。規模からみて居館とは考えられず、有力一般農民の「屋敷」の可能性もある。井戸の出土遺物は、13世紀代から16世紀代まで幅が見られ、溝も同じ位置でのつくりかえと考えることができ、洪水に見舞われたのちも、同じ地に継続して集落が営まれていたと思われる。

今回の調査部分は遺跡の縁辺であり、新幹線関連の屋代遺跡の調査成果と考え合わせ遺跡の性格を考えていく必要がある。

註

1. 勸長野県埋蔵文化財センター 1994 「屋代遺跡 (新幹線関係)」 長野県埋蔵文化財センター年報10

第9章 結 語

これまで、中央道長野線建設に伴って発掘調査を実施した、更埴市・長野市内の7遺跡の調査成果について述べてきた。個々の遺跡の総括は、各章の「小結」に記したが、ここで時代別にまとめておく。

もっとも古い時期の遺物には、塩崎城見山砦遺跡の槍先形尖頭器・掻器・神子柴型石斧[?]があり、旧石器時代の後半期～終末期に位置付けられる。後世の削平によって原位置をとどめないが、本来は氾濫原との比高差110mほどの尾根頂部に生活址があったと見られ、旧石器時代の遺跡立地を考える上で重要である。時期は下るが、更埴市森将軍塚古墳からは押型文土器など、長野市北平古墳からは石器が出土し、高地遺跡の調査例はわずかに数えられる。

縄文時代に関しては多くのページをあてた。鳥林・小坂西遺跡は立地や継続時期が似ており、とりわけ縄文早期については注目される成果がある。鳥林遺跡からは、長野盆地で初めて押型文期の住居址2軒と土坑を検出した。土器の主体を占める立野式はこれまではほぼ県内に分布が限られたが、分布範囲が北信に拡大することが明らかになった。立野式にはいくつかのパラエティーが知られるが、鳥林遺跡は格子目文主体で他の文様がほとんど見られない顕著な特徴があり、縄文・蒸糸文を少量伴い、SB01はひとつの指標となる。楕円式・細久保式も出土しているため、石器組成は土器ほどに明瞭ではないが、狩猟具と動物質食料の加工具が約70%を占め、植物質食料にかかわる道具が25%、漁撈具などが若干という構成で、押型文期の生産活動を反映している。スタンプ形石器は県内で報告は少なく、すべて特殊磨石の再利用品である点は、関東地方の例と異なる特徴である。

縄文早期は少量ながら小坂西遺跡で田戸下層式、鳥林遺跡で田戸上層式が出土した。条痕文期は小坂西遺跡で住居址1軒を検出し、ここから出土した茅山上層式に粕畑式・絡条体圧痕文土器が伴って一時期を構成するのであろう。粕畑式は佐久地方まで分布が知られたが、本例は大町市とともに北限となる。小坂西遺跡は継続時期が長く、遺物が混在して出土したため石器組成は明らかではないが、刃器類にホルンフェルスを多用する特徴がある。鳥林遺跡では石鎌素材の大部分が黒曜石で、ヒスイ製の磨製石斧が含まれるなど、さまざまな産地の石材が用いられ、この流通を明らかにすることは課題のひとつである。

前期は小坂西遺跡では初頭から後葉までの土器が継続的に出土し、前葉段階の住居址1軒は、長野盆地では4例目となる。塩崎城見山砦遺跡では5基の陥し穴を検出し、¹⁴C年代測定の結果、前期に属す。もっとも近い例には、大岡村鍋久保遺跡に早期の陥し穴がある。中・後期は一般に遺跡が多い時期だが、鳥林・小坂西遺跡では空白期となる。晩期末葉には小坂西遺跡は土坑や土器集中を残す居住地となり、出土土器は氷式後半の短時期のため、編年資料として貴重である。篠ノ井・屋代遺跡群などは一足早く氾濫原へ進出したが、弥生文化への移行期の遺跡分布を語るには今日なお調査例が不足している。

弥生時代では小坂西遺跡で吉田式期の土坑、古墳時代では鳥林遺跡で前期の土坑、小坂西遺跡で前期の住居址などのほか、前後の時期の土器が少量ある。奈良・平安時代では鳥林遺跡で9・10世紀の住居址、小坂西遺跡で8・9世紀の住居址と土器集中などがある。弥生時代以降、同じ山麓立地の遺跡でも、眼前に後背湿地の水田地帯を控えた鶴前遺跡などの多数の住居址群からなる集落と、本書で報告したような奥まった立地の小集落とでは、単に遺跡の中心と周辺の違いにとどまらない、性格の違いがあるのだろうか。出土遺物からこれを明らかにすることはできなかったが、古墳群・窯址群、寺院址を含め、伝統的な自然堤防上の集落および生産域の動向など、広範な視野から検討すべき課題である。なお、千曲川を渡った一丁田遺跡では7・8世紀の住居址が検出されたが、広大な屋代遺跡群の縁辺に当たる。

集落址については一見目だった成果がないように見える一方、鶴萩七岩岩陰遺跡では弥生中期前半の

再葬墓にかかわるであろう焼人骨群を検出し、古墳中・後期には巨岩祭祀遺跡という性格を明らかにした。この時期の骨織は全国的に類例は少なく、今後注意したい。また、塩崎城見山砦遺跡では上部を削平されていたものの、弥生後期の土器棺墓と、古墳中期の底部穿孔壺を含む土器集中が検出され、低墳丘墓の可能性がある。これらは県内では稀な遺跡として注目される。

中世では二つの山城があり、塩崎城見山砦遺跡は小規模城郭の全面調査、赤沢城跡は堀の一部を調査した。前者は発掘によって3時期の城郭施設の変遷と烽火台の構造が明らかになり、縄張り図との比較や各種施設の構造に詳細な検討が行われ、築城主体者や周辺の城郭にも言及する。このほかの4遺跡でも中世後半の遺物が出土し、小坂西遺跡では堅穴建物址、一丁田遺跡では井戸・溝を検出した。

本書に報告する6遺跡はいずれも山麓にあり、盆地部の大遺跡に比較すれば中小規模ではあるが、ここにまとめたように旧石器時代から中世以降におよぶ多彩な調査成果があった。先に刊行された坂北村・麻績村内の報告書では長野調査事務所の沿革にふれ、整理・報告にかかわるいくつかの課題を挙げたが、本書ではどれほど解決がはかられたのだろうか。本書掲載遺跡の発掘調査は開所2年目の昭和63年から平成3年に実施され、平成3・4年度の整理作業を経て実質5か年を要して報告書刊行の運びとなった。今回も整理・編集担当者のほかに執筆分担者が各種遺物や山城などの専門分野を担当し、それぞれの資料の位置付けを明らかにする努力をしてきた。しかしながら、整理担当者が実見したことのない遺跡を記述するケースも生じ、また数量が多くないとはいえ時期の異なる多様な遺構・遺物の説明に当たっては、逡巡することしばしばであった。このため、資料をめぐる詳細な検討は避けて参考文献も最小限にとどめる結果となった。今日的な研究水準に照らして、報告者としての責を果たせたか懺悔の思いを禁じ得ないものの、当センターがめざしてきた地域史の再構成という課題解決のための基礎資料として本報告書を提示し、その評価は専門研究者にゆだねたいと思う。

本書の刊行をもって更埴市・長野市6遺跡の記録保存事業は完了するが、拙筆するにあたり、これまでにご支援、ご協力いただいた関係各位、諸機関に深い感謝の意を申し上げるとともに、本書が地域の歴史・文化財を考えるうえで活用されることを切に願うものである。



塩崎地区の現況（手前は鶴前・鶴森七尋岩除遺跡）

付 章 自然化学的分析

- | | | |
|-----|--|----------------|
| 第1節 | 小坂西遺跡出土の中世火葬骨 | 茂原信生・芹澤雅夫 |
| 第2節 | 小坂西遺跡出土炭化材の樹種 | 鈴木三男・能城修一 |
| 第3節 | 鶴萩七尋岩陰遺跡出土の人骨および動物骨 | 阿部修二・茂原信生 |
| 第4節 | 鶴萩七尋岩陰遺跡出土の骨鏃 | 茂原信生 |
| 第5節 | 塩崎城見山砦遺跡出土炭化材の樹種 | 鈴木三男・能城修一 |
| 第6節 | 塩崎城見山砦遺跡の土坑の内容物推定および ¹⁴ C年代測定 | パリーノ・サーヴェイ株式会社 |

第1節 小坂西遺跡出土の中世火葬骨

茂原信生・芹澤雅夫（獨協医科大学第一解剖学教室）

1 はじめに

小坂西遺跡は長野県更埴市桑原小坂西にあり、縄文時代早期から中世まで断続的に続いている。今回報告する骨片は、中世（SK01・02）、および平安時代（SK05）のものと考えられている。SK05は骨粉だけである。骨片はいずれも細片で、焼かれている。

2 同定された骨片とその特徴

① SK01出土の骨片

長骨の骨幹はウロコ状に割れており、軟部がついたまま、すなわち普通の火葬の状態では焼かれたものと推測される。細片も含めて100点ほどの骨片である。

同定された骨片はすべてヒトで、以下の7点である。獣骨は混在していない。

頭蓋骨：下顎骨右関節頭

下顎骨右筋突起

歯：上顎左第2大臼歯（エナメル質欠損）

歯根片（歯種不明）

上肢骨：右手中節骨（第5指？）

手指基節骨遠位骨幹（左右不明）

手指基節骨近位端（左右不明）

手指末節骨遠位端（左右不明）

重複する部分はなく、一個体分の人骨と考えられるが、断定するには資料が少なすぎる。骨の量は、一個体分の火葬人骨とすれば非常に少なく、ここで火葬され骨灰等に取られた残りの部分と考えられる。

手指の末節骨はかなり大きめで、基節骨も太い。また、下顎の筋突起は厚みは高いが低い。これらの特徴を考え、これらの骨が一個体であるとする、男性の可能性が高い。

基節骨の骨端が癒合していること、第2大臼歯の歯根が完成していること、関節頭の形態、筋突起の大きさや性状から、成人には達していたと推測される。ただし、第2大臼歯の歯冠の象牙質の形態は咬耗によってほとんど乱されていないので、さほど高齢ではないと考えられる。

② SK02出土の骨片

やはり、長骨の骨幹はウロコ状に割れており、軟部がついたまま、すなわち普通の火葬の状態では焼かれたものであろう。細片も含めて20点ほどの骨片である。

同定された骨片はすべてヒトで、以下の3点である。獣骨は混在していないらしい。

頭蓋骨：頭蓋骨片

歯：下顎切歯歯根片？（左右不明）

上肢骨：左第4中手骨近位半

性別・年齢に関してとくに判明することはない。ただし、歯根片は永久歯の歯根であるから、乳幼児ではない。

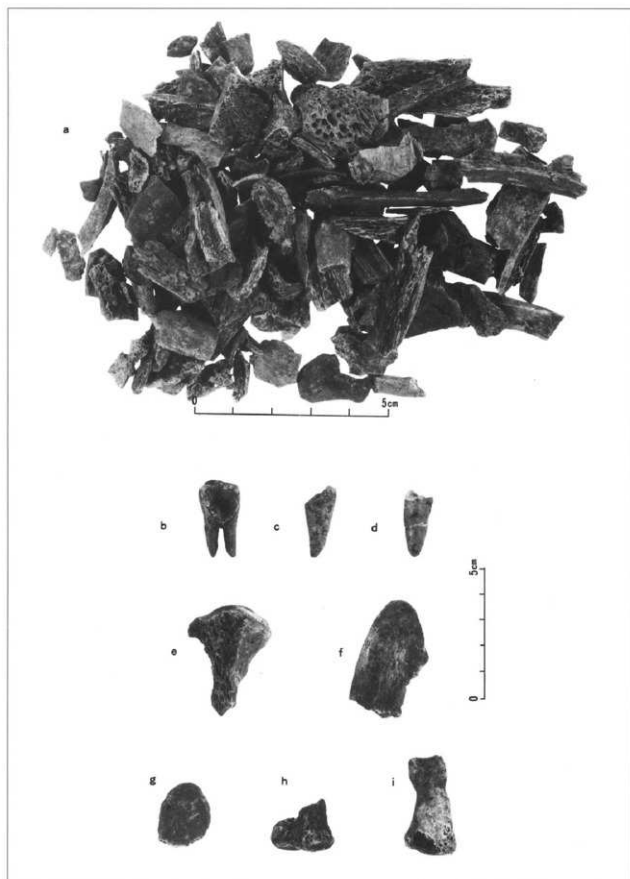


写真1 小坂西遺跡出土の火葬された骨片・SK01出土の人骨片

a : 部位不明の骨片、d : 上顎第2大白歯、c - d : 歯根片、e : 下顎骨右関節頭、f : 下顎骨右筋突起、
g : 手の末節骨遠位半、h : 手の基節骨近位端、i : 手の中節骨(右第5指?)

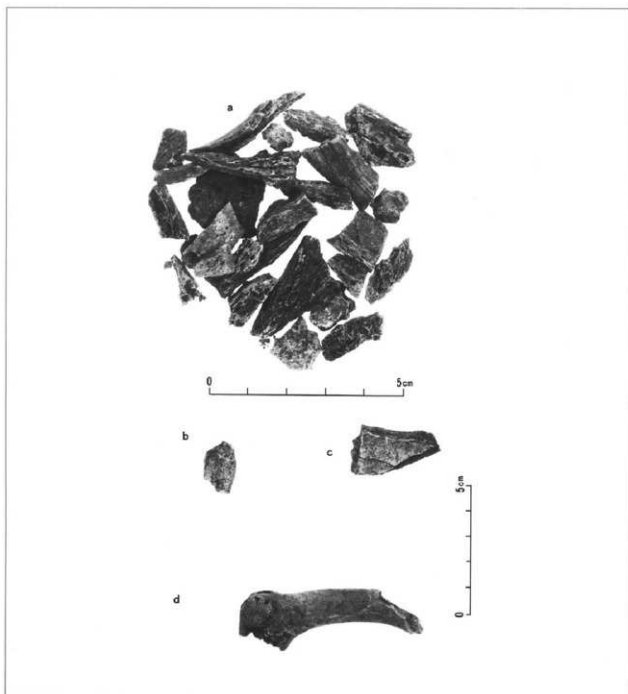


写真2 小坂西遺跡出土の火葬された骨片・SK02出土の人骨片

a : 部位不明の焼骨片、b : 歯根片 (下顎切歯?)、c : 頭蓋骨片、d : 左第4中手骨近位半

第 2 節 小坂西遺跡出土炭化材の樹種

鈴木三男 (金沢大・教養・生物)

能城修一 (農水省森林総合研究所)

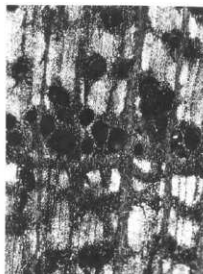
長野県更埴市の小坂西遺跡から出土した炭化材 2 点の樹種を調査した。試料は中世の堅穴住居の建築材とおもわれるもの 1 点 (BKO-9) と火葬施設遺構からの炭化材 1 点 (BKO-10) である。試料は徒手で横断、接線、放射の各破断面を作り、金属顕微鏡で観察同定した結果、以下に示すように BKO-9 はヤマザクラで、BKO-10 はエノキ属であった。炭化材はプレバートの形での証拠試料の保存は困難なので、金属顕微鏡で撮影した写真を証拠標本として金沢大学教養部生物学教室に保管してある。

エノキ属 *Celtis* ニレ科 BKO-10 (写真 1-4)

年輪始めに比較的大きな道管が 1-2 層に並び、順次径を減じて晩材部では薄壁多角形の小道管が斜め接線状に多数集合して波状の紋をなす環孔材。道管の穿孔は単一で、小道管の内壁には顕著ならせん肥厚がある。木部柔組織は周囲状。放射組織は大きな異性で、単列部にしばしば結晶細胞を持つ。これらの形質からエノキ属のエノキ、あるいはエゾエノキの材と同定した。エノキ材は大材が比較的得易いので器具材や建築材などに用いられるが材質は余り良くなく、腐り易い。

ヤマザクラ *Prunus jamasakura* Sieb. et Zucc. バラ科 BKO-9 (写真 5-9)

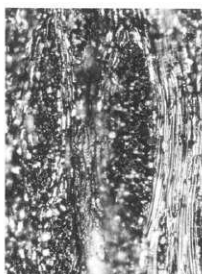
年輪始めにわずかに大きい丸い道管が並び、それよりやや小さい丸い道管が年輪内に単独あるいは放射方向に数個複合して均一に散在する散孔材。道管の穿孔は単一、内壁に顕著ならせん肥厚があり、隔壁には交互状の小孔紋がある。木部柔組織は目立たない。放射組織は 3-5 細胞幅くらいの紡錘形で、異性、時に結晶細胞を持つ。これらのことからバラ科サクラ属のヤマザクラの材と同定した。サクラ属材の堅穴住居の建築材への利用は中心的な柱材でなければ十分可能性が考えられるが、類例は少ない。



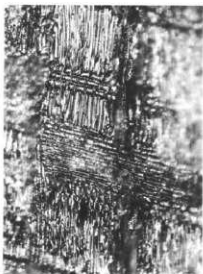
1. エノキ属 (BKO-10) C×50.



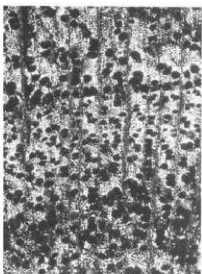
2. 同 C×100.



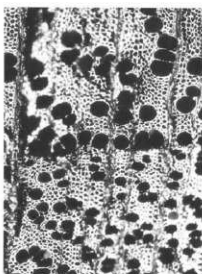
3. 同 T×100.



4. 同 R×100.



5. ヤマザクラ (BKO-9) C×50.



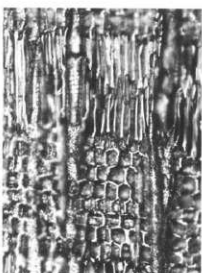
6. 同 C×100.



7. 同 T×100.



8. 同 T×200.



9. 同 R×200.

第3節 鶴萩七尋岩陰遺跡出土の人骨および動物骨

阿部修二・茂原信生（獨協医科大学第一解剖学教室）

はじめに

鶴萩七尋岩陰遺跡は長野市塩崎にある遺跡で、長野県埋蔵文化財センターによって1989年の9月から10月にかけて発掘された。弥生時代中期から近世に至る複合遺跡で、人骨はおもに弥生時代から古墳時代にかけての層から出土している。

以下これらの骨片について、遺構別に記載する（表1）。

1 弥生時代の遺構

SK01

最も多くの人骨が出土している墓坑である。重複する部分は以下のような部位である。

- ①成人の頭蓋骨の前頭骨右眼窩部3個（No85、No115、No125；標本番号、以下同様）
- ②成人の大腿骨の右骨幹部及び遠位部4個（No68、No152、No159、No190）
- ③子供の橈骨遠位部（No57）

ここにあげた頭蓋骨や大腿骨は子供のものではないので、この墓坑からは少なくとも5体の人骨が出土していると考えられる。頭蓋骨の下顎骨中央切歯部に歯槽が閉鎖した抜歯痕の見られる骨片がある。これが抜歯によるものかあるいは外傷によるものかは判断できない。弥生時代にはまだ抜歯の風習が残っている（馬場・他：1986）ので抜歯の可能性もある。

出土量は5体分としては少ないので、火葬後に取り残された部分の可能性もある。しかし、大腿骨がほぼ1本出土していたりするので必ずしもそうは言えない。火葬され、そこに埋葬されて自然に侵蝕などで消失した可能性が考えられる。

この墓坑には少なくとも5体分の人骨が関係しており、4体は成人、1体は子供のものである。性別は不明である。

2 古墳時代の遺構

SK02（古墳時代中期）

出土した量はごく少なく、墓坑のうちでは最も少ない出土量である。その中で一部が重複する部位として成人の頭蓋骨の後頭骨2個（石垣下03とNo11石垣下）が出土している。このため、この墓坑には少なくとも2体分が関係していたと考えられる。

SK02はSK01とはやや離れた位置にあるのでこれらが混在してしまう可能性は少ない。したがって、これらの2体は、別のものでと考えてよさそう。

この墓坑には少なくとも2体分の人骨が出土していた。ともに成人であろうが性別は不明である。

SK03（古墳時代後期）

SK01に次いで多い出土量である。この墓坑はSK01と重なり合っている。出土した中に、左の側頭骨が重複してみられる。少なくとも2体分が出土していると考えられる。この墓坑から出土した鎖骨の左胸骨端に軽度の病変がみられた。

焼かれていない骨でカモ類の右肩甲骨が混在している。大きさはマガモ大のものである。

この墓坑からは人骨とともに鳥の骨が出土している。人骨は2体分であろう。成人のものと考えられるが性別は不明である。

3 墓坑以外から出土した人骨や獣骨など

上記の墓坑の他に、以下のグリッドから人骨や獣骨などが出土している。

以下の表現のなかで、「関係している」と表現することがある。この理由は、出土した骨はほとんどが焼かれた骨であるためそれぞれの個体に関する情報が十分に得られず、個体識別ができないからである。他の墓坑やグリッドの人骨との関係が判断できないということである。

OR01

ヒトの頭蓋骨が1点（上顎骨片）出土している。

OR03

ヒトの頭蓋骨片が4点出土している。重複する部位はない。

1R02

ヒトの頭蓋骨片、椎骨片、手根骨、寛骨の4点が出土している。成人のものであろう。

1R03

グリッドでは比較的多い方の出土量である。頭蓋骨の前頭骨眼窩部が2個出土している。どちらも焼けている。他に焼けていない頭蓋骨片が数点出土している。これを考えると少なくとも成人3体分が関係しているらしい。頭蓋骨の他に、上肢骨や下肢骨の一部が出土している。

これ以外に、キツネの右腕骨遠位半が出土している。古代遺跡からのキツネの出土例はどの時代でもさほど多くない。

1R04

ほぼ完形のヒトの手の中節骨が出土しているだけである。

2R01

頭蓋骨片と手の基節骨の遠位部が出土している。

2R02

6点が同定された。頭蓋骨が4点、下肢骨片が2点である。いずれもヒトのものである。

この他に、焼かれていないイヌの左腕骨骨幹中央部が出土している。

2R03

グリッドのうちでは最も多くの骨が同定できた。焼骨と焼かれていない骨が混在しているが、焼かれた骨がほとんどである。左脛骨の近位端が2個出土しているが、一つは焼骨であり、もう一つは焼かれていない。少なくとも2体分の人骨が関係していたと考えられる。

この他に焼かれていないイタチの左尺骨骨幹中央部と貝殻1個（種不明）が出土している。これらは後世の混在の可能性がある。

このグリッドには、少なくとも成人2体が関係している。

3R03

頭蓋骨や歯の破片、上肢骨、下肢骨が出土している。歯の出土量は最も多い。これらの歯は焼かれていないものである。下顎の左第1小白歯が2本出土している。少なくとも2体分の人骨が関係していたと考えられる。

この他に焼かれたイノシシの右上腕骨近位端が出土している。

このグリッドには少なくとも成人2体が関係している。

4 まとめ

以上のように、鶴萩七尋岩陰遺跡からは多くの人骨とごく少数の獣骨などが出土している。3つの墓坑(SK01、SK03、SK02)から出土したものは比較的まとめて考えやすいが、各グリッドから出土した人骨は焼かれているため個体識別はほとんど不可能で、それぞれを1体あるいは何体と考えることは難しい。3つの墓坑からは合計9体分の人骨が出土していると考えられるが、攪乱があればこの個体数は減少することになる。グリッドを含めて、遺跡全体から何体が出土したかは判断できなかった。

各墓坑に関してはある程度の推測が可能である。これらの中には、火葬された骨と火葬されていない骨が混在しているが焼かれた人骨が圧倒的に多い。また、焼かれた人骨の中には十分焼けていない人骨(灰化していない人骨)と高温を受けたと考えられる人骨がみられる。火葬の条件は一定していなかったし、むしろ不十分に焼かれたものが多い印象を受ける。すなわち、骨幹はやや熱を受けているが、骨端はほとんど焼けていない長骨がある。一般的な火葬ではむしろ骨端の方が熱が通りやすいので、今後、どのような焼かれ方をしたのか、あるいは埋葬されたうえが塚として使われたのかを検討する必要がある。

焼けているものなかには、頭蓋骨の縫合の明瞭なものがあり、正確な年齢は不明であるが若い個体が含まれていることを示唆するものがある。

焼かれた人骨の全体量は多くなく、火葬した残りである可能性が考えられる。ただし、大腿骨がほぼ残っているなどの場合もあり、今後の検討課題である。

参考文献

馬場悠男・茂原信生・阿部修二・江藤盛治(1986):根古屋遺跡出土の人骨・動物骨。「霊山根古屋遺跡の研究」、福島県霊山町教育委員会:93-113。

〈写真説明〉

a:前頭骨片(生骨:1R03)、b:前頭骨片(焼骨:1R03)、c:右側頭骨錐体(焼骨:1R03)、d:左側頭骨錐体(焼骨:1R03)、e:右側頭骨片(焼骨:1R03)、f:左側頭骨片(焼骨:1R03)、g:左大腿骨骨幹および遠位端部(焼骨:SK01、No136)、h:骨片(焼骨:1R03)、i:骨片(焼骨:SK01、集中区11th下げ一括)

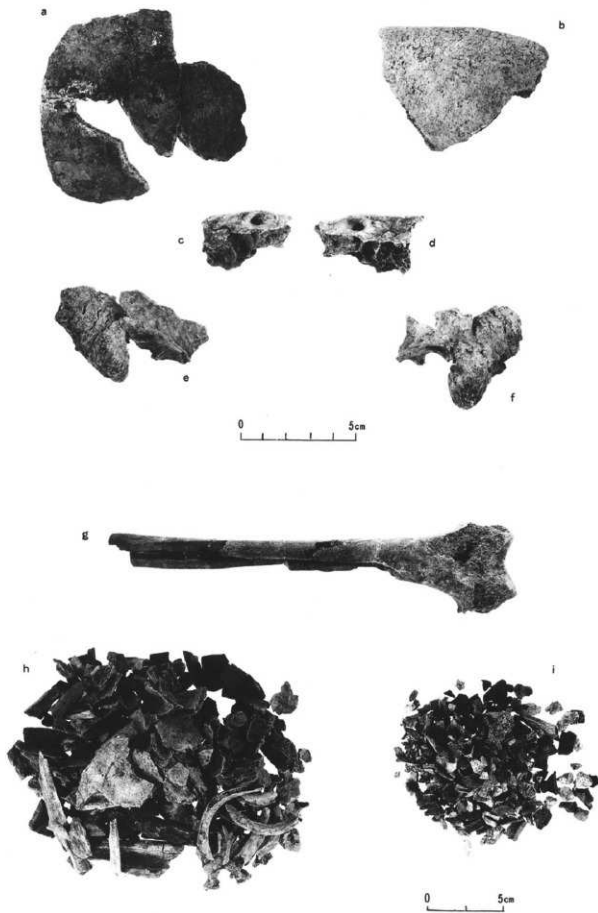


表 1 : 鶴橋七尋岩除遺跡出土の人骨および獣骨等の区別出土部位 (備考に種名のないものはヒトである)
(c : 完形, f : 破片)

区	No	Noの備考	発掘日	骨名	焼、生	左右	状態	備考
0 R	01	石垣下	891026	頭蓋骨	焼骨	左	f	上顎骨片
0 R	03	セタベルト	891013	頭蓋骨	不明		f	1個骨片と1個と頭蓋破片
0 R	03	セタベルト	890912	頭蓋骨	不明		f	骨片少数
0 R	03	セタベルト	891012	頭蓋骨	焼骨	不明	f	骨片少数
0 R	03	セタベルト	891012	頭蓋骨	焼骨	不明	f	骨片少数
1 R	02		890918	頭蓋骨	焼骨	右	f	骨片1個
1 R	02		890918	椎骨(仙骨)	焼骨	不明	f	椎骨1個の破片
1 R	02		890918	中椎骨(三叉骨)	焼骨	右	f	12は変形
1 R	02		890918	寛骨(単管枝)	焼骨	左	f	骨片1個
1 R	03	3rd下げ黒土一拵	890929	頭蓋骨	焼骨	左右	f	前頭骨眼窩部
1 R	03	4th下げ黒土一拵	890921	頭蓋骨	焼骨	不明	f	前頭骨眼窩部、小片
1 R	03		890925	頭蓋骨	生骨	不明	f	前頭骨片
1 R	03		890925	頭蓋骨	焼骨	不明	f	頭蓋骨体部
1 R	03		890925	頭蓋骨	焼骨	不明	f	側頭骨孔縁突起部
1 R	03		890925	頭蓋骨	焼骨	右	f	骨片
1 R	03		890925	頭蓋骨	焼骨	左	f	側頭骨片
1 R	03		890925	頭蓋骨	焼骨	左	f	側頭骨突起
1 R	03		890925	頭蓋骨	焼骨	左	f	下顎骨関節部
1 R	03	2nd下げ一拵黒土	890929	頭蓋骨	焼骨	不明	f	下顎骨(歯槽部の骨片)
1 R	03		890925	頭蓋骨	焼骨	不明	f	やや大きめの骨片数個
1 R	03	トレー拵	891028	頭蓋骨	焼骨	不明	f	骨片1個
1 R	03	7th落ち込み下げ一拵	891004	頭蓋骨	焼骨	不明	f	骨片2個
1 R	03		890926	頭蓋骨	焼骨	不明	f	骨片少数
1 R	03		890929	頭蓋骨	焼骨	不明	f	骨片少数
1 R	03		891005	頭蓋骨	焼骨	不明	f	骨片少数
1 R	03	8th下げ一拵	890911	頭蓋骨	焼骨	不明	f	小片1個
1 R	03	東	891006	頭蓋骨	焼骨	不明	f	小片少数
1 R	03	赤下小一拵(東)	891006	頭蓋骨	焼骨	不明	f	小片少数
1 R	03	東	891005	頭蓋骨	焼骨	不明	f	小片少数
1 R	03	2nd下げ一拵	890925	頭蓋骨	生骨	不明	f	骨片少数
1 R	03		890925	頭蓋骨	焼骨	不明	f	骨片少数
1 R	03	褐色上部	890927	頭蓋骨	焼骨	不明	f	薄い骨片多数
1 R	03		890926	歯根	不明	f	歯冠なし(2本)	
1 R	03		890925	椎骨(腰椎)	生骨	f	乳頭突起付近	
1 R	03		890925	椎骨	焼骨	f	椎骨片多数	
1 R	03	トレー拵	891023	椎骨	焼骨	左	f	椎骨片1個
1 R	03		890925	肋骨	焼骨	右	f	骨中肋骨
1 R	03		890925	肩甲骨	焼骨	右	f	肩甲骨と外側縁
1 R	03		890925	鎖骨	焼骨	右	f	肩峰端
1 R	03		890925	上腕骨	焼骨	左	f	遠位端
1 R	03		890925	手の中指骨	焼骨	右	C	近位端と遠位端の骨片片
1 R	03		890926	手の基節骨	焼骨	不明	f	近位端
1 R	03		890927	手の基節骨	焼骨	不明	f	遠位端
1 R	03	褐色上部	890926	手の中指骨	焼骨	不明	f	遠位端
1 R	03		890925	寛骨	焼骨	左	f	寛骨片の一部
1 R	03		890925	脛骨	焼骨	左	f	栄養孔付近
1 R	03		890925	腓骨	焼骨	右	f	栄養孔付近
1 R	03		890925	足指骨(踵骨)	焼骨	右	f	上側の関節部
1 R	03		890926	中足骨	焼骨	左	f	中央部
1 R	03		890926	足の基節骨	焼骨	不明	f	近位端
1 R	04		891013	手の中指骨(II)	焼骨	左	f	ほぼ完形
2 R	01	右下	891101	頭蓋骨	焼骨	不明	f	骨片少数
2 R	01	右下	891101	手の基節骨	焼骨	不明	f	遠位端1個
2 R	02		891102	頭蓋骨	焼骨	不明	f	骨片少数
2 R	02		890925	頭蓋骨	焼骨	不明	f	骨片少数
2 R	02	一拵	891030	頭蓋骨	焼骨	不明	f	小片1個
2 R	02	2ndレベ骨片集中部	890929	頭蓋骨	焼骨	不明	f	小片少数
2 R	02		890925	脛骨	焼骨	左	f	骨幹中央部
2 R	02		890925	腓骨	焼骨	左	f	骨幹中央部
2 R	03		890927	肋骨	焼骨	不明	f	肋骨1本
2 R	03		890926	頭蓋骨	焼骨	不明	f	骨片少数
2 R	03	一拵	891024	頭蓋骨	焼骨	不明	f	骨片少数
2 R	03	10h下げ一拵	891013	頭蓋骨	焼骨	不明	f	骨片少数
2 R	03	10h落ち込み部下拵	890929	頭蓋骨	焼骨	不明	f	骨片1個
2 R	03	黒落ち込み下拵	891006	頭蓋骨	焼骨	不明	f	小片2個
2 R	03	8th下げ黒一拵	891005	頭蓋骨	焼骨	不明	f	小片少数
2 R	03	赤下拵一拵	891006	頭蓋骨	焼骨	不明	f	小片少数
2 R	03		890925	頭蓋骨	焼骨	不明	f	不規則骨片多数
2 R	03		890925	頭蓋骨	焼骨	不明	f	薄い骨片多数
2 R	03		890925	歯	焼骨	f	歯冠片	
2 R	03	赤一拵	891005	歯	焼骨	不明	f	歯冠のみ
2 R	03		890926	歯根	焼骨	不明	f	歯冠なし
2 R	03		890926	椎骨(胸椎)	焼骨	f	椎骨片	
2 R	03	土器内	891003	椎骨(胸椎)	焼骨	f	左側突起	
2 R	03		890925	椎骨(腰椎)	焼骨	f	関節突起部2個	
2 R	03		890925	上腕骨	焼骨	右	f	肩1突起部
2 R	03		890925	尺骨	焼骨	右	f	遠位端
2 R	03	10h下拵一拵	891013	手根骨(三角骨)	焼骨	右	C	遠位端
2 R	03		890925	中手骨	焼骨	不明	f	骨幹部および遠位端
2 R	03		890925	手の基節骨	焼骨	不明	f	遠位端
2 R	03		890927	手の基節骨	焼骨	不明	f	遠位端および骨幹中央部
2 R	03		891004	手の基節骨	焼骨	不明	f	遠位端
2 R	03	2nd下拵一拵	891013	手の中指骨	焼骨	不明	C	遠位端
2 R	03	10h下拵一拵	890926	手の中指骨	焼骨	左	f	遠位端
2 R	03		890925	手の中指骨	焼骨	不明	f	遠位端
2 R	03		890925	寛骨	焼骨	左	f	寛骨口部付近
2 R	03		890925	鎖骨	焼骨	左	C	遠位端を欠く

第3節 鶴萩七尋岩除遺跡出土の人骨および動物骨

2 R	03			890925	膝骨	牛骨	右	f	遠位端
2 R	03		2nd黒色土一括	890929	脛骨	鹿骨	右	f	近位部後側の骨片
2 R	03			890925	脛骨	生牛骨	左	f	近位端
2 R	03			890925	脛骨	鹿骨	左	f	近位端
2 R	03			890925	趾骨 (趾骨)	鹿骨	右	f	関節部の骨片
2 R	03			890925	趾骨 (内関節状骨)	鹿骨	左	f	半分欠けている
2 R	03			890925	中足骨 (III)	鹿骨	右	f	遠位端を欠く
2 R	03			890926	中足骨	鹿骨	不明	f	近位端1個
2 R	03	燕中区	10th下(1)一括	890913	趾の近位骨 (I)	鹿骨	不明	f	不明
3 R	03			890918	趾骨	鹿骨	不明	f	骨片少数
3 R	03			890918	趾骨	鹿骨	不明	f	骨片少数
3 R	03			890925	趾骨	鹿骨	不明	f	骨片少数
3 R	03		層1一括	891026	趾骨	鹿骨	不明	f	骨片少数
3 R	03		層2一括	891031	趾骨	鹿骨	不明	f	骨片少数
3 R	03			890918	上腕骨	生牛骨	左	C, f	小片少数
3 R	03		層1一括	891026	上腕骨	生牛骨	右	f	第2臼歯肉 (歯冠のみ)
3 R	03			891026	下腕骨	生牛骨	左	f	第1小臼歯 (ほぼ球形)
3 R	03		層1一括	891026	下腕骨	生牛骨	左	C	第1小臼歯 (ほぼ球形)
3 R	03			890918	下腕骨	生牛骨	左	f	第2小臼歯 (歯冠のみ)
3 R	03			890918	中手骨	鹿骨	不明	f	近・遠位端のみ
3 R	03			891026	手の中手骨 (V)	鹿骨	不明	f	遠位端
3 R	03			890918	大趾骨	鹿骨	不明	f	中央部の骨片
3 R	03			890918	足の第2趾骨	鹿骨	右	f	ほぼ球形
S	03	燕中区		891022	趾骨	鹿骨	不明	f	骨片3個
S	03		下部	891003	趾骨	鹿骨	不明	f	小片2個
SK	01	125		891013	頰蓋骨	鹿骨	右	f	前頭骨後部
SK	01	118		891003	頰蓋骨	鹿骨	右	f	頰蓋骨後部
SK	01	85		891006	頰蓋骨	鹿骨	右	f	頰蓋骨後部
SK	01	10		890928	頰蓋骨	鹿骨	右	f	頰蓋骨1個
SK	01	135		891013	頰蓋骨	鹿骨	不明	f	頰蓋骨片1個
SK	01	4		890929	頰蓋骨	鹿骨	不明	f	頰蓋骨 (外頰蓋隆起部)
SK	01	187		891018	頰蓋骨	鹿骨	不明	f	頰蓋骨片
SK	01	45		891003	頰蓋骨	鹿骨	不明	f	下顎骨1個、他2個
SK	01	60		891003	頰蓋骨	鹿骨	不明	f	下顎骨 (骨盤厚い)
SK	01	84		891006	頰蓋骨	鹿骨	不明	f	やや大きめの骨片
SK	01	87		891006	頰蓋骨	鹿骨	不明	f	骨片1個
SK	01	118		891013	頰蓋骨	鹿骨	不明	f	骨片1個
SK	01	193		891013	頰蓋骨	鹿骨	不明	f	骨片2個
SK	01	58		891003	頰蓋骨	鹿骨	不明	f	骨片2個
SK	01	燕中区	12th下(1)一括	891018	頰蓋骨	鹿骨	不明	f	骨片3個
SK	01	218		891003	頰蓋骨	鹿骨	不明	f	骨片少数
SK	01	165		891017	頰蓋骨	鹿骨	不明	f	骨片少数
SK	01	燕中区	11th下(1)一括	891017	頰蓋骨	鹿骨	不明	f	骨片少数
SK	01	72		891004	頰蓋骨	鹿骨	不明	f	骨片少数
SK	01	74		891004	頰蓋骨	鹿骨	不明	f	骨片少数
SK	01	85		891006	頰蓋骨	鹿骨	不明	f	骨片少数
SK	01	35		891002	頰蓋骨	鹿骨	不明	f	骨片少数
SK	01	73		891004	頰蓋骨	鹿骨	不明	f	小片1個
SK	01	50		891003	頰蓋骨	鹿骨	不明	f	小片1個
SK	01	146		891017	頰蓋骨	鹿骨	不明	f	小片1個
SK	01	76		891004	頰蓋骨	鹿骨	不明	f	小片1個
SK	01	30		891002	頰蓋骨	鹿骨	不明	f	小片少数
SK	01	219		891006	頰蓋骨	鹿骨	不明	f	小片少数
SK	01	219		891004	頰蓋骨	鹿骨	不明	f	小片少数
SK	01	23		891002	頰蓋骨	鹿骨	不明	f	小片少数
SK	01	57		891004	頰蓋骨	鹿骨	不明	f	小片少数
SK	01	201	下部	891018	上腕骨	生牛骨	右	C	第2臼歯 (咬痕なし)
SK	01	2		890927	下顎骨	鹿骨	不明	f	第1臼歯と第2の頰骨根
SK	01	218			前歯	鹿骨	不明	f	遠位の歯
SK	01	218			後歯 (嚙痕)	鹿骨	不明	f	頰突起基部
SK	01	65		891004	嚙骨 (嚙痕)	鹿骨	不明	f	嚙突起基部
SK	01	176		891017	嚙骨	鹿骨	不明	f	嚙骨片数個
SK	01	72		891004	肋骨	鹿骨	不明	f	骨片少数
SK	01	56		891003	肋骨	鹿骨	不明	f	骨片2個
SK	01	124		891013	肋骨	鹿骨	不明	f	骨片1個
SK	01	150		891018	肋骨	鹿骨	不明	f	骨片1個
SK	01	31		891002	肩甲骨	鹿骨	不明	f	肩甲骨1個
SK	01	125		891013	肩甲骨	鹿骨	左	f	肩甲骨近部
SK	01	160		891018	肩甲骨	鹿骨	左	f	外側縁部の骨片
SK	01	69		891004	肩甲骨	鹿骨	左	f	関節部付近
SK	01	205		891023	肩甲骨	鹿骨	左	f	関節部付近
SK	01	75		891004	肩甲骨	鹿骨	左	f	関節部付近
SK	01	196		891002	肩甲骨	鹿骨	不明	f	外側縁部の骨片
SK	01	65		891004	鎖骨	鹿骨	左	f	肩峰部
SK	01	53		891003	鎖骨	鹿骨	左	f	骨体中央から肩峰端の一部
SK	01	136		891013	肋骨	鹿骨	右	f	遠位端の下関節部
SK	01	57	下部	891004	肋骨	鹿骨	不明	f	子供の骨
SK	01	198		891018	尺骨	鹿骨	右	f	遠位端
SK	01	175		891017	尺骨	鹿骨	右	f	遠位端の骨体
SK	01	176		891017	尺骨	鹿骨	右	f	肘関節
SK	01	173		891017	尺骨	鹿骨	左	f	近位端
SK	01	196		891018	尺骨	鹿骨	左	f	近位端
SK	01	142		891013	尺骨	鹿骨	左	f	遠位端
SK	01	35		891006	手根骨 (舟状骨)	鹿骨	左	f	殆ど破損
SK	01	144		891013	手根骨 (舟状骨)	鹿骨	右	C	
SK	01	184		891018	手根骨 (舟状骨)	鹿骨	左	f	
SK	01	燕中区	11th下(1)一括	891017	手根骨 (舟状骨)	鹿骨	左	f	
SK	01	189		891012	手根骨 (大槲形骨)	鹿骨	右	C	
SK	01	燕中区	12th下(1)一括	891018	手根骨 (小槲形骨)	鹿骨	右	C	
SK	01	81		891006	手根骨 (有鉤骨)	鹿骨	右	C	
SK	01	燕中区	12th下(1)一括	891017	手根骨 (有鉤骨)	鹿骨	右	C	
SK	01	58		891003	手根骨 (有鉤骨)	鹿骨	右	C	ほぼ球形
SK	01	218			中手骨 (I)	鹿骨	右	C	
SK	01	191		891018	中手骨 (I)	鹿骨	左	f	遠位端の破損
SK	01	115			中手骨 (II)	鹿骨	左	f	頰骨破損
SK	01	203		891018	中手骨 (II)	鹿骨	左	f	遠位端破損

SK 01		45		891003	中手骨 (III)	焼骨	右	f	関節のみ
SK 01		190	周辺下部	891010	中手骨 (IV)	焼骨	右	f	近位端
SK 01		197		891011	中手骨 (IV)	焼骨	右	f	骨体中央部
SK 01		70		891004	中手骨 (IV)	焼骨	右	f	近位端破損
SK 01		118		891013	中手骨 (IV)	焼骨	右	f	遠位端
SK 01		75		891004	中手骨 (IV)	焼骨	左	f	近位端なし
SK 01		160		891017	手の基礎骨 (V)	焼骨	左	f	近位端破損
SK 01		160		891002	手の基礎骨 (I, 3)	焼骨	右	f	ほぼ完形
SK 01		174		891017	手の基礎骨 (I, 4)	焼骨	右	f	近位端
SK 01		149		891017	手の基礎骨 (III)	焼骨	左	f	近位端が破損
SK 01		176		891017	手の基礎骨 (I)	焼骨	左	C, f	完形+近位端 (2)
SK 01		218		891017	手の基礎骨 (I)	焼骨	不明	f	近位端
SK 01	東中区		11th下げ一括	891017	手の基礎骨	焼骨	不明	f	近位端2個
SK 01		72		891004	手の基礎骨	焼骨	不明	f	近位端破損
SK 01		190	周辺下部	891010	手の基礎骨	焼骨	不明	f	近位端
SK 01		184		891018	手の基礎骨	焼骨	不明	f	近位端のみ破損
SK 01		192		891018	手の基礎骨	焼骨	不明	f	近位端
SK 01	東中区		12th下げ一括	891018	手の基礎骨	焼骨	不明	f	近位端
SK 01		119		891013	手の基礎骨	焼骨	不明	f	近位端のみ破損
SK 01		126		891013	手の基礎骨 (II)	焼骨	不明	f	遠位端
SK 01		219		891017	手の中節骨 (II)	焼骨	左	C	
SK 01		170		891017	手の中節骨 (II)	焼骨	不明	C	
SK 01		188		891018	手の中節骨 (III)	焼骨	右	f	ほぼ完形
SK 01		218		891017	手の中節骨	焼骨	不明	f	遠位端
SK 01		190		891010	手の中節骨	焼骨	不明	C	断何番目か不明
SK 01		123	周辺下部	891013	手の末節骨 (I)	焼骨	左	f	ほぼ完形
SK 01		132		891013	寛骨	焼骨	右	f	耳状面
SK 01		84		891003	寛骨	焼骨	右	f	坐骨体部
SK 01		133		891013	寛骨	焼骨	右	f	腸骨嚢部の骨片
SK 01		126		891013	寛骨	焼骨	右	f	寛骨臼部付近
SK 01		137		891013	寛骨	焼骨	左	f	腸骨後付近の骨片
SK 01		161		891017	寛骨	焼骨	左	f	大坐骨切痕部の骨片
SK 01		126		891013	寛骨	焼骨	左	f	寛骨臼部付近
SK 01		132		891013	寛骨	焼骨	不明	f	寛骨多数
SK 01		190		891003	寛骨	焼骨	不明	f	腸骨
SK 01		45	周辺下部	891010	寛骨	焼骨	不明	f	寛骨臼部付近
SK 01		65		891004	寛骨	焼骨	不明	f	寛骨臼の一部
SK 01		73		891004	寛骨	焼骨	不明	f	寛骨臼の一部
SK 01		150		891018	大腿骨	焼骨	右	f	骨幹上部
SK 01		190		891018	大腿骨	焼骨	右	f	骨幹部や中遠位部
SK 01		142		891013	大腿骨	焼骨	右	f	骨幹部の近位部
SK 01		155		891017	大腿骨	焼骨	右	f	近位端
SK 01		152		891017	大腿骨	焼骨	右	f	骨幹遠位端部
SK 01		68		891004	大腿骨	焼骨	右	f	遠位端
SK 01		159		891017	大腿骨	焼骨	右	f	骨幹中央部
SK 01		136		891013	大腿骨	焼骨	左	f	骨幹および遠位端部
SK 01		116		891013	大腿骨	焼骨	左	f	大腿骨遠位部
SK 01		150		891017	大腿骨	焼骨	左	f	骨幹後部
SK 01		195		891018	大腿骨	焼骨	左	f	骨幹後部
SK 01		143		891013	大腿骨	焼骨	左	f	骨幹近位部付近
SK 01		132		891013	大腿骨	焼骨	不明	f	大腿骨遠位部
SK 01		76		891013	大腿骨	焼骨	不明	f	遠位端
SK 01		119		891013	大腿骨	焼骨	不明	f	骨幹上部
SK 01		202		891018	膝蓋骨	焼骨	右	f	ほぼ完形
SK 01		132		891013	膝蓋骨	焼骨	右	f	半分欠けている
SK 01		76		891004	脛骨近位部	焼骨	左	f	ほぼ完形
SK 01		125		891013	脛骨遠位部	焼骨	不明	f	ほぼ完形
SK 01		136		891013	脛骨	焼骨	右	f	遠位端の下方関節部
SK 01		206		891023	脛骨	焼骨	不明	f	内果部付近
SK 01		125		891013	脛骨	焼骨	右	f	遠位端の外果関節部付近
SK 01		45		891003	腓骨	焼骨	左	f	近位端
SK 01		176		891017	腓骨	焼骨	右	f	遠位端骨片
SK 01		45		891003	腓骨	焼骨	不明	f	遠位端
SK 01		3		890929	腓骨 (踵骨)	焼骨	左	f	栄養孔付近
SK 01		45		891003	足根骨 (踵骨)	焼骨	右	f	関節部の骨片
SK 01		156		891017	足根骨 (踵骨)	焼骨	不明	f	関節部の骨片
SK 01		82		891006	足根骨 (距骨)	焼骨	不明	f	関節部の骨片
SK 01		57	下部	891004	足根骨 (舟状骨)	焼骨	右	f	半分欠けている
SK 01		137		891013	足根骨 (舟状骨)	焼骨	左	f	半分欠けている
SK 01		146		891013	足根骨 (外側楔状骨)	焼骨	右	f	焼骨
SK 01		174		891017	足根骨 (内側楔状骨)	焼骨	右	f	ほぼ完形
SK 01		75		891004	中足骨 (III)	焼骨	左	f	近位端
SK 01		193		891018	中足骨 (IV)	焼骨	左	f	関節破損
SK 01		21		891017	中足骨 (IV)	焼骨	左	f	遠位端破損
SK 01		126		891013	中足骨	焼骨	左	f	骨体中央部
SK 01		176		891017	中足骨	焼骨	不明	f	遠位端骨片
SK 01		120		891013	中足骨	焼骨	不明	f	内果破損
SK 01		142		891010	中足骨	焼骨	不明	f	近位端破損
SK 01		190	周辺下部	891013	中足骨	焼骨	不明	f	遠位端
SK 01		142		891013	足の基礎骨 (I)	焼骨	左	f	遠位端
SK 01		45		891003	足の基礎骨 (II)	焼骨	左	f	近位端
SK 01		148		891017	足の基礎骨	焼骨	右	C	
SK 01		176		891017	足の基礎骨	焼骨	右	C	
SK 01		218		891017	足の基礎骨	焼骨	不明	f	遠位端
SK 01		129		891013	足の基礎骨	焼骨	不明	C	
SK 01	東中区		12th下げ一括	891018	足の基礎骨	焼骨	不明	f	近・遠位端のみ
SK 01		126		891013	足の基礎骨	焼骨	不明	f	遠位端
SK 01		218		891013	足の基礎骨	焼骨	不明	C	
SK 01		55		891006	足の末節骨 (I)	焼骨	右	f	遠位端が破損
SK 01		45		891003	足の末節骨 (I)	焼骨	左	C	
SK 01		142		891013	足の末節骨 (I)	焼骨	左	C	
SK 01		58		891006	足の末節骨 (II)	焼骨	右	f	遠位端が破損
SK 01	東中区		11th下げ一括	891017	足の末節骨 (I, V)	焼骨	左	f	近・遠位骨が完形
SK 02		1		890921	頰蓋骨	焼骨	左	f	頰蓋骨片
SK 02		11, 15		890928	頰蓋骨	焼骨	左	f	頰蓋骨片
SK 02	石垣下 0 3	1		891023	頰蓋骨	焼骨	右	f	後頭骨底部
SK 02	石垣下	11		891025	頰蓋骨	焼骨	右	f	後頭骨片
SK 02		6		890929	頰蓋骨	焼骨	右	f	上顎骨片

第3節 鶴取七尋岩除遺跡出土の人骨および動物骨

SK	02		20		890929	椎骨 (頸椎)	椎骨	f	f	椎体
SK	02	pit 2			891023	椎骨 (腰椎)	椎骨	f	f	関節突起の下面筋面
SK	02	pit 2			891023	手根骨 (三角骨)	腕骨	c	c	
SK	03	(S-1) 周囲	265		891027	椎骨	腕骨	f	f	前部骨 (股前上縁部付定)
SK	03	pit 3		4th一拵	891027	椎骨	腕骨	f	f	前部骨 (股前上縁部付定)
SK	03		253		891027	椎骨	腕骨	f	f	前部骨 (股前上縁部付定)
SK	03		244		891026	椎骨	腕骨	f	f	前部骨 (股前上縁部付定)
SK	03		246		891030	椎骨	腕骨	f	f	前部骨 (股前上縁部付定)
SK	03		253		891027	椎骨	腕骨	f	f	前部骨 (股前上縁部付定)
SK	03		250		891027	椎骨	腕骨	f	f	前部骨 (股前上縁部付定)
SK	03		235		891026	椎骨	腕骨	f	f	前部骨 (股前上縁部付定)
SK	03	占塚上層		4th一拵	891026	椎骨	腕骨	f	f	前部骨 (股前上縁部付定)
SK	03	pit 3			891027	椎骨	腕骨	f	f	前部骨 (股前上縁部付定)
SK	03		238		891026	椎骨	腕骨	f	f	前部骨 (股前上縁部付定)
SK	03		277		891027	椎骨	腕骨	f	f	前部骨 (股前上縁部付定)
SK	03	pit 3		5th下拵一拵	891039	椎骨	腕骨	f	f	前部骨 (股前上縁部付定)
SK	03	pit 3		一拵	891026	椎骨	腕骨	f	f	前部骨 (股前上縁部付定)
SK	03	pit 3		一拵	891026	椎骨	腕骨	f	f	前部骨 (股前上縁部付定)
SK	03	pit 3		右下より	891101	椎骨	腕骨	f	f	前部骨 (股前上縁部付定)
SK	03		283		891030	椎骨	腕骨	f	f	前部骨 (股前上縁部付定)
SK	03		284		891030	椎骨	腕骨	f	f	前部骨 (股前上縁部付定)
SK	03		286		891030	椎骨	腕骨	f	f	前部骨 (股前上縁部付定)
SK	03		261		891027	椎骨	腕骨	f	f	前部骨 (股前上縁部付定)
SK	03	pit 3		4th下拵一拵	891027	椎骨	腕骨	f	f	前部骨 (股前上縁部付定)
SK	03	pit 3		4th下拵一拵	891027	椎骨	腕骨	f	f	前部骨 (股前上縁部付定)
SK	03		268		891027	椎骨	腕骨	f	f	前部骨 (股前上縁部付定)
SK	03	pit 3		5th下拵一拵	891030	椎骨	腕骨	f	f	前部骨 (股前上縁部付定)
SK	03		245		891026	椎骨	腕骨	f	f	前部骨 (股前上縁部付定)
SK	03	pit 3		一拵	891026	椎骨	腕骨	f	f	前部骨 (股前上縁部付定)
SK	03	pit 3		5th下拵一拵	891026	椎骨	腕骨	f	f	前部骨 (股前上縁部付定)
SK	03	pit 3		一拵	891026	椎骨	腕骨	f	f	前部骨 (股前上縁部付定)
SK	03		239		891026	椎骨	腕骨	f	f	前部骨 (股前上縁部付定)
SK	03		233		891023	椎骨	腕骨	f	f	前部骨 (股前上縁部付定)
SK	03		273		891027	椎骨	腕骨	f	f	前部骨 (股前上縁部付定)
SK	03	占塚上層			891016	椎骨	腕骨	f	f	前部骨 (股前上縁部付定)
SK	03	pit 3		4th一拵	891026	椎骨	腕骨	f	f	前部骨 (股前上縁部付定)
SK	03	pit 3		一拵	891027	椎骨	腕骨	f	f	前部骨 (股前上縁部付定)
SK	03		278		891027	椎骨	腕骨	f	f	前部骨 (股前上縁部付定)
SK	03		262		891027	椎骨	腕骨	f	f	前部骨 (股前上縁部付定)
SK	03	pit 3		一拵	891026	椎骨	腕骨	f	f	前部骨 (股前上縁部付定)
SK	03	pit 3		4th一拵	891027	椎骨	腕骨	f	f	前部骨 (股前上縁部付定)
SK	03		231		891026	椎骨	腕骨	f	f	前部骨 (股前上縁部付定)
SK	03		279		891027	椎骨	腕骨	f	f	前部骨 (股前上縁部付定)
SK	03		249		891026	椎骨	腕骨	f	f	前部骨 (股前上縁部付定)
SK	03		240		891026	椎骨	腕骨	f	f	前部骨 (股前上縁部付定)
SK	03	pit 3		一拵	891026	椎骨	腕骨	f	f	前部骨 (股前上縁部付定)
SK	03	pit 3		一拵	891027	椎骨	腕骨	f	f	前部骨 (股前上縁部付定)
SK	03		264		891027	椎骨	腕骨	f	f	前部骨 (股前上縁部付定)
SK	03		228		891026	椎骨	腕骨	f	f	前部骨 (股前上縁部付定)
SK	03	pit 3		4th一拵	891027	椎骨	腕骨	f	f	前部骨 (股前上縁部付定)
SK	03		229		891026	椎骨	腕骨	f	f	前部骨 (股前上縁部付定)
SK	03		233		891023	椎骨	腕骨	f	f	前部骨 (股前上縁部付定)
SK	03		232		891026	椎骨	腕骨	f	f	前部骨 (股前上縁部付定)
SK	03	pit 3		一拵	891027	椎骨	腕骨	f	f	前部骨 (股前上縁部付定)
SK	03	pit 3		一拵	891026	椎骨	腕骨	f	f	前部骨 (股前上縁部付定)
SK				2th下拵一拵	891004	足指骨 (舟状骨)	腕骨	f	f	半欠けしている
SK				2th下拵一拵	891004	足指骨	腕骨	f	f	骨片少数
SK				4th下拵黒土一拵	890921	肩甲骨	腕骨	f	f	肩甲骨縁部の骨片
SK				6th下拵一拵	891002	鎖骨	腕骨	f	f	骨片少数
SK				6th下拵一拵	891002	鎖骨	腕骨	f	f	半欠けしている
SK				8th下拵黒土一拵	891005	手根骨 (月状骨)	腕骨	f	f	ほぼ完形
SK				8th下拵黒土一拵	891005	手の基節骨	腕骨	f	f	ほぼ完形
SK				8th下拵黒土一拵	891005	手の基節骨	腕骨	f	f	ほぼ完形
SK				8th下拵黒土一拵	891005	足の基節骨	腕骨	f	f	ほぼ完形
1 R	03		S		890925	椎骨	椎骨	f	f	遠位端 (キツネ)
2 R	02				890925	椎骨	椎骨	f	f	骨幹部 (イヌ)
2 R	03				890925	椎骨	椎骨	f	f	椎体1個
2 R	03				890925	椎骨	椎骨	f	f	遠位端欠 (イナシ)
2 R	03				890918	上腕骨	腕骨	f	f	遠位端 (イナシ)
SK	03	pit 3		一拵	891026	肩甲骨	腕骨	f	f	カモの骨頭 (マダモ犬)

表 2 : 鶴巻七岩陰道跡出土の人骨および獣骨等の部位別出土リスト (備考に種名のないものはヒトである)
(c : 完形, f : 破片)

区	No	Noの種	発掘日	骨 名	胎、生	左右	状態	備 考
SK	01	125	891013	頤蓋骨		右	不明	前頭骨裂開部
SK	01	115	891006	頤蓋骨		右	不明	前頭骨裂開部
SK	01	85	891027	頤蓋骨		右	不明	前頭骨裂開部
SK	02	266	890921	頤蓋骨		左	不明	前頭骨 (眼上縁部付混)
SK	02	1	890921	頤蓋骨		左	不明	前頭骨片
1 R	03		890929	頤蓋骨		左右	不明	前頭骨裂開部
SK	03	(S-1)	891002	頤蓋骨		不明	不明	小片少数
1 R	03		890921	頤蓋骨		不明	不明	前額骨不完全部、小片
1 R	03		890925	頤蓋骨		生骨	不明	前頭骨片
1 R	03		890925	頤蓋骨		生骨	不明	前頭骨片
SK	02	11, 15	890928	頤蓋骨		左	不明	頤蓋骨片 1個
SK	01	10	890928	頤蓋骨		左	不明	頤蓋骨片 1個
SK	01	135	891013	頤蓋骨		不明	不明	頤蓋骨片 1個
SK	01	4	890929	頤蓋骨		不明	不明	後頭骨 (外縁部絶縁部)
SK	01	187	891018	頤蓋骨		不明	不明	後頭骨片
SK	02	右顔下 0-3	891023	頤蓋骨		不明	不明	後頭骨基部
SK	02	右顔下	891023	頤蓋骨		不明	不明	後頭骨片
SK	05	253	891027	頤蓋骨		左	不明	側頭骨裂開部のみ
SK	03	pH.3	891027	頤蓋骨		左	不明	側頭骨裂開部のみ
1 R	03		890925	頤蓋骨		不明	不明	側頭骨裂開部
1 R	03		890925	頤蓋骨		不明	不明	側頭骨裂開部
SK	02	右顔下	890925	頤蓋骨		不明	不明	側頭骨乳様突起部
SK	05	6	890929	頤蓋骨		左	不明	上顎骨片
SK	05	244	891026	頤蓋骨		右	不明	上顎骨片
1 R	03		890925	頤蓋骨		右	不明	上顎骨片
1 R	03		890925	頤蓋骨		右	不明	上顎骨片
1 R	03		890925	頤蓋骨		右	不明	上顎骨片
0 R	03	セグベルト	2層	891012	頤蓋骨	不明	不明	下顎骨片 1個と頤蓋骨片
SK	01	45	891003	頤蓋骨		不明	不明	下顎骨片 2個
1 R	03		890925	頤蓋骨		左	不明	下顎骨閉鎖部
SK	01	286	891030	頤蓋骨		不明	不明	下顎骨 (咬痕、歯槽附随)
SK	01	30	891002	頤蓋骨		不明	不明	下顎骨 (咬痕厚)
1 R	03		890929	頤蓋骨		不明	不明	下顎骨 (咬痕部の骨片)
0 R	03	セグベルト	2層	890912	頤蓋骨	不明	不明	骨片少数
0 R	03	セグベルト	2層	891012	頤蓋骨	不明	不明	骨片少数
0 R	03	セグベルト	一層	891012	頤蓋骨	不明	不明	骨片少数
1 R	02		890918	頤蓋骨		不明	不明	骨片 1個
1 R	03		890925	頤蓋骨		不明	不明	骨片 1個
1 R	03		891025	頤蓋骨		不明	不明	骨片 1個
1 R	03		891004	頤蓋骨		不明	不明	骨片 2個
1 R	03		890926	頤蓋骨		不明	不明	骨片少数
1 R	03		890929	頤蓋骨		不明	不明	骨片少数
1 R	03		891005	頤蓋骨		不明	不明	骨片少数
1 R	03		891005	頤蓋骨		不明	不明	骨片少数
1 R	03		890911	頤蓋骨		不明	不明	小片 1個
1 R	03		891006	頤蓋骨		不明	不明	小片少数
1 R	03		891006	頤蓋骨		不明	不明	小片少数
1 R	03		890928	頤蓋骨		不明	不明	小片少数
1 R	03		890928	頤蓋骨		不明	不明	小片少数
1 R	03		890925	頤蓋骨		不明	不明	骨片少数
1 R	03		890925	頤蓋骨		不明	不明	骨片少数
1 R	03		890927	頤蓋骨		不明	不明	薄い骨片多数
2 R	01	右下	891101	頤蓋骨		不明	不明	骨片少数
2 R	02	右下	891102	頤蓋骨		不明	不明	骨片少数
2 R	02		890925	頤蓋骨		不明	不明	骨片少数
2 R	02		891030	頤蓋骨		不明	不明	骨片 1個
2 R	02		890929	頤蓋骨		不明	不明	骨片 2個
2 R	03		890926	頤蓋骨		不明	不明	骨片少数
2 R	03		891024	頤蓋骨		不明	不明	骨片少数
2 R	03		891013	頤蓋骨		不明	不明	骨片少数
2 R	03		890929	頤蓋骨		不明	不明	骨片少数
2 R	03		891005	頤蓋骨		不明	不明	小片 1個
2 R	03		890929	頤蓋骨		不明	不明	小片 2個
2 R	03		891005	頤蓋骨		不明	不明	小片少数
2 R	03		891005	頤蓋骨		不明	不明	小片少数
2 R	03		890925	頤蓋骨		不明	不明	骨片少数
2 R	03		890925	頤蓋骨		不明	不明	薄い骨片多数
3 R	02		890918	頤蓋骨		不明	不明	骨片少数
3 R	03		890918	頤蓋骨		不明	不明	骨片少数
3 R	03		890925	頤蓋骨		不明	不明	骨片少数
3 R	03		891026	頤蓋骨		不明	不明	小片少数
3 R	03	セグベルト	層 1 一層	891031	頤蓋骨	不明	不明	小片少数
3 R	03	セグベルト	2層中	891032	頤蓋骨	不明	不明	小片少数
S	02	層四	891033	頤蓋骨		不明	不明	小片 2個
S	03		891033	頤蓋骨		不明	不明	小片 2個
SK	01	60	891003	頤蓋骨		不明	不明	やや大きめの骨片
SK	01	84	891006	頤蓋骨		不明	不明	骨片 1個
SK	01	87	891006	頤蓋骨		不明	不明	骨片 1個
SK	01	118	891013	頤蓋骨		不明	不明	骨片 1個
SK	01	123	891013	頤蓋骨		不明	不明	骨片 2個
SK	01	158	891003	頤蓋骨		不明	不明	骨片 2個
SK	01	東中区	12th下げ一房	891018	頤蓋骨	不明	不明	骨片 3個
SK	01	218	891002	頤蓋骨		不明	不明	骨片少数
SK	01	163	891017	頤蓋骨		不明	不明	骨片少数
SK	01	東中区	11th下げ一房	891017	頤蓋骨	不明	不明	骨片少数
SK	01	72	891004	頤蓋骨		不明	不明	骨片少数
SK	01	74	891004	頤蓋骨		不明	不明	骨片少数
SK	01	63	891006	頤蓋骨		不明	不明	骨片少数
SK	01	38	891002	頤蓋骨		不明	不明	骨片少数
SK	01	73	891004	頤蓋骨		不明	不明	小片 1個
SK	01	50	891003	頤蓋骨		不明	不明	小片 1個
SK	01	146	891017	頤蓋骨		不明	不明	小片 1個
SK	01	70	891004	頤蓋骨		不明	不明	小片 1個

第3節 鶴萩七尋岩陰道跡出土の人骨および動物骨

SK 01		30		891002	頭蓋骨	不明	左	小片少数
SK 01		219		891018	頭蓋骨	不明	左	小片少数
SK 01		219		891024	頭蓋骨	不明	左	小片少数
SK 01		33		891002	頭蓋骨	不明	左	小片数片
SK 01		57	下部	891004	頭蓋骨	不明	左	小片2個
SK 03		253		891027	頭蓋骨	生骨	左	外面のみ骨片1個
SK 03		259		891027	頭蓋骨	不明	左	骨片1個
SK 03		235		891026	頭蓋骨	不明	左	骨片1個
SK 03	吉備pit上			891018	頭蓋骨	不明	左	骨片2個
SK 03		238		891026	頭蓋骨	不明	左	骨片少数
SK 03		277		891027	頭蓋骨	不明	左	骨片少数
SK 03	pit 3		5th下け一括	891030	頭蓋骨	不明	左	骨片多数
SK 03	pit 3		一括	891028	頭蓋骨	不明	左	骨片多数
SK 03	pit 3		一括	891026	頭蓋骨	不明	左	骨片多数
SK 03	pit 3		4th一括	891027	頭蓋骨	不明	左	骨片少数
SK 03	pit		右下より	891011	頭蓋骨	不明	左	骨片多数
SK 03		283		891030	頭蓋骨	不明	左	小片1個
SK 03		284		891030	頭蓋骨	不明	左	小片1個
SK 03		286		891030	頭蓋骨	不明	左	小片中量
SK 03			2th下け一括	891004	頭蓋骨	不明	左	骨片少数
SK 03			6th下け一括	891002	頭蓋骨	不明	左	小片少数
SK 03	pit 3	261	4th下け一括	891027	上顎歯	右	C	第2小臼歯(歯冠が半分欠)
3 R 03				891027	上顎歯	右	C	第1大臼歯(歯冠のみ)
SK 01		201		890918	下顎歯	生骨	左	1顎突部1・2小臼歯
3 R 03	セツベルト		層1一括	891026	上顎歯	生骨	右	第2大臼歯(歯冠のみ)
3 R 03	セツベルト		1層	891026	下顎歯	生骨	左	第1小臼歯(ほぼ完形)
3 R 03	セツベルト			891026	下顎歯	生骨	左	第1小臼歯(ほぼ完形)
SK 03	pit 3		4th下け一括	890918	下顎歯	生骨	右	第2小臼歯(歯冠のみ)
SK 01		2		890927	下顎歯	不明	右	第1大臼歯(歯冠の2/3)
SK 03		268		891027	下顎歯	右		第3大臼歯(歯冠が破損)
2 R 03				890925	歯	不明	左	歯冠片
2 R 03			赤一括	891005	歯	不明	左	歯冠のみ
SK 03	pit 3		5th下け一括	891005	歯冠	不明	左	半欠か欠れている
SK 03			5th下け一括	891030	歯冠	不明	左	歯冠なし
1 R 03				890926	歯冠	不明	左	歯冠なし
SK 01		218		890926	歯冠	不明	左	歯冠なし(2本)
SK 03		245		891026	歯冠	不明	左	歯冠なし
SK 01		218			椎骨(頸椎)	不明	右	椎体中央部
SK 01		65		891004	椎骨(頸椎)	不明	右	椎体中央部
2 R 03				890926	椎骨(胸椎)	不明	右	椎体中央部
SK 02		20		890929	椎骨(頸椎)	不明	右	椎体
2 R 03			七尋内	891003	椎骨(胸椎)	不明	右	頸胸突起
SK 02	pit 2			891023	椎骨(腰椎)	不明	右	関節突起の下部前面
1 R 03				890925	椎骨(腰椎)	生骨	右	孔頸突起付近
2 R 03				890925	椎骨(腰椎)	不明	右	関節突起部2個
1 R 02				890918	椎骨(頸椎)	不明	右	不完全な骨片
1 R 03				890925	椎骨	不明	右	椎骨片多数
SK 03	pit 3		一括	891028	椎骨	不明	右	関節突起部少数
1 R 03			トレ一括	891025	椎骨	不明	右	椎体片1個
SK 01		176		891017	椎骨	不明	右	椎骨片数個
1 R 03				890925	肋骨	不明	右	肋骨片少数
SK 03	pit 3		5th下け一括	891030	肋骨	不明	右	1片
SK 03	pit 3		一括	891028	肋骨	不明	右	骨片少数
SK 01		72		891004	肋骨	不明	右	骨片2個
SK 03		56		891003	肋骨	不明	右	骨片2個
SK 01		259		891028	肋骨	不明	右	骨片2個
SK 01		124		891013	肋骨	不明	右	骨片1個
SK 01		150		891018	肋骨	不明	右	骨片1個
SK 03		273		891023	肋骨	生骨	右	骨体中央部
SK 03		233		891027	肋骨	不明	右	中央部
1 R 03				890925	肩甲骨	右	右	肩甲骨と外側縁
2 R 03				890925	肩甲骨	右	右	肩甲骨と外側縁
SK 01		31		891002	肩甲骨	左	左	肩峰端
SK 01		125		891013	肩甲骨	左	左	肩峰端
SK 01		150		891018	肩甲骨	左	左	外側縁部の骨片
SK 01		165		890921	肩甲骨	左	左	肩甲骨縁部の骨片
SK 01		69	4回目下け黒上一一括	891004	肩甲骨	左	左	関節窩部付近
SK 01		206		891023	肩甲骨	左	左	関節窩部付近
SK 01		75		891004	肩甲骨	左	左	関節窩部付近
SK 01		33		891002	肩甲骨	不明	右	外側縁部の骨片
1 R 03				890925	鎖骨	右	右	肩峰端
SK 03	吉備pit上			891018	鎖骨	左	左	胸骨端部で湾曲あり
SK 01		65		891004	鎖骨	左	左	肩峰端
SK 01		53		891003	鎖骨	左	左	骨体中央から肩峰端の一部
1 R 03				890925	上腕骨	左	左	遠位端
2 R 03				890925	上腕骨	右	右	遠位端
SK 03		226		891026	上腕骨	右	右	大腸骨頭
1 R 03				890925	腕骨	右	右	近位端
SK 01		136		891013	腕骨	右	右	遠位端の下部関節部
SK 03	pit 3		4th一括	891027	腕骨	不明	右	腕骨頭片
SK 01		57	下部	891004	腕骨	不明	右	子骨の骨片
2 R 03				890925	尺骨	右	右	遠位端
SK 03	pit 3		一括	891026	尺骨	右	右	尺骨頭片
SK 01		198		891018	尺骨	右	右	遠位端
SK 01		175		891017	尺骨	右	右	肘関節の骨体
SK 01		176		891017	尺骨	右	右	肘関節の骨体
SK 01		173		891017	尺骨	左	左	近位端・滑車切痕
SK 03		278		891027	尺骨	左	左	下部の骨体片
SK 01		198		891018	尺骨	左	左	近位端
SK 01		142		891013	尺骨	左	左	近位端
SK 01		55		891005	手根骨(舟状骨)	左	左	遠位端
SK 01		144		891013	手根骨(月状骨)	右	右	近位端
SK 01			8th下けくろ一括	891005	手根骨(月状骨)	右	右	ほぼ完形

SK 01		184		891018	手根骨 (月状骨)	左	f	
1 R 02				890918	手根骨 (三角骨)	右	f	ほぼ兜形
SK 02	pit 2			891023	手根骨 (三角骨)	左	C	C
2 R 03			10th下げ一拵	891013	手根骨 (三角骨)	左	C	f
SK 01	集中区			891017	手根骨 (豆状骨)	左	C	f
SK 01	集中区	189	11th下げ一拵	891012	手根骨 (大槲形骨)	右	C	f
SK 01				891018	手根骨 (小槲形骨)	右	C	f
SK 01		81	12th下げ一拵	891006	手根骨 (有頭骨)	右	C	f
SK 01	集中区			891018	手根骨 (有頭骨)	右	C	f
SK 03		262		891027	手根骨 (有頭骨)	右	C	f
SK 03	pit 3			891026	手根骨 (有頭骨)	右	C	f
SK 01		149	一拵	891017	手根骨 (有頭骨)	右	C	f
SK 01		58		891003	手根骨 (有頭骨)	右	C	f
2 R 03				890925	中手骨	不明	f	骨幹部および近位端
3 R 03				890918	中手骨	不明	f	近、遠位端のみ
SK 03	pit 3		4th一拵	891027	中手骨	不明	f	遠位端
SK 01		218			中手骨 (I)	右	f	C
SK 01		191		891018	中手骨 (I)	左	f	遠位端が破損
SK 01		115			中手骨 (II)	左	f	両端破損
SK 01		203		891018	中手骨 (II)	右	f	遠位端破損
SK 02		45		891003	中手骨 (III)	右	f	両端のみ
SK 03		231		891026	中手骨 (III)	左	f	両端の一部破損
SK 01		197	周辺下部	891010	中手骨 (IV)	右	f	遠位端
SK 01		197		891018	中手骨 (IV)	左	f	骨体中央部
SK 03		279		891027	中手骨 (IV)	右	f	遠位端破損
SK 01		70		891004	中手骨 (IV)	右	f	遠位端部破損
SK 01		118		891013	中手骨 (IV)	左	f	遠位端
SK 01		75		891004	中手骨 (IV)	左	f	近位端なし
SK 01		160		891017	中手骨 (V)	右	f	遠位端破損
SK 01		33		891002	手の基礎骨 (I)	左	f	ほぼ兜形
SK 03		249		891026	手の基礎骨 (I)	右	C	
SK 01		174		891017	手の基礎骨 (I)	左	f	遠位端
SK 03		240		891026	手の基礎骨 (II)	右	f	ほぼ兜形
SK 01		149		891017	手の基礎骨 (III)	左	f	遠位端が破損
1 R 03		176		890925	手の基礎骨	右	C	ほぼ兜形
SK 01				891017	手の基礎骨	左	C	兜形と近位端 (2)
2 R 03			一拵	890925	手の基礎骨	不明	f	遠位端と遠位端の骨数片
SK 03	pit 3			891026	手の基礎骨	不明	f	1個
2 R 03				890927	手の基礎骨	不明	f	遠位端および骨幹中央部
2 R 01	右下			891101	手の基礎骨	不明	f	遠位端1個
1 R 03		218		890926	手の基礎骨	不明	f	遠位端
SK 01				891026	手の基礎骨	不明	f	遠位端
SK 01	集中区		11th下げ一拵	891017	手の基礎骨	不明	f	遠位端2個
SK 01		72		891004	手の基礎骨	不明	f	遠位端破損
SK 01		194	周辺下部	891010	手の基礎骨	不明	f	近位端
SK 01		190		891018	手の基礎骨	不明	f	遠位端のみ破損
SK 01		194		891018	手の基礎骨	不明	f	遠位端
SK 01	集中区		12th下げ一拵	891018	手の基礎骨	不明	f	近位端
SK 01		119		891013	手の基礎骨	不明	f	近位端のみ破損
2 R 03		126	2th下げ一拵	891004	手の基礎骨	不明	f	遠位端
SK 01				891013	手の基礎骨	不明	f	遠位端の一部
SK 01		126	8th下げくろ一拵	891006	手の基礎骨	不明	f	近位端
1 R 03			褐色上部	890927	手の基礎骨	不明	f	遠位端
SK 01		219			手の中節骨 (II)	左	C	
1 R 04			7th下げ	891013	手の中節骨 (II)	不明	f	ほぼ兜形
SK 01		170		891017	手の中節骨 (III)	不明	f	ほぼ兜形
SK 01		188		891018	手の中節骨 (III)	不明	f	ほぼ兜形
3 R 03	セクベルト		第1一拵	891026	手の中節骨 (V)	不明	f	遠位端
SK 03	pit 3			891027	手の中節骨	不明	f	近位端
1 R 03				890926	手の中節骨	不明	f	遠位端
SK 01		218			手の中節骨	不明	C	遠位端
2 R 03	集中区		10th下げ一拵	891013	手の中節骨	不明	C	頸骨目か不明
SK 01			周辺下部	891010	手の中節骨	不明	f	遠位端
1 R 03		123	褐色上部	890927	手の中節骨	不明	f	ほぼ兜形
2 R 03				891013	手の末節骨 (I)	左	C	
2 R 03				890926	手の末節骨 (V)	不明	f	遠位端を欠く
SK 03	pit 3		一拵	890925	手の末節骨	牛骨	不明	C
				891027	手の末節骨	生骨	不明	C
SK 01		132		891013	寛骨	右	f	耳状部
SK 01		54		891003	寛骨	右	f	坐骨体部
SK 01		133		891013	寛骨	右	f	腸骨腰部の骨片
SK 01		126		891013	寛骨	右	f	寛骨臼部付近
SK 03		264		891027	寛骨	右	f	寛骨臼部付近
1 R 03				890925	寛骨	左	f	寛骨臼部付近
2 R 03				890925	寛骨	右	f	寛骨臼部付近
SK 01		137		891013	寛骨	左	f	腸骨横行部の骨片
SK 01		161		891017	寛骨	左	f	大坐骨臼部の骨片
SK 01		126		891013	寛骨	左	f	寛骨臼部付近
1 R 02				890918	寛骨 (坐骨棘)	左	f	寛骨臼部付近
SK 01		132		891013	寛骨	不明	f	骨片多数
SK 01		45		891003	寛骨	不明	f	腸骨片
SK 01		190	周辺下部	891010	寛骨	不明	f	寛骨臼部付近
SK 01		65		891004	寛骨	不明	f	寛骨臼部付近
SK 01		73		891004	寛骨	不明	f	寛骨臼の一部
SK 01		190		891018	大腸骨	右	f	骨幹上部
SK 01		190		891018	大腸骨	右	f	骨幹部や遠位部
SK 01		142		891013	大腸骨	右	f	骨幹部の近位部
SK 01		155		891017	大腸骨	右	f	近位部
SK 01		152		891017	大腸骨	右	f	骨幹遠位部
SK 01		68		891004	大腸骨	右	f	遠位端
SK 01		159		891017	大腸骨	右	f	骨幹中央部
SK 01		139		891013	大腸骨	左	f	大腸骨
SK 01		116		891013	大腸骨	左	f	骨幹力および遠位端部
SK 01		155		891017	大腸骨	左	f	大腸骨腰部
SK 01		190		891018	大腸骨	左	f	骨幹腰部
SK 01		143		891013	大腸骨	左	f	骨幹近位部付近
3 R 03				890918	大腸骨	不明	f	中骨片
SK 01		132		891013	大腸骨	不明	f	大腸骨茎

第3節 鶴萩七尋岩遺跡出土の人骨および動物骨

SK 01	132		891013	大腿骨		不明	左	位	遠位端
SK 01	119		891013	大腿骨		不明	右	左	近位端
SK 01	202		891013	膝蓋骨		不明	右	左	ほぼ完形
SK 03	228		891026	膝蓋骨	出生	右	左	C	C
2 R 03			890925	膝蓋骨		右	左	C	C
SK 01	132		891013	膝蓋骨		左	左	左	半分欠けている
SK 01	76		891004	腕骨		不明	左	左	1/4が破損
SK 01	125		891013	腕骨		不明	右	左	腕部直部の骨片
2 R 03			890925	脛骨	生骨	右	右	左	遠位端
SK 01	136	2 th.褐色土一括	891013	脛骨		右	右	左	遠位端の下降筋部
2 R 03			890929	脛骨		右	右	左	近位部遠位の骨片
1 R 03			890925	脛骨		右	右	左	栄養孔付近
2 R 03			890925	脛骨	生骨	右	右	左	栄養孔付近
2 R 03			890925	脛骨		左	左	左	近位端
2 R 02			890925	脛骨		左	左	左	骨幹中央部
SK 01	206		891023	脛骨		不明	右	左	内果形付近
SK 01	125		891013	腓骨		不明	右	左	遠位端の外果側面部分付近
SK 01	45		891003	腓骨		不明	右	左	近位端
1 R 03			890925	腓骨		左	左	左	栄養孔付近
2 R 02			890925	腓骨		左	左	左	骨幹中央部
SK 01	176		891017	腓骨		不明	左	左	遠位端骨片
SK 01	45		891003	腓骨		不明	右	左	近位端
SK 01	3		890929	腓骨		不明	右	左	栄養孔付近
1 R 03			890925	足根骨 (踵骨)		右	右	左	上面の間隙面
2 R 03			890925	足根骨 (踵骨)		右	右	左	関節部の骨片
SK 01	45		891003	足根骨 (踵骨)		右	右	左	関節部の骨片
SK 01	356		891017	足根骨 (踵骨)		右	右	左	背側関節面
SK 01	82		891006	足趾骨 (指骨)		不明	右	左	関節部骨片
SK 03 pit 3		4 th一括	891027	足趾骨 (舟状骨)		右	右	左	ほぼ完形
SK 01	57	3 th下け一括	891004	足趾骨 (舟状骨)		右	右	左	半分欠けている
SK 01	137	下部	891004	足趾骨 (舟状骨)		右	右	左	半分欠けている
SK 03	229		891026	足根骨 (立方骨)		不明	右	左	半分欠けている
SK 01	136		891013	足根骨 (外側楔状骨)		右	右	左	ほぼ完形
SK 03	233		891023	足根骨 (外側楔状骨)		右	右	左	ほぼ完形
SK 01	174		891017	足根骨 (内側楔状骨)		不明	右	左	ほぼ完形
2 R 03			890925	足根骨 (内側楔状骨)		左	左	左	半分欠けている
SK 03	232		891026	中足骨 (I)		左	左	左	近位端破損
2 R 03			890925	中足骨 (III)		右	右	左	遠位端を欠く
SK 01	75		891004	中足骨 (III)		左	左	左	近位端
SK 01	193		891018	中足骨 (IV)		左	左	左	関節破損
SK 01	171		891017	中足骨 (IV)		左	左	左	遠位端破損
1 R 03			890925	中足骨		左	左	左	中央部
SK 01	126		891013	中足骨		不明	右	左	骨体中央部
SK 03 pit 3		一括	891007	中足骨		不明	右	左	IIIかIV
2 R 03			890926	中足骨		不明	右	左	近位端1個
SK 01	176		891017	中足骨		不明	右	左	近位端骨片
SK 01	120		891013	中足骨		不明	右	左	関節破損
SK 01	142		891013	中足骨 (舟状骨)		不明	右	左	近位端破損
SK 01	190	周辺下部	891010	中足骨		不明	右	左	遠位端
SK 01	142		891013	足の基節骨 (I)		左	左	左	遠位端
SK 01	45		891003	足の基節骨 (II)		右	右	左	近位端
SK 01	148		891017	足の基節骨		右	右	左	C
SK 01	176		891017	足の基節骨		右	右	左	C
SK 03 pit 3		一括	891026	足の基節骨		不明	右	左	遠位端2個
1 R 03			890926	足の基節骨		不明	右	左	近位端
SK 01	218		891013	足の基節骨		不明	右	左	遠位端
SK 01	129		891013	足の基節骨		不明	右	左	遠位端
SK 01 集中区		12th下け一括	891018	足の基節骨		不明	右	左	近・遠位端のみ
SK 01	126		891013	足の基節骨		不明	右	左	遠位端
SK 01	65	8 th下け黒一括	891005	足の基節骨		不明	右	左	遠位端が破損
SK 01	218		891006	足の基節骨 (I)		不明	右	左	C
SK 01	65		891003	足の基節骨 (I)		不明	右	左	遠位端が破損
SK 01	45		891003	足の基節骨 (I)		不明	右	左	C
SK 01	142		891013	足の基節骨 (I)		不明	右	左	C
2 R 03 集中区		10th下け一括	891013	足の基節骨 (I)		不明	右	左	遠位端破損
SK 01	55		891006	足の基節骨 (II)		不明	右	左	遠位端が破損
SK 01 集中区		11th下け一括	891017	足の基節骨 (I, V)		不明	右	左	C
3 R 03			890918	足の基節骨		右	右	左	ほぼ完形
2 R 03			890927	趾骨		不明	右	左	破片1個
SK 03 pit 3		一括	891026	踵骨	生骨	不明	右	左	踵の先端 (マゴモ大)
1 R 03		5	890925	踵骨	生骨	右	右	左	遠位半 (キツネ)
2 R 02			890925	踵骨	生骨	右	右	左	骨幹中央部 (イヌ)
2 R 03			890925	尺骨	生骨	右	右	左	遠位端欠 (イタチ)
3 R 03			890918	尺骨	生骨	右	右	左	近位端 (イノシシ)

第 4 節 鶴萩七尋岩陰遺跡出土の骨鏃

茂原 信生 (獨協医科大学第一解剖学教室)

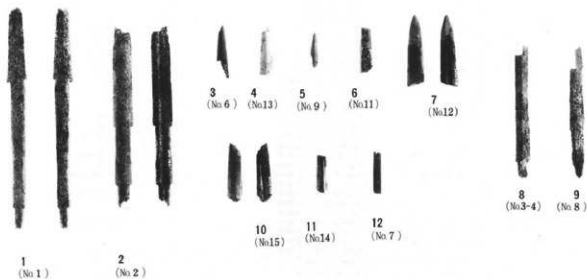
骨 鏃

12点: Na 1、Na 2、Na 3、Na 4、Na 6、Na 8、Na 52、Na 246、Na 254、Na 255、Na 257、Na 258、Na 284

これらの鏃は、おそらくシカの中手骨あるいは中足骨である。すべて人為が加わっており、焼かれてはいない。

Na 1やNa 2の溝は骨内の自然面を利用しているが、研磨はされているらしい。

骨の表面は残されていない。すなわちすべての面が研磨されている。



第5節 塩崎城見山砦遺跡出土炭化材の樹種

鈴木三男（金沢大・教養・生物）

能城修一（農水省森林総合研究所）

長野県長野市の塩崎城見山砦遺跡から出土した炭化材9点の樹種を調査した。試料は中世の城郭の建築材や構造材など5点（BSZ-1～5）と縄文時代の落し穴遺構に伴う炭化材4点（BSZ-6～9）である。試料は徒手で横断、接線、放射の各破断面を作り、金属顕微鏡で観察同定した結果、以下及び表1に示すように、ヒノキ、クリとケヤキが同定されたが1点は試料が小さすぎて同定には至らなかった。炭化材はプレパラートの形での証拠試料の保存は困難なので、金属顕微鏡で撮影した写真を証拠標本として金沢大学教養部生物学教室に保管してある。

ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* Sieb. et Zucc. ヒノキ科 写真1-7（BSZ-1）、8-9（BSZ-2）

比較的柔らかい針葉樹の炭化材で、年輪は明瞭。早材の仮道管は整然と並び、晩材部は狭く、晩材部への移行はやや急。樹脂細胞は不明瞭。仮道管内壁にらせん肥厚は見えない。放射組織は単列で背は低い。分野壁孔はヒノキ型で一分野2個ある。これらの形質からヒノキの材と同定した。ヒノキ材は強靱で保存性がよくて水湿に強く、また加工が容易で美しいので建築材としては最も優秀な木材である。これらが城郭内の建築物や土塁等の構造材に用いられているとしたらかなりきちんとした施設であったことが窺える。

クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科 写真10-13（BSZ-4）

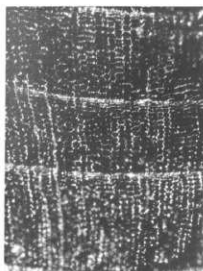
年輪始めに大変大きな道管が1-数層に並び、晩材部では薄壁多角形の小道管が火炎状に集まって配列する環孔材で、道管の穿孔は単一、道管の側壁には小孔紋の壁孔がある。放射組織は単列同性で背は余り高くない。これらの形質からクリの材と同定した。クリ材の利用は縄文時代で最も普遍的なものである。

ケヤキ *Zelkova serrata* (Thunb.) Makino ニレ科 写真14-18（BSZ-5）

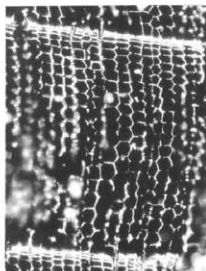
年輪始めに大道管が並び、晩材部では薄壁多角形の小道管が多数集まって広い帯となって接線状に配列する環孔材。道管の穿孔は単一、側壁の壁孔は小孔紋で交互状、小道管の内壁には顕著ならせん肥厚がある。放射組織は幅3-6細胞位の紡錘形の異性で上下縁、時には周囲に大きな結晶細胞を持つ。これらの形質からケヤキの材と同定した。ケヤキ材は大材が得易く、加工性がよいので巨大な木造建築、構築物に良く用いられる。

表1 塩崎城見山砦遺跡から出土した炭化材の樹種一覧

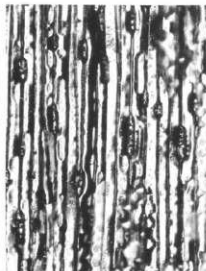
標本番号	樹種名	遺構	製品の種類	時代
BSZ-1	ヒノキ	土塁溝	炭化材	中世
BSZ-2	ヒノキ	土塁テラス	炭化材	中世
BSZ-3	ヒノキ	掘立柱建物	柱材	中世
BSZ-4	クリ	溝	炭化材	中世
BSZ-5	ケヤキ	土坑	炭化材	中世
BSZ-6	クリ	落し穴	炭化物	縄文
BSZ-7	クリ	落し穴	炭化物	縄文
BSZ-8	クリ	落し穴	炭化物	縄文
BSZ-9	同定不能	落し穴	炭化物	縄文



1. ヒノキ (BSZ-1) C×50.



2. 同 C×100.



3. 同 T×100.



4. 同 T×200.



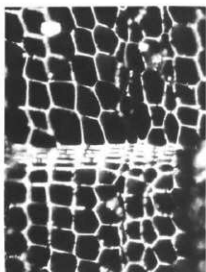
5. 同 R×100.



6. 同 R×200.



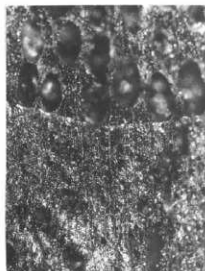
7. 同 R×500.



8. ヒノキ (BSZ-2) C×200.



9. 同 R×200.



10. クリ (BSZ-4) C×50.



11. 同 C×100.



12. 同 T×100.



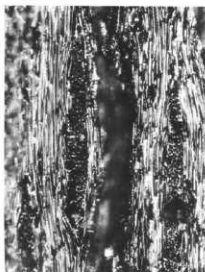
13. 同 R×200.



14. ケヤキ (BSZ-5) C×50.



15. 同 C×100.



16. 同 T×100.



17. 同 T×200.



18. 同 R×200.

第 6 節 塩崎城見山砦遺跡の土坑の内容物推定および¹⁴C年代測定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

塩崎城見山砦遺跡は、善光寺平南部の長野市篠ノ井塩崎地域に所在し、千曲川左岸の篠山山系からのびる尾根先端部に立地する。検出された遺構は、16世紀の中世城郭（山城）に関連する遺構が主体で、他に縄文時代・弥生時代・古墳時代の土坑がある。また、出土遺物は、縄文時代～中世の土器、先土器時代終末期以降の石器類、さらに金属製品として靱皮金具・銭貨・鉄砲玉・鉄釘・鉄製品がある。また、その他に獣骨が出土している。

ところで、縄文時代の土坑では発掘調査段階でその性格を推定することのできる遺物はほとんど認められず、その機能・用途が判然としていない。勤長野県埋蔵文化財センターは、これまでの調査事例などから埋葬施設として機能していたのではないかと想定している。また、検出された土坑などの遺構には年代推定の手掛かりとなる遺物が乏しく、その帰属時期が不明確なものが少なくない。

今回、勤長野県埋蔵文化財センターから以上の問題を解決することを目的とした自然科学分析調査が当社に要望された。これを受けて、当社と同センターが分析内容に関する協議を行った結果、遺構覆土を対象として人骨の痕跡をリン・カルシウム分析によって定性的に把握し、土坑が埋葬施設として機能していた可能性の検討を行うこととした。また、各遺構内から出土した炭化材を試料として¹⁴C年代測定を行い、その帰属時期を推定することとした。

一般に、壘内あるいは土坑内に人骨等が確認されない場合の人体の痕跡を検証する自然科学的分析手法として、次の2つの方法があげられる。ひとつは、人体、特に人骨に多量に含まれ、しかも土壌中では比較的移動しにくいリン酸の含有量を測定するリン分析（竹迫、1981など）である。もうひとつは、動植物

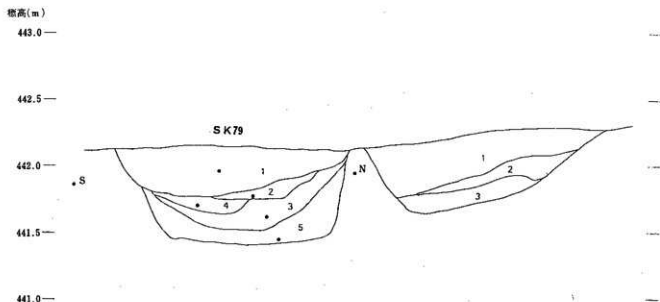


図 1 遺跡の試料採取層位

試料採取層位は送付資料を参照した。なお、試料採取層位の中で示した1～5は層名を、・は採取層位を示す。試料名は、基本的に層名であるが、地山試料はNおよびSとした。

の有機成分で土壤中に比較的残留しやすい脂肪酸の組成を測定する脂肪酸分析(中野, 1986など)である。現在では、後者の脂肪酸分析が動植物の判定をできる点、あるいは種類を具体的に判別できる可能性を有する点で優れた面が多いといわれている。しかし、試料の取扱いと分析が複雑で、しかも土壤を対象にした場合データの信頼性に疑問が残る。したがって、今回はこれまでに分析調査事例が豊富で、分析操作が比較的簡便なリン分析を実施する。加えて、骨のもうひとつの主成分であるカルシウム含有量についても分析し、多角的な調査を行うこととした。

1 土坑の内容物推定

(1) 試料

分析対象とした遺構はSK79である。試料は、土坑覆土の各層から5点、その対比試料として地山の北と南から2点(N, S)が採取された(図1)。

(2) 分析方法

分析は、土壤標準分析・測定法委員会(1986)、土壤養分測定法委員会(1981)、京都大学農学部農芸化学教室(1957)、農林省農林水産技術会議事務局(1967)、ペドロジスト懇談会(1984)などを参考にした。以下に操作行程を示す。

試料を風乾後、軽く粉砕して2.00mmの篩を通過させる(風乾細土試料)。風乾細土試料の水分を加熱減量法(105℃、5時間)により測定する。風乾細土試料2.00gをケルダールフラスコに秤とり、はじめに硝酸(HNO₃) 5mlを加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸(HClO₄) 10mlを加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、水で100mlに定容してろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸(P₂O₅)濃度を測定する。別にろ液の一定量を試験管に採取し、干渉抑制剤を加えた後に原子吸光光度計によりカルシウム(CaO)濃度を測定する。これら測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン含量(P₂O₅mg/g)とカルシウム含量(CaOmg/g)を求める。

(3) 結果・考察

結果は、表1に示す。リン含量は、対比試料とした地山試料で北・西ともに0.16P₂O₅mg/gを示す。また、土坑内試料5点では含量範囲が0.19~0.25P₂O₅mg/gの比較的近似した値を示し、4層を除く試料のほとんどが全く同じ値である。

表1 リン・カルシウム分析結果

遺構	試料採取層位	リン酸含量 P ₂ O ₅ mg/g	カルシウム含量 CaOmg/g	土色・土性
SK79	1層	0.20	1.13	鈍い黄褐色(10YR 4/3) L
	2層	0.19	1.90	鈍い黄褐色(10YR 4/3) L
	3層	0.19	1.38	鈍い黄褐色(10YR 4/3) L
	4層	0.25	2.13	黒褐色(10YR 2/2) L
	5層	0.19	1.11	鈍い黄褐色(10YR 4/3) L
地山(N)		0.16	0.90	鈍い黄褐色(10YR 4/3) L
地山(S)		0.16	1.55	鈍い黄褐色(10YR 4/3) L

注. 1) リン酸・カルシウム含量の単位は、乾土1gあたりのmgで表示。

2) 土色の判定は、マンセル表色系に準じた新版標準土色帖(農林省農林水産技術会議監修, 1967)による。

3) 土性の判定は、土壤調査ハンドブック記載の野外土性の判定法(ペドロジスト懇談会編, 1984)による。L…壤土(砂と粘土を半々に感じる)。

土壌中のリン含量は、これまでいくつか報告されている。Bowen (1983) が調査した世界各国の土壌での含量中央値は $2.0P_2O_5\text{mg/g}$ 、Bolt and Bruggenwert (1980) では $1.0\sim 2.5P_2O_5\text{mg/g}$ とされる。わが国の川崎ら (1991) の結果では、リン含量の比較的高い黒ボク土の平均値が未耕地で $2.1P_2O_5\text{mg/g}$ 、既耕地で $5.5P_2O_5\text{mg/g}$ 、天野ら (1991) ではリンの自然賦存量は $2.7P_2O_5\text{mg/g}$ 以下とされる。これらの報告に記載されている単位は%であるが、ここでは単位を mg/g に換算して表示した。これらの報告例から、土壌本来のリン含量は特殊な場合を除き普通 $3.0P_2O_5\text{mg/g}$ 以下で、最大 $5.0P_2O_5\text{mg/g}$ 前後と推定される。以後、本文中でこの範囲の含量を標準含量と仮称する。したがって、この値を著しく越える土壌では、リン成分を多く含むものが何らかのかたちで土壌中に富化されたものと考えることができる。今回の結果では、対比試料・土坑内試料ともに標準含量を越える値は示さず、試料中にリン成分の高いものが富化されていた痕跡を認めることはできない。

ただし、相対的には対比試料よりも土坑内試料全体で僅かに高い値を示し、特に4層で顕著である。この相対的な差異は、覆土そのものの土質の違いによることが分析前の土性・土色観察結果(表1)から判断される。一般に、有機物量の多い土壌では、その供給源となった植物遺体からのリン酸成分がそこに蓄積するために無機質土壌よりもリン酸量が相対的に高いといわれている。つまり、試料中最も高い値を示す4層の試料では他の試料に比較して黒味が強く、有機物量(腐植含量)の多いことが示唆され、このことが相対的にリン含量の高い原因と考えられる。しかし、埋め戻された土そのものに有機物が多かったのか、それとも土坑内の内容物によって有機物が富化されたか否かについては、本結果から判断することはできない。

一方、カルシウム含量は対比試料の含量で $0.90, 1.55\text{CaOmg/g}$ の値を示し、試料間に差異が認められる。また、土坑内試料の含量範囲は $1.11\sim 2.13\text{CaOmg/g}$ であり、リン含量に比較して試料間のばらつきが大きい。一般に土壌中のカルシウム含量は普通 $1\sim 50\text{CaOmg/g}$ (藤貫, 1979)といわれ、自然賦存量の含量幅が大きい。なお、この報告に記載されている単位も%であるが、ここでは単位を mg/g に換算して表示した。このように、カルシウム含量の結果だけで土壌本来の含量以上に富化されたか否かを判断することは難しい。今回の結果でも、対比試料間にあきらかな差異が認められ、相対的にも判断しにくい結果である。その中で4層の試料だけがリンとともに試料中最も高い値を示し、特徴的である。

(4) 墓塚としての可能性について

分析の結果、土坑内の4層に相対的なリン・カルシウム成分の濃集が認められた。しかし、その含量は普通の土壌に含まれる量の範囲内であり、リンなどではむしろ低い含量として評価することができる。この点は、長い年月の経過に伴う両成分の分解・流亡を促す環境変化も充分想定されることから、絶対量が低いことだけで内容物の痕跡を否定できない面もある。したがって、本結果から4層における相対的な濃集を内容物による痕跡として捉えるべきか、それとも有機物量の多い覆土本来の成分として捉えるのか判断が難しい。今後は、この点を解決するためにより細かい試料採取(同一土層における複数の試料採取)、さらには覆土平面を含んだ3次元的な調査を実施することが必要と思われる。また、脂肪酸分析、微化石分析など別な角度からの複合分析による情報取集も、土坑の性格を把握するためには実施しなければならないであろう。

参考文献

- 天野洋司・太田 健・草場 敬・中井 信 (1991) 中部日本以北の土壌型別蓄積リンの形態別計量。農林水産省農林水産技術会議事務局編「土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発」, 149p. : p. 28-36.

- Bowen, H. J., M. (1983) 環境無機化学—元素の循環と生化学—, 浅見輝男・茅野充男訳: 297, 博友社 [Bowen, H. J., M. (1979) *Environmental Chemistry of Elements*].
- 土壤標準分析・測定法委員会編 (1986) 土壤標準分析・測定法, 354p., 博友社.
- 土壤養分測定法委員会編 (1981) 土壤養分分析法, 440p., 養賢堂.
- 藤貫 正 (1979) カルシウム, 地質調査所化学分析法, 52: 57-61, 地質調査所.
- G. H. Bolt, M. G. M. Bruggenwert (1980) 土壤の化学, 岩田進午・三輪管太郎・井上隆弘・陽 捷行訳, 309p., p. 235-236, 学会出版センター [G. H. Bolt, M. G. M. Bruggenwert (1976) *SOIL CHEMISTRY*].
- 京都大学農学部農芸化学教室編 (1957) 農芸化学実験書 第1巻, 411p., 産業図書.
- 農林省農林水産技術会議事務局監修 (1967) 新版標準土色帖.
- 竹迫 敏 (1981) 11号住居址内埋藏中の土壌リン酸分析, 横浜市道高速2号線文化財埋藏文化財発掘調査報告, p. 156-158, 横浜市道高速2号線文化財埋藏文化財発掘調査団.
- 中野益男 (1986) 真庭遺跡出土土器に残存する動物油脂, 「真庭遺跡」配石遺構の土壌に残存する脂肪の分析, 大湯環状列石周辺遺跡発掘調査報告書, 第1巻, 46p., 秋田県鹿角市教育委員会.
- ベドロジスト懇談会編 (1984) 野外土性の判定, 「土壌調査ハンドブック」, 156p., p. 39-40, 博友社.

2 ¹⁴C年代測定

(1) 試料

測定試料は、各遺構より採取された炭化材BSZ-001~009の9点である(表2)。

(2) 測定

測定は、学習院大学放射性炭素年代測定室が行った。なお、半減期としてLIBBYの半減期5570年を使用した。

(3) 結果および考察

結果は、表2に示した。

表2 各遺構出土炭化材の¹⁴C年代測定結果

試料番号	試料採取位置 () 内は時代・性格等	Code No.	年代(1950年よりの年数)
BSZ-001	主郭西側テラス状部分 (中世山城の時期)	GaK-16489	3030±120y, B, P, 1080B, C,
BSZ-002	SB04 (中世山城の時期の溝状遺構)	GaK-16490	700±140y, B, P, A, D, 1250
BSZ-003	SK83 (中世山城の時期の柱痕)	GaK-16491	1510±90y, B, P, A, D, 440
BSZ-004	SK84 (中世山城の時期の土坑)	GaK-16492	1410±80y, B, P, A, D, 540
BSZ-005	SK15 (中世山城の時期の掘立柱建物跡)	GaK-16493	1750±90y, B, P, A, D, 200
BSZ-006	SD101 (中世山城主郭土塁外側をめぐる溝)	GaK-16494	4320±160y, B, P, 2370B, C,
BSZ-007	SK77 (縄文時代の陥し穴)	GaK-16495	5460±110y, B, P, 3510B, C,
BSZ-008	SK79 (縄文時代の陥し穴)	GaK-16496	5670±150y, B, P, 3720B, C,
BSZ-009	SK80 (縄文時代の陥し穴)	GaK-16497	5500±180y, B, P, 3550B, C,

中世山城に関係するとみられているBSZ-001~006のうち、BSZ-002のみはほぼ中世に相当する年代測定値が得られたが、他は古墳時代以前に相当する年代測定値が得られている。また、BSZ-002にしても、16世紀と考えられている山城の年代観とは隔たりがある。6試料とも確実に中世の遺構に伴う建築部材などの炭化材とされているところから、想定されている年代観より古い年代測定値が得られた原因については、築城時に古い木材が再利用された、覆土中に流入している古い堆積物の影響を受けたなどの可能性があげられるが、いずれかを断定するには至らない。

また、縄文時代陥し穴と考えられているBSZ-007~009は、比較的揃った年代測定値が得られた。いずれも陥し穴の埋積途上で土坑内に遺された炭化材とみられるが、特にBSZ-008、009 (SK79・80) では陥し穴を覆うしゃへい物が炭化したものと考えられており、またBSZ-007 (SK77) も同様の可能性を有すると考えられている。したがって、これらの土坑は縄文時代前期頃の可能性がある(キーン・武藤、1982)。陥し穴は、時期決定に有効な土器・石器類の出土が稀であり、確実な年代推定を行えない場合が多い。今後、同様の炭化物層が認められる事例については、さらに ^{14}C 年代測定を実施し、資料を蓄積する必要がある。

参考文献

キーン C. T.・武藤康弘(1982) 縄文時代の年代。「縄文時代の研究 I、縄文人とその環境」、雄山閣、p.246-275。

写 真 图 版

(PL)



長野盆地南西部全景 (1:200,000)

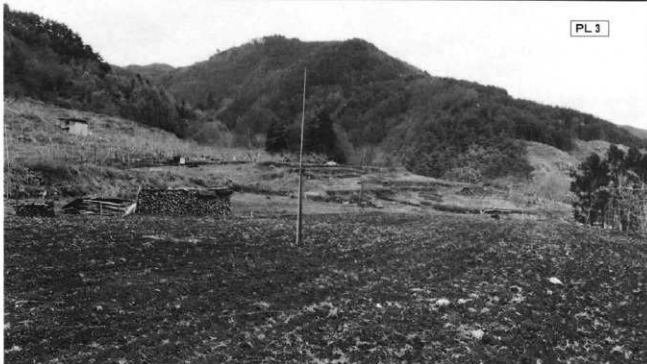
1. 鳥林遺跡 2. 小坂西遺跡 3. 赤沢城跡 4. 鶴萩七尋岩陰遺跡 5. 塩崎城見山岩遺跡 6. 地之目・一丁田遺跡



鶴萩七尋岩除遺跡(4)・赤沢城跡(3)・塩崎城見山砦遺跡(5)航空写真



鳥林(1)・小坂西(2)遺跡航空写真



遺跡全景(南から)



遺跡全景(東から)



34・36T区全景(南から)